

---

# 青と赤の白黒テレビ：金銀＋

暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青と赤の白黒テレビ：金銀＋

### 【Nコード】

N5479A

### 【作者名】

暁

### 【あらすじ】

《青と赤の白黒テレビ》の続編です。カイとチカは高校に進学、奇妙な新生活が始まった。カイとチカの加速する恋、金と銀によって更に激動するカイの高校生活。幼かった二人の恋はどうなるのか？

## 青の新居

青くて溺れそうなくらい深い空、春風で波のようにざわめく森、風に吹かれて蝶のように舞い上がる桜の花びら。

今は春、この島も明日でお別れ、夏休みには帰って来るとは思いつけど、やっぱり名残惜しい、身支度をしてとそこから聞き慣れた声で、聞き慣れた呼び出し方で俺を呼ぶ女の子が一人

「カイ！終わった！？」

俺の一番大事な人、チ力だ、今この島の同級生はチ力だけになった、みんなこの島を出ていった。

自分の支度が終わってチ力の支度をしにチ力の家に行った

「何で俺が手伝わなきゃいけないんだよ」

「良いだろ、どうせやること無いんだろうから」

かなり無理矢理な奴だ、多分みんながいなくなった悲しみを隠したいただけだろうけど、でも流石に最後の一人を見送った時は寂しかったな。

「じゃあ、明日、寝坊するなよ」

「当たり前だろ、起こしに行つてやるからな」

「言つてろ。おやすみ」

「おやすみ」

支度って言っても長話で終わった気がする、思い出話だけど、その話をしてる時のチ力の目が寂しかった、いつも一緒にいた奴らは明日からはいない、そう思うと誰でも悲しいよな、俺も過去に更けながら明日に備えた。

「カイ！起きろ！」

「起きてるよ」

いつもと同じようにチカが来た、でもいつもと違う朝、下におりるとおとおかあがいた

「おとおかあ、じゃあね」

「頑張つてこいよ！俺の息子なんだから最高の高校生活おくつてこい！」

「めんどくさいから見送りは行かないから」

見送りもいつもの調子だけど、内心結構キツイ、血は繋がってなくても立派な親子だから、人並みの感情つてものがある

「ほら！チカちゃんが待つてるぞ！」

「そうだった。それじゃ、じゃあね」

おとおとおかあを背に家を出た、親から離れる辛さを始めて感じながら。

港に着くと調度船が来たところだった、この船が俺達の新しい一歩を踏み出す文字通り渡し船

「これでこの島とお別れだな」

「泣くなよ」

「大丈夫…のはず」

船に乗るといつものチカとは違って静かだった、100%とは言えないけど泣いてるように見えた、あの二人もこんな感じだったのかな、俺はいつものように寝るつもりだった。

「カイ、起きろ」

「起きてるよ」

目を瞑ったまま応える、どうしても今回は眠れなかった、チカに起こされるのが怖いってのもあるけど、他にもいろいろな感情があつて考えてたら眠れなかった

「何だよ、起きてるなら言えよ」

「眠れなかった」

チカも元気になってるし、俺も整理がついたし、新生活の準備が出来た

「おりるぞ」

「ん？ああ」

何度か来たことのある港だけど、いつもとは違う場所に感じられた、何度か乗った事ある電車だけど、いつもとは違う所を走ってるように思えた。

俺とチカは両親からの指名で下宿というか寮というか、とりあえず住む家を決められた

「チカ、住所どこ？」

「はい」

えっ！？嘘だろ？やっぱり間違ってる、俺の住所とチカの住所を何回も見比べたけど、全く同じだった、そう俺とチカは同じ所住むらしい

「どうした？」

「これ、俺の住所」

チカの住所と俺の住所を渡した、チカもフリーズした、そりゃそうだろ、いくらなんでも同棲だぞ、普通しないだろ

「一緒だ…」

「だろ、それに、着いたっばい」

「ホントだ」

二人とも理解と整理が出来ないまま目的地に着いた、そこは極普通の2階建の一軒家だった、ホントに普通すぎるくらい

「とりあえず入ってみる？」

「そうだな、カイも鍵あるよな？」

「あるよ」

家の鍵は開いてた、おそろおそろ忍び込むように入った

「おじゃましま〜す」

“ドタドタドタ！”

「カイ！チカ！」

とりあえず驚いた、走って来たのは、白く短い髪で俗に言うイケメン（ジャンル分けするとジャーニーズ風）で背が高い男がそこにいた  
『ユキ！？』

「久しぶりい、元気にしてたあ？」

「あら、カイ君とチカちゃん、遅かったのね」

長くて綺麗な黒髪にお姉さん系、ユキと二人でいると誰もが憧れる二人の出来上がりだ

『マミ姉も！？』

「これからみんなでココに住むんだってえ」

「みんなで共同生活だって」

その後いろいろ説明をもらった、整理するところだ。

親同士が話し合って合意のうえで俺らの共同生活が決まったらしい、理由は知らない所に下宿させたりするよりはこっちの方がマシらしい。

部屋は2階に個々に部屋がある、廊下にはドアがあって奥がマミ姉とチカ、階段側が俺とユキ、ドアは女の子側からじゃないとロック出来ないようになってる。

生活費は仕送だけど、その他はバイトして稼げだって、俺の金もあるから何とかなるけど。

後は好きにしろとのこと。

こうして俺達の奇妙な新生活が始まった

## 金との出会い

今日は入学式、高校初日で胸は踊らないけど、チカと一緒にのクラスになることを願うだけかな

「おはよう」

「マミ姉か、おはよう」

先にマミ姉が起きて来た、いつもと同じだ、俺がいるときは俺が飯を作るけど、いない時は他が作る、自然とそうなった、朝は俺が作ってマミ姉が支度をするみたいな感じだ

「悪いけどチカとユキ起こしてきてくれない」

「分かった」

いろいろと自然に役割が決まってきた、一日が回ってる。

朝飯を片付けて着替える時に気づいた、この学校ブレザーにネクタイだ、嫌いなんだよなこの二つは、無くていいか

「カイ、ブレザーとかネクタイはあ？」

「嫌いだから」

「でえ、そのカーディガン？」

「前に買ったやつ」

「先生達に引つ掛かるなよお」

「大丈夫だろ」

実際中学生の時もブレザーにネクタイだったけど、一年生の半分しか着ていなかった。

通学路には新品の制服をきっちり着た新入生の山が、その中に先輩っぽい人がいた

「人多いな」

「私達も最初は圧倒されっぱなしだったよ」

「カイは？」

「別に、少し多いけどビツクリするほどではないな」

チ力とかにはありえない人数だもんな、まあすぐに慣れるだろ。

校門をくぐった途端にユキが女の子の群れにのまれた

「マミ姉良いの？」

「いつもの事だから」

「スゲエ……」

ユキは苦笑いをしながら前に進もうとしてるけど、群れがそれを許さない

「何であんなに群れるの？マミ姉がいるのもみんな知ってるだろ？」

「何か生徒達の暗黙の了解らしいよ」

「イケメンに群がるのが？」

「そう、カイ君もその内……、ってもう来たよ」

ユキと同じような群れが俺に向かってくる、バツファローばりの力強さだな……、って感心してる場合じゃないよな

「カイ、変な事するなよ！」

「大丈夫、何組だかメールいれといて」

「分かった」

チ力は案外落ち着いてた、マミ姉が言った事もあるし、やっぱり俺の事信じてくれるのかな、って自惚れてみたりする。

それよりもこの集団から脱出する手段を考えないと遅刻する、隣にも同じような群れがあるし。

俺が解放されたのはホームルームが始まってからだ、完璧遅刻決定、初日からインパクト十分だな。

メールによるとチ力は2組らしい、俺のやつも見といて欲しかったな、そういえばさつきから後ろに集団に囲まれてた、俺と同じく可哀想な奴が着いてくる

「一年？」

「お前も？」

「そうだよ」



見てみると身長は俺と変わらないくらいだ、確認出来るだけで右耳に3個、左耳に4個ピアスをつけてる。

腰にはチェーンをつけて歩く度に音がなるからそこにいるって分かる、ネックレスも2つくらい着けてる、光り物好き？

一番印象的なのは髪の毛、俺が言うのもなんだけど髪がド派手、綺麗な金髪で玉　宏風の髪型、顔は日本人っぽくない、まあもてそうだな

「四色海、お前は？」

「五百蔵黄金、気になると思っけどこの髪は自毛だから、俺ハーフだから」

どうりで、全てのつじつまがあつた、にしてもチャラチャラした感じ何だけど爽やかなんだよな、不思議なやつ

「カツコイイ名前だな、ちなみに俺も自毛」

「ふん、カーディガンは？」

「ブレザーとネクタイが嫌いだから」

「初日くらいちゃんと着て来いよ」

「お前もな」

腰パンに第二ボタンまで開けてる、ネクタイは開いてる所にあわしてる

「お前はやめろ、コガネでいい」

「俺もカイで良いから、コガネ」

速攻友達が出来た喜びを噛み締めながら、クラスの表がある体育館に行った

「コガネは何組？」

「7、ちなみにカイもな」

「おつ、ホントだ。一人で遅刻するのも視線が痛いなあ、って思ってたんだよな」

「アイツもか…」

「アイツ？」

「何でもない」

俺の周りにはいないクールな感じが新鮮みを帯でて良かった、チ力と離れた事に気づいたのはその後だった。

入学式とかテレビ放送らしく全生徒が教室にいる、みんな静かだったから息を整えて入ろうとしたら、コガネが速攻入っていった

「おい！コガネ」

「遅れてすみません」

そのまま教室に入ろうとしたら、明らかに体育教師の担任らしき教師が制止した

「お前ら、五百蔵と四色か？」

『はい』

“ゴツツ”

頭を殴られた、明らかに今殴られた、かなり痛い、隣にいるコガネが完璧にキレた目をしてる

「デメエ！何すんだよ！」

「遅刻するほうが悪いんだろ！」

初日から喧嘩かよ、体力有り余ってるね

「コガネ面倒だからやめとけよ」

「カイはム力つかないのかよ！」

「ム力つくけど……」

教師を睨んだ、冷静さを装ってたけど、一人だったらキレてたな

「先生、知ってる？殴る理由は2種類あるんだよ、一つは正当防衛でしょうがなく殴る奴。もう一人は相手に口では勝てないと思った馬鹿、知能指数の低い救いようのないクズだ。先生がどっちに転ぶかはご自由に」

「……なっ！」

拳を握って震えてる、やっぱりコイツは後者だな

「コガネ行こ、席空いてるとこですよね？」

「……」

あゝあ、ブラックリスト入り決定だな、俺の高校生活は喧嘩からか

よ、先が思い遣られるな。

五百蔵黄金、コイツのお陰といつかせいといつか、とりあえずコガ  
ネがいれば飽きなそうだな

## 青のライバル

遅刻してきた上に教師と喧嘩までした俺らは、あっという間にクラスの有名人になった、俺的には好ましくないんだけど周りはおかまいなし

「コガネのせいだぞ」

「何が？」

「コガネがあそこで喧嘩腰になるから、完璧に目をつけられたぞ」  
「カイもかなり挑発してただろ」

二人で一緒にいるから更に目立つ、一緒っていうか席が隣なだけなんだけどね

「おい！五百蔵、四色終わったら応接室に来い」

「何で？」

「自分の髪見たことないのか？」

「自毛だよ、俺もコガネも」

「とりあえず来い！」

ああ、うるせえな、コガネに至っては終始シカトをしてた、喧嘩されるよりはマシか。

俺らは渋々、応接室に行った、中に入るとチカもいた、ホントに髪の毛のことで呼ばれたんだ

「チカもいたんだ」

「当たり前だろ、髪の毛の事なんだから」

「それが信じられなかったから」

「カイ、誰？」

コガネがチカに近づいて顔を覗きこんだ

「な、何だよ？」

「手を出すなよ、俺の彼女なんだから」

「ふっん」

そういつて離れていった

「コイツはコガネ、同じクラスの奴」

チカが目を細くして、コガネを見た、この二人あうのかな？

「カイをよろしくな！」

「カイには借りがあるし、こんな口のたつ奴が近くにいれば鬼に金棒だろ」

「何の鬼だよ？」

「……なんだろ」

馬鹿なんだなコイツ、この調子だから喧嘩ばっかしてたんだろうな、朝みたいな感じで

「お前ら、騒ぐな！」

『うるせえな』

ボソボソつとコガネとハモった、聞こえたらしく睨まれた、俺らも睨み返すように見た

「お前から本当に自毛なのか？」

「そつだよ、疑うなら一本提供してやろうか？」

「俺はハーフだからしょうがないだろ、お前らも知ってるだろ」

「そこのは？」

「潤間です」

ああコイツホントにム力つく、人の話しは聞かないし、無駄に偉そうだし

「しょうがない、でもその服装は何だ？」

「ブレザーとネクタイが嫌いだから」

「趣味」

こつちは案外うるさいけど、この馬鹿ならどうにかなるだろ

「でもあれですよ、ここ公立だし、校則で無いですよ、カーディガンもOKだし、光り物も大丈夫ですよ」

「高校生らしい服装を、とあるだろ」

「高校生らしいって人によってそれぞれですよ、俺らはこれが普通なんですよ、先生はどうか分からないですけど、先生の観念を

押し付けられても困りますから」

「……」

また拳を握って震えてる、最初に俺が言った事が効いたんだろうな、普通だったら今頃コガネと大喧嘩してるはずだけど

「他に無いなら帰ります」

「……」

俺らはあのアホ教師を残して応接室を出た、その後大きな音が聞こえた、多分アイツが何か蹴った音だろ

「ハハハ！カイ最高、マジ気持ちいい」

「俺も、アイツ馬鹿だから簡単に口で負かせるし、最初に俺が言った事もあって何も出来ないからな」

「教師と喧嘩したのってホントにカイ達だったんだ」

クラスだけじゃなくて学校中に知れ渡ってらしい、明日からが面倒だな

「誰から聞いたの？」

「アイツ」

チカが指差した先には、スカートを短くしてその下にジャージを履いて、明らかにギャルっぽいけど何故かナチュラルメイクの女の子だった

「誰？」

「友達」

「違うでしょチカ、僕はチカの‘オンナ’」

僕？オンナ？もしかしてあっち系の人？

「これがチカの彼氏？」

「そうだよ」

「よろしくね、ワシタカツバサ驚鷹翼！」

「俺は……」

「知ってるよ、四色海君と五百蔵黄金君でしょ、遅刻して先生と喧嘩した」

何だコイツの情報通っぷりは、フルネームまでしってるし、俺はチ

カが教えたとしてもコガネは？

「コガネ、知り合い？」

「騒がしい奴に知り合いはいねえ」

第一印象は最悪だな、コガネとは正反対だもんな

「何でこんな奴と友達に？」

「こんな奴なんてヒドイ、僕はただ…」

「アタシがメイクしただけ」

ずっとチカ腕にしがみついてクネクネしてる、もしかしてライバル出現！？

「何で？」

「だってツバサのメイク酷いんだもん、化粧品の無駄遣い」

そういえばチカはメイク得意だったんだよな、まあそこで手を出すのはチカらしいな

「チカメツチャクチャメイク上手いから感動しちゃって、運命感じちゃった」

すみません俺の彼女なんスけど、軽く嫉妬してみたりする

「カイ、帰ろう、コイツうるさい」

「コイツじゃない、ツバサだ」

うわぁ、仲最悪

「ツバサ君をどこかにやってくれ、じゃないとクズになる」

クズ？ああ殴るって事か、しょうがないチカと帰りたかったけど、

コガネをコイツから離すか

「チカ悪い、コガネと一緒に帰るからソイツくくつというて」

「ソイツじゃないツバサだ！」

「ツバサ君をくくつというて」

「分かったよ、行こツバサ」

「べーっだ！」

片目瞑って舌を出してる、ホントにイタイ奴だな。

コガネと二人で帰ってる時は凄くイライラしてた、完璧ツバサのせ

いだよ、この二人は近付けない方がいいな

「ああ、ムカつく」

「そうカツカするな、もう会わなきゃ良いだけだろ」

「お前がいるかぎり来る」

「何で？」

もしかしてツバサが俺に惚れて、コガネはそれを瞬時に見抜いたとか？

「お前の彼女が来るだろ」

「あつ、そっか。何とかなるだろ」

「いや、無理だ、あの女は生理的に受け付けない」

うわあ、完全拒否姿勢だよ、何とか二人が喧嘩しないようにがんばらないとな。

ツバサか、また変な奴に会っちゃったな、でもコガネとは巧くいきそう、でもコガネと一緒にいると何か事件が起こりそう



## 青と部活

この学校には一部の生徒（俺みたいな）を困らせる最悪の授業がある、その名は‘講座’、響きは普通だけど言い換えると‘部活’の時間だ、この学校は全員が部活に入らなきゃいけないらしい、そのせいで馬鹿みたいな量の部活がある、当たり前だけどフリークライミング部もサーフィン部もない、料理部ってのに惹かれたけど2秒で却下、理由は女に囲まれるとめんどくさいから

「コガネは部活どうするの？」

「サッカー」

サッカーか、運動部ならそれなりに出来るから良いかな

「カイはどこ？」

「決めてないんだよな」

「サッカーくらい出来るだろ？カイもサッカー部来いよ」

「行くところないし、とりあえず見学だけでも行ってみるか」

そんな話をしているとやかましい二人が、コガネの顔が一瞬で変わったのが分かった、チカとツバサだ

「カイ、部活どこにするんだ？」

入って来て第一声がそれかよ、クラスの視線が集まってるのもお構いなしに寄って来た

「一応サッカー、コガネもいるし」

「僕の情報によるとサッカー部は別名イケメン部で、イケメンが多い事で有名だよ」

「お前に聞いてねえよ」

「お前じゃない、ツバサだ」

周りの男子が何やら騒いでる、後ろの男子に理由を聞くと

「潤間さんと鷺鷹さんは、学年でもトップクラスの可愛さだよ。やっぱりイケメンには可愛い子が集まるんだね」

らしい、チカって人気があるんだ、それにツバサがモテるのにもビ

ツクリ

「チ力達は？」

「カイ、まだ終わらないのか？」

ツバサの事がホントに嫌いなんだな

「悪い、少し待ってて。で、チ力は？」

「バレー部、ツバサも一緒だよ」

「バレー部と言えば別名美少女部、可愛い子が多いので有名な」

「お前うるせえよ！人の話に入ってくるな！」

コガネが怒鳴った、俺の後ろの奴に、明らかにビクビクしてるよ、

何もクラスメイトにやつあたりしなくても

「ごめんな、コガネ機嫌悪いから」

「誰のせいだか」

そっいつてコガネが横目でツバサを見た

「僕のこと？」

「他に誰が？」

「…勝手にイライラしてる」

「はあ？」

あつ、今完璧にキレた、初日に見せたあの目だ、これは流石にマズイな

「ツバサ、もう帰って、コガネが危ない」

「ええ、でも…」

「早く消えろ」

「何だよ、ベーっだ！」

またそれかよ、チ力とツバサを無理矢理返してその場を収めた、コガネも少しは落ち着いたかな

「悪いな、コガネ」

「カイが謝る事じゃない、あのクソがいけないんだよ」

そんな感じで話をしてると自然と男子達が集まり始めた、チ力達の事かな

「何？」

「四色と五百蔵って、潤間さんと鷺鷹さんと友達なの？」

「友達も何もチ力は俺の彼女だから」

『ええええ!!』

何もそこまで驚かなくても、しかも一部の女子の悲鳴にも似た声も混じってたし

「クソオ、潤間さんはダメか、でも、鷺鷹さんなら」

「あのクソ女のどこが良いんだよ」

各々が各々の答えを出してるけど、一つ可哀想なところが、ツバサはチ力に惚れてる事をみんなは知らない、まあ知らない方が良いと思うけど。

講座の見学時間、俺とコガネは体操服に着替えてサッカー部の練習を見に行った。

グラウンドには見学のカツコイくらいの奴がゴロゴロ、それにマネージャー希望が追っかけかどっちか分かんないけど女の子が多数。

にしてもサッカー部の先輩達、あれでもサッカー部かよ、俺より下手くそじゃん

「下手な野郎ども」

「コガネもそう思う？」

「当たり前だろ、小学生みたいだ」

「じゃあ一発かましてきますか？」

「そうしますか」

俺達二人はミニゲームに参加した、俺はどこでも同じだからコガネとツートップで

「俺とコガネ振り子で行くぞ、他に渡しても高が知れてる」

「OK」

スタートと同時に個人技やらワンツーやらで進んで行った、一緒にプレーすると更にクソだな

「ゴール！一年チーム先取」

実況好きらしい先輩の実況がさつきからうるさい

「おおっと、金髪の一年がボールを奪った！空かさずロングパス、その先には青髪の一年！そのままボレー！2点目だ！何だこの大型新人は！？」

みたいな感じだ、ジン川平ばりの熱さでの実況ありがとう。

見学が終わって帰ろうとした時だった、一人の小さい先輩が寄って来た

「どうも部長の小林、君達サッカー部に入らない？君達ならすぐにレギュラーになれるよ」

まああのレベルなら余裕だろ、しかも最初から入るつもりだったし「コガネは決まりで良いよな？」

「カイが良いなら」

「じゃあ入ってくれるんだね！みんな一年生が二人入ったよ！」

そうすると話してた部員達が集まって来た、確かにみんなカッコイイ、爽やか系とかワイルド系等々あらゆるジャンルのイケメン達が「よろしくな」

「お前らがいれば百人力だな」

「お前、フォワードのレギュラー落ち決定だな」

「……」

その他いろいろな反応を示した、俺はとりあえず挨拶をしてたけど、コガネは終始無言だった。

まだ正式部員じゃないからすぐに俺達は帰った

「何で黙ってたの？」

「いやあ、あんだだけ調子乗ったこととして、嫌われたと思ったから、あの反応されてビックリした」

「まあ良いんじゃない、何か楽しそうな部活だし」

「まあな」

俺達はまだ知らなかった、サッカー部という所は部活以外が一番キツイって事に……

## 青の地獄生活

やっと普通の授業が始まった、でも退屈だ、何の新鮮さもないし簡単な事ばかりやってる、聞いているフリだけはしてるけど10分するとブラックアウトしてる、コガネに至っては休み時間しか起きてない。

3時間目が終わった時に以外な訪問客が

「カイ君、お弁当忘れちゃって」

マミ姉だ、一緒に登校してて分かったけどマミ姉の人気はユキ並だ、だから一瞬で教室が騒がしくなった

「はい、ユキも持っていてないから届けといて」

「分かった、じゃあね」

マミ姉が出ていった後、例の如く男子達が集まってきた、今回はコガネも興味があるらしい

「カイ、あの美人誰？」

「五百蔵知らないのかよ！？2年生の蘭さんだぞ、去年のミス光ヶ丘！」

光ヶ丘は俺達の高校名ね、それにマミ姉がそんなに凄いのにもビックリ

「で、何でミスがカイの所に？」

「うーん、お姉ちゃんみたいなものかな」

『何いいい！』

今度は女子の喜びにも似た叫びだ、別に秘密にする気もなかったし言う必要性もなかったし

「でも、ユキの彼女だよ」

「あの、時期生徒会長と呼び声の高い樹々下さんと！？」

「美人はイケメンにか…」

生徒会長？ユキってそこまで頭良くないし人望を集めるタイプじゃないよな、自ら立候補するとは思えないし

「何でユキが？」

「四色知らないのか？この学校で生徒会長をヤルって事は、学校のイケメンって事何だぞ」

「そう、暗黙の了解でそうだった」

「知ってたコガネ？」

無言で首を横に振る、何か無茶苦茶な学校だな、学校全体で美男美女コンテストかよ

「ちなみに四色と五百蔵は有力候補だから」

『やだよ』

そんなかったるいのやってられるかよ。

先生が入って来てみんなが席に着いた、礼と同時にコガネが爆睡、その十分後、俺も……。

起きた時には礼が終わってた、有意義な一時間だったな、弁当の飲み物を買に行こうとしたら地響きが聞こえて来て、その後教室にバツファローがなだれ込んで来た

「これ、お弁当！」

「私も！」

「四色君は私の食べるの！」

「五百蔵君食べて！」

スゲーパワー、ってか何で俺らがこんなめにあわなきゃいけないんだよ、と考えると噂男（後ろの席の奴）が説明を

「昨日のサッカー部の件で君達は完全に注目の的だよ、運動も出来てイケメンときたら食い付くのが女の子の性だろ」

納得、出来ないよな、しかも一年だけならまだしも、ネクタイの色から判断して2、3年もいるよ、中には可愛い子もいるけど困るんだよな

「そんなに食えないし、第一自分の弁当があるから悪いけど」

「俺はいらない」

それで撤収してくれたら楽なんだけどな、全く聞く耳持たずだな、

思い思いに騒いでるよ、その時チカとツバサが入って来た、救世主登場！

「コガネ、あれ見ろ」

「しょうがない、今は手段を選んでる余裕はないな」

コガネも何とか納得してくれたし、後は根性で

「チカ！遅かったじゃん！」

「カイ、どうした？」

「ゴメンね、予約済みだから、いつか機会があったらね」

「半永久的に無いけどな」

人をかき分けてチカとツバサの所に行って教室を出た。

チカが状況把握が出来て無いらしい、俺達も出来て無いけど

「カイ、あれは何？」

「僕が説明してあげるよ！どうせカイっちもコガネんも分かって無いと思うから」

カイっち？コガネん？もしかしてあだ名って奴？だんだんイタイのが浮彫りになってきたな

「……コガネん」

気に入ったの！？コガネの趣味が見えてきません

「たまにはマシな事言うな」

「でしょでしょ！コガネん気に入ってくれた？」

「少しな」

顔を真っ赤にしてる、理解出来ない、何でこんなにセンスのセどころか発する意欲すら見えないあだ名は、3年間これで呼ばれるとなると、辛い

「で、理由を教えるよ」

「あ、そうだそうだ！カイっちとコガネんは昨日サッカー部の先輩達に圧勝したでしょ。サッカー部の追っかけの子達は上手い人の追っかけになる確率が80%くらいなんだよね。だから、矛先が君達に向かった訳」

噂男より説得力があるな、でもこれからこの地獄生活が始まるのかよ

「疲れるなあ、何か打開策はないの？」

「無いよ！」

即答ありがとう

「チカ、助けてよ」

「アタシに助けてを求めるなよ、アタシだって辛いんだから」

「チカチカは男子からの告白が止まないんだよ」

「ツバサもだろ」

「チカチカには負けるよ」

この学校が怖くなってきた、チカも辛いだろうな、俺達も昨日は告白されたし、一目惚れでも少しは考えろよ。

飲み物を買って教室に帰った、弁当を持ってチカとツバサが来るらしい

「コガネは弁当？」

「そうだよ」

「無くない？」

「ん、まあ」

チカとツバサが入って来た、相変わらず男子の目を惹いてるな。

コガネが立ち上がった女子の席群に向かった、この学校は男子が窓側から中央にかけて出席番号順、女子は廊下側からだ、コガネが向かった先は廊下側の一番後ろの席の前で止まった、何してんだろ

「ヒノ弁当」

「はい」

女の子から弁当貰ってる？へっ？コガネが？嘘だろ、どついう事だよ！？



## 銀との出会い

「ヒノ、弁当」

「はい」

俺はその一コマを見てビックリを通り越して、脳細胞が退化した、あのコガネが女の子に話かけた、しかも弁当受け取ってるし、彼女？もしかして彼女なの？俺はとりあえず駆け寄った

「カイ、行くぞ」

「はいストップ」

コガネを制止した

「何だよ？」

「とりあえず、その弁当とこの女の子の事から説明してもらおうか」  
「幼馴染みだけど」

そういうことね…、って幼馴染み！？ああ悲しい一人でノリツツコミするほど落ちぶれた俺が、悲しすぎる

「何で同じクラスにいるのに言ってくれないんだよ」

「言わなかったっけ？」

キョトンとした顔をしてる、不思議そうな顔をしてるけど俺がその顔したいよ。

チカとツバサがすぐ後ろにいるのに今気づいた、二人は普通にコガネの幼馴染みの所に行った

「何だよヒノリ、カイと同じクラスだったんだ」

「ヒノノとコガネんは幼馴染み、と」

あ、ツバサが新しい情報をインプットした、ってか何でチカとツバサが知ってるの？もしかして俺ってハブ？

カスガヒノリ  
「春日氷乃梨」

「え？あ、うん、俺は四色海、って知ってるよな」

俺の目を見ながら無言で頷いた。

ヒノリって子は、長い黒髪をこめかみの所で顔にかからないように

留めてる。

キリッとした目つきで何だか凜々しい、可愛いつていうか大人びてて、美しいって表現の方が近い

「で、何で弁当を？」

「幼馴染みに作ってもらっちゃいけない？」

「いやそうじゃないけど、何で持参しないのかな、って」

コガネは少し間をおいて

「一人暮らししてるから」

「そう、なら納得」

何か前のがインパクトが強すぎてあんまり驚けない、確かにビックリだけど詮索に疲れた

「ヒノノも一緒に食べようよ」

「ヒノリはまだ食べてないだろ」

また無言で頷いた、無口な人だな

「良いのかヒノ？」

また無言で頷いく、頼むからしゃべってくれよ、何か怖いよ。

5人で屋上で弁当を食べてる途中に一つ物凄い事に気づいた、それはヒノリの目だ

「ヒノリ、それカラコン？」

無言で首を横に振る

「天然！？」

「お母さんのお祖母ちゃんがロシア人」

ヒノリの目は灰色を通り越して、銀色っぽかった、何か綺麗で吸い込まれそうな瞳だった

「ホントだ、ヒノリの瞳綺麗だな」

「ヒノノ可愛い！凄い綺麗、良いな良いな」

ヒノリが顔を真っ赤にしてうつ向いて言った

「…ありがとう」

「良かったな、ヒノ」

また無言で頷いた、もしかしてこの二人…、まあ良いか、それより気になる事がもう一つ

「チカとツバサは何でヒノリの事知ってるの？」

「バレー部仲間」

以外にアクティブなお方なんだな、文芸部とか入ってそうな感じがしたんだけどな、でもバレー部は美少女部って噂男が言ってたけどホントだな

「ヒノ、今日も弁当美味しいな」

「…ありがとう」

「惚気るな」

「カイ、弁当美味しい！」

うわぁ、チカが下らない対抗心燃やしてるよ

「当然だろ」

周りがビツクリしてる、俺が弁当作っちゃいけないのかよ

「カイ、料理するの？」

「何なら食ってみる？百聞は一食にしかず、ってな」

「一見な…」

よく知ってるじゃん、ってかツバサもつまんで来やがった、チカの食えば良いのに

『美味っ！』

ビツクリした、そんなに叫ばなくても良いのに、ってかさりげなくヒノりも食べてるし

「…美味しい」

「ヒノもそう思うだろ」

「カイっちは料理上手、と」

あ、またインプットされた、そして隣で誇らしげなチカ

「カイの料理は天下逸品だよ」

「ってきりミスが作ってるもんだと思ってた」

ミス…、ああマミ姉の事か、コガネの中ではミスで定着したらしい「ミスって誰？」

「マミ姉の事だよ」

「何で、ミス？」

「僕にお任せなさい！」

でた、情報通、ツバサならこの学校の事なら何でも知ってるからな、情報の入手元は不明だけど

「蘭さんは去年のミス光ヶ丘、ミス光ヶ丘ってのは、毎年文化祭で開かれるミスコンの事、ミスジャパンとかミスユニバーズあたりを想像してもらえばいいよ。ちなみに今年は蘭さんとココにいる3人が有力候補だよ」

スゲー情報網、詳し過ぎるし、今はミス候補に囲まれてるって事が、そこら辺の男子が死にもの狂で入りたい輪なんだ

「誰が呼んだか、光ヶ四天王、って呼ばれてるけどね」

それは笑える、四天王だって、でも自分の彼女がモテるのって凄く複雑な気分なんだよな

「モテる彼女を持つと苦労するな」

「コガネもな」

コガネとヒノリが顔を真っ赤にしてる、やっぱりこの二人、どっちもガツガツ行くタイプには思えないしな、でもコガネがシャイボーイってのが意外だな

「ちなみにカイっちとコガネんは、イケメンツートップ、って呼ばれてるよ」

「何だか段々、その情報嘘臭くなって来たんだけど」

「カイっち何を言うか！君がこの学校で一番頭が良いのも知ってるんだぞ！」

やっぱりツバサの情報網は確かだ、何か全部筒抜けになってるみたいでいやだけど

「ヒノリは告白何回くらいされた」

ふときになって聞いちゃった、候補ならそれなりにあるだろ

「……5人」

「やった！僕の勝ち！僕は7人だもんね」

「チカは？」

「アタシも5人かな」

何だコイツら、でもみんな勝算が無いんだよな、でも一人今の会話を聞いて落ち着かない奴が

「ヒノ、OKしたの」

横に振った、当たり前だろ、コガネがいるんだから、コガネもあからさまにホツとするな

「カイとコガネはどうなんだよ？」

「俺はされる前にチカの事を言うから、最後まで行ったのは2人かな」

「俺は……、忘れた、当然全部NOだけど」

コガネらしいな、でも何で彼女がいる俺にコクった奴が二人もいるんだろ、何かこの学校おかしいよな、みんな必死さが伝わってくる。

春日氷乃梨、不思議だけどコガネにはこれくらいが調度良いかもな、うるさくないから

## 赤との帰り道

部活の輪にも入れて最近は学校が楽しくなってきた、女の子達さえいなければ…、練習中の女の子の量が半端ない、軽くスタジアムと化してる、これが普通らしいけど活力はどこから来るんだよ

「最近女の子増えたな」

一年の面倒をみるのが大好きな林さん、この人もカツコイイけどそれが埋もれるのがサッカー部の凄いとこ

「何ですか？」

「お前らのせいだぞ」

『俺ら？』

普通に俺らも埋もれてると思ってた、だってレギュラーなんて各学校の一番カツコイイ人が集まった感じだから

「気付けよ、時期生徒会長」

「林さんもしやないんですか？」

「俺は無理だ、樹々下がいるかぎりな」

「そういえばユキは何部なんですか？」

講座は2年まで必修だから気になった、ユキがどんな事やるのか

「アイツはバスケ。四色は樹々下の事知ってるのか？」

「義理の兄弟ですから」

『嘘っ！？』

後ろで水を飲んでるコガネが吹き出した、それよりユキはバスケ部か

「カイ、聞いてないぞ」

「おかしいな…」

「そうか、なら蘭も知ってるだろ？」

「まあお姉ちゃんみたいなもんですから」

林さんが顔を真っ赤にして頬をかきながら言った

「実は惚れてたんだよな」

「そうなんですか！？」

「ああ、あつけなくフラレたけど」

「でも林さんならすぐに出来ますよね？」

「その気になればな」

そうだ、サッカー部はナルシストが多いんだよな、サッカー下手くそな奴でもサッカー部にいるからな、肩書が欲しくて入ったアホがちらほら。

帰りはバレー部に寄ってから帰ってる、チカとヒノリ目当てで、おまけでツバサが付いてくるけど

「チカ終わった？」

「今ね」

「にしても、上凄いな」

「ん、ああ、まあね」

サッカー部同様エネルギーを持て余した男達が、そのせいで体育館の熱気が異常だ、大型扇風機が置いてあるくらいだ

「おい！お前誰だよ！」「いくらイケメンでも潤間さんを独り占めにする権利はない！」

「金髪手前もだよ！」

ある意味女の子よりたちが悪い、コガネも軽くキレかけてるし

『サッカー部の…』

「四色と！」

「五百蔵」

『文句あるならサッカー部に来い！』

はい、予行演習通りに決まった、って浸っていると走って下りてきた、流石に喧嘩する理由もないし逃げるか

「コガネ行くぞ」

「チカちゃん、ヒノいつもの所だな」

「僕も！」

そういえばツバサの存在を忘れてた、そんな事考える暇もなく男達が走って来た。

遅かったからあつという間まけた、いつもの場所ごと学校の裏門を少し行つた空き地にチ力達がいた

「お待たせ」

「大丈夫か？」

「余裕！つてかツバサは？」

ツバサだけがいなかった、いつもチ力のくつつき虫なのに

「バイトだつて」

「そうなんだ、なら久しぶりに二人で帰ろ」

チ力がコガネとヒノリを見て頷いた、チ力も分かつてるじゃん

「じゃあねコガネ」

「ヒノリもコガネ君にちゃんと守ってもらいな」

「おい！カイ、チ力！」

「…バイバイ」

案外ヒノリは勘が鋭いし素直だな、それに比べてコガネときたら。

俺とチ力は街に来てた、チ力と二人で帰りたいってのも半分だったし、たまには楽しまないといつ足元をすくわれるか分からないからな

「カイ、クレープ食べよ」

「良いよ」

クレープ屋の商品にビックリした、半分は普通なんだけどあとの半分が、コロツケとかキムチとか納豆とかクレープとは思えない物ばかり、普通のを頼んだけど興味がある

「クレープおいひ」

「チ力、クリームがついてる」

何か最近いろいろ疲れてたから癒されるな、慌ててクリームを拭き取ってる

「取れた？」

まだついてたから親指で拭き取った、指についたクリームを舐めるとチ力が真っ赤になった



「とれたよ」

「…ありがと」

「久しぶりだから免疫が低下した？」

無言で頷いた、やっぱりチ力は可愛い、あんなクソどもには死んでも渡せないな

「まだそれつけてるんだ」

ブレスレット、俺がチ力の誕生日プレゼントであげたやつだ

「当たり前だろ、運動とか風呂とか以外はずっとつけてるよ」

「何か嬉しい」

「何で？」

「高校入ってチ力が遠くに行っちゃった気がしたから、これでも寂しかったんだから」

チ力がモテて、何か嫌だった、ヤキモチって言われればそれまでだけど、やっぱり彼女がモテて嬉しい奴はいないだろ

「それはアタシもだよ」

「大丈夫だよ、チ力以外は興味のきの字も無いから」

「アタシも！」

いつもより寄り添って歩いた、途中同じ学校の生徒に会ったけど無視していった

「カイ、コガネ君とヒノリどう思う？」

「二人とも消極的だね、完全に両想いなのに一歩踏み出す勇気がない」とみた

「やっぱり、アタシもそう思うんだよな」

チ力が心なしかウキウキしてる、他人の恋を楽しんでるよ、まあ少なからず俺もだけど

「ヒノリ可愛いもんね。でもコガネ君は何か不思議な感じ」

「悪そうなんだけど、怖くない？」

「そう！」

指をパチンと鳴らした

「あんなにピアスもいっぱいつけてるし、髪の色も色だから怖くて

もおかしくないんだけど、何か爽やかで話易いんだよね」

「コガネマジックだよ」

「だね」

その後公演のベンチに座って学校の話をした、最後はキスで絞めて、久しぶりだったから心臓がうるさかった

## 青と金の喧嘩

最近はいろいろと慣れてきて楽になった、昼は誰もいない屋上でいつも通りに5人で弁当を食べる予定だった、その日は変な奴に止められた

「おい、その金髪と青髪、止まれよ」

声の主は一言で言うところ不良、しかも雰囲気からシヨボくてダサイ、もう弱さが溢れ出てる

「何？」

「ちよつと来いよ」

「はあ？」

コガネがキレかけた、でもここでいざこざを起こすと面倒だな、チ力達もいるし

「分かったよ」

「カイ何でだよ？」

「ココじゃ面倒だろ。チカ、先行つてて、スグに行くから」

みんな不安な顔をしてる、まあ何の問題も無いけど教師に見つかるのが一番面倒なんだよな

「大丈夫？」

「全然大丈夫」

多分かなり面倒な事なんだろうな、ってか男からの呼出して始めてだな。

俺らが連れて行かれた場所は体育館の裏だった、定番過ぎて笑えて来た、そこに4人の不良が地べたに座ってタバコを吸ってる、ああもつとめんどくせえ

「プツ」

コガネが吹いた、少しは我慢しろよ、俺だってギリギリの綱渡りしてるんだから

「何がおかしいんだよ!？」

うわぁ、ドスの効かない声で言われても火に油だよ

「だってなぁ、カイ」

「笑うなよ、俺だって我慢してるんだから」

頭っぽい奴が顔を真っ赤にして、コガネの胸ぐらを掴んできた、コガネはそれを叩いた

「だってなぁ」

「ん、まぁ」

『ダサイんだもん』

頭っぽい奴がコガネに殴りかかろうとしたけどあっさり避けた、全員が立ち上がった時だった

「ちよつと待って」

何だよコガネ、臨戦体勢だったのに

「カイ、普通にやってちゃつまないから、多く倒した方がみんなにゼリーおごりってどう？」

「のった!」

確かにただ喧嘩するだけじゃつまないよな、謝罪の意味も込めてコガネにしたや良いこと思いつくじゃん

「お前ら二人で盛り上がってんじゃねぇよ!」

「そうだ!二人とも立てなくしてやるからよ!」

「寝言寝てから言え」

「古!」

「うるせえよ!」

そんなことしてると殴りかかってきた、一人目は腹に一発で倒れた、案外弱いな、二人目は脇腹を蹴ろうとしたけどその足を捕まえてその場に倒して、顔面に一発

「コガネ、二人終わったぞ!」

「俺も」

残り一人は呼出しに来た奴だけど、震えて逃げに行った、なんだよつまんねぇの

「おい！待てよ！」

「コガネ良いよ、それよりコレって引き分け？」

「だな、割り勘で」

帰ろうとして体育館の裏から出た時だった

「いやあ、お二人えろお強いんやなあ」

そこには関西弁のにやけた男がいた、糸目でできた大きな口、スパイラルのかかった髪の毛、変な奴

「誰？」

「わい？わいは烏丸虎鐵や」  
カラスマコテツ

「カイ知ってる？」

「知らない」

ってか何でコイツがココにいるんだよ、体育館の裏なんて普通来ないだろ、しかも喧嘩を見てた口ぶりがまた怪しい、だって喧嘩した後の奴なんて頭に血が昇って何されるか分からないもんな、コイツおかしい

「何でお前がココにいるんだよ？」

「何でって、わいが全部仕掛けたさかい」

その瞬間コガネが関西人の胸ぐらを掴んだ、でもまだ笑ってる、コイツの余裕はどこから来るんだよ

「何でこんな事した？」

「試しただけや」

コガネは殴りかかったけど、胸ぐらを掴まれたゼロ距離で関西人はよけた

「本題やけど、うちの道場に来てくれへん」

『断る』

何でこんな訳の分からない奴の言うことを聞かなきゃいけないんだよ、しかも道場？

「ちなみに何の道場？」

「極真空手や、ちなみに師範やらしてもろってますう」

だからか、でもあの距離からのを避けるって事は、並の師範じゃな

いことは確かだな

「頼んますう、今人が少のうて困ってんねん、二人ともカツコイさかいに客寄せのためにお願いしますう、バイト代はずみまっせ」

「あんな事しておいて虫がいいだろ」

「じゃあせめてこの写真だけでも」

そうして出したのは俺らの学校での写真だった、部活とか勉強中とかその他もろもろ

「それ何だよ!？」

「おたくらの写真や、これを公認して事で売らしてえや」

「それも無理だな」

「欲張り過ぎやでえ、どっちか一つしか譲れへんで」

そうするとコガネが耳打ちしてきた、確かにこれなら良いな

「おい、なら俺らも条件だす、それをのめ」

「何や？」

「購買のゼリー5個、それで写真を公認にしてやるよ」

コガネの威圧にも顔色一つ変えない、コイツ普通にスゲー

「ちよつと待っててえな!」

走って購買方面に向かった、何か変な奴に目をつけられちまった。

戻って来た手にはゼリーがあつた、何故か満面の笑だった

「ほなこれで公認にしてみらうで、五百蔵はん四色はん」

えっ? 俺達名前を名乗った覚えはないぞ、何でコイツ知ってんだよ

「何で俺らの名前知ってんの？」

「スカウトする相手の名前くらい調べるのは当たり前やろ」

確かに、俺達は足早にその場を去った、後ろで手を振ってる関西人を無視して。

そつえばあの不良達って何年だろ、それにあの関西人も何年だろ、事としいによっちゃ面倒なことになりそうだな。

早く屋上に行こ、チ力達との弁当の時間がなくなっちゃうよ

## 青と関西人

屋上に行くと、場の空気が沈んでるのが分かった、完璧に俺らのせいでよ、しょうがないゼリーじゃどうにもならないと思うけど無いよりはましだろ

「お待たせ」

「カイ！大丈夫か？」

「何が？」

「何がって…」

少し泣きそうなチ力がいた、これはヤバい、思ってた以上に深刻な状況かもしれない

「何でも無いって、なあコガネ」

無言で頷いた

「じゃあ何があったか言えよ」

「チ力達に何かしたらただじゃおかないって、アイツはモチ力達のファンなんだって」

「ホントか？」

「おう、チ力は俺の彼女だ、その言葉そのままそっくり返すよ、って言うて帰ってきた」

何かかなり苦し紛れの嘘だな、冷静な状態だったら通用しないよ、ってかいつの間にかツバサがゼリー食ってるし

「チ力チ力、カイっちがそう言うてるんだから良いじゃん、それにカイっちとコガネが無事だからモウマンタイ」

チ力は渋々ゼリーを食べた、ヒノリは無関心だ

「カイっち、さっきから気になってたんだけど、後ろの誰？」

「後ろ？」

俺達の後ろには、ニタニタした糸目がいた、そう関西人だ、ってか何でコイツがココにいるんだよ

「いやあ、べっぴんさんばかりでんなあ」

「何でお前がココにいるんだよ!？」

「まあ細かい事は気にせんといて」

コイツがココにいる理由が分からねえ、もう用は無いだろ、そうだ情報通のツバサなら何か知ってるかも

「ツバサ、コイツの事知ってる?」

「僕に知らない事は無い!」

頼もしいな、関西人は普通に俺のゼリーを食い始めた、まあこの際そんなことはどうでもいい

「烏丸虎鐵、1-5、烏丸道場の若き師範にして、金儲けの虫、主にこの学校のイケメンとか美少女の写真を隠し撮りして売ってる関西人だよ」

「隠し撮り言うても、怪しい事はしてないで」それをしてたら警察につき出してるところだよ、それでも肖像権の問題で警察につきだせるかもな

「で、何でお前がここにいるんだよ?」

「そうそう、カイはんとコガネはんを調べとったら、潤間はんと春日はんが浮かんで来たんや」

「何か俺らが友達になつてんだよ?」

「細かいことは気にせんといてえな」

細かくねえよ、それにコイツ調べてやがったのかよ、にしてもホントにニタニタしてるな

「お二人は人気あるさかいに、写真を公認にしとて、そやさかいつけてたら会えると思うたらまさにビンゴや、それに棚ボタや、もう一人の人もべっぴんさんや」

ホントにコイツの頭には金儲けの事しかないらしい、でも俺がそれを許すとも思っただのかよ、調べたんだから付き合ってるまで達してるだろ

「チ力のは許さねえぞ」

「なら春日はんは?」

「俺が許すわけないだろ」



困り顔をしてる、当然の結果だけどな、次に関西人が目を向けたのはツバサだった、悪いけどツバサなら良いな

「おたくはどや？」

「おたくじゃない、僕は鷺鷹翼だ！」

「鷺鷹はん、公認にしてくれへん？」

ツバサが不適な笑を浮かべた、何か考えてるな

「売り上げの4割を頂戴！」

「4割かいな！？2割にならへん？」

ツバサが関西人に耳打ちをした、何か変な事考えてるな、関西人の顔がパツと明るくなった

「のったあ！」

「じゃあ今度の日曜ね」

「良い仕事しまっせ」

二人の間でどんな契約が交されたんだろ、しかも今度の日曜に会う？

「おい関西人、ツバサに変な事するなよ」

「コテツでええよ」

「何かきにくわないけど。ツバサ、コテツに変な事されたら…、コガネどうする？」

「とりあえず喧嘩は良くない」

俺らが生きて帰れないような気がする、とりあえず何もしないことを祈るだけだな

「カイっちもコガネんもありがと、でも僕にも考えがあるから大丈夫だよ」

今はツバサとコテツを信じるしかないな。

関西人、烏丸虎鐵、変な奴に目をつけられたな、今度からは周りに気を付けよ、いつ撮られてるか分からないもんな

## 青とキャンプ

週明けの月曜日、最近は大ッファローの群れも治まってきて楽に登校ができる、ってか今日は一際少なかった、理由は廊下の一郭の人溜りだ、明らかに通行不能になるくらいの量の人だ、女の子が3の男子が7くらいだ、二つの幟のぼりには

《四色・五百蔵公認写真》

って書いてある、もう一つ幟は

《鷲鷹コスプレ公認写真》

コスプレ？鷲鷹、鷲鷹……、ツバサのコスプレ写真！？あの時の耳打ちってそれか、驚いてるとツバサが後ろから来た

「チカチカ、カイっちはよー！」

「おはようって、あれ何？」

幟を見て笑顔で鞆から写真を取り出した

「コレコレ、撮ってもらったんだ」

そこにはコスプレをしてポーズを決めたツバサがいた、メイド、ナース、家庭教師、その他アニメに至るまで様々なコスプレが…、ツバサ、俺にはツバサの方向性が読めないよ

「僕、一回してみたかったんだよね」

「コスプレを？」

「うん！コスプレしていると違う自分になれたような気がして、気持ちいいんだよね。チカチカもやる」

「アタシはいいよ」

頼むからチカだけはやめてくれ、ツバサはそっちの道に進みそうな気がして怖い、ってかこの服はどこから仕入れたんだよ

「この服はツバサの？」

「分かんない、知り合いに作ってもらったらしいよ」

コテツも何か怪しいな、この騒ぎの張本人が来た、いつの間にか人がいなくなってた、寄って来たコテツは只でさえ大きい口の角をあ

げながら

「ホンマに良く売れたわ、ボロ儲けやで、完売や完売」

「僕の取り分は！？」

「4000円でんな」

「キヤー、コテツツー大好き！」

「ほな付き合う？」

「やだ」

即答、コテツのあだ名はコテツツーか、それより儲けの方だよ、ツバサの取り分が4割で4000円だから……、一万円！？写真だけで一万円？ツバサのコスプレで一万円かよ、真面目にバイトしてる高校生がバカバカしく思えるよ

「カイはんとコガネはんのも売れたでえ、5000円くらやな」

「頂戴よ」

「契約が違いまつせ。なあチ力はんやつぱりあきまへん？チ力はん達のがあれば2万はゆうに超えるんやけど」

「やだよ、アタシはツバサとは違うから」

コテツは最近昼休みの屋上に来るようになって、自然というか無理矢理というか、とりあえず俺達の輪に入ってきた、ツバサに惚れたらしく毎日のように

「好きやで」

とか言ってるけど、ツバサは即答で断ってる、コテツは軽すぎるかな

「みなはん授業始まりまつせ」

「ホントだ、チ力、ツバサじゃあね」

「さいなら」

『バイバイ』

6組から8組までは階が違ってからココでお別れだ。

今日はホームルームがある、その内容は金曜日のキャンプの事だ、キャンプがあること自体にビックリしてる、今始めて聞かされた、

ちなみにキャンプの目的は親睦を深めるためらしい、それにいろいろイベントもあるとの事、めんどくさ

「コガネ知ってた？」

「知らねえ」

「お前らが寝てる時に話した！」

担任が横から入って来た、最近俺達と担任の関係が悪化の一途を辿ってる、別に良いんだけどいちいちうるさいのがムカつく。

班は最低4人らしく3人までは決まったけど残り一人が決まらない、3人は俺とコガネとヒノリだ

「ヒノリ、誰がいる？」

「いっぱいね、さつきから女の子達が来てるじゃない」

「ヒノ、それはなしだ」

確かに、さつきから女の子がひっきりなしに来る、当然一緒の班になるうというものだ、それに男子も多い事にビックリした、ヒノリ目当てだ

「一人いる」

「誰？さつきの集団以外ね」

無言で頷いて歩いて行っただ、教室にいる時にいつも話してる、ヒノリの隣の席の人だ

「この人なら良い？」

「えゝと悪い、名前何だっけ？」

「矢野です！」

顔はカワイイんだけど髪の毛がボサボサで、見える限りでは綺麗な足なんだけど長いスカート、所々直せば絶対に可愛くなりそうな子だ

「よろしく」

「よ、よろしくお願いします！」

「堅いなあ、ラフに行こうよ、な？」

「…はい」

「あと敬語禁止、男に免疫が無いのかどうなのか分からないけど、クラスメイトだろ、楽しく行こうよ」

「名前を知らなかったけどな」

「コガネは知ってたのかよ」

「何回か話したから、な？」

そういつて矢野の顔を覗きこんだ、多分ヒノリ経由で何度かって感じだろ

「なら決定で良いな？」

「良いよ」

「俺も。矢野は？」

「よ、喜んで」

紙に書いて担任に提出した、キャンプか、楽しそうだけどさっきからチ力が気になってしょうがない、ツバサがいるから大丈夫だと思うけどあの二人は人気かるからな

「チカちゃんの事がきになるのか？」

「当たり前だろ」

「ツバサ君がいるから大丈夫だろ、それにカイの女に手を出す馬鹿はいないだろ」

「そうだな」

部活が終わっていつものようにバレー部に行った（コテツ付き）、中に入ると一人の罵声が聞こえた

「おい！お前慣れ慣れしく潤間さん達に近寄るんじゃないやねえよ！」

「おい、やめとけ、四色と五百蔵をしらないのかよ？」

「誰だそれ？」

「あの青髪と金髪だよ、あの二人で3年の不良の先輩4人をボコボコにしたらしいぞ、それに隣の糸目は空手部の新人で入部初日で先輩全員に勝った怪物だ」

何かさんさんの言われようだな、しかもボコボコって一発ずつしか殴ってないのに、それにあれだコテツだよ、空手部ってのは知ってたけどそんな事してたとは

「怪物なんて酷い話やなあ」

「いやいや、怪物なんてまだまだ甘いだろ」

「人間兵器だな」

「わいは只の高校生やで、コガネはん」

とにかく、噂が一人歩きしてくれたお陰で逃げずにすんだな、最近  
は喧嘩の噂が効いたのか男子からのやじが無くなった、その代わり  
練習中のギャラリ―は増えたけど

「やつぱりあんた達喧嘩してたんだ」

「いや、チカそれは…」

「僕の情報によると相手は3年の不良で、先生達も手を焼くほどの  
問題児で、自称喧嘩には負けた事ないらしいよ。更に付け足しとく  
とそれを仕組んだのは他でもないコテツッーだって」

チカとヒノリの目が変わった、軽く子供がショック死するくらいの  
殺気を放ちながら

「コテツ良くもカイを…」

「コガネを…」

『はめたわね』

「堪忍してえな！」

鬼が二人、関西人に襲いかかった、上の男子が引くくらいのドスの  
効いた声で

「きゃー、チカチカ！ヒノノ！頑張れー、ってか僕も虐めるう！」

意味も分からずツバサも参戦した、人間兵器が袋叩きにあってる、  
女の子って強いんだな

「ヒノ…」

「強い女に惚れた自分を恨め」

「ほ、惚れてねえ！」

顔を真っ赤にして、誘導尋問には引つ掛からなかったか、素直にな  
れよコガネ。

その後ボ口雑巾になってコガネが帰って来たのは言うまでもない

## 青とキャンプ（後書き）

どうも暁です！突然ですけど番外編を書きたいと思ってます、前作から今作まで、それから今後も更新につれカイ以外の目線から書きたいと思ってます。そこでみなさんから「ここでアイツはどう思ってるの？」とか「コイツ目線で書いて欲しい」とか「何でそうなった」等々、とにかく書いて欲しいことを募集してます。本人でも書き忘れたストーリーが多々あります、だからとりあえずメッセージ下さい、何でも書きますから

## 赤とキャンプ

今日は待ちに待ってはないけどキャンプだ、ってかダルい、どこの高校でもあるけど親睦を深めるキャンプなんていらないよ、疲れるだけだし

「カイ、元気ないな」

「かつたるいだけだよ」

「そんなことあらへんやろ、高校生にとってキャンプっちゅうもんは恋のターニングポイントやで」

何でコテツがココにいるんだよ、クラス別に並んでるのに極自然に混ざってるのがすごい、それに恋？コガネへの当て付けかよ

「だって、コガネ」

「何で俺なんだよ？」

「ヒノリと二人きりにしてやるから安心しろ」

「だから何で俺？」

「コガネはん、素直にならへんと掴める恋も逃げて行きまっせ」

コガネは顔を赤くして黙りこんだ、コテツほど積極的になれとは言わないけど、人並みに自己アピールを出来るくらいにはなっただいよな

「大丈夫やで、わいとカイはんが助けてやるさかいに」

「コガネ、やっぱりこのキャンプが勝負だな」

「俺の事は俺がどうにかする、ほっとけ」

「言ったな、事後報告はちゃんとしろよ」

「秘密は無しやで」

コガネの一步を無理矢理歩ました俺らは各々の班に戻って点呼を受けた、バスに乗って速攻意識が飛んだ。

気づいた頃には着いてた、周りは山の中と思われる、みんな降りる準備をしてるけど隣で俺以上に爆睡してるコガネがいた



「起きろ、コガネ起きろ」

頬を叩いても無反応、しょうがない怖いけどいちかばちか使ってみるか、周りに聞こえないように

「ヒノリを抱くぞ」

“ドフツ！”

殴られた、しかもみぞおちに完璧に入った、無言で悶絶しているとコガネが起き上がって来た

「どうしたカイ？」

「：殴られた」

「誰にだ」

キレてるけど本当の事言ったらどうなるんだろ、ってか吐き気と戦ってやっと勝てた

「コガネに」

「俺？何で？」

「言えないよ、また殴られる」

コガネが追求してきたけど今度は顔面にきそうだからやめといた、今度から起こす時はヒノリは禁句だな。

降りると森の気持ちよかった、潮風には慣れてたけど森の空気は新鮮でいい、この中でばーっとしてるだけで一日過ごせるな

「これから何するの？」

「カイ知らないの？」

「知ってると思った？」

「……、ゴメン過大評価しすぎた」

何か引つ掛かるけど、コガネと一緒に何も聞いてないない、ってか聞く気ゼロだけど

「宿まで歩きだって」

「ヒノ、それ本当か？」

無言で頷く

「最悪だよ、コガネ、帰らない？」

「交通手段は？」

「……徒歩」

「ヒノ、宿行くぞ」

やだあ、コガネとヒノリが先に歩いて行った

「行こう」

「矢野か…」

「一番の班は夕食豪華らしいよ」

「コガネ！ヒノリ！気合い入れて行くぞ、矢野も！」

一気にテンションが上がった、夕食のタメなら逆立でも何でもするよ、でも不味かったら暴れるけどな。

割りと歩いたな、アバウトな地図を貰ったけどパツと見10km近くあるぞ、この学校は生徒を歩き倒れさせたいのかよ

「痛っ」

ヒノリが足首を捻ったらしく倒れた、人間のそれとは思えない速さでコガネが寄って行った

「ヒノ大丈夫か？」

「痛い」

コガネが患部を触ったり動かしたりして確かめてる

「大した事無いけど歩くのはキツイな」

「みんなゴメンなさい」

「コガネどうするんだよ」

コガネは考えた末に、背中をヒノリに向けた

「乗れ」

「でも…」

「足手まといになりたく無かったら乗れ、そのままが一番迷惑だ」

「ありがとう」

渋々コガネの背中にヒノリが乗った、二人とも顔を真っ赤にしてる、幼馴染みなんだからそれくらい大丈夫だろ。

着いた頃には日が沈んでた、部屋は当然女の子と別だ、部屋にはま

だ誰もいなかった、この中では一番だったらしい、コガネはヒノリの怪我の手当のタメに先生の部屋に行ってる、一人で真っ暗な森を眺めてると誰かが入って来た

「カイはん、コガネはんいてまっか？」

コテツも案外早く着いたんだ、にしても勝手に人の部屋に入ってくるなよ、しかも他のクラスの

「聞いたで、ヒノリはん怪我したんやて？」

「一日で治るくらいの捻挫だよ」

「コガネはんはどうやった？」

コテツが求めている答えは不適な笑で理解できた

「ずっとおぶってた」

「ホンマかいな！？災い転じて福と成すとはこのことやな」

二人で今日のキャンプの事とかコガネの事、いろいろ話をしてた、この部屋はコガネとあと3人くるはずなんだけど誰も来ない、そんな事をも考えてると勢い良く扉が開いた

「カイ！ヒノリは大丈夫か！？」

チカとツバサが入って来た、ってか男子と女子の部屋ってかなり離れてたし、行き来禁止だったはずなんだけど

「何で二人がココに来てんだよ！？」

「いや、ヒノリが部屋にいなかったから」

「ヒノノは大丈夫？」

二人とも友達を気にするのは良いけど、男子の部屋に来るなよ、俺も説教くらわなきゃいけないんだから

「明日には治るって」

「良かった」

「コガネんは？」

「弱ったヒノリはんをたらしこんでるみたいやで」

「誰が誰をたらしこんだって？」

コガネがそこに立ってた

「いやあ、それは、あれや！なあカイはん」

「俺にふるな」

「それにチカちゃんとツバサ君も何でここに？」

「ヒノリが気になって」

「そうだよコガネん、みんなヒノノが心配なんだから」

「それはありがたいけど、女子がココにいるのがバレたら皆で説教されなきゃいけないんだぞ」

二人が絞んだ、コガネは部屋の中に入って来て座った、この部屋5人入ると狭いな、そんな事を考えてると一番面倒で恐れてた事が起きた、担任が入って来た

「お前ら何してる！」

頭に響くでかい声、部屋にいた奴らが出てきて俺らの部屋の周りに集まって来た

「女子を連れ込むなと散々言っただろ！」

「悪かった、だから怒鳴るな」

「黙れ！お前ら全員来い！」

ああ、ダルい、頭がガンガンする。

俺達は連れてかれるがままロビーらしき所に並べられた、案外他人の目が痛い

「何でお前らは問題を起こすんだ！？」

「問題にすかれてるからじゃない」

「同感」

担任が殴ろうと思って拳を振り上げた時

「クズか」

その一言で拳は止まる、入学以来この言葉を使えば殴られる事はない、俺とコガネはこれに味を占めて自由にしてるけどその内殴られるんだろつな、それが分からないほど馬鹿じゃないからな

「すみませんでした」

セリフっぽく言ってその場を去った、飯の時間も近いし早くこの視線から逃げたかった

「チカ、ツバサ来るときはメールしろ、外に出てやるから」

「分かった」

部屋に帰ると同じ部屋の奴がいた、みんな説教されたのを知ってるらしく、質問攻め

「潤間さん達と何してたんだよ？」

「何も」

「五百蔵は春日さんをたらしこんだんだって？」

「自分が言った事がどれだけ馬鹿な事か身を持って実感するか？」

キレた、コガネをからかった奴は震えながら謝ってる、馬鹿な奴だな、コガネに冗談は通じないこれ今日の教訓、例え寝ている時でも部屋に実行委員の人が来て

「ご飯だから集まって下さい」

そうかもうそんな時間か、確か一番の班はそこで発表されるんだよね、しかも豪華な料理ときた。

食堂は異常に広がった、まあ一学年がまるまる入るくらいだから侮る無かれ、班で座るんだけどヒノリと矢野が来てない

「ヒノリ来れないの？」

「来るって言ってた」

噂をすればヒノリと矢野が来た、歩き方を見る限りもう大丈夫らしい

「ヒノリ、大丈夫なの？」

無言で頷く、良かった大事にならなくて、心なしかコガネのテンションも上がってきたし後は発表だけだ、実行委員長が前に出てきた「宿に到着した順番を発表します」

食堂が最高潮に盛り上がる者と、明らかに自分達は無いとシラケてる者、俺達は前者だ

「第三位、5組の烏丸班」

コテツ達の班か、やるじゃんコテツ

「第二位、1組の土屋班」

まだまだ、まだ俺達に希望がある

「第一位……」さあ来い！コガネだって頑張ったしヒノリの怪我を無駄にするな

「7組の春日班」

春日班…、俺達の班だ！

「コガネ、一番だつて！豪華な料理だぞ」

「俺のお陰だな」

盛り上がってる俺らを次の一言がどん底まで落とす

「一位の春日班にはデザートにゼリーが付きます」

「はあ！？」

俺の聞き間違いじゃなきゃ、豪華何てみじんも感じさせない庶民の食べ物なんですけど

「豪華な料理じゃないの！？」

「いえ、ちゃんとしおりに書いてありますよ」

俺とコガネは矢野を見た、矢野は蛇に睨まれたカエルみたいになった

「矢野、嘘ついたな！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！私の聞き間違いです！」

「カイ、矢野を攻めても始まらない、無いよりあった方が良かったら確かに、まあ良いか、そこまで期待もしてなかったけどゼリーはイタイな、攻めても豪華料理に変わるわけじゃないし、あるもので我慢するか。

飯を食い終って、その後風呂に入って自由時間だ、やることもないしコガネはいつの間にかいないし、とか考えてたらメールが来た、差出人はチ力だ

“暇”

この一言のみが送られて来た、確かに分かるけど文章で送って欲しいと思うのは俺だけじゃないよ

“玄関に来て、俺も行くから”

そう送って部屋を出た、背中に罵声を浴びながら。

玄関に着いたのは俺の方が先だった、その後すぐにチカも来た、つてかキャンプって凄いな、いつの間にか付き合ってる奴がちらほら俺らは外に出て階段に腰かけて話した、暗いけど森の音とか川の音が聞こえて俺にとっては居心地が良い

「ココ何も無いから自由時間つままない、みんな誰が好きとかしか話さないんだもん」

女の子ってやっぱりそんなもんか、男も同じようなもんだけどな

「ツバサがいるだろ？」

「コテツとどこかに行った」

もしかしてツバサとコテツって付き合ってたりするのかな、だったら何か楽しいよな

「俺を呼んだのはそれだけじゃないだろ？」

「何で？」

「男達の呼び出しが多いから俺といればそれが無いと思ったんだろ？」

チカが何で分かったの、って感じの顔をしてる、少なくとも俺もチカと同じ状況だったし、廊下での会話でコクるコクらないって聞こえたし

「何で分かったかって？俺もそうだから、コガネは知ってたか知らずかいつの間にかいなかったし」

「何で皆アタシ達が付き合ってるの知ってるのに」

「僅かな期待か、抑えられない衝動、どちらかだろうな」

チカは不安な顔をしてる、何が不安なのか分からないけど久しぶりにあの顔を見た

「カイは大丈夫だよな？」

「何が？」

「なびかないの？」

「チカから違う奴に？」

無言で頷く、変な事言う奴だな、俺がチカ以外に興味を持つなんて

死んだ人を生き返らせるくらい有り得ないな

「チ力はどうなんだ？」

「アタシはカイだけだよ！」

「俺もだよ、俺がチ力を思う気持ちはチ力が俺を思う気持ちと同じ、揺るぎないもの、かな」

「やっぱりカイは最高！」

そう言つてチ力が抱きついて来た、高校に入ってから二人の時間が少なかったから今という時間が永遠になることを望んでる俺がいた、その後俺から離れたチ力が目を瞑った、俺もそれに応えてキスをした。

暗闇の中に溶け込んだ俺は暫くの永遠とチ力を感じた



## 銀とかき氷

森の爽やかな風、朝の全てに力を与えるような日差し、川の流れる涼しい音、でもこれだけの条件が揃っても一人の馬鹿のせいで最悪な目覚めになった

「朝だ！お前ら起きろ！」

担任だ、周りのどんな自然をも無にするコイツのモーニングコールほど気分の悪いものはない

「7時30分から飯だ！昨日の食堂に来い！」

でも担任のうるさい声で地に堕ちた気分を薙払ってくれるのもこの自然だ

「あんな起こされかたしたのに気分良いな」

「自然が気持ち良い、それだけで十分だろ」

「意外だな」

俺はいつも寝る時とか家にいる時はカチューシャをしてる、今もそうだ、今日はめんどくさいからこのままでもいい。

食堂に行く今回のはヒノリと矢野が先に座ってた、二人とも眠そうな目をしてる

「おはよ」

「カイ君、カチューシャ？」

「ああ、髪が邪魔だから」

「なら切れよ」

笑ってながした、何となくこの長い髪が気に入ってるからな、矢野は相変わらずボサボサだし、ホントにもつたいないんだよな。

実行委員長が前に出てまた何か話し始めた、みんな眠いのには無駄にシヤキツとしてた

「朝食の後はオリエンテーションがあります、なので8時30分に正面玄関に集合です」

オリエンテーションか、何があるんだろ

「コガネ、オリエンテーションなにやるか知ってる？」

「知らねえ」

「ヒノリと矢野は？」

「近くにフリークライミングができる所があるからそこでフリークライミングやって、かきごおりの早食いやって、宝探しやって総合得点で宿題の有無を決めるらしいよ。フリークライミングと早食いは代表一人だつて」

「ホントかよ、矢野？」

「前回があるからな、でもそれが本当なら一つは確実に断トツトップだな」

「本当、私が保証する」

「ならフリークライミングは俺がやる」

みんなが目を丸くしてる、俺が積極的だから？それともフリークライミングなんて選んだから？

「出来るのかよ」

「乞うご期待」

「じゃあ早食いはヒノだな」

無言で頷いた、つてかコガネがやれば良いじゃん、人に任せないで「何でヒノリなの？」

「ヒノは冷たいものに鈍感だから、小さい頃からアイスとかかきごおりとかの早食いで勝った事ないから」

意外な一面、これなら宿題免除も夢じゃないな、俺達つて地味に最強グループだったりして、宝探しは力いれなくても大丈夫だろ、それにフリークライミングか、久しぶりにやるな、鈍つては無いと思うけど全盛期にくらべたら大した事無いだろうな、まあ負ける気はしないけど

「学年単位でやるの？」

「クラスだつて」

只今の時間は8時35分、場所は泊まった部屋、そう遅刻だ、コガネの馬鹿がピアスを一つ無くしたらしい、しかもそれがヒノリから貰った物らしい

「コガネ、心当たり無いのかよ？」

「あつたら苦労しねえ」

確かに、でもこのままだと説教直行便の高速運転だよ、学年全員に見られながら説教つてのは流石にイタイぞ、って……

「コガネストップ！」

コガネがピタッと止まった

「何だよ？」

「……ほれ」

「おお！！」

コガネの別のピアスに引つ掛かってた、これはいくら足下さがしても見つかるわけないな

「見つかったなら早く行くぞ！」

着いたところには案の定全員が整列して担任が完璧にキレてた、一学年全員の視線を全て集めるというオプション付きの説教が開始されたのは言うまでもない

「お前らはホントに集団行動が出来ないな！いつもいつも自分勝手な行動ばかりだ……」

2分経過

「だからだな……」

「先生皆が待つてるんですよ？なら早く俺らの説教を終らせないと時間無くなりますよ」

「お前ら……」

「俺らが悪いのは分かってます、でも更に俺らのせいで皆を待たせるのは不本意ですし、今回は皆の前で謝りますんで次回また説教お願いします」

そう言つて無理矢理向き直してコガネとアイコンタクトをとつて『すみませんでした!!』

そう叫んで班に戻つた、担任を丸つきりシカトして、にしても殴られなかったのが不思議なくらいだよ、俺もコガネも殴られる気満々だったのに。

戻ると心配そうなヒノリがいた

「ゴメン、ヒノリ」

「何で遅れたの？」

「ヒノに貰つたピアスが見付からなかった」

「他のピアスに引つ掛かつてたけどな」

二人で大笑いしていると担任が怒鳴ってきた、少しトーンを下げて話を続行した

「ならまた買ったのに」

「ダメだ、始めてヒノに買って貰つたものだから」

コガネって思い出とか大事にするタイプなんだ、色々ピアスのパターンを変えてたけどこれだけいつも同じ位置にあったのはその理由か。

最初のオリエンテーションはフリークライミングだ、案外近くに、しかも公共としてあつた事にビックリした、教えてくれれば抜け出して行つたのに、壁は一般的なものと同じ高さだ、皆が口々に高いだの怖いだの言つてるけど見慣れてて実感が湧かない

「カイ大丈夫か？」

「大丈夫だよ、なんならコガネやる？」

「いや俺は高所恐怖症だから」

かなり意外だな、怖いもの何て無いと思つたのに

「ならヒノリ、今度皆で遊園地でも行くか」

ヒノリがクスクス笑つてる、あんまり笑わないってか始めて笑うところを見たかも

「俺は行かねえ」

「冗談だよ、冗談」

「コガネは中学校の時私とジェットコースターに乗って泣いちゃったもんね」

「おい！ヒノ」

皆で大爆笑しているとまたあのうるさい声が響いて来た

「春日班！出てこい！」

うるせえ声だな、いちいち騒がなくても聞こえるつうの、しょうがないから小走りで前に出た、聞いた話しによるとタイムアタック制で暫定トップは1分37秒らしい、素人にしゃまあまあの記録だな、でも玄人の力の前ではノミ同然の記録だな

「始めるぞ！スタート！」

始まると同時に俺を除いて全員壁に飛び付いた、俺はとりあえず見学、足や手を滑らせる者、下をみて怖じ気付く者、やっぱりだめだな「どうした？怖じ気付いたか？」

担任が嫌味ったらしく行つて来た、しょうがないから登つてやるけど、ビックリしすぎてハゲるなよ

「行っきまゝす！」

登つてみると簡単だな、一年近く人工の壁を登つて無かったから楽に感じる、天然のはテクニクがいるから島にいた時に自然とレベルアップしたんだな、ってかもう終りか、ジムにいた時は片手でぶら下がって正面の窓から外を見てたけど、今は大自然を堪能してる、最高に気持ちいいな

「か、春日班、36秒！」

そんなもんか、下にいきすぎたな、実際は20秒マイナスつてところだな、しかも皆の視線はさっきと違って気持ちいい、良い意味で目立つてる。

降りると大騒ぎだった、ってかまだ登つてる奴いるし

「怪物だ」

「四色はイケメンだしスポーツ万能だし、勝てる気がしねえ」

「キヤー！四色君カッコイイ！」

怪物は酷いだろ、せめて超人止まりにしてくれよ、班に戻るとコガネの間抜け面があった

「カイ、何で？」

何となく文章がおかしいけど、普通フリークライミングやってる奴なんていないし、認知度も低いからしょうがないか

「経験者だから」

「ルール違反だろ」

「そんなルールないから」

班に戻っても視線が刺さる、この髪のせいでいつも目立ってたけど今回は違うな。

次はこの場で早食いだ、これもタイムアタック制で2つを食べ終わったタイムで測定、1つだと簡単だから2つらしい、拷問だなこれは「ヒノリ大丈夫か？」

自信あり気に頷く、コガネからの推薦だし大丈夫かな、それにあんな自信満々のヒノリの顔を見ればな

「春日班、出てこい」

「ヒノリ頑張れ！」

「ヒノ、見せ付けてやれ」

「頑張つて春日さん」

みんなからの声援を受けながら出ていった、各班何か根性ありそうな男子ばかりだ、しかもかき氷は大盛りだ

「あの、イチゴシロップありますか？」

ヒノリ、その余裕は何処から来るんだよ、それにヒノリの人気を実感させる男の声援

「春日さん頑張れ！」

「おい！一つにしてやれよ！」

そうだそうだ、もっと言つてやれ、これでハンデがつけばもうけもんだよ

「では始めます。スタート」

難なくスルーして始まった、皆ガツガツ食って頭を抱えてるけど、

ヒノリは掻き込むまではいけないけどかなり食うのが速い、10秒  
足らずで一つ食べ終った

「速」

「しかも楽しんでるんだよな、ヒノは」

スゲー、男子が一つ食べ終る前に完食したよ

「あのお、もう一つ貰えませんか？」

大食い女王かよ、しかも三つ目は楽しんでゆっくり食べてるよ

「何あれ？」

「冷たいもの好きだから」

何か周りの男子が惨めだな、戻って来てもいつになく上機嫌だった、  
そつえば頭が痛くなつた雰囲気がないな

「頭痛くないの？」

「全然、それにかき氷美味しかった、もう一つ貰つとけば良かった」  
大食いチャンピオンここにあらわる、あれだけのかき氷なら一つで  
十分だけどそれを三つも食べてるからな。

ヒノリは目の色も、冷たい物への耐久性も氷のお姫様並か

## 青と宝探し

2種目が終わって俺らの班当然一位、でも次の種目で大どんでん返しがあつてらしい、宝探しと称したものは山の中に宝箱というか得点があつてそれを探すものらしい、だから一つの班が異常にとれば一位になる事は可能だ、だから断トツ一位だからって侮る無かれ

「これが地図だつて」

「うわ、俺勘弁」

「私も」

「地理の授業みたいだな」

矢野がじっくり見てる、こんなの解るのかよ、俺にはとりあえず適当にあたるしか方法は見つからないけどな

「矢野、解る？」

「は、は、は、はい！何とか解つた」

「まあビリにならない程度にがんばろ」

矢野のナビで始まった、つてか矢野のナビ通りにやっていると見つかる見つかる、木の上とか土の中、石の下にまであるよ

「矢野スゲーよ！つてかコガネ役に立ってないぞ」

「うるせえ！司令塔なんだよ俺は」

まあコガネの言い訳はおいといて、もしかしたらこの種目でも一番がとれる勢いで宝（得点）を見つけていった

「あそこに一つ」

そこは細い木の枝の先だった、流石にあそこには登りたくないな、折れそうで怖い

「俺の出番だな」

今まで設立たずのコガネがやっと動きだした、でもこんな所どうやって取るつもりなんだろ

「どするんだよ？」

「こつだよ！」



力任せに木を蹴り飛ばした、木は大きく揺れて枝に引っ掛かってた得点が落ちて来た、何だよコガネの馬鹿力っぷりは、しかも勝ち誇った満足気な顔をしてるし、でも……

「一点」

「えっ？ヒノよく見たのかよ？十点の間違いだろ」

コガネに得点の書かれた紙を差し出す、俺も覗いたけど、どうみても一点にしか見えなかった、コガネお疲れさん

「はあ」

明らかに落胆してる、その時だった、俺の携帯が鳴り出した、こんな山奥でよく繋がったな、電話の主はチ力だった

「もしもし、何？」

「力…、ツ…サ…が………、コテ…が走って………、来て！」

「何？聞こえな…」

“プープー”

切れた、でもチ力が泣いてるのはハッキリ確認出来た、電波が確りしてなかったし泣いててよく分からなかったけど、ツバサとコテツに何かあった事は何となく推測がつく、泣いてた事からただ事じゃないことは確かだ

「カイどうした？」

「分からないけどチ力が泣いてた」

「チ力ちゃんが！？何で？」

「コテツとツバサに何かあったらしい。コガネ、とりあえず戻るぞ、ヒノリと矢野は後から来い」

そういつて俺とコガネは走って宿に向かった、ヒノリと矢野も走って来たけどあつという間に見えなくなった。

玄関に向かうと何人かの先生と泣き崩れてるチ力がいた、先生の数とチ力の泣き方を見て緊張感が増した

「チ力！何があった！？」

「力、カイ！」

思いつき飛び付いて来た、公衆の面前でこれはちょっと、そんなこと考えてる暇は無いよな、心苦しいけどチ力を離して話を聞いた、皆が見てるし

「チ力、とりあえず説明お願い」

チ力をなだめて、呼吸を落ち着かせて話せる状態にした

「ツバサが落ちて、それを聞いたコテツが走って山に入って行っちゃった」

最悪だよ、一人で山に飛込むなんて、ってかやっぱりコテツは本気でツバサの事が好きらしいな、そんな事よりこの状況は尋常じゃないくらいヤバい状況だな、後からヒノリと矢野が息をきらして玄關に入ってきた、それを見てチ力に泣いてるところを見られないように上着を被せた

「ヒノリ、チ力を頼んだ。コガネ、行くぞ」

「おい！四色、五百蔵、勝手な行動は許さないぞ！」

このタイミングで担任かよ、コイツをぶん殴って出ていきたいところだけど、そんな暇は無いか

「じゃあ誰が行くんだよ！？」

「それは……。でもお前らが行くのは危険だ！」

「少なくとも、ここに居る奴らを行かせるよりは安全だと思うけどな」

フリークライミングで山とかは慣れてるし、体力とかも自信がある、そこら辺の教師よりはマシだと自負してる

「分かったか？行くぞコガネ」

周りの制止をふりきって走って山の中に入った、一つ盲点だったのが何処で落ちたか聞き忘れた、俺は最高の馬鹿だな。

とりあえず下に降りながらツバサとコテツを探した、おかしい所とか枝が折れてるような所を重点的に探しながら、途中で会った生徒に話を聞いたけどこれといって有力情報はない

「カイ、ヤバいぞ、日が暮れてきた」

「ホントだ、…………、しょうがないけど一旦戻るぞ、夜の山は危なすぎる」

渋々、帰る事にした、今回はゆっくり慎重に下を見ながら、でも山を出る頃には辺りは真っ暗になって見付かってもどうにも出来ない状態だった、後はコテツとツバサが先に着いてる事を祈るだけだな。

俺の期待を見事に裏切ってくれた、ツバサどころかコテツすら戻って来てない、これは本気でヤバイ、万が一が…………ってそんなこと考える事も出来ない、今出来るのは祈るだけだ

「コテツとツバサ、帰って来るかな？」

「チカが祈ってればな」

「ふざけないで」

「悪い、正直俺もしんどい、信じてるけど…、でもやっぱり」

沈んでると一人の男子が走って来た

「おい！誰か来たらしいぞ！」

えっ？もしかしたら、いや絶対だ、コテツとツバサに決まってる、

コテツなら絶対にやってくれるに決まってる。

案の定コテツだった、背中にはグツタリしたツバサをおぶりながら、足には怪我をしたのかズボンが真っ赤に染まって、ツバサも傷だらけだし真っ黒だ

「コテツ！大丈夫か？」

「大丈夫に見えまっか？わいより先に…、ツバサ、は、んを……」

その場に倒れた、コガネはコテツを、俺はツバサを担いで部屋に向かった。

部屋に二人を寝かした、二人とも傷だらけだった、ツバサの方は左腕と左足の擦り傷程度だったけど問題はコテツだ、右足の膝の下から10cmくらいに渡って枝で切ったような切傷があった、それに足首は腫れあがってた、この状態で人一人をおぶって来たんだから

尋常じゃない精神力だな

「う、ん」先にコテツが起きた、起き上がるうとしたけど体が痛むらしく断念した

「無理するな」

「皆はんお揃いかいな。それよりツバサはんは？」

「大丈夫だよ、コテツの怪我に比べたらな」

コテツは笑ってるけど普通なら歩けないくらいの傷だよ、コテツの事見直しちゃったな

「んー」

ツバサがやつと起きてきた、ツバサの方は起き上がれるらしい、擦り傷で済んだんだからラッキーだったよな

「生きてる、僕生きてる」

「コテツに感謝しな」

ツバサはコテツを見るとボロボロと泣きだして抱きついた、新しい恋ってか

「コテツ！」

「痛！痛いでんがな、死ぬ死ぬ！」

本気でコテツがもがいてる、それでここまで歩けたのはどこの誰だか、でも好きな人のタメなら何でも出来る、コテツはそれを証明してくれた

「はっ！ゴメン。僕つい嬉しくて」

「まあ気にせんといて」

コガネとヒノリは呆れてる、チカは顔を真っ赤にして顔をそらしてるけどもっと大胆だったぞ

「カイっち笑うな！」

俺は大爆笑、二人のお似合いっぷりがツボだった、でも一件落着だな

「みんな迷惑かけてゴメンね」

ツバサが頭を下げて謝った、謝る相手を間違えてるけどな

「俺らじゃなくてコテツに感謝しろよ」

「ツバサ君を命がけで助けたんだぞ」

「カイには負けるけどな」

「最高のダーリンね」

チ力、さりげなくのろけなしてくれよ、ヒノリは案外楽しい事言ってくれるじゃん、後はコガネだけだぞ、気付けよ

「わいらどうやって帰るんや？」

「どうやって、ってバスで」

「もう出てるんとちゃう？」

時間を見ると夜の10時を回ってた、確かにバスはとっくに出てる時間だ、俺らのタメに待ってる訳は無いし、もしかして放置！？

「お前ら、起きたなら行くぞ」

担任が扉を開けて入って来た、いまいち理解が出来ない、担任がコ  
コにいることやいたなら呼ばなかった事が

「行くって？」

「帰るんだよ！」

「バスは？」

「俺が送って行く、もう他の生徒は全員帰ったぞ、お前らをずっと  
待ってたんだ」

今この担任に物凄く感謝してる自分がいた、でも理解出来ない何で  
俺らだけ残してくれたんだろ、普通なら無理矢理でも帰されそうな  
気もするけど

「何で俺らを残したんだ？って顔をしたるな」

「はい」ってか今素で敬語を使った、皆も気づいて驚いてるし、自  
分が一番ビククリしてるけど

「どうせまた色々理由を付けて残るつもりだったんだろ、だから俺  
が他の先生に頼みこんどいた」

「ありがとうございます！」

反射的に立ち上がった頭を下げてた、コガネも俺と同じ行動をとっ  
てた、教師に感謝したのは始めてかもしれない

「但し！お前ら帰ったら掃除だからな！その女子もだ」

やっぱりか、無条件でこんなことしてくれるとは思って無かったか

けど、まあ良いかそれくらいなら。

帰りは小さいバスみたいなワンボックスだった、あいりみたいな車だ、チ力と俺は寄り添っていつの間にか寝てた、他は言うまでもないだろ

## 金の想い

キャンプの騒動からの休み明けでツバサもコテツもちゃんと登校してきた、コテツは松葉杖をつきながらだけどいつも以上に元気だった、その理由はあの後からコテツとツバサは付き合う事になったらしい、当然と言っちゃ当然だな、この噂は俺の耳に届くくらいだからかなりの大事らしい

「コテツとツバサ君の、大変な事になってるな」

「ああ、コガネも遅れをとるなよ」

「な、何が？」笑ってながしたけどこの二人が一番下積みが長いからな、ある意味一番の問題児だ、チカとツバサもヒノリにかけあつてるらしいけど回答は同じようなものらしい、危機感が足りないんだよな、でもヒノリもコガネ以外と付き合う気が無いからコガネも余裕ぶっこいてるんだろうな、でも仕掛けたらそいつがボコボコにされるだろうな、厄介な案件ですなあ。

昼休みはいつも通り6人で屋上にて弁当を食ってる、違うところはコテツとツバサが前より親密な事だ、イチヤイチヤとまではいかないけど見ててこっちが恥ずかしくなるくらいだ

「コテツ、これ僕が作ったんだぞ」

「ごつつう美味しいで」

「ホントに!？」

「ホンマや」

こんな感じで普通のカップルだ、まああんなことされたら誰でも惚れるよな、ツバサも良い彼氏を持ったな

「何や皆はん、箸止まっとるで？」

「あ、ゴメン、コテツとツバサに呆れてて」

一同頷く、俺とチカもここまでではしてこなかったけど、この二人は限度を知らなそうだな、周りにストッパーがいないとその内ひかれ

て友達がいなくなるぞ

「ええやないか、付きおうとるんやから」

「まあそうだけど」

「オーブン過ぎないか？」

「コガネはんまでそないな事を、ツバサも何か言ってやりい」

「多分みんな僕達にひがんでるんだよ」

『お前ら向こう行ってやれ！』

スゲエ、あまりの事にテレパシーばりの荒業をやっちまった、ってかヒノリもこの言葉が出てきた事にビックリだよ、まあ誰でも言いなくなるよ、死語で言う《バカツプル》ってな、何か最高で最悪のペアだな

「チカチカまで、大丈夫だよチカチカ、捨てたりしないから」

「いや捨てて」

「酷い！チカチカ、あの熱い夜は遊びだったの！？枕元で呟いてくれたあの言葉も全部偽りの愛だったの！？」

ヨダレ垂らしながら言われても妄想としか受け取れないんですけど、それに前に教師で同じような事を言った奴がいたな

「わい相手まちごうてもうた気がしてきた」

「いやピツタリだよ」

「それよりカイ！助けて！」

ツバサに襲われてるチカがいた、ツバサがついに妄想の世界から飛び出してきた、しかも顔が痴漢の顔だよ、彼氏が出来て拍車がかかった？

「もう終りや」

見かねたコテツがツバサをUFOキャッチャーみたいに軽々と持ち上げた、案外怪力なんだな、しかも松葉杖なのに器用な事だ、そして周りからは称賛と賛美の声が

「コテツ、やきもちやいてる？」

「アホか」

「大丈夫だよ、本番は夜だから」



「なんでやねん！皆はん誤解せんといてな、まだ大人の階段に足すら掛けてないで」

分かるよ、ってかコテツがやっとまともな思考を取り戻してくれた、ツバサが暴走してれば必然的にコテツがストッパーに回るんだ。

コガネの恋はいつ実んだろ、手を伸ばせば掴める所にあるのに取ろうとしない、俺にはそれが理解出来ないんだよな。

部活が終わってチ力達は先に帰ったらしく男3人で帰ってた、心なしかコテツが沈んでたけど、そりやそうだよな一緒に帰ろうと思ったら帰ってるんだもん

「コテツ、気にするな」

「そやかてあんまりでんがな、始めてでこれやで」

「そんなこともあるさ、それより今日家に来ない？」

コガネが自分の家に誘うなんて始めてだな、一人暮らしだからいつでも押し掛ける事は出来るけど、チ力と帰ってたから機会が無かったんだよな

「じゃあコガネんち食材ある？」

「無い」

速答ありがとう、まああることを期待してないけどな、なら俺の出番だな、久しぶりに家以外で飯を作るな

「今日は俺が飯作るよ」

「ホンマかいな！？カイはん料理出来るん？」

「そうかコテツはカイの飯食った事無いんだよな、半端無い美味さだぞ」

「楽しみやなあ」

そうかコテツは知らないんだよな、俺の飯を食べば怪我の一つや二つ治るさ、何てこたあ無い、一人で突っ込むのって切ないな

「食いたいのある？」

「ラーメン」

「殴るよ」

「わいはパスタやな」

「どんなのがお好みで？」

「俺はカルボナーラ」

「わいもそれで」

本日の夕飯はカルボナーラで。

食材も全部買ってコガネ宅に着いた、普通っていうか割とオシャレなマンションだ、色々気になる事があるけど後で良いか、でもこのマンション、高校生がバイトして住めるような所じゃないしコガネにバイトする余裕も無さそうだし。

部屋の中は綺麗に整理されてた1DK、銀色を基調とした家具がオシャレを際立たせてる、月収30万貰ってます、って言っても疑わなくらいの部屋だった

「じゃあ作るから待ってて」

「手伝おうか？」

「大丈夫」

料理はライフワークだし特技だから一人の世界に入ることがしばしば、だからいつの間にか一時間経ってたとかは日常茶飯事、カルボナーラなら俺流で20分くらいで出来る、男3人の部活後だから量が普通じゃない、軽く5人分くらいあるな、そんなこんなで完成、名付けて《カイ流カルボナーラSP》

「出来たよ」

「待ってました！」

「美味そうじゃん」

「美味そうじゃないから、美味いんだよ」

「わいは食にはうるさいで」

「食ってから言え」

各々食べ始めた、コテツは大きな口を開けて大きな一口で食べた、そしてフリーズ、それを見てコガネが一口

『うまつ！！！！』

「何やこれ！？めっちゃめっちゃ美味いやんけ」

「美味すぎだろ」

「当然、どうだコテツ？」

「今までの人生の中で一番や」

やっぱりいつ聞いてもこの一言は興奮するな、料理人にでもなつちやおうかな

「何でこない料理が上手いん？」

「それは…」

俺は色々経緯を話した、別に隠す気は無いし聞かれたら答えるつもりだったし、でも何かテンション下がったな

「別に気にしなくても良いよ」

「そやけど」

「……似てる」

コガネがボウっとしながら言った、過去の事かな？

「俺も親に捨てられたも同然なんだよな」

「どういうこと？」

「俺の親父は代議士なんだよね。中二からこんな服装なんだよな、当然趣味だからな、そこら辺の不良とかと一緒にするな。でも親父は気に入らないらしくて中三からは家を追い出されて一人暮らし、最初はコンビ二弁当だったけどヒノリとかが作りに来てくれたし、簡単な料理なら覚えた。今は親には関わらない契約で仕送をしてもらって生活してる」

辛いんだな、中三っていったらまだガキだしヒノリも毎日来れる訳じゃない、俺何かはまだ楽な方なのかな、で、中盤辺りから泣き始めたコテツ、飯を食いながら泣いてるよ

「辛い思いしたんやなあ」

「いや、俺的には俺の人生より今のコテツの方が同情を誘うよ」

大いに同意、まあコガネは自分を確り持ってたからこれまでやってこれたんだろうな、一人暮らしなんて簡単に出来るもんじゃないも

んな

「それでヒノリに惚れたと」

「ゴホッ、ゲホッ、ゴホッ」

カルボナーラを喉に詰まらしたらしい、色白な顔を真っ赤にしてる、照れか苦しみか分らないけど、でも恐らくは凶星だろ

「そやなあ、弱い時に優しくされると誰でもなびくさいに」

「ち、違うから」

「じゃあその前から？」

コガネの顔がどんどん赤くなつてく、本当にこっぴどくのはダメらしいな、でもコガネをイジって楽しんでる俺らも俺らだけだな

『さあ、どっち？』

「コテツ」

「わいの勝ちや！カルボナーラちよいと貰うで」

「おい！」

負けたあ、つてかそれがメインじゃないんだよな、本題に移らないとこのまま流れる可能性大だよ

「それで、初恋？」

顔が溶け出すくらいの赤さで頷いた、世のコガネファンにこの顔を見せたら大変な事になるだろうな、多分ファン3割増とみた

「ヒノリはんの母性本能言うやつちゃん」

「よく手を出さなかったな」

「当たり前だ！つてか出せるような……」

「勇気はないと、でも一緒にいて欲しいくらいは言えるだろ」

男には敵無しだけど、ヒノリとなると小動物みたいに小さくなるな、いつもみたいに堂々としてないしクールさも見当たらない

「ちよつと……」

「無理やないやろ、それに誰かに盗られてまうかもしれへんのやぞ？」

「怖いんだ」

やっとコガネが本心を語始めたよ、ただのチキンなら色々矛盾が生

じるし話すのもままならないだろ、でも半分頼りにしてるって事は他の何かがある

「今の関係でも心地いいんだ、だから自分の気持ちが通じなかった時が怖い、壊れるくらいなら今のままで良い、そう思っちまうんだよ」

「そつかあ、それなら無理に背中を押すのはプラスにはならないな」「そやかて一歩やぞ、あと一歩で答えが出るところまで来するのに、何で手を伸ばせへんのや？」

「コテツにやつと手に入れた安息が分かるのかよ？」

コガネの目が変わった、今までの逃げるような目じゃなくて悔しさや憤りの目だ

「親には見捨てられて、世間には白い目で見られて、やつと手に入れた安息を壊したくない、その思いがコテツには分かるか？」

コテツも俺も言葉が出なかった、多分コガネはハーフとかピアスとか服装で色々言われてきたんだと思う、でもヒノリだけが認めてくれた、だから好きだけどその事を言ったら唯一無二まで失うかもしれない、そんな辛い思いと戦ってたんだろうな

「分かった、わいもその恋応援するで、わいらは親友兼先輩や、何でも聞きたい」

「先輩？」

「恋のや」

「俺らが何でも相談にのってやる、だから親友も頼れ、な？」

笑って全員の拳を合わせた、いつ実か分からない恋を応援する、苦悩を別けあう覚悟と、友情を分かち合う覚悟、二つの思いを胸に秘めて

## 青と赤の同居

コガネの家を出てからは意外にコガネの家から近いということが判明したコテツ宅にコテツを送ってから帰った。

玄関に入ると靴からみてツバサとヒノリがいる事が分かった、って何時までいるつもりなんだろ、もう9時を回ってるぞ、それにキヤイキヤイ騒ぐ声が、入り辛いけどしょうがない

「ただいま！」

そういうとすぐにチカの返事が帰って来た

「お帰り」

リビングか、ってか会話が完璧に無くなった、何でだろ。

リビングに行くつもりでフリーズしたツバサとヒノリがいた、そんで理解が出来ない俺とチカがいた

「何でカイ君が？」

「ここってチカチカの家だよね？」

「うん」

もしかして、俺の説明不足っていうか、想定範囲外っていうか、とりあえず今考えてる事は十中八九当たってるだろうな

「カイっちは何で？」

「俺んちもココだから」

「ええええ！」

やっぱり、説明をしてなかったらしい、俺もチカも言ったと思ってたからこっちもビックリしてるし

「もしかして、チカチカとカイっちは同棲してるの!？」

「近からずとも遠からずかな、正確には俺とチカとユキとマミ姉でくらしてる、かな」

ヒノリの鋭い目が真ん丸になってる、尋常な生活じゃないのは分かるけどそれっぽい事を言ったような気がするんだよな

「チカチカ！何もされてない!？」

「されてないよ」

「それにする暇も無いから」

「不純」

「だから何もしてないって!」

ツバサとヒノリの間で色々な妄想が飛び交ってるらしいけど、ユキとマミ姉がいたらそんな事出来ないし、する気は……、無いって事で

「じゃあヒノノ二人の時間を邪魔しちゃ悪いね」

「うん、皆みの邪魔はいくら友達でも出来ないからね」

「じゃあ、また明日!」

逃げるようにツバサとヒノリが帰って行った、何か物凄い勘違いしてる気がするんだよね

「する?」

「しねえしユキとマミ姉が帰って来るぞ!」

「冗談だよ」

目がそれっぽかったから冗談っぽく聞こえないし、しかもチ力にそんなこと言われてドキドキしてるし。

部屋で着替えて雑誌を読んだり音楽を聴いたりして暇を潰してた時だった、いつものように窓を叩く奴が一人、犯人は分かっている、チ力だ、部屋が隣だからたまに屋根をつたって来る事がよくある。

窓を開けて俺も外に出た

「今日は星綺麗だな」

「ホントだ。ってか今日コテツが悲しんでたよ」

「何で?」

チ力は本気で分かって無いらしい、無知って罪だね

「ツバサを連れてっちゃったじゃん」

「ああ!盲点だ」

「まあ良いけどね、男同士の話つても楽しかったから」

チ力は笑って空を見た、この屋根に居るときが俺は好きだ、夜風が気持ちいいし街の灯りが綺麗だから今見てるもの全部手に入れた錯覚

に陥る、その錯覚が気持ち良い

「コガネはヒノリの事好きなんですよ？」

「そうだよ、ヒノリもだろ？ヒノリは告白する気は無いの？」

「今一つ勇気が出ないんだって、好きだけと言ったら幸せが逃げそうで怖いんだって」

「コガネも全く同じだよ、無理に俺らが引っ付けても本意じゃないだろうな」

俺らが無理矢理機会を作ったりコクらせる事は簡単だけどそれは望まないだろうな、二人はスローペースな恋がお好みと

「ヒノリは待つてるのに」

「でもコガネが一人暮らしなのは知ってるだろ、その時に助けくれたのがヒノリなんだって、だから現状を壊したくないらしいよ」

「ならヒノリの好き好きアピールしかないな」

「好き好きアピール？」

「そんな気を見せればコガネも決心がつくんじゃない」

そうだよな、不安ならその不安要素を取り除く何かがあればどうにかなる、コガネの場合はヒノリの確かな気持ちか、ヒノリはそんなに表に出すタイプじゃないから難しいんだよな

「明日ヒノリに相談してみるよ」

「頼んだ、俺もコガネをどうにかしてみるから」

そういつて部屋に戻ろうとした時に後ろ手を掴まれた、まだ何かあるのかな、それとも俺がいないと寝れないとか？多分後者の可能性は少ないだろうけど

「何？」

「おやすみのキスは？」

あまりの事にむせかえった、チカから始めて聞く言葉だったから、それにおやすみのキスなんて一回もしたこと無いし、同居マジックか？

「何、恒例っぽく言ってるの？」

「出来ないの」



チカから顔を背けて、チカが手を掴む力を強くしたのを確認したら、振り返って素早くキスをした、俺って策士だな、顔を離すとチカは顔を真っ赤にしてうつ向いてる、これが本来のチカだよ

「おやすみ」

「……おやすみ」

チカを屋根に残して部屋に戻った、すぐにチカが部屋に戻ったのを確認して、明日に備えた。

翌日、昼休みいつものように弁当を食べてるとツバサがあの話を蒸し返してきた

「コテツ、コガネん、カイっちとチカチカが同棲してるの知ってた？」

「俺は知ってたよ」

「ホンマかいな！？わいは知らなかったで、隠すなんてきたないで」「別に隠した訳じゃないし、知ってると思ったんだよ」

そっか、コガネには言ってたから皆に言った気になってたのか、でもコガネは何でヒノリとこの話をしなかったんだろ、他人を話の種にするのは嫌いなのかな

「ヒノは知らなかったの？」

無言で頷く

「知ってると思ってた」

コテツが静かに寄って来て周りに聞こえないように耳打ちをしてきた、何となく予想つくけど

「やったんか？」

ビンゴ、高校生だから気になるのは分かるけど、それを出来る状態にする親はいないだろ

「ツバサも同じ事聞いてきた」

「で、どうなんや？」

「残念ながら、期待通りの応えは出来ないようだ」

「何や、おもしろくないな」

やっぱり同居っていうとみんなそっちの方に考えるのかな、でもユキとマミ姉がいるから出来ないもんな、お互いがお互いを監視させるのが目的だろうな

「おやすみのキスくらいはしてるだろ？」

コガネの問いにチカが弁当を詰まらした、無言で応えてくれておりがとう、コガネでも分かったらしい

「流石カイ」

「一回だけだよ」

「僕にはキスしてくれないのに、カイっちにはおやすみのチューまで」

落ち込むところか？だんだんツバサが本気が冗談かが分からなくなってきた、それに彼氏がいる前で言わないだろ

「チカちゃんも気を付けろ、カイは危ないぞ」

「危なくねえよ」

「大丈夫、そこまで弱い女じゃないから」

「チカも普通に返すな」

その後、男子だけになって

「終わったら報告しろ」

だってよ、青春ボーイズが、報告するわけないだろ、こっちにも秘密権があるんだよ

## 赤にストーカー

夏休みを間近に控えて期末テストが終わった今日この頃、部活も始まって色々活気づいてきた。

最近ではヒノリとコガネを二人にする計画というか俺達が二人きりになりたいっていうか、とりあえず3組になることが多い。

今日の部活帰りもいつものようにチカと二人で帰ってた、何か最近心なしかチカの元気がない

「チカ、どうした？」

「何が？」

「最近元氣無いじゃん、ため息ばかりだし」

チカはしまったって感じの顔をした、何か不満でもあるのかな

「実は……」

「実は？」

「やっぱダメ！カイには言えない」

「何だよ？俺に言えないような事でもしたのかよ？」

チカが無言で首を横に振った、最近大人っぽくていうか成長してきたから見なかったけど、チカが不安そうな顔をしてる、こんな顔を見るのは久しぶりだ、高校に入ってからは見なかった自分で何かを溜め込んだ顔だ

「……ストーカーがいるみたい」

「はあ？」

「ここ一週間、ストーカーにつけられてるような気がするんだよ」

「何で？」

チカは息を整えて決心したのか話だした

「最近下駄箱に変な手紙が入ってたり、夜に窓に石を投げられたり、一人でいるときとかは誰かの気配を感じるんだよね」

「今は？」

「無い、でも一人でコンビニとか行くと視線を感じる」

「手紙はある？」

チ力は鞆の中から一枚の紙を出した、今は冷静を装ってるけど、実はかなりムカついてる、そんなふざけたような奴は全身全霊をかけて殴りたい気分だ、んで手紙の内容は

《チカちゃんへ

僕の大好きなチカちゃん、いつもいつも見てるよ》

気付いたら紙をクシャクシャにしてた、絶対に殴る、何だこの気持ち悪くてウザイ手紙は、でも一番辛いのはチカだろうな

「明日から一人になるな、このクズは俺が焙りだす」

「ありがとう」

多分俺がいればコイツは寄って来ないだろ、それを逆手にとるしか方法は無い、でもチ力を危険にさらす事になる、一晩考えるか。

翌日、いつもものように一緒に登校した、下駄箱に着いて靴を履き替える時にチ力の顔色が変わった、多分また手紙があっただろ、考えるだけでイライラする

「また手紙か？」

「それだけじゃない……」

そういつて手渡した物は、手紙が一枚、それに写真が一枚、チ力が学校にいるときの写真だ、やっぱりこの学校の誰かか、手紙の内容は《チカちゃんへ

僕が見てるのを分かってくれた？

君は僕のもの、誰にも渡さないよ》

殺意が湧いた、日本に法律が無かったら殴り殺してるかもしれない、法律があってもいざとなったら理性が飛ぶかも、それくらい許せなかった。

チ力には今日、一人で帰ってもらう事にした、ストーカーがついて来ればこっちのもの、馬鹿みたいにチ力を一人で帰すけど俺が後を

つける、チカには辛いだろうけど細い路地に入ってもらえば自然とストーカーが出てくるだろう、そこが勝負だ

「チカ、少しでもヤバくなったら俺を呼べ、近くにいますからすぐに行く」

「分かった」

「視線を感じたらメールを打つふりをしろ、確認できたら俺がメールを送る、そしたら人がいない路地に入れ」

「カイ、大丈夫だよな？」

「俺を信じろ」

チカを抱き寄せて、耳元で話しかけた、俺が今からやろうとしていることは、チカが一方的に危険な事だからだ

「ゴメンな、チカにばかり辛い思いをさせて」

「大丈夫だよ」

チカが離れて歩いて行った、何とか確認出来る位置から怪しまれないようにチカをつけた、こんな事してるのはもどかしいけどしょうがない。

10分くらい歩いてチカがメールを打つふりをしたのが確認出来た、俺からはストーカーを確認できなかったけどメールを送った

“ゴメンなチカ、確認した”

送信、辛かったけど今後の事を考えたら我慢するしかない、チカが暗い路地に入って行った、その後すぐにうちの高校の制服を来た奴がチカの後をつけていった。

俺は走ってチカが入った路地に行った、そこには呼び止められた怯えたチカがいた、男は気味が悪い笑を浮かべてた、俺は肩を掴んで後ろの方に投げ倒した

「カイ！」

「何する……」

俺が誰だか分かったらしい、逃げると思ったけど立ち上がってポケットからバタフライナイフを取り出した、最高のクズだな

「君さえいなくなればチカちゃんは僕の物」

「大丈夫、俺がいなくなる事はまずない、それより自分の心配した方が良くない？このゲス野郎が！」

ストーカーがナイフを振り回しながら来た、つてか突かれるより危ねえ、チカを後ろに遠ざけて避けながら殴るチャンスをつかってた  
「ハハハ！大した事無いねえ、死んじやうよ？」

コイツの笑い方も、喋り方も、全てが俺の逆鱗に触れる、今すぐにも殴りたいけどナイフを避けながらじゃ

「死ねよ！君は僕にとって邪魔な存在な……！」

つまづいてよろけたのを見逃さなかった、ナイフを持ってる右手を思いつき殴った、胸ぐらを掴んで寄せた

「さあて、とりあえず謝ってもらおうか」

「やだね、君なん……」

全体重をかけて殴り飛ばした、白眼をむいて口から泡ふいてる、強く殴り過ぎたかな、でもこれくらいしないと俺の気が収まらない

「カイ、頬が切れてる」

「えっ？」

触つてみると確かに血がついてた、切られてたんだ、気付いた途端に痛み出した、耐えられるけどうつとうしいな

「チカ、帰ろう。コイツはもう良いだろ？」

「うん、でも一つ……」

チカはストーカー野郎をひっくり返して、背中に落書きをした、いつ起き上がるか分からない奴だったけど、俺も面白いから楽しんでた  
《僕はストーカーです》

しかも油性ペンの白、これは消えないぞ、顔にも書いてるし、明日から学校に来れないじゃんこれじゃ、まあ良いんだけど

「すつきりした！早く帰って手当てしよ」

「OK」

ストーカー野郎を踏んで帰った、当分学校には来れないだろうな、あっそうだ、これだけじゃまだ甘いよな

「チカ、悪い少し待ってて」

「何で？」

「良いから」

走って倒れてるストーカーの所に行った、落書きだけじゃダメだな、ズボンとパンツを脱がしてチカと俺に繋がるものを全てをドブに流した、下品な俺、どうやって帰るのかな。

戻るとチカが不安そうな顔をしてた

「何してたの？」

「ズボンとパンツ脱がしてきた」

顔を真っ赤にした、聞かなきゃ良かったのに、まあアイツも不幸だったな、俺にケンカを売ったのがそもその間違いだったんだよ

「どうやって帰るんだろ？」

「バッグは残したから」

笑いながら帰った、頬を切ってるから周りに見られてたかもしれない、でも完全に二人の世界に入ってたからな。

家に帰って傷の大きさにビックリした、一生残るなこれは、チカを守った勲章として自分で妥協した

## 銀と着物

一学期も終わって夏休みって喜ばないんだけど、運動部は大会があるから夏休みも無いに等しい、まあ負ければ良いんだけど。

コテツは怪我が治りきらないらしいから今回は出ないらしい。

チ力達は大会だけど弱いから地区大会突破も危ういくらい、だから夏休みはそれなりにあるらしい。

問題は俺らだ、適当なところで負けないと夏休みが無くなる、部員達もずば抜けてヤル気のある奴はいないかなりのグダグダ部だ、だから都大会には行かないらしい

「コガネはどう思う？」

「大会の事？ 楽で良いじゃん」

「まあみんなそんなもんか」

ちなみに真面目な奴の言い訳は、女の子が沢山来て他の学校に迷惑になるかららしい、それも一理あるな、この学校の女の子のエネルギーは他校に迷惑をかける。

学校帰り、いつものようにチ力と二人で帰ってた、夏休みの計画をたてながら

「チ力も明日から大会だろ？」

「うん、初戦から優勝候補、だから夏休みは楽できるんだ」

部活に全てをかけてる奴には可哀想だな、でも諦めがついて良いよな、俺達もそんなだったら良いのに

「カイ達は？」

「本気を出せば県大会入賞出来るけど、サッカー部って彼女持ちが多いし、ヤル気無いから2回戦敗退で決定した」

「どんなだよ、まあサッカー部は一番ヤル気無いもんね」

そう、練習もひたすらゲーム、しかも流して、みんなテクニクは



あるけどヤル気を出さないから弱い、俺にとっては最高の部活なんだけど

「なら夏休み家でバイトしない？」

「良いよ」

「今回はツバサとヒノリも誘つといたから」

「ホントに？楽しくなりそうだな。しかもそのメンツならコガネとコテツも来るだろうな、一応誘つとくよ」

「浴衣持参でね」

夏祭りか、浴衣買わないとな、流石にユキのお下がりは無しだな、チ力と買いに行くか。

サッカー部地区大会第二回戦、3 - 0で負けてる、ロスタイム残り2分、敗退決定のこの流れのなかで普通の青春蹴球児なら落ち込むところだがうちは違う、みんな満面の笑でグダグダな試合を展開してる。

終了すると優勝したんじゃないかくらいの盛り上がりかた、3年の人は引退なのに異様にテンションが高い

「よっしゃー！終わった！みんなで打ち上げに行くぞ！焼き肉だ焼き肉」

撤収速度も尋常じゃない、みんな走って行っただけと俺とコガネは近くの体育館に行った、チ力達とそこで待ち合わせをしてるからだ。

体育館の客席にはコテツがいた、怪我で大会を辞退したとは思えない勢いで応援してる、周りにいる観客がドン引きするくらい

「カイはんにコガネはんやないか、もうそろそろ終わるで」

バレー部の試合は遅めにあるからなんとか最終セットは見れた、スコアボードを見るとわりと接戦だった（負けてるけど）

「皆はん大活躍やで、得点は相手のミス以外は全部3人が入れたんやで」

「へえ、やるじゃん」

「そちらはندوقやった？」

『惨敗！』

Vサインで誇らしげにハモるとコテツが腹を抱えてころげながら笑ってる、コテツの周りを気にしない行動の数々には脱帽だよ

「なら夏休みは遊べる言うことやな？」

「そのことだけどさ、チカの家の民宿でバイトしない？」

「楽しそうじゃん、俺行く」

「わいもわいも！」

「で、夏祭りがあるから浴衣なり甚平なり持参ね。お祭りは格好からでしょ」

コガネが何かを思い立ったかのように口を開いた、ってか試合そっちのけだな

「ヒノんちで浴衣作って貰えるかもよ」

「ホントに？」

「ああ、何回か作って貰った事あるから、ヒノんち着物屋で割と安くしてもらった」

「ほな決定やな、これからみんなで行くで」そんな話を話してる間に試合が終わったらしい、負けたけど異様にテンションの高い3人、ってかみんな試合やった後なのに元気だよな。

解散して客席で待ってる俺達の所に来た、ツバサは走ってコテツに飛び付いた、コガネはタオルをヒノリに手渡した、俺はスपोर्टドリンクをチカに渡した

「ありがとう」

「あ、間接キス」

「ブッ！」

女の子らしらぬ勢いで吹き出した、ケラケラ笑っていると強烈なボディが入ってTKO

「最低」

「……冗談だよ」

「ほな行こか」

コテツが行こうとしたけどチ力達には理解出来てないらしい、そりゃそうだよ、俺らの中で話した事なんだから。

コガネが説明してやっと理解したらしい、流石にテレパシーがついてないから分らないよコテツ

「そうなのヒノノ!？」

ヒノリが無言で頷く

「じゃあヒノリの家に行こう!」

ヒノリの家は表は着物屋、裏は家、全体的に純和風で落ち着きがある、庭は日本庭園だなこれは。

俺達は裏から入って、居間に通された、家の中には高そうな壺やら掛軸やらいろいろあった

「ちよつと待つてて、見習い呼んでくるから」

見習い?別に文句は言わないけどあえて言うことか、言わなきゃ良いことだろ

「コガネ、見習いつて?」

「多分兄貴の事だろ、男はどんどん継いでるらしいから」

そういう事か、でも見習いだろ、言っちゃ悪いけど作れるのかな、見習いだろ

「カイ、見習いだからって甘くみるな、この家は店主以外は全員見習い扱い、兄貴は他に行けば店主レベルだって言ってたぞ」

そうなんだ、安く作ってくれるらしいから文句は言えないし、着れば良いんだよ。

暫く待つてるとヒノリと着物を着た男の人が来た、ボサボサで眠そうな顔をしててなんだか頼りないな

「ヒノリ、この人達?」

無言で頷く、ヒノリのお兄さんはメジャーを持ってきて、順番に計り始めた、あつという間に終わった、ビックリするくらいに早く、紙に全部書いて営業つばく進めた

「じゃあ甚平タイプが良い人、手あげて」

コテツとコガネが手をあげた、俺は浴衣派なもので、おもむろにツバサが立ち上がってお兄さんに耳打ちした

「出来ます？」

「楽しそうだね、喜んでやらしてもらおうよ」

何んて言ったのかは何回聞いても教えてくれなかった、その後生地を選んで終わった、妹の友達だから一週間くらいで作ってくれるらしい、完全オーダーメイドだから楽しみ倍増ってか。

チ力はどうな物にしたんだろ、みんなお楽しみになってるからな

## 青と赤の帰省

今は船の中、どうもこの船っていう乗り物には何回乗っても慣れない、酔わないように寝たいんだけど周りがそれを許さない、目を瞑るとチ力が起こしてくるし、コテツとツバサは他の客の迷惑を考えずに騒いでる、コガネは爆睡、流石職人芸って感じだよ、ヒノリは本を読んでも酔わないのかな

「あとどれくらいで着きはる？」

「20分くらいじゃない」

「ほなツバサ、デッキに行こや」

「行く行く！」

ガキ二人の暴走を誰か止めてくれ、こっちが疲れる、チ力が落ち着いて見えるのはコイツらお陰か

「カイ、アタシ達も行こう、いつも寝てばかりだから起きてる時くらいは楽しもうよ！」

前言撤回、やっぱり疲れるな、席を立てて前の席にいるヒノリとコガネの横を通つてにやけた、爆睡してるコガネがヒノリの肩を借りて寝てた、ヒノリは本を読んでも思っただらヒノリも寝てるし。

デッキに上がると潮風が気持ち良かった、人もそんなにいないし、今度はココで寝よ

「気持ち良い！」

「まだ島は見えないな」

「みんないるかな？」

「サエ以外はいるだろ」

チ力が不思議そうな顔をしてた、チ力の知能を過大評価しすぎてたな、説明が必要だな

「ミッチーはコノミちゃん、ユメちゃんはゲン、ダイチはフウちゃんに会いに戻ってるだろ」

「そういえばダイチはどうなったの？」

そういえば、自分達の事でいっぱいいで全く気にして無かった、それも聞かないとな、ダイチがいなくてもフウちゃんがいるだろうし

「着いたら聞くか」

「そうだな」

島も見えてきたし戻るか、里帰りって事になるんだよな、みんな変わって無いと思うけど楽しみだな。

上陸するとコテツとツバサは一目散に走りだした、ホントに子供だな、コガネはヒノリに起こされながらだからフラフラだ、にしても久しぶりでも変わって無いな、当たり前前の事だけど

「やっぱり気持良いな」

「そうだな、東京の空気は汚いし、潮風が懐かしい」

島の自然は何も変わって無かった、変わっていくのは人だけか、じやあ俺とチカは自然だな

「じゃあ俺は一旦帰るから、荷物置いたらすぐに行くよ」

「分かった」

俺はみんなとは違う方向に歩いて行った、みんなは民宿に泊まるからチカと一緒に、俺は自分の家に。

変わらない自然を楽しみながら歩いてると懐かしい二人が、この二人も4ヶ月じゃ変わる事もなく相変わらず子供だ

「よっ、ユメちゃん、ゲン」

「カイ、おかえり」

気のせいかな事実か分からないけど、ユメちゃんが大人っぽくなったような気がする、東京パワーか？

「チカは？」

「いるよ、でも今は高校の友達付き」

「何時までいるの？」

「高校の友達は一週間ちょっと、俺らは夏休みが終わるまでいら安心しろ」

「何を？」

「さあね。じゃあ俺待たせてるから、また今度な」

小さく手を振るユメちゃんと、全身を使って手を振るゲンを背中に家に向かった。

家も相変わらずだった、先にユキが帰ってるハズだけどボードが無いって事は今は海か。

おとおとかあも相変わらず、変わらないものがあるって幸せなのかもしれない、俺は荷物を置いて家を出た。

チカの家の外にはみんながいた、これから島案内を要求されたから渋々案内することになっている。

みんなが使う海を案内して、お祭りをやる神社、その他もろもろを案内して自由行動、迷わない程度に案内したから大丈夫だろ。

俺とチカはとりあえず中学校に行った、何をするでもなくとりあえず暇つぶし

「そういえばさっきユメちゃんに会ったよ」

「どうだった？やっぱり子供のまま？」

「うん、でもどこことなく大人っぽかった、ゲンは相変わらずだったけどな」

笑いながら歩いてるとまた見慣れた顔が、中学校にふさわしい人物だ、この人の事でどれだけ俺らが悩まされた事か

「カイ君！チカちゃん！」

「フウちゃん、久しぶり」

前よりパワーアップしたフウちゃんだ、見る度に先生らしさが失われていく気がしてならない、ダイチの事を聞きたいけどフウちゃんに聞くの微妙だからやめとこ

「フウちゃん、ダイチとはどうなった？」

聞きやがったよ、折角俺が遠慮したのに、人の気持ちをつゆしらず、

平気でしかも何の躊躇いもなく、それにフウちゃんが顔を真っ赤にしてるのを見ると、もしかして……

「やっぱり歳が離れ過ぎてるよね？」

「付き合ってるの!？」

「……一応ね」

心の中でダイチを誉めてる俺がいた、ってかニヤリが止まらない、ヤベエ、何で他人の事なのにこんなに嬉しいんだろ

「もしかしてこれから会うの？」

「うん」

「こんな事聞くのも変かもしれないけど、何でOKしたの？」

「男の人にあんなに熱心になられた事が無かったから、何だか嬉しくて嬉しくて」

フウちゃんもまだ乙女か、夢って叶うもんなんだな、フウちゃんは走り去っていった、俺とチ力は笑いつばなしだった

「良かったな、ダイチ」

「カイは愛に年齢は関係ないと思う？」

「大なり小なりあるんじゃない、価値観の違いとかジェネレーションギャップとか。これを言ったら元もこも無いけど、好きなら良いんじゃないの」

「そうだね」

人の心は不思議なもの、簡単に揺らぐし簡単に移り変わる、でも揺るぎないものもあっても良いんじゃないの、俺はそう思った。

変わらない自然、変わらない街、でも確かに変わっていく人の心、でも変わらないのも人の心、俺とチ力はどっちだろ



## 赤と星空

2日間、いつもこの時期は民宿の客入りがピークになる、だから俺らはお手伝いだ、今回はユキとマミ姉は参加してない、ってか島にもいない、二人は行ったり来たりしてる状態だ。

今回は厨房に俺とヒノリで他は接客だ、今回はサーファー客が多くて前に比べれば百倍楽だ、ヒノリは初めてだからいっぱいいっぱいだけ

「大丈夫ヒノリ？」

無言で頷く、俺にはギリギリにしか見えないんだけど。

忙しくてあつという間に終わった、夢中だったからか忙しかったかは分からないけど、終わったらドツと疲れた、俺らは一足早く終わったから外で休んでた、夏とはいえ外は涼しくて潮風が気持ち良い

「ヒノリ、飲む？」

「ありがとう」

買って来たジュースをヒノリに渡して隣に座った、厨房は異常なくらいに熱いから汗を思ったよりかいてるし、体力の消耗が激しいんです、ヒノリは女の子なのに良く頑張ったと思う

「きつかった？」

「うん、思ったよりも熱かったし、鍋も重いし、忙しいし、あと…」

…」

「ゴメン、何時まで続く？」

「かなり」

あまりの愚痴の多さに途中で止めてしまった、自分でふつときながら後悔してる、まあ去年の俺も同じような事を言ってたと思うけど「ヒノリはコガネの事好きなんだろ？」

「ブッ!!」

ジュースを吹き出した、奇襲作戦だったけどここまで良い反応をしてくれるとは、しかもみるみるうちに顔が真っ赤になっていったし、

無言で肯定してるようなもんじゃん

「好きなんだ」

「でも、コガネはどうか」

肯定はしないけど否定もしない、ほとんど肯定だけだね、にしてもホントにコガネと同じような反応してくれるな

「コガネはあんななりだけどシャイなのは分かってるだろ、だから自分から動かないと何も変わらないぞ」

「でも、どうやれば？」

「思うがままに、口に出さない程度に好きって事を伝える、そうすれば何か変わるんじゃない」

ヒノリは考えこんじやった、俺は東京とは違う、押し潰されそうな星空を見上げてた。

ボくっとしてると後ろからチカとコガネが来た、接客も一通り終わったらしくクタクタな感じで帰ってきた、疲れてるのはコガネだけだな、チカは慣れてるらしくピンピンしてる

「お疲れ」

「カイ、キツ過ぎだぞこれ」

「ヒノリよりはましだろ、女の子なのに物凄い頑張ってたぞ、それにチカがピンピンしてるから情けなく見えるだけだし」

「うるせえ、チカちゃんも鉄人なんだよ」

チカは少し止まったあとコガネを蹴った、チカのコンピューターは処理速度が遅いな、ヒノリはこのどたばたコントについていくエネルギーは残ってないらしい

「そっついえばコテツとツバサは？」

「走ってどっか行っただ」

エネルギー有り余ってるな、コガネですらここまでなるのにまだそんな余裕があるなんて、愛というか馬鹿というか、とりあえず出どころの分からないエネルギーだな、でもまあ俺もこの状況を生かさない手はない

「チカ、俺らも走って行かない？」

「行く！」

実際歩いてるだけでも辛いけど馬鹿を演じるタメに走ってその場を離れた、コガネとヒノリのタメに俺らがどれだけ疲れた事か、勝手にやってるだけだけど。

夕日の入り江に行った、夜にココに来ることが無かったから新鮮で気持ち良い、静かだけど波の音が周りに反響してステレオに聞こえる、空を見上げれば満月だしそのまま海に視線を下ろすと月光の道が出来てる、更に天の川、泣きそうなくらい最高の場所だな

「……ヤベエ」

「綺麗……」

唖然、それ以外のなにものでもない、これを二人占めしてるとなると何だか申し訳ないな、でも誰にも教えないけど

「天の川か、初めて見たな」

「織り姫と彦星はいるかな？」

この状況でその馬鹿っぷりを晒すか、まずは7月7日について勉強してからだな

「7月7日にしか会えないからいないだろ」

「えっ！そうなの！？」

頼むからマジで驚かないでくれよ、チ力を過大評価しすぎたな、でもこれ以上馬鹿に出来ないな、俺も詳しくは知らないんだよな

「可哀想だな、一年に一度なんて、アタシなら途中で死んでるよ」

「確かに」

「でも何で会わないんだろ、親の言いつけなら無視すれば良いし、天の川があるなら渡れば良い、もしかして天の川って激流なのかな？」

夢の無い話を、どうせ神様が何かが出てくるんじゃないの、こういう話って神様は悪役だな、信じるだけバカバカしくなってくるよ

「じゃあ俺は橋を架けてチ力に会いに行くよ、それでもダメなら川を塞ぎ止める、神様が邪魔するなら俺が神になる、余は何があつて

もチ力を離さない」と

「神様に好かれた女が、カッコイイ」

何か違うけどまあ良いか、でも彦星には成りたくないな、だからチ力を織り姫にはさせない、一人よがりになっても……、一人よがりには成らないように頑張る。

次の日も同じように終わった、3日後には夏祭りを控えてる、チ力の家の前に座って空を見てた、みんな疲れてるなりにテンションが高い、約二名は疲れすら感じさせない

「終わった！ やつと終わった、皆はんもつと喜ばな」

「無理だよ、普通の人間は疲れるところだろ」

「アカンなあ、わいらは高校生やで、高校生言ったらエネルギー有り余る年頃やないか、これくらいでへばってたら卒業する前に死ぬで」

コテツはどんだけハードな遊びをするつもりなんだろう、少なくとも俺はついていく自信も気合いも勇氣もない、只ひたすらに放置するのみ

「コガネはんからも何か言うてやりいな」

「頼むから休ませろ、ツバサ君も止めてくれ」

「男の子が情けないなあ」

ダメだ、誰かこの馬鹿二人の暴走を止めてくれ、ってか俺らの側から退けてほしい、余計に疲れる

「しゃあないな、ツバサ、大人しくするか」

「ええ、僕まだ遊び足りないよ」

ツバサにとってさっきの接客は遊びか。

空を眺めるとチ力がお盆の上にのせたスイカとかなり大きな袋を持って来た、俺は見かねてスイカを受け取りに行った

「言えば手伝ったのに」

「疲れてたから」

「大丈夫だつて」

スイカを持って行くと最初にコテツとツバサが飛び付いて来た、その後無言でヒノリが二つスイカをとってコガネに渡した

「ありがとう」

「この亭主関白が」

小さい頃からこうだったのかな、だとしたら笑える、チカの持ってきた袋は多分花火だろう

「それ花火？」

「そうだよ、みんなでやろう」

「ホンマかいな！？花火なんて久しぶりやな」

ハイエナの如くコテツとツバサが群がって来た、中身は打ち上げ花火が8割の手持ち花火があとの2割だ、でも尋常じゃない量だから6人でも十分過ぎるくらいだ

「コテツ、ツバサ、海行くぞ、ココじゃ狭いだろ」

「ほな行きまつか！」

「コテツ、そっちじゃない、こっち」

逆に走り出そうとしたコテツを制止して順路に戻した、いつか迷子になるな、ツバサ共々。

海につくとやっぱり一番最初にコテツとツバサが花火を出し始めた、一つ出す度に感動の言葉を漏らした、疲れないのかな

「火、火は何処や？」

「僕達の愛で火が着くかもよ？」

「そやな……！」

コガネが見かねて二人の頭をグーで殴った、コテツはともかくツバサは女だぞ、まあ俺も我慢の限界が来てたけど

「カイ、チャツカマン貸して」

「はい」

コガネは付属のロウソクに火をつけて砂に差し込んだ、近くにあった噴射型の花火に火をつけて遠くに置いた、暫くして緑やら赤やら

青やら、色んな色の火花が出てきた、真っ暗な砂浜が一瞬で明るくなった

「綺麗やな」

「ほんとだあ」

いつの間にかシリアスモードに入ったコテツとツバサがいた、落ちて着いてて良いや。

恒例といっちゃ恒例の3ペア、コガネとヒノリは静かな手持ち花火と閃光花火中心に、俺とチ力はチ力が持ってきた様々な花火をする、コテツとツバサは噴射型の花火だけを選んで花火の周りをアフリカの原住民がしそうな踊りをしてる、怖い

「花火って怖いよな、あっという間に消えて無くなる、可哀想な人生」

「でも記憶に残る、儚くても記憶に残ればいいんじゃない、星だつて今見てる星は死んだかもしれないだよ、でも記憶には残る」

そっか、世の中には形に残るものと記憶に残るものの二つがあるんだな、形を大事にする人と記憶を大事する人、どっちも大事だけどどっちに頼り過ぎても良くない、人間って難しいな。

俺はチ力を思い出にはしない、絶対に形のままで残したい

## 青と体育会系達

やっぱり島に帰って来たらやらなきゃいけない事があるでしょ、フリークライミング？それも有るけど二の次三の次だね、夕日の入り江？それはついで、やっぱりサーフィンでしょ、夏だし一年近くやってなかったし海に入りたいし、とりあえず支度するか、飯も作らないと腹が減ったし、早起きしているいろいろ支度してる時だった、久しぶりに聞くこれに免疫が衰えていた

「カイ！海に行くぞ！」

情けないけどビックリして飛び跳ねてる俺がいた、久しぶりだからこれが来るのをすっかり忘れてた、にしてもやっぱりチカもサーフィンやりたかったんだ、通じあってるな俺ら……、ちなみに気のせいつてのが分からないほど馬鹿じゃないから、俺はパンを2枚、ジヤムとバターを塗って出た、炭水化物に糖分と脂肪、美味くて簡単で朝の心強い味方だな

「ほはひよ（おはよ）」

「行くぞ！」

チカがボードを持って走って行った、俺もボードを持って走って後を追った、パンを口に頬張りながら。

海は良い波がきてて水温も高め、天気も良好、久しぶりだけど勘は二ブってないはず、それにチカと二人きりでサーフィンって、ただ体育会系カップルなんだよ、しかもすでにチカが準備体操してるし、あの事件いらいちゃんと準備体操をするようになった、俺も軽くストレッチしてから入った、やっぱり海は最高に気持ちいいし学校の事とか面倒な事全部洗い流してくれる、70%の力は偉大だな

「気持ち良い！！」

「きゃ！何いきない？」

「いや、心の雄叫びがつい声にでちゃった」

「ふん。それより早くサーフィンやる、この波は今しか来ないんだから」

チ力は沖に出ていった、自分で話をふっておきながら難無く強制終了かよ、考えてもめんどくさいから海にでるか、いつものポイントまでつくと波待ちをしたにはしたけどあつという間に良い波が来たから速攻波乗り、この波乗りの感覚は最高の薬物だな、中毒症状に近い感覚になる、東京でもサーフィンが出来たら良いんだけどするために千葉か湘南まで行かないといけないんだよな、電車代って高校生には痛すぎる出費なんだよ。

2、3時間くらいかな、ずっと海に入ってたから流石に疲れがきた、とりあえず浜に戻って休んだ、部活の倍以上楽しい運動になる、やっぱりサーフィン部を作るべきという下らない論争を心の中で繰り広げる

「カイ、サーフィン部作ろう」

俺は大爆笑、ヤベエ腹イテエ、呼吸が出来ねえ、死ぬ……、アブねえ、ホントに笑い死にするとこだった、考えてる事が同じ事にも笑えたし口に出した事にも笑えた

「呼吸困難になるまで笑うなよ、何だか恥ずかしくなるだろ」

チ力が顔を真っ赤にしてる、俺はチ力の後頭部を掴んでこっちに向けて顔を近付けた

「俺も同じ事考えてたから」

チ力が含ま笑いをした、チ力から顔を話して後ろに手をついた

「確かに笑える」

「でもそんなメチャクチャな部活作れる訳ないのは分かってるんだよな、第一海も無いしな」

若干落胆してる、もしかして軽くマジだったのかな、チ力なら否定しきれない

「サーフィン部とか最高の部を何で作らないんだろ？」



「海が近くにないし人口が少ないじゃん、それにそんな発想自体浮かばないだ……！」

「お二人はんこんな所にいたんかいな！」

林の中からコテツ達が出てきた、ってかココって軽く秘密の場所なのによく見つけたな

「何しに来たの？」

「冷たいやないか、折角こんな所まで来たんやぞ」

「二人だけで海なんて……、サーフィン？」

全員の目線がボードにいく、何でいるか聞いたのに流された、しかも今日は自由って言ったのに律義に全員とは

「とりあえず何で来たの？ 応えたら応えるよ」

「チ力はんのおかあはんはんに聞いたら海にいる言われたから、海をしらみつぶしに探してたというわけや」

「ふーん、俺らは見ての通りサーフィン」

しかも水着姿の4人、もしかして遊びに来たとか、残念な奴ら、俺らを追ってきたから遊べないじゃん

「ちなみにココ、サーフィン以外出来ないよ、ドン深だから、3mくらい行ったら足が着かない何てもんじゃないよ」

「ホンマかいな、残念やな」

「遊びたいなら道路に出て坂を登った所に階段があるよ、そこを降りれば遊ぶには最高の海があるよ」

「ほな、遊ぶ前にサーフィン鑑賞といきましょうか」

「そうだな、カイのダメっぷりを拝ませて貰わない事には遊ぶに遊べないな」

「泣いて謝るのが目に浮かぶ、チ力、いつちよかますか!？」

チ力と海に出て波待ちをした、ちよつと本気を出そうと最高の波を待つてるとほんの一分ほどで波が来た、今出来る最高のテクニクを使った、それでもユキよりはキレが良いんだぞ、ユキはスピードが尋常じゃないんだけど、波に乗ったり波に逆らったりいろいろ試した、先に俺が浜についた、その後チ力がすぐに波乗りを始めた、

チカは体の柔軟性を使ってるから流れるように進んでく、やっぱりチカは凄いなあ、チカが帰って来ると思ってたより周りは静かだった

「ハンパねえ」

「ホンマかいな」

「どうした？」

『スゲーよ!!』

コガネとコテツが前のめりになって叫んだ、そこまで興奮することではないと思うんですけど、でも柄にもなく頑張ったから驚いて貰わないと困るな

「プロ？」

「んなわけないじゃん、趣味だよ、ただの趣味」

「チカチカやつぱり凄いい、やつぱり僕の女だよ」

蛇のようにチカにツバサが絡まった、恒例だけどコテツ引き離す、ツバサに暴走してもらえればうるささ半減なんだけだな

「ゴンメなチカはん」

「こらコテツ！僕とチカチカの愛を邪魔するな、夜寝てやらないぞ！」

「寝ない！それにツバサの一方的な愛やないか。わいでもだんだんツバサの言つとる事がホンマかウソか分からんってきた」

コテツ、変態彼女を持つと苦労するな、ってか普通って良いことなんだな

「チカ、これからどうする？」

「もう十分サーフィンやつたしもうそろそろ引き上げようと思ってたんだよね」

「じゃあコガネとかについていって遊ぶか」

「うん」

俺達は近くのこれもまた秘密の海に案内した、波も無いしココでボードに乗ってボウっとするのが好きなんだよな。

真っ白な砂浜、水深20センチで天然の水族館、腰の辺りまでつか

れば30センチくらいの魚は普通にいる、しかも水深5、6mでも底まで見える透度、ココなら遊べるだろ

「綺麗やな、ツバサ泳ぐで!」

「凄い凄い!綺麗綺麗!泳ぐ泳ぐ!」

壊れたロボットみたいな反応だな、俺とチカとコガネとヒノリはビーチバレー、何だか分かんないけどココにはネットがあるんだよね、錆びてるけど使いものにはなる、それに紐でコートまで出来てるから手間いらず

「行くぞお」

コガネのアンダーサーブで始まった、フワリとコートに入れるだけのサーブが上がった、チカがレシーブして俺がトスを上げる、最後にチカのアタック

「ヒノ、俺に任せ、ゴフツ!」

伝家の宝刀顔面レシーブ、俺は大爆笑だけどヒノリはあたふた、チカは申し訳無さそうな顔をしてる

「コガネ、のびてる暇は無いぞ、ホレ」

俺のアンダーサーブで始まった、ヒノリのレシーブでコガネがトス、ヒノリのアタック

「ガフツ!」

伝家の宝刀顔面レシーブ再来、今度は俺の番かよ、今度はコガネが大爆笑、ってか俺らは大変な事を忘れてた

「コガネ、集合!」

コガネを呼んで隅の方で肩を組んでコガネに報告と意見聴取、これは重大にして最大の盲点だ

「コガネ、俺ら何か物凄く物凄い事忘れてないか?」

「……ああ!」

「恐らくこのゲームが終わる頃には俺らボロ雑巾より悲惨な状況になるかもよ、ツバサがいらないだけマシだけど」

「そうだな、だってアイツら……」

『バレー部三峰将じゃん!』

説明が必要なな、俺らがサッカー部の《イケメンツートップ》と呼ばれてるようにチカ・ヒノリ・ツバサは《三峰将》と呼ばれてる、どれだけ強いかはさっきので分かってもらえたと思う

「勝つ術は無いのか？」

「待て、あえて俺ら二人で挑むぞ」

「馬鹿だろ」

「コガネ、俺らの土俵に持つてけば良いんだよ、俺の知識によるとバレーは手だけじゃない……………」

座談終了、チームを変えて俺とコガネチームとヒノリとチカチーム、男の下らない意地でこのチーム編成になった

「カイ、馬鹿？」

「うるせえ！男には戦わなきゃいけない時が何度かある、今がその時だな」

「コガネ、ゴメンね」

「ヒノ、手加減無しだからな」

むこうのサーブが始まった、チカの力を込めたジャンプサーブ、速いけどこれくらいなら

「コガネ！」

「余裕！」

コガネは足でレシーブ、足ならサッカーの専売特許だしバレーのルールではフェアだ、俺はジャンプしてトス……、するふりしてツーアタック、見事にボールと砂浜の再開、一点先取

「よっしゃ、ナイスコガネ」

「カイも最高だった」

「無茶苦茶だろ、確かに足は有りだけであえて足でレシーブするなんておかしいだろ」

「俺らはサッカー部だぞ、これくらいなら朝飯前だよ」

「ノーバンノーバンの要領だからな」

いくら速くても女子のアタックなら見える、見えれば蹴り上げるの

は容易だ、盛り上がつてると海から上がる馬鹿二人、コイツらの襲来により俺らは更にキツくなる

「何やわいらも混ぜてや」

「チカチカずるいよ、僕もやる、コテンパンにしてやる」

コテツがこっちに来たせいで自然にツバサがチカチームに行った、二人ならどうにかなったけど三人はキツイだろ

「コテツ、お前のせいで勝算が減った」

「なんでやねん、向こうは……、悪い、相手を性別のみで見とった」  
コテツも理解したらしい、今からダダをこねるのは性に合わない、これで勝つのが真の侍ってもんだろ、侍じゃないけどね

「しょうがない、やるしかねえな」

「コガネ、サッカー部式アンダーサーブを見てやれ」

「おう！」

コガネは普通のアンダーサーブをした、ヒノリがレシーブをしてツバサがトス、チカがジャンプしてたからチカに注意したけどチカはスルー、ボールが向かった先にはヒノリがいた、ヒノリの奇襲アタックを何とかスライディングでコガネがレシーブ、俺の所上がったてきたボールをトス……、しないでスルー

「……何てね」

落ちてきたところを足でトス、自分でも驚くような奇跡的トスをコテツが力任せにアタック、でも尋常じゃないスピードが出て再びボールと砂浜の劇的再開

『よっしゃ！』

「わいらバレーでもやっていけるとちゃう？」

「三峰将敗れたり、ってか」

「やっぱり俺のレシーブのお陰だろ」

ホントに奇跡が起きた、コガネの喧嘩仕込みの反射神経を使ったレシーブに俺の悪知恵仕込みの奇襲トス、それにコテツの空手仕込みの馬鹿力のアタック、どれもが即席の滅茶苦茶な技ばかり、もしかして俺らって本物の天才？

終わってみるとやっぱり負け、接戦だったけど玄人と素人の差、勝てると思った俺らが馬鹿だったって事に気付いた

「勝てねえって」

「無理やで」

「負けた」

大の字で倒れる情けない男三人、問題はミスだ、力的には負けて無かったと自負する、でもミスが多すぎた

「僕ビツクリしちゃった、みんな凄く上手いんだもん、コテツのアタクなんて普通の男バレ並だよ」

「アタシもだよ、何回カイに騙された事が、運動神経が良いのを利用してあんな手やこんな手を」

「コガネのレシーブも凄かったよ、しかも9割が足でレシーブだし」  
後の1割は癖で胸でとって蹴りあげるといふサッカーテクニクを使って失点、まあ楽しかったから良いか。

俺らこんな体育会系デートで良いのか？普通高校生でココまで本気でビーチバレーをする3ペアもいないだろ

## 青とお祭り

夏祭り当日、夏休み最高のビッグイベントになるであろうこの日がやってきた、夏祭りⅡ浴衣、ってことでヒノリのお兄ちゃんに作って貰った浴衣を着てから再度集合になった、コガネとコテツはうちにて着替えてる、ジンベイなのですぐにきれる。

コガネのは灰色の生地で両肩と左足の半分が網になっている。

コテツは、紺色の生地にも所々に小判がプリントされているもの、コテツらしいって言っちゃコテツらしいな。

俺のは青に水色を少し混ぜた波っぽい感じの生地だ、なんか海っぽくて俗に言う一目惚れ、それに雰囲気を出すためにベ　カムがやってたサムライヘアーにしてみた

「どう？ぽくない？」

「見事に出来てるな、それでサッカーやればかなりウケるぞ」

「カイはんやから様になるんやな、そこらへんの野郎がやってただのキモ男やで」

誉められてるのかけなされてるのかよくわからないけど良いか、それに自分では微妙に気に入ってるし、暫くは日常でもこれでいくか。

チカの家の前に行くとき既に三人とも揃ってた、にしても三人とも違う感じの雰囲気だな。

チカの浴衣はピンクの生地に向日葵のプリントがされてる、しかも例の如く前髪を下ろしてる、この時のチカは大人しく見えるんだよね。

ヒノリは黒に猫が所々プリントされてる、しかも若干胸をはだけて色っぽい、コガネは顔を真っ赤にしてうつ向いてる、そしたらいきなりコテツが俺とコガネの間で肩を組んできた

「ヒノリはん胸でこうない？」

「確かに、コガネ、サイズいくつか知ってる？」

「し、知らねえよ！それに知ってても教えないから」

ヒノリの胸は平均女子高生のものとは育ちが遥かに違った、今まで気付かなかったのが不思議なくらいだ、軽く見積もってもDは堅いな。

そして最後に問題のツバサだ、一言で言うところコスプレに近い浴衣になつてゐる、黄色い生地には花柄でミニスカートばりの短い裾、浴衣の概念を脱した。

「カイ、ツバサ君のあれは……」

「コスプレだな」

「ええやないか可愛くて。ツバサめっちゃ可愛いで！」

コテツがツバサのもとに走って行った、ヒノリはいつの間にかコガネの腕を抱いてた、でも何故かコガネはコツチを見て口パクで訴えてきた

「む…ね…が？」

胸が当たつてゐるって言いたいのか、残念ながら俺にコガネを助ける手段は無いよ、コガネを見捨てていつもよりおとなしいチ力の手をとつた

「やっぱり可愛いな」

「ありがとう。カイ、その頭何？」

「サムライヘアー、雰囲気ですでしょ」

「カッコイイよ？」

疑問文になつたのはさておき俺らは神社に向かった、約二名を抜いてはいつもとは違う雰囲気だった、その二名とは当然コテツとツバサだ、相変わらずの馬鹿ハシャギっぷりは健在どころか過熱する一方。

神社は人で賑わっていた、大きい神社にも関わらずところせましと人がいる、コテツとツバサは軽快なスタートダッシュで人ごみに消えて行った、俺とチ力はコガネ達を置いてお祭りに参戦した。

去年と変わらない出店の数、去年と変わらないような人の量、お祭



りって何か特別な雰囲気が好きだ、とりあえず去年屈伏させた金魚すくいに行った、おじさんは険しい顔をして俺を見る。

「やらせないぞ」

「何だよ？俺は客だぞ」

俺が第一声を発する前に拒否された、まあ当然だけどせめて何か言わせろよ、先を越されるのがこれほどム力つくとは

「頼むからやらないでくれ！」

頭の上で手を合わせてる、そこまでして俺に金魚すくいをさせたくないか、多分こんな状況に陥ったのは俺くらいだろう

「でもタダで帰るわけにはねえ……」

「クソ、これ持つてけ」

おじさんが出したのは焼きそばタダ券二枚だった、恐らく出店してる人に配られる物だろ、金魚をもらうより割が良いし焼きそば食いたかったからありがたく受け取ってその場を去った。

焼きそばを貰って食べながら歩いた、去年はあんまり周りを見てなかったけど案外いろんな出店があるんだな

「焼きそば美味しいな」

「うん。カイってそこら辺の店には文句言っけど屋台は美味しいの一点張りだよ、何で？」

「雰囲気かな、料理は雰囲気で味が変わる物だから、こういうのは全部美味く感じるものなんだよ」

チ力は呆れた感じで焼きそばを食べ続けた。

俺は焼き鳥とお好み焼きを買って神社の裏に行った、去年チ力が教えてくれたオススメポイントだ、一年じゃ変わるハズもなく記憶のまま残ってた

「カイさつきから食べ過ぎじゃない？」

「ほうは（そうか）？」

「うん、ジャガバターにモチポテ、たこ焼きに……、お好み焼きも別に食べてただろ」

「まあね」

「食べ過ぎでしょ、しかもいつも二人分頼んでほとんどカイが食べてる、何でそんなに食べるの？」

「雰囲気かな」

チ力は呆れて焼き鳥を頬張った、でもお祭りは食べ歩きのためにあるものだろ、高いとか言って何も食わない奴はタダの散歩野郎だ

「この後花火だね」

「そっか、当然見に行くだろ？」

チ力が無言で頷く

「コガネ達も誘ってしんみり……、出来そうないけど、とりあえずユキとマミ姉には悪いけどあの場所に行くか」

「うん！」

波の音を聞きながらのお好み焼きは最高に美味い、そして隣にはチ力、何かこの世の天国みたいで怖い、幸せ過ぎて不幸になりそう。

食べ終ってまだ時間があつたからそこら辺を見て回ってる時だった、新鮮で懐かしい二人組がいた、この二人を見ると奇跡を信じたくなってくるよ

「カイにチ力！久しぶり！」

「ダイチにフウちゃんか。ダイチ、おめでとう！」

「やめれえ、照れるだろ」

顔を真っ赤にしながら頭をかいてる、フウちゃんはずっとダイチと腕を組んで寄り添ってる、少しダイチも大人っぽくなってた

「いつまでいるの？」

「夏休みいっぱいはいるよ、ダイチは？」

「俺も」

久しぶりにみんな集めてみるかな、運が良ければみんな集まるだろ「そういえばカイ、聞いてよ、物凄い奴らがいたぞ」

この胸騒ぎはなんだ？違う事は分かってる、でももしかしたらありえないとも言い切れない、そこが怖い

「まずは、なんだかうるさい二人でさ、一人は関西弁でもう一人は  
ミニスカートみたいな派手な浴衣着てんだ」

うわぁ、予感的中、完璧にコテツとツバサだよ、あれは目立つよな、  
黙っててもツバサのせいで目立つよ

「もう一組はハーフっぽい不良と巨乳セクシーな女の子、不良のほ  
うは真っ赤なんだよな、不良のクセにシャイなんだぞ、笑えるよな」  
それはコガネとヒノリだ、あの二人も目立つよな、コガネが金髪な  
うえにあのピアスの量だから不良に思われてもしょうがないよな、  
実際不良っぽいけどな

「チカ、どう考えてもアイツらに行き着くんだけど」

「アタシもだよ、否定の余地がないくらい」

「何？どうしたの？」

「俺らの高校の親友」

「ええ！」

オーバーなりアクションで驚くダイチ、そりやそうだよな、あんだ  
け濃い奴らとつるんでればそりやびっくりするよ、否が応でも目立  
つもんな

「どう思う？フウちゃん？」

「私からしたら貴方達も十分厄介だったよ」

否定出来ないのが悔しい、確かにすぎ放題やってたけどフウちゃん  
も十分教師の域を脱した事をやってただろ

「じゃあ俺ら行くから」

「頑張れよ」

「な、何がだよ！？」

顔を真っ赤にして俺達とは反対の方に歩いて行った、他人から見  
たら普通の二人だけど俺らから見たらあれほど笑えるものはないんだ  
よな。

待ち合わせしてた鳥居の所に行くとコガネとヒノリがいた、ヒノリ  
はまだコガネの腕を抱いてるけどずっとあれだったのかな

「早いじゃん」

「カイとチカちゃんが遅い」

「そうかジャストだよ、しかもまだコテツとツバサが来てないし」  
あの二人が遅いのは予想通りだな、騒いでるから探すのは簡単だけ  
どあれと一緒に見られたくない、そんな事を考えてたら二人が帰っ  
てきた、これは予想外でびっくりした

「二人にしては早いじゃん」

「当たり前やないか、これから花火やる？遅れたら後が怖いで」

「いや、2分14秒の遅刻だ」

「細かつ！関西じゃ時間は目安やで」

「ココは首都東京だ」

そういえばコガネは遅刻だけはしないんだよな、時間には人一倍う  
るさいし、コガネと待ち合わせしたら五分前行動なんだよな、こん  
なに時間をつるさく言われたのは小学生以来だよ

「じゃあとっておきの場所に案内するよ」

みんなを連れてユキとマミ姉に教えてもらった場所に行った。

森の中にそこだけが開けてて波の音がどこからともなく聞こえてく  
るこの島独特の場所だ、俺はこの島のこういう自然が大好きだ、一  
人で感慨に浸つてると大きな爆音とともに夜空に大きな花が咲いた  
「始まつたで！」

「ずいぶん近いな」

「すぐその海で打ち上げてるからな」

ココから見ると空一面に花火が広がって圧倒される、花火がこんな  
に大きいなんてみんな知らないだろうな

「大きいな」

「しかも綺麗で手をのばせば掴めそう」

「掴んだら火傷するよ」

チ力のせいで地に落とされた、夢の無いことを平気で言うよな、そ  
れが天然だから可愛いんだよな、これってのろけ？

大きな花火は精一杯美しくなって、  
儚く消えた、小さい花火も大き  
い花火も思い出でしかないのか

## 白、消える

コガネ達が帰って今は俺とチ力だけだ、前に戻っただけなんだけど毎日が静かな感じがする、どこかがいつもと違うけど、どこかがいつもと同じな毎日、今日もサーフィンをするためにボードを取りに行った、風景は変わらないけど一つの変化が、ユキのボードだけ倒れてた、風が強かったりするとたまにあることだけど俺は何故か鳥肌が立った。

この事はあんまり気にもとめないで一日を過ごしてた、サーフィンも終わって夕日を見ようと思ったけど時間がかなりあった、それに今日はマミ姉とユキが帰ってくる事もあったから一旦家にボードを置きに行った。

ボードを置いて着替えようと部屋に向かう途中の居間、おとおおかあが顔色を変えてテレビを見ていた、気になったからテレビを見てみた、番組はニュースだった

“……東京湾沖25 Kmの所でフェリーと漁船が衝突し、衝撃により1名が海に投げ出され行方不明……”

俺は思考が停止した代わりに恐怖が襲って来た、テレビに写っていたフェリーはこの島に向かうものだった、しかもそれにユキとマミ姉が乗っているハズだ、本数が少ないから十中八九乗っているだろう、そして一人が行方不明、行方不明という文字が頭の中でユキとマミ姉を連れて行くとうとしてる

「おとお、おかあ、これユキとマミ姉じゃないよな？悪いけど別の人だよな？」

「分からねえ、だけど儼然に出来るのは悔しいけど祈るだけだ、海の神様が海を愛してる二人を連れて行かない、それを信じるだけだ」神様が、そんなものに頼った事は無かったけど、悔しいけど今は神様に祈るしか出来ない。

俺は部屋に入って着替えてチカと夕日を見に行く気になれなくて断ろうとした時だった、階段を走り上がる音が聞こえて俺の部屋の前で止まるとドアが勢いよく開いた、立つてたのは髪の毛を留めるのを忘れたチカだった、息があがって顔色が悪かった、俺も人の事言えないと思うけど

「カイ、ニュース聞いたか？」

「ああ」

「怪我人がいなかったらしいから別の船で帰って来るって！多分あと一時間くらいで着くんだって、行くだろ？」

「行くよ、二人とも帰って来ると思うけど」

空気で笑ってみせた、今俺がチカに出来る精一杯の慰めだ、当然二人とも帰って来るって信じてるけど怖い、吐き気がするくらいにギリギリの状態だ、チカは堪えきれなくなったのか一気に泣き出した、今まで泣いてないのが不思議なくらいだったけど、やっぱりチカもきつかったんだ

「カイ、あ、アタシ怖いよ、……だって、だって……！」

俺は気付いたらチカを抱き締めてた、いつもより強く、今の俺の弱々しい鼓動が聞こえるくらいに

「俺も怖い、でも信じるしかないだろ、絶対に二人揃って帰って来るから」

暫くの間チカは泣き続けた、俺はただそれを見てる事しかできなかった。

俺らは港にいた、周りには俺らと同じような人が大勢いた、おとおとかあとかとママ姉の両親は家で報告を待ってる、大きい船が見えてきて元気な人は甲板から手を降っている、でもユキとママ姉の姿は見えなかった。

着岸して駆け出して来る人、泣きながら出てくる人、疲れきって出てくる人、でもその中にユキとママ姉はいなかった、最後に船の人に支えられて出てきたのはママ姉だった

「マミ姉！」

「……カイ君、チカちゃん……、ゴメンね……」

そのまま黙ってしまった、マミ姉の状態、そしてこの状況を見て目頭が熱くなってきた、目の前が歪んで見えづらい

「マミ姉、ユキは？」

マミ姉は自分でやつと立っている状態だったけどその場に崩れた、俺はその時始めてマミ姉が泣いてるのを見た、そして俺の肩で声を上げて泣き出した、見かねてマミ姉を支えてた人が話かけてきた  
「樹々下さんの知り合いですか？」

「家族です、ユキは何処にいますか？怪我でもして病院行っただけですか？」

「残念ながら海にいます、行方不明の状況です、海上保安庁が全力をあげて捜していますが……」

「おい、俺らに気を使わずに言えよ、ユキが生きて帰ってくる確率はいくつだ？ハッキリと明確にな」

「限りなくゼロに近いです」

自分で聞いておきながら後悔してる、マミ姉だけが降りて来た時に薄々気が付いていたけど、実際に聞くと絶望感に押し潰されそうだし、チカは俺の背中に顔を押しあてて泣いていた。

ユキが行方不明になって一日が経った、ほとんど寝れなかった、お前は一晩中泣き続けてた、お前はユキのボードを手入れしてた、二人とも生気が無かったのは確かだ。

俺もきつかったけど涙も出なかった、慰めにはならなかったけどマミ姉の家に行った、一番ユキに依存してたのはマミ姉だったし目の前でユキが落ちたのだから、聞いた話だとマミ姉が落ちそうになったのをかばってユキが落ちたらしい、だからマミ姉のショックは俺が感じてるものとは比にならないだろう

「マミ姉はいますか？」



「マミコは海に行ってるわよ」

マミ姉のお母さんは疲れきっていた、多分マミ姉の事でだろう。

俺は考えられる海に行った、いつもサーフィンをしてる海だ、真っ白な砂浜にマミ姉が膝を抱いて座っていた、そしておもむろに立ち上がって海に向かって歩き出した、俺は走って追ったけど砂浜のせいで走りにくい、マミ姉を捕まえたのは深くなる一歩手前だった、ジタバタするマミ姉を抱き抱えて浜に戻した、その時に違和感を感じた、その違和感是最悪のものだった

「マミ姉！ユキは帰ってくる、その時にマミ姉がいなかったらユキは悲しむだろ、マミ姉が信じなくて誰が信じるんだよ」

「……………」

「おい、マミ姉……？」

「……………」

マミ姉が失ったのはユキだけじゃなかった、言葉も失っていた、口を動かすだけで声は出ない、マミ姉は喉を押さえて悲しい顔をした、いくら声を出そうと頑張っても出てくるのは空気だけだった

「マジかよ、ありえねえ」

「……………」

マミ姉は泣く気力すら無いらしい、儚く笑って切なく虚ろな目をした、神様ってのはどれだけ最低な存在なんだよ、ユキだけじゃなくてマミ姉の声まで奪っていくなんて。

一週間後、ユキの搜索は打ち切られた、事実上ユキは死んだ事になった、この世から‘ユキ’という存在は消えた、悲しいって感情はとつくに無くなった、今は苦しい、義理の弟とい事で慰めを受けるけど、どれもがトゲとなって突き刺さる、この島に来る前よりも親に捨てられた時よりも生きる価値観を失ってた、今俺がココにいるのはチカがいるからだ、チカがいなかったらマミ姉と同じ行動をと

ってただろう、マミ姉はあれから海には行くけど黙って沖を見つめるだけ。

人一人死んでも世界は変わらないと人は言うけど、みんながみんな世界を持つてる、だから俺の周りには世界が音をたてて崩れていった人達で溢れてる、俺もその内の一人だ。

ユキ、戻って来てくれよ、もう一回俺達の前で笑ってくれよ、もう一回マミ姉の心からの笑顔を見せてくれよ、もう一回一緒にサーフィンやろつよ、頼むよユキ。

樹々下雪、享年16歳、若き天才サーファーは愛した海に殺された

## 白の弔い

ユキが消えてからかなりの時間が過ぎていった、おとおは抜け殻状態で毎日を虚ろに過してる、おかあは満面の笑を浮かべた遺影に話しかけてる、俺とチ力は海にいるマミ姉の側で海を見てる、マミ姉はあれ以来海をずっと無表情で見てる、何も喋れないから波の音だけを一日中聞いて終わる事もある、最初の頃は話すと一応笑ったけど今は無表情のままだ。

今日はこの島にいる最後の日ということでサーフィンをすることにした、楽しむためじゃなくてユキの弔いだ、ユキがサーフィンする時に使ってたものを俺が使ってサーフィンをする、この道具達もご主人様を無くして存在価値を無くしたからな、俺が離れる前に使ってたやらないと、それに四十九日の前にユキとサーフィンがしたかった。

「マミ姉、最高のサーフィンしてくるからちゃんと見ててよ」

俺はチ力とマミ姉を置いてユキとサーフィンに出た、海は多少荒れてるけどこれくらいなら大した事はない、むしろ波が力を持つてるから乗りやすい場合もある、暫く波待ちをしてると良さそうな波が来た

「ユキ、行くよ」

俺はパドルングで波を捉えると同時に立ち上がった、その瞬間波じやない何かに押された、多分ユキだったんだよな、俺はそう信じたかった、しかもいつもよりサーフィンが出来たし、ユキは海で生きてるよな。

浜に戻るとマミ姉が微笑んでた、その笑顔はユキが死んでからの表面の笑顔じゃなくて心の笑顔だと思う、そして何故か啞然としたチ力がいた

「どうした？」

「今のサーフィン、ユキの癖とか、ユキ特有の上半身の使い方がそ

つくりつていうかユキそのものだった、ユキのサーフィン見てるみたいだった」

あの時の不思議な感じはそれだったのか、サーフィンやってる時、いつもとは違う感じがした、非科学的だけど俺は何だか気持ち良かった。

その日の日暮れ時、俺とチ力は入り江にいた、この島に来ていろいろありすぎてこれなかったけど、最後まで見ないとな、ちょうど道が出来てきて入り江が朱に染まる

「ユキはこの海で死んじゃったんだよね？」

「ああ」

「綺麗なのに……」

チ力は悲しい顔をしながら笑った、綺麗な海なんだけど今は悲しくなる、大好きな海なんだけど今は恨めしくなってくる、ユキが愛した海だけ何でユキを嫌った

「カイ、泣いてる？」

「ゴメン、情けねえよな、彼女の前で泣いちゃって……！」

気付くと今までに味わった事がない圧迫感が顔にあたった、それがチ力の胸に抱かれてるって気づいたのは暫くしてからだ、初めての安心感に強く泣いてた、離れてチ力を見るとチ力も涙を流してた、チ力の顔が徐々に近付いてきてチ力がキスをしてきた、そのまま次は俺が強く抱き締めた、顔を離すとチ力が思いつきり笑って涙を拭いた

「ユキに見られちゃったな！」「あつ、そういえばそうだな、まあ俺らも見ちゃったから帳消しだな」

何となくふっきれた、雪は海に還ったんだ、雪は海ユキカイの中で生き続けるんだよな、俺はそう信じる事でユキの死を乗り越えた。

今日でこの島ともお別れだ、あつという間だった気もするけど濃かった、フェリーに乗り込むと港からマミ姉が手を振ってた、マミ姉は学校を辞めてこの島で過ごすらしい、東京暮らしも寂しくなるな  
「今度は俺らが戻ってくるから！待っててよ、ユキとマミ姉の分まで歐歌してくるから！」

船が出て甲板で潮風を感じながらチカと話した、人がそんなにいないから周りを気にする必要がない

「やっぱり外はきもちいい！」

「夏の暑い日でも潮風だけは涼しさを運んでくれるからな」

今日はいつもより暑いのに甲板は最高に気持ち良かった、冷房なんか比べ物にならないくらいに涼しい、でも俺らが通ってるこの海にユキが眠ってるんだよな、まあいつまでもグダグダ引きずっててもユキが帰って来る訳じゃないし、ユキのタメに前に進まないとな

「何ニタニタしてんだよ？」

「別に普通だよ」

「そつは見えないけどな」

俺は空を眺めてたらいつの間にか瞼が重くなってきた、そして意識が飛んだ。

“ドスン！”

「~~~~~！」

頭の上に何か重い物が落ちた、ってか首の骨が折れると思った、目を開けて見てみると俺のカバンだ、そんで目の前で笑ってるのはチカ、新手の目覚ましか

「おはよ！」

「……おはよう」

「ほら早く降りるぞ、もうアタシ達だけだよ」

「嘘！？マジで！」

俺は荷物を持って走った、そして船の端の方に行って気づいた、まだ海の上だ、港は見えるけど停まってない、完璧チカに騙された

「チカ、降りたらシャレになんないんだけど」

「へへへ、アタシの経験上カイを着いてから起こしたら遅いって事が分かってね、先手を打った訳ですよ」

右手の人差し指を立てて自慢気に解説してるチカにデコピンをしてその場に座った、なんだか必要以上にエネルギーを使った気分だよ  
「イッタク！何するんだよ！？」

「お返し、人間焦ると必要以上にエネルギーを使うんだよ、そのエネルギー消費量を痛みに加算するとそうなる訳だ」

ムスツとしたチカをいじっていると今度は本当に港に着いた、港にはコガネ達がいた、俺とチカは人がある程度降りてから降りた

「お出迎えありがとう」

「カイ、何だ、その、ご愁傷様」

俺とチカは顔を向き合って無言で審議会をひらいた、そして出た答えはユキの事だ、やっぱりみんな知ってるんだ、でも俺も多分チカも大丈夫だな

「もう大丈夫だよ」

「ホンマかいな？家族やる？」

「ユキはシンミリしたの嫌いだから、島の人とかみんなブルーだから俺らだけでも明るくしてないとユキが可哀想だろ」

「なら良いけど。ミスは？」

コガネのミスっていうのはマミ姉の事だ、コガネは本人の前でもミスって読んで、マミ姉は嫌がってないから良いんだと思うけど

「マミ姉は学校辞めたよ」

みんな驚いてた、俺はマミ姉の事を全部話した、どうせツバサがいれば遅かれ早かれバレると思うし、流石のコテツとツバサでも黙りこんじゃった

「別に気にしなくても良いよ、ショックによるものだからいつかは喋れるようになるらしいから」

「カイはなんでそんなに平気でいられるんだ？」

「チカのお陰かな？」

チカの頭に手を置いて笑った、あの時チカの前で泣いてなかったら正直きつかったかな、それに周りがあれば落ち込んでたら俺の落ち込む分まで取られたような気がしたし

「こんな所で話してたら邪魔だろ、うちに行って昼飯食べよ、荷物も置きたいし」

「そやな、行きましょか！」

コテツありがとう、みんなに同情されるのは嫌じゃないけど重い空気が嫌いなんだよな、コテツが明るくしてくれれば少しは変わるだろ。

家に着くとポストにはいろいろな郵便物がはいつてた、ユキへの手紙が多い

「カイはん、まだココに住むん？」

「そうだけど、なんで？」

「いやあ、樹々下はんも蘭はんもおらんやろ、ちゅう事はチカはんと二人だけやで」

「ああ！！」

俺とチカはフリーズした、ユキの事でいっぱいいっぱいで親達すら気づいてなかった、今まではユキとマミ姉がいたからどうにかなかったけど、流石に二人だけはヤバすぎる

「……ヤバいな」

「チカチカ大丈夫？男は野獣だよ！危ないよ、なんなら僕の家で……」

ツバサ、ヨダレを垂らしながら言われたらツバサの方が危ない人に見えるよ、でも確かにヤバイ、いくら彼女と言えども高校生にして既に同棲とは

「カイは俺んとこ来いよ、一人暮らしだからどうにかなるだろ」

「じゃあチカチカは僕の家に決定！」

「大丈夫なの？コガネは一人暮らしだからカイがいても邪魔じゃない

いけど、ツバサのところにアタシがいたら家族に迷惑だろ？」

「大丈夫だよ、僕ん家は母子家庭だしお母ちゃんも男の家を転々としてるからほとんどいないもん」

サラッと重い家庭内事情を言うツバサが凄すぎる、普通他人に遠慮して言わないものだろ、それをあんなに笑いながら

「とりあえず今日はこの家で過ごすよ、明日引越しね」

「ならチカちゃんも危ないから俺泊まるよ」

「チカチカ、野獣が二人もいたら危ないから僕がついてるよ！」

「ツバサがおるんならわいも泊まるで」

そして一同ヒノリを見る、ヒノリは呆れた感じでため息をついた

「しょうがない、私も泊まる」

結局全員泊まる事になった、全員でのお泊まり会って始めてだな、なんだか怖い、無事に終わるハズがないよこのメンツで、もしかしたら流血とか……、そんな事は無いと思うけど、この家で過ごす最期の一夜か。

ユキ、バイバイ



## 銀の大きさ

男子と女子が一つ屋根の下にて一泊、これで何も起こらないのが俺らの凄いところ、みんな相手がいるし飢えてないから必然と言っちゃ必然だな、寝る時は流石に別々だけだね、俺とコガネとコテツは俺の部屋でお話、チカとツバサとヒノリはチカの部屋にて、チカと俺の部屋は隣同士だけど壁が無いと錯覚するくらいうるさい、女子特有の噂の会で盛り上がってる、情報源は当然ツバサだ

「隣は元気でんなあ」

「女の子が三人集まればそうなるだろ」

“飯田君ってヒノノの事好きらしいよ”

飯田とは俺が言うのもなんだけど、俺らの陰に埋もれたイケメンだ、多分他の高校に行つてればハーレムだっただろうに、そしてそれを聞いたコガネの顔色が変わった

「あのクソナルシストが……」

「落ち着け、別にヒノリは逃げないから大丈夫だよ。不安ならユキの部屋貸すからこれから大人のエスカレーターを駆け上がる？」

「それは名案やな！ ええんとちゃう？」

「………… いやそれは良くない」

顔が熱湯に突っ込んだ温度計の如く真っ赤になった、俺とコテツは大爆笑だけどコガネは想像が先走り過ぎて失神寸前

「そういえば、ヒノリはんのパジャマ見た？」

「あれは犯罪だな、イ リンも裸足で逃げ出す色気だった」

「あんなデカイもんほつといたら持ってかれるで、高校生にしちゃ発育良すぎやからな」

コガネは妄想の世界に行つたまま帰つて来ない、でも隣の部屋の会話で現実に戻された

“ヒノノって胸大きいよね”

“男の視線がを集めてるからな”

“わーい！揉んじゃえ！”

“あつ、ちよつと、やあ！”

コガネが死線をさまよってる、ってか向こうに行きたいな、少なくとも俺も雄だし、コテツは雄を通り越して狼と化した

“ツバサだけずるゝい！アタシも、アタシも！”

“や、やめて、おお、大きくなっちゃう……”

「あ、ヤベエ……」

「コガネはん？」

「倒れたな」

あまりの刺激の強さでコガネが鼻血を出して気を失った、俺らはコガネの血を拭いて鼻にティッシュを詰めて下にコガネを運ぼうとした時だった

“ねえ、ヒノノって何カッブ？”

“ああ、それアタシも知りたい”

『隣に同じく』

聞こえないだろうけどコテツと意思疎通出来た、コガネにもこの会話を聞かしてやりたいって……、起きた

「丁度いいや、黙って耳済ませ」

「はっ？」

意識が曖昧なコガネの口を押さえて聞耳を立てた、悪い事してるのは分かってる、でも男子高生だもん、なんの言い訳にもなっていないけど

“……え、F”

“F！？スゴイ！んゝ、顔を埋めると最高に気持ちいい”

“辞めてツバサ！それにチカとツバサはいくつなの？”

“アタシはCだよ、カイは小さいのは嫌いかな？”

“いや、全然十分です……、んな事はどうでもいいよ”

“良いな二人とも、僕なんてAだよ。ねえヒノノ、どうすれば大きくなる”

“揉む。チカ、ツバサが大きくなりたいって”

“じゃあ揉んじゃえ！”

“きゃっ、やめ、辞めて、あ、ダメダメ！”

『あっ』

再びコガネ失神、俺達は男の性を抑えられなくなるまえにリビングに行くことにした、ココにいたらコガネが出血多量で病院送りになりそうだし。

コガネをソファーに寝かして俺とコテツはさっきの事で会話に花を咲かした、今回のお泊まり会は大きな収穫があったな、ってかコガネの免疫の無さにもビックリだし、コガネのファーストキスはいつになる事が

「ツバサは小さいな、子供サイズってか？」

「マニアには大ウケやで」

今かなり墓穴を掘ったよな、ってか普通女の子同士でもあんな話しないよな、今はキヤイキヤイ騒ぐ声だけしか聞こえないけど、かなりドタバタしてる

「ヒノリはんFやって」

「イエロ キャブ並だな、うちの高校に水泳の授業が無くて良かったな」「そやな、コガネはんが救急車で運ばれるか、コガネはん以外の血がプールになるかのどっちかやな」

「誰が救急車で運ばれるって？」

ノソノソと起き上がって来たコガネが只でさえ白い顔を青くしてる、血足りてんのかな？

「いやあ、今から向こうに参戦しようと思っとなとこなんや」

「ふざけ……、って血が足りねえ」

「大人しくしてろ、かなり鼻血出してたからな、ってかコガネならヒノリの胸くらいなら揉めるだろ」

キレそうになっただけど頭に昇る血が足りなくてフラフラしながら椅子に座った、コガネは頭を押さえながら睨んでる

「そうカッパするな、体に良くないぞ。それよりさあ、ヒノリはい

「つから人より發育良くなつたの？」

「……中一」

「なんやちゃんとチェック済みやないか」

「しょうがねえだろ、毎日一緒にいたんだから、嫌でも目にはいる」  
チカとツバサとはモテるジャンルが違ふよな、確実に胸で選んでる奴もいるよな、ってか大半がそうだったりして、でもコガネの事だからヒノリが目立つのは嫌だったろうな、半殺しになった奴もいたりして

「あれは‘バレー部’やのうて、‘バレーボール’やで、運動してる時は邪魔やろうな」

「肩こるって」

「なんだよちゃんと聞いてるじゃん、自分だけ気にならないようなそぶり見せやがって」

「俺も男だ」

「ってかこんなトークばかりで悲しくなってきた、もっと爽やかトークがしたい、でも気になる、俺の中の男が邪魔をする」

「ツバサ君はマニア向けだろ？」

「あれはあれで良いんや、ムードメイカーっちゅうやつや」

「コテツはもうツバサとキスはしたの」

「してへんで」

笑いながら答える、コテツにしちゃ意外だった、コガネとは正反対で自分の気持に素直すぎるからな、悪く言つと自己チュー

「カイはんとチカはんのキスはいつ？」

「去年の8月の中盤くらいかな」

「付き合つたのもそんなくらいだよな？」

「付き合つ前だからね」

「ハア〜！？」

大声で叫んで口を大きく開く二人、そんなに驚く……事だな、今考えると俺って大胆だな、改めて自分にビックリしてる  
「それは流石に早すぎやろ」

「いやあ、なんていうか、馬鹿だった？」

コガネは信じられないといった表情だ、今もだけどあんどきはマセてたんだよ、きっと

「どうやれば出来るの？」

「ノリと空気、かな？」

「俺にもその勇気と積極性を分けてくれよ」

「とりあえずコガネは自分のキモチに素直になれよ、怖くても一歩踏み出す勇気が必要だね、後はその場の空気を追い風に……、押し倒せ！！」

「あつゴメン、途中から聞いて無かった」

「あつそ」

せつかくの俺の熱弁を難なくスルーするとは、コガネには負けたよ、問題は誰もが予想してなかったシャイっぷりだな、コガネの事だから俺が気にしても何も前に進まないんだよな

「じゃあコガネはん、今から突入しますか」

「コテツが樹々下さんの部屋使ってこい」

「激しく同意」

「あかんでえ、そんな事したら大人になってまうわ」

『別に良いだろ』

コテツは何を気にしてるんだよ、俺らには到底理解できない、ってかコテツは大人にならないつもり？

「わいは大人にはならへん」

「意味が分からねえ、ピーターパンかよ？」

「大人になつてもうたらこうやって騒いどるのが煩わしくなるやろ、そんならわいは大人になりとうない」

「別にヤツ………！！」

「みなまで言わなくてええで」

コテツが口を押さえてきた、まあコテツが言うのも分からなくないけど、それにそれとは別物だろ

「大丈夫、ツバサ君と一緒にいれば半永久的に大人にはなれない、

むしろ日々退化？」

「退化はしてへん！」

これは確実に退化してるな、三人で大騒ぎしてると物凄い勢いでツバサが入って来た、その次に笑顔のチカと呆れたヒノリが入って来た、コテツとツバサは抱き合ってる、頼むからプチ感動の再開をしないでくれ、コガネはアタフタして明らかに怪しい、チカはいつの間にか俺の隣に座ってた

「みんなどうしたの？」

「カイっちとかがエツチな話をしてると思ってる」

「男三人集まれば少なからずそんな話が出るだろ、別に常にしてる訳じゃないから」

「ホントかカイ？」

「ホントだよ、なあコガネ？」

「お、おう」

コガネのせいで台無しだ、ふった俺もミスだけどコガネのそれは無しだろ、まあ聞いてたような口ぶりじゃなかったから大丈夫だろ

「ってかもう遅いから寝るぞ、みんなには明日の引越し手伝って貰うんだし」

「じゃあカイ、一緒に寝よ」

「みんながいなかったらな」

サラッと流したけど、実際かなり焦ってた、最近そういうことをよく言うしマジっぽいのが更に焦る

「しょうがない、チカチカ！僕と寝よう」

「ツバサと寝たらなにされるか分からないんだけど」

「大丈夫、ヒノノの枕付きだから」

「人の胸を何だと思ってるの？」

ああ、またコガネが失神しそうだよ、コテツも感じとったらしく、アイコンタクトによる座談会の結果

「悪い、コガネが気分悪いらしいから先に寝るから」

「ホンマにすみまへんな」

ヒノリが本気でしんぱいしてる、失血だから顔色が悪いからなんとか……、ならなかった、今回ばかりは最高の誤算だった、嬉しい誤算だな

「じゃあ私が看病するよ、大丈夫コガネ？」

「いや、大丈夫」

「でも顔色悪いよ、ほらソファで横になろう」

「分かったよ、大人しくしてるから………！？」

コガネが寝たところでヒノリが膝枕をした、コガネが脱出しようとしてるけどヒノリが無理矢理その場に押し付ける、ヒノリが俺らの方を向いて笑ったから俺ら親指を立てて合図を送った

「じゃあコガネ、お大事に」

「あ、おい！ちよつと待て………！」

“ボタン！”

無理矢理その場にヒノリとコガネを残して部屋を出た、俺らは別々に寝るのは言うまでもない、コガネとヒノリはほつといても何も無いから安心だけど、俺らは無理です

## 青とお好み焼き

俺とコガネで俺の引越し、後はチカの引越しを手伝わせた、女の子だけで引越しは出来ないからコテツを付けた、俺のは二人で足りるしそんなに荷物が無いから多いと逆に邪魔だ、引越しは3時くらいに終わって遅い昼飯を食べるためにとりあえずツバサ宅に向かった。

マンションの10階、ファミリー向けの比較的古いマンションだ、その角部屋がツバサの家だ、チャイムを鳴らすと物凄い勢いでコテツが出てきた、俺とコガネに抱きつかうとしてきたけど避けた、勢い余って柵に顔からダイブしたけど無視して家に入った、まだ荷物はごちゃごちゃしてるけどある程度は片付いてる

「昼どうするの？」

入ってそのまま居間にいるチ力達に話しかけた、後ろからのそのそと歩いてきたコテツが俺とコガネの肩に腕をまわしてきた

「わいが作るで」

『コテツが？』

「なんやお二人はん、わいじゃ不安でつか？」

俺とコガネは向き合って暫く沈黙が続いた、そしてコテツの方を向いて頷いた

「酷いなあ、わいの家は道場だけやないで、お好み焼きが本業や、そやさかいわいが作るお好み焼きは絶品やで。どや？食いたくなつたやろ？」

「しょうがない、俺は行くけどみんなはどうする？」

「俺も」

「食べる物無いからアタシも」

「コテツが作るお好み焼きなら僕いくらでも食べれるよ！」

そこでヒノリが無言で頷く、満場一致でコテツのお好み焼きに決まった。



コテツめ、俺に料理自慢をするとは、曙のK 1 参戦ばりに無謀だな、思いっきり後悔しとけてな。

### 《お好み焼き・烏丸》

お店の雰囲気は若干レトロな感じで懐かしさがある、店内は少しソースの匂いが漂ってきて空腹を後押しする、カウンターに座ると厨房にコテツが立つ、大きな業務用の冷蔵庫から食材を取り出して混ぜていく

「わいが作るのは当然大阪風やで、シンプルで美味しい、やっぱりお好み焼きは大阪やる」

話ながらも手際が良い、慣れた手付きで人数分を仕込んだ、今気づいたけど店には俺らしいくない、外に準備中とか書いてあったような無かったような、俺がボクッと考えてるとすでに焼かれていた、コテツはツバサと話しててお好み焼きには目も触れてない

「コテツ、大丈夫か？」

「大丈夫やで、鉄板の細かい温度も焼け時間も全部把握済みや」

多分毎日親の手伝いをしてたんだろ、確実にお駄賃付きで、金目当てで手伝ってたらいつの間にか焼けるようになってたんだろうな、ああ、でもホントにヤベエ、こんなもんを目の前で見せられたら腹減りで死にそう

「カイ、少し我慢しろよ、後少しだよ」

「あら、バレちゃった？朝飯から何も食って無いからヤバいんだよね、チ力は大丈夫なの？」

「アタシは大丈……」

“グウ”

チ力の腹が鳴った、お腹を押さえて顔を真っ赤にしながらうつ向いてる、俺はそつと頭に手を置いて顔を覗きこんだ

「大丈夫じゃないな、隠さなくてもいいのに」

「……………はい」

周りの奴らは自分達の事で夢中らしく俺らの会話には全く見向きもしなかった、まあ俺らも同じだけだね。

コテツはお好み焼きを次々にひっくり返していく、かなりのスピードだし正確、焼けた面は良い焦げ色がついていた、そこからすぐに出来てコテツがソース・鰹節・青のり・マヨネーズをこれも慣れた手付きで付ける

「出来たで、みんな食うてや」

『いただきます』

割箸を割ってお好み焼きを一口サイズでとって食う

「うま、コテツめちやめちや美味いよこれ！」

「そやる、わいの唯一の得意料理やからな、まだまだ作ってるから食うてや！」

俺は一枚は軽々完食した、すぐに二枚目にも手をつけた、他人の飯でこれだけ感動したのは久々だな、チカも腹が減ってたらしく二枚目に取り掛かってた

「美味いな」

「カイの料理の方が美味しいよ」

「やめれ、照れるだろ」

「いくら美味しくても流石に物には限度ってものがあるな、そろそろお腹いっぱいになってきた」

チカの箸が止まった、三分の一くらい残してる、まあ女の子にしたらくよく食べただろ、残すのはコテツに悪いから食べるか

「貰うよ？」

「悪い、ありがとう」

二口くらいで食べる、俺のも同じくらい残ってるけど、割とギリギリなんだよな、でもここで残しちや料理人として許せないな、同じく二口で完食する

「スゴイ！全部食べちゃった、頑張った頑張った」

チカが俺の頭を撫でながら笑った、なんだか怒るに怒れないな、しかもチカのこの笑顔を見たらどれくらいでもお好み焼き食べれそう

だな、実際は無理だけど。

みんなで話していると奥からガタイの良いおじさんが出てきた、恐らくコテツのお父さんだろう、俺らを見てそのまま視線をコテツに移した、そのままコテツに跳び蹴りをした、だけどコテツは軽々と防いだ、流石空手部の若きエースといったところだ

「何やねん！？人がせつかく楽しく話してたのに！」

「貴様また稽古サボってこない所で遊んで、真面目に稽古しろや！」

恐らく今日、コテツは稽古をサボって俺らの手伝いをしてたのだろう、でもいきなり跳び蹴りなんてやることが違うな、それを止めるコテツも恐ろしい、この家にいたら命がいくつあっても足りないな「しょうがないやろ、友達の引越し手伝わなあかんかったんや！それに稽古いうても只のリンチやないか、あれのどこが稽古や！？」

「うつるさーい！」

今度は回し蹴りだ、コテツはしゃがんで避けた後に腹を殴った、でも腹筋に力をいれて防がれた、うわあ、かなり血生臭い家族だな、コテツも強くなるよ

「スゲエ家族だな」

「……………」

チ力は口を開けて啞然とした表情で二人を見てた、ってか俺もみんなも同じような状態だ

「まあ今回は友達のタメならしゃあない、でも次逃げたら百人抜きするまで稽古やからな！」

「分かった、次やからな、次だけやからな」

コテツのお父さんは腕を組んで奥に入っていた、その後静寂が訪れた、目の前でジャツキー エンも裸足で逃げ出すような親子喧嘩を繰り広げた後だ、無理も無いだろ

「悪いな、うちの馬鹿親父が乱入してもうて」

“誰が馬鹿親父や！？”

「うるさいねん！少し黙れ！」

最高に仲が悪いな、しかも関西弁で喧嘩されると迫力がありすぎて怖い

「コテツの親父さん怖いな」

「ただうるさいだけやで、いつも頭に響くような声で叫ばれたらたまらんわ」

殴られるのに抵抗は感じてないんだ、確かに声はデカイけど殴られる方が問題有りだろ、あえてそこはつつこまないけど。

その日はそれで解散だ、俺とコガネは夕食の買い出しでスーパーにいた、ってか俺とコガネが街を歩いてても目立つのにスーパーにいると目立つなんてものじゃない、おばさんのヒソヒソ話がム力つく、まあこんな所でババア相手に喧嘩しても待つてるの警察と退学だけだ  
「カイ、早く帰ろうぜ、居心地が悪い」

「分かってる、でもコガネんちって何も無いから量が多くなるんだよ」

その後、調味料やら野菜やらを大量に買いこむことにした、コガネの家は生活観の欠片も無いからな。

会計の時だった、俺の携帯が電子音を大きな音で鳴らし始めた、メロディからチカからのメールだな

《かいたすけて、つばさにおそわれる》

スゲーリアル、平仮名だし短いから否定しきれない、コガネはメールを覗いて吹き出した、俺は一応チカに電話した

「プルル……………、もしもし！？」

「大丈夫か？」

「助け……………！カイっち、なんでも無いから、バイバイ！……………プツ」  
確実に犯罪の匂いがする、まあツバサの事だから少しいじるだけだろ、気になるけど押し掛けるほどではないな、俺は気にせずに携帯をしまった

## 青と金の過去

夏休み明けの学校はみんなの変化に驚かされる時でもある、真っ黒に焼けてる奴、髪の毛を染めてる奴、急に付き合い始めてる奴、そして一番驚いたのは下駄箱でだ、手紙がはいってるのは慣れたけど何故か量が多い、コガネも微妙に量が増えてるし、最初の方は一定じゃなかったけど6月を過ぎたあたりから多少の大小はあるけど固定されてきた、それがココに来ていきなり増えた、考えた結果ユキの影響が一番適当だ、ユキがいなくなつてユキのが俺やコガネになびいたんだろう、最初はム力ついたけど段々馬鹿らしくなつてきた  
「ユキの遺産か」

「かなり迷惑なんだけど」

「俺に言うな、俺だつて迷惑してるんだよ、にしてもこれだけの量つてことはユキの人氣はスゲーな」

手紙の量が倍近くになつて、ユキを本気で好きな奴もいるだろうからかなりの量のファンがいたつて事だよな、ユキも辛かつたんだな。

下駄箱で手紙の処理をしてるとコテツとチ力とツバサが来た、チ力とツバサの下駄箱も大変な事になつた、これはマミ姉の置き土産か、二人の影響力は多大だな、今後が辛い

「おはよう、チ力」

「なあ、これなんだよ？アタシこんなに多く無かつたよな？」

「俺らもだよ。多分ユキとマミ姉の影響だろ」

チ力にバッグの中の手紙を見せる、呆れた感じで見て、ツバサはその場で読んでは捨て読んでは捨てる繰り返し、他人がせっかく書いた手紙を平気でその場に捨てる根性、流石ツバサって感じだな。

教室には既にヒノリがいた、いつものように本を読んで、俺はそのまま席に座つた、夏休み前に席替えして一番廊下側後ろから二番

目、コガネの前でヒノリの隣だ、コガネを一番後ろの端にすると常に爆睡してる

「おやすみ」

「まだ朝のホームルームすら始まってないぞ、たまには授業受けるよ」

「グウ~~~~」

既に寝てた、コイツは学校に何しに来てるんだよ、ヒノリは寝てるコガネを子供を見るような目で見ていた

「……可愛い」

「どこが？こんな不良被れの歩いてたら関わりたくないタイプトッブ3に入りそうな奴、そのどこが可愛いのか？」

「寝顔？子供っぽさ？」

分からなくもない、いつも無愛想な顔とは違って力の抜けた顔だからな、女の子が見たら大騒ぎしそうだよ、みんな恐くて近寄ろうともしないけどね。

今日は始業式のみで帰宅、部活も無いから6人で遊ぶ事にした、とりあえず腹が減ったからファミレスで早めの昼を食べる事にした。

中には俺ら見たいな学生が大勢いた、沢山のグループの中のうるさい不良グループの一人がこっちに寄って来た、ワックスでガチガチに立たせた髪の毛に何も無い眉毛、そいつがコガネの前で止まった、コガネが何かしたのかな、コガネの事だから何しててもそんなに不思議じゃないけどな

「よお、久しぶり！」

不良Aはコガネの両肩に手を置いて笑顔で挨拶した、コガネは頭に疑問符が浮かんでる、コイツ完璧に忘れてるな

「あれ？忘れちゃった？俺だよ俺、伸也」

「……ああ、ぶん殴って鼻の骨を折った奴か」

話ながら座ってコガネの頭の中からやっとな伸也が出てきたらしい、

伸也つて奴も可哀想だな、コガネの記憶だと鼻の骨を折ったことしか無いんだから

「で、何？」

興味が無いらしくいつもより無愛想に話す、しかも顔すら見てない、よそ見をしながら

「何だよ冷たいな、一緒に喧嘩した戦友に向かってそれは無いだろ、話がしたかっただけだよ」

「それだけ？」

「それだけじゃないよ……………」

そういつて俺を見てくる、何だか分からないけどかなり険しい顔だ、初対面でそこまで変な顔しなくてもいいのに

「何でお前とこの青髪が一緒にいるんだよ？もしかしてこれから喧嘩とか？」

「は？」

「え！？もしかしてコガネ忘れたの？この青髪お前と喧嘩しただろ」

『ええええええ！？』

俺やコガネだけじゃなくてチ力達も驚いてた、伸也がコガネに嘘をつくとは思えないし青髪なんて俺くらいしかないだろうし

「忘れたの？渋谷の裏路地で俺らが貯まってる時にこの青髪が来たじゃん」

「……………カイ、覚えてる？」

「ちよっと待って、……………あ、思い出した」

あれは俺が中学二年の頃だった、友達に無理矢理連れて来られて渋谷にいた、でもその時の俺にとって渋谷は最高に居場所の悪い所だった、だから来て一時間ほどでイライラして一人で帰った、人が見たく無かったから人がいない路地を選んで歩いてた、細くて街灯が一つしかない裏路地に入った時だった、灯の下に不良がたまっていた、俺は何も気にしないで真ん中を突っ切って行った、狭かったからか誰かに当たったけど気にせずに進んだ、でもそれでスルーしないのが不良という生き物

「テメエ人の事蹴っついて何も無しかよ!？」

「……………」

「何か言えよ!!」

「……………何か」

青筋をたてて俺の胸ぐらを掴んできた、ホントに馬鹿な奴ら、俺は思わず吹き出した

「テンメエ!!」

顔を真っ赤にして俺を突き飛ばして殴ろうとした、大振りだったから軽く体を屈めて腹を殴る、体を埋めてその場に倒れた、座ってた奴らが立ち上がり走って来た、一人目は顔面に蹴りをいれたら吹っ飛ぶ、二人目は顔を思いつきり殴り飛ばした、三人目は俺の後ろに回って脇の下から腕を回してきて四人目が殴ろうとする、俺は腕を背中の方に回してそのまま三人目を投げるついでに四人目に投げた、倒れた二人の腹に蹴りを入れる、最後に一人で壁に持たれて雑誌を読んでる金髪、これがコガネだ

「終わっ……………？終わったみたいだな」

「俺帰るから」

「逃がすと思ってる?」「少しね、コイツらの事どうでも良いんだろ?仲間を大事にしてます、って感じでもないし」

コガネは鼻で笑った、その場に雑誌を投げ捨てて構えた、俺は嫌々に構えるとコガネにいつの間にか殴られてた



「本気本気」

「かったる」

立ち上がって殴ろうとしたコガネの手を弾いて顔面を殴る、コガネは怯んだけど俺の脇腹に蹴る…………。

それからかなり殴りあった、俺もコガネもボロボロで立ってるのがやつの状態、俺はその場から離れてタクシーを捕まえて帰った、流石にこの顔で電車に乗る勇氣は持ちあわせて無かった、俺は始めて喧嘩に勝てなかった、自慢にはならないけど俺は喧嘩は全部勝ってた、外見で喧嘩を売られる事が多かったからいつの間にか術を身に付けてた

「ああ、そんな事もあったな、あの後一週間も学校にいけなかったんだよな」

「俺も、顔を見せたく無かった」

「あの時のコガネはボロボロなのに笑ってたよ、怪我の手当してる時も笑ってた、理由を聞いても答えてくれなかったけど」

ヒノリが呆れた顔で言った、あの頃は多分俺もコガネも喧嘩したかったんだろうな、でも喧嘩して笑ってるとか変態だよな

「コガネ、良いのかよ？コイツを放っておいて」

「放っておくもなにもカイは親友だから、それよりお前邪魔だよ、どっかいけよ」

伸也の顔がひきつった、次の瞬間伸也はコガネの胸ぐらを掴んで立ち上がった、青筋をたてて明らかにキレてる、コガネと俺とコテツはシラケた顔をしてるけど女の子三人はあたふたしてる、周りの人

も思いっきり見てるし

「デメエ！表出るよ！いつまでも偉そうにしやがって」

伸也の仲間と思われる奴らもいつの間にかたかっていた、人数は8人、流石に俺とコガネでもキツそうだな

「コテツもやるだろ？」

「なんでやねん、わいがやったら逆に相手が不利やで」

「確かに、まあ良いだろ、なあコガネ？」

「なるべく穏便すませたいからな」

そういつて俺達三人は店の隣の公園に行った、店の裏は後で店に入れてもらえなくなる可能性が高まるからだ、伸也達はいつの間にかバットやら鉄パイプやらを持ってる、コイツらドラ もんかよ

「コテツ、これでどれくらい？」

「6：4やな」

「7：3だろ」

「二人とも残念賞だな、世の中にはこういう言葉もあるんだよ、猫に小判、豚に真珠、馬の耳に念仏、のれんに腕押し、まあ言いたいのは意味が無いと」

『同感』

俺らの座談会にシビレをきらしたのか一人が走って来た、コテツが上段回し蹴りで吹っ飛ばす

「あのクソ親父に言わんといてな、ホンマに殺されてまう」

「当たり前だろ、流石にコテツを殺すことは出来ないよ」

「デメエはいつまで無視してるんだよ！？」

今度は全員で来た、コテツがいるから大した事はないけど、疲れるんだよな。

終わって店内に入ると店長らしき人が出てきて制止された、俺達三人はどうにか謝って中に入れてもらっただけで周りからの視線が刺さる、俺らは席に着くとチ力達が不安そうな顔をしてる

「ただいま」

「大丈夫か、カイ？」

「大丈夫大丈夫、話し合いで穏便に終わったよ、アイツらも馬鹿じやなかったらしいよ」

真っ赤な嘘です、白眼剥いて泡ふいてる奴もいたな、これは秘密だけどね

## 青の最悪な一日

今日は朝から不幸続きだった、携帯は見付からないしワイシャツのボタンはとれてるし財布を落とすし（財布は後ろにいた奴が拾ってくれたけど）、それらのせいで遅刻、今もそうだ、10分休みでコガネとジュースを買いに行つてるとマッチョな高校生とは思えないような男に呼び止められた、体育館裏につれてかれたから俺を気に入らない奴らの一人だと思った、コガネも着いて来てるから安心だけど

「四色か？」

「そうだけど、何？授業があるから早く帰してくれない」

「……す、好きだ！！」

太い声でそれだけ言つて走つて逃げた、コガネは後ろで大爆笑してるけど俺は吐き気がするほどだった、マッチョはあっち系の人だったらしい、呆れて動けない俺をまくしたてるようにチャイムがなるし、これでこの授業は遅刻決定だ

「ああ、もう最悪、俺サボるから」

「なら俺も寝る」

俺らは屋上でサボる事にした。

コガネは屋上について仰向けになって3秒でイビキをしながら爆睡、俺は屋上の柵を乗り越えて足を投げ出しながら下を行き交う車を見る、鬱の時つて飛び下りたくなるのかな？俺は今日に限って鬱だ、柵を背持たれにして買ってきたペットボトルの炭酸飲料を一口飲む、そして一息ついた時に扉が勢いよく開いて担任が出てくる、物凄い音が鳴ったのに起きないのがコガネの凄いところ

「四色！こっちに来い」

「やっぱり最悪だ」

俺は乗り越えて内側に降りる、何故か担任は怒ってるようには見え

ない、つてか最近怒られたためしがない

「危ないから内側にいろ」

そういうと帰ろうとする、あまりに教師らしからぬ行動に何故か俺は担任を止めてた

「それで終り？最近キレないじゃん」

「どうせお前に怒鳴ったところで簡単に言い返されて終りだ、それに問題を起こさなきゃそれで良い、二人とも飛び抜けて馬鹿って訳でも無いからな」

「ありがとう」

ビツクリして間抜けな声が出てきた、担任は扉を閉めて消えた、つてか呆れられたのか俺ら？嫌じゃないけど良くも無いな、心おきなく騒げるのは確かだけど、最近は担任もいきなり怒鳴ってくる事は無くなった、何かしでかしても理由を聞いてからキレるなりする、丸くなったのかな？

そのまま昼休みに突入して俺らは一旦教室に弁当を取りに行つてから屋上に行った、最近男三人と女三人が交互に飲み物を買に行つて、俺はこの最悪の一日を何とか乗り切るタメにゼリーを買いに行く事にした

「ゼリー買ってくる」

「電話すればいいじゃん」

「迷惑だから自分で行くよ」

「あつそ、いつてらっしやい」

俺は屋上を出てそのまま階段で一階まで降りて反対側の校舎にある購買に行った、人が退いた後だったから戦争をせずに済んだ、奇跡的に一つだけ残ってたサイダー味のゼリーを買って帰ろうとした時だった、体育館の方に不良に腕を引っ張られてるツバサを見つけた、明らかに尋常じゃない二人に俺はその場にゼリーを置いて走って行った

「辞めてよ！嫌だ！」

「ツバサ、どうした？」

「カイっち！」

「ゲッ、お前！」

不良は走って逃げようとしたけど襟元を掴んでそのまま仰向けに倒して馬乗りになった、ツバサは泣きながら乱れた服を直してる

「ツバサ、何があった？」

「チカチカとヒノノが怖い先輩に連れてかれちゃった」

俺は不良に目をやったままツバサに質問した、とことんまで今日は最悪な日らしい、これはマジでシャレにならないな

「おい、チカとヒノリは何処だ？言わなかったら殺すぞ」

「た、体育館倉庫だよ。言ったから離してくれよ、何もしないから誰が教えた放すって言った？おやすみ」

顔を殴ると後頭部が地面に当たり気絶した、白眼をむいて口から泡を吹きながら、俺は立ち上がってツバサの前まで行く

「コガネとコテツを呼んで来い、火急的速やかに、分かったか」

「でもカイっちは？」

「いいから行く！」

俺はツバサを180度回転させて背中を押した、ツバサは渋々走って屋上に行った、正直ツバサの前で怒りを抑えるのはきつかったな、体育館倉庫だっけか？かなりヤバいな。

俺は体育館倉庫まで来た、中からはチカの悲鳴が聞こえた、完全に頭に血が昇って頭が回らない、でも体が勝手に動いて扉を勢いよく開けてた、中には6人の柄の悪い不良が笑ってた、一人はチカのブラウスのボタンを外そうと手をかけてた、ヒノリは多少乱れてるけど何もされてないらしい

「こんにちは」

「カイ！」

「またデメエか、まあ良い、一人で来るとは馬鹿な奴だな」

『ハハハハ！』

チカに触れてる奴が言つと周りは大笑いしてる、コイツが頭らしい、チカと目が合つて俺は殺意が芽生えた、コイツらチカを泣かせやがった

「いやあ、コガネとかがいたらお前らが可哀想だから、病院送りで済めばラッキーかな？だから今のうちに逃げれば、これが最終勧告ね」

「お前頭おかしいだろ！？この状況を見るよ、なあ、お前ら、ブフア！」

リーダーが言い終わる前に顔面を蹴りとばす、チカから離すためだからあんまり力を入れてない、不良グループとチカとヒノリの間に俺が入る、相手を挑発する余裕はあっても二人を逃がす算段までは頭が回らない

「大丈夫か？服直せ」

「カイ、ありがとう！ダメかと思った」

「おい！お前ら、感動の再開してる場合じゃないだろ、ピンチには変わりないぞ」

確かに、これだけの相手をチカとヒノリを守りながら喧嘩するのはさすがにキツイな、コガネ達を信じるか

「うるせえなごちゃごちゃと！怖くて手も出せねえのかよチキンども！」

「調子乗りやがつて！」

一人が走って近くあつたほうきで殴ろうとしたけど顔面ストレートで殴った、鼻血だしながら倒れる、周りは完全にキレたらしく一斉に殴りかかって来た、一人目はボディーに一発いれて終りだったけど二人目に脇腹を蹴られた、でもあんまり痛くないや、そのまま肩の辺りを蹴り飛ばすと頭から床に突っ込んで気絶した、その後の隙が大きすぎで後ろから掴まれる、一人が俺の腹を殴る

「グッ！」

俺を押さえてる奴は力が強くて俺じゃ投げれない、もしかして絶体

絶命ってやつ？

「さつきはよくも蹴ってくれたな！」

鼻血を出したリーダーが俺の顔を殴る、受け身をとれないと痛いな、口の中が切れたし

「プッ！」

血の混ざった唾をリーダーの顔にかけるとリーダーは顔を赤くして後ろを向いた、何か他の奴と揉めてる

「さすがにそれはヤバいだろ、死んじまうぞ」

「うるせえ！殺すんだよ！」

物騒な会話をして振り返るとリーダーの手には金属バットが握られてた、マジかよ、後ろではチ力とヒノリが泣く声が聞こえるし、頼むから早く来てくれよ

「死ねよ！」

リーダーは俺の頭を金属バットで殴って来た、それと同時に俺は解放されたらしい、多分床に倒れたんだと思う、意識が飛びそうだが、コガネとコテツが入って来たのは理解出来た、目の前が自分の血で真っ赤になって音は何も聞こえない、今俺に残ってるのは視覚だけだ、痛みも感じない、ヤバい、意識が……………



## 赤の幸せ

今、アタシの前で大好きな人、一番大切な人がバットで頭を叩かれて呑み込まれそうな真つ青な髪の毛を真つ赤に染めてる、大好きな人は人形のように倒れた、それと同時にコテツとコガネが入って来た

「カイ？ねえ、カイ、起きてよ！」

全く動かない、アタシを襲おうとした人はバットを床に投げ捨ててカイの傍に立った、怖い、カイが動かない、アタシの声が届かない、アタシを襲おうとした人はカイを見下ろしてそのままお腹を思いつき蹴った

「カイ！」

「カイはん！」

「カイ！」

カイは人形の用に転がるだけ、アタシは気付いたらカイに覆い被さってた

「辞めて！もうカイに触らないで！」

「何だよ？お前も死にたいのか？」

この人怖い、アタシは怖いしカイの事が不安で動けなかった

「……………もう辞めろや」

「んだようるせえな！お前ら！そいつらやっちゃって良いよ」

「お前が来いや！それとも一人じゃ喧嘩の一つもできひんのか？怖いんならバットつこうてもええで」

コテツの目が開いてる、いつもは開いてるか開いてないか分からないくらい細いのに、怒りの矛先がアタシじゃないって分かってても怖い、コガネはうつ向いたまま動かない

「さんざん馬鹿にしゃがつて！ぶっ殺すぞ！」

リーダーはアタシ達から離れてバットを持ってコテツとコガネを威嚇した、でも二人共に微動だにしない

「他の奴らは逃げてもええで、今は見逃してやるさかいに」

「それはこつちのセリフだ！お前が逃げた方が良いだろ？」

「しゃあないな、……………いてこましたるか？」

コテツの低くてドスの効いた声、怖いなんてものじゃない、でもアタシはさっきからカイが気になってしょうがない、息はしてるけど弱い、アタシの制服はカイの血で真っ赤、それも気にならないくらいに不安だった

「コガネはん、コイツら死にそうになったら止めてな、わいもう理性飛んでもうたわ」

そういつて近くにいた不良の人に回し蹴りをした、バキッって鈍い音をたててそのまま飛んでっちゃった、コテツに蹴られた人は腕を押さえながらもがいてる、よく見ると肩から下が変な感じに曲がってる、折れちゃったのかな、コテツはその人に馬乗りになった

「悪いのう、まだ意識あるん？寝てれば痛く無いやろ」

コテツが殴ると泡をふいて気絶しちゃった、他の人がコテツの後ろから蹴ろうとした、でもコガネの膝が顔にめり込む、二人は周りにいた人達をボコボコにしていく、最後に残ったのはバツトを持ったリーダーだけ、リーダーはバツトを振り上げてコテツに殴りかかった、コテツは片手でバツトを止めて殴った、リーダーは頭から倒れた「まだまだ温いで、これくらいで済むと思うたら大間違いや」

「頼む、待ってくれ！もう何もしないから！」

コテツは馬乗りになつて拳の雨を降らせた、リーダーは動かなくなってるけど止まらない、見かねてコガネがコテツをリーダーから遠ざけた、コテツはやつと収まってアタシ達の方に来た

「チ力はん、大丈夫でっか？」

「アタシは大丈夫だけどカイが、血が、血が、いっぱい出てきて」「ちよつと待っててや」

そういつてコテツはカイの頭に自分のワイシャツを巻いて傷口を塞いだ、コガネは放心状態のヒノリを抱き抱えて倉庫を出た、それと同時にカイの先生が入って来た

「大丈夫かお前……………、四色！潤間、四色を救急車に運ぶ、お前

が付き添っててやれ。烏丸と五百蔵は残れよ」

「やっぱりそうなるん？　しゃあないな、チ力はん、カイはんを頼んだで」

アタシとカイは病院に向かった、その後、先輩達も搬送された。

あれから3日がたった、カイは動かない、危ない状態らしい、アタシはずっと側にいるけど不安で押し潰されそう、ジョニー達はアタシに全部任してくれた、でも今はアタシ一人だけ、カイの顔に触れても生きてる感じがしない、アタシのせいで付いた頬の傷痕が何でもないように見える頭の包帯、もう辛いよ

「カイ、起きてよ、死んじゃダメだからな」

アタシはどれくらい泣いたか覚えてない、常に泣いてたのかも、泣き疲れては寝て、起きてもカイは動かなくてまた泣いて、それを繰り返してた、いつかはカイは起きるって信じてるけど弱い心臓の音を聞くと心が折れそうになる

「こんなクシャクシャの顔じゃまた寝たくなっちゃうよな、顔あらって来るから待ってて」

そういつて立ち上がろうとした時だった、握るなんて強さじゃない、触れる程度の強さでアタシの腕をカイが掴んだ、ビククリしてカイの顔を見ると少しだけ目が開いてる

「カイ！？　分かる？　アタシだよ？」

「……ち……か………？」

アタシの心に光が差し込んだ、カイの意識が戻ったんだ、今度は不安の涙じゃなくて嬉し涙が溢れ出てきた

「カイ、お、おかえり」

「……チ力、悪いけど、痛い、どいて」

アタシはカイの胸の辺りで泣いてた、確か肋骨が折れてるんだった、でもそんなのどうでもいい、カイがアタシの前でまた喋ってくれた、それだけで満足

「ゴメンな、心配かけて」

カイの大きな手がアタシの頭を非力に撫でる、いつもみたいな力強さは無いけどそれだけでアタシは嬉しかった、待ち望んだカイの温もりがそこにあった

「あれ？みんなは？」

「ジョニー達はアタシがいるから任せてくれた、コテツとコガネは停学中、ツバサとヒノリは二人が停学明けるまで学校には行かないで一緒にいるらしいよ」

カイは僅かに笑った、まだ本調子じゃないらしくたまに苦痛に顔を歪める、アタシはその一つ一つにカイが生きてる事を実感出来て舞い上がった、ゴメンねカイ

「不良は？」

「停学のハズだったけどみんな自主退学した」

「怪我は？」

「一人は肩の骨折、三人は鼻の骨の骨折、後はただの打撲。それとリーダーが顔が少しおかしくなっちゃったらしいよ、コテツが殴り過ぎて」

「それヤバくないか？コテツ慰謝料もんだろ？」

カイが本気でコテツの事を気にしてた、みんなカイのせいで停学のよね

「川上先生のお陰でそれは免れたらしいよ」

「川上？」

「カイとコガネの担任でしょ」

初めて知ったらしい、そういえばいつも担任って言うってたから知らないんだ、今回はその先生のお陰で丸く収まったのに

「最初は不良側の親が騒ぎ出したんだけど、川上先生がカイの方が

重傷でその分の慰謝料はいらないからコテツを見逃してくれるように頼んだらしょ、全部ジョニーの了承を得てね」

「アイツが……………」

カイは窓の外を見て更けてた、アタシはカイの横顔に幸せを感じた、そしてその横顔が愛しくなってきた。気付いたら両頬に手を当ててカイにキスをした

“ガラガラ！”

「うわっ！お二人はん、ココは病室やぞ」

「キャー！チカチカ大胆、僕には冷たいのに」

「見舞いに来れば、……………もう少し寝てろ」

「……………不純」

最悪のタイミングでみんなが来ちゃった、思いっきりキスしてるところ見られちゃったし、顔が熱い、カイの顔も真っ赤だし何か頭押さえてる

「傷口が開く、最悪のタイミングだし」

「ゴメンね！カイ、大丈夫？」

「元気そうで何よりや、お見舞いに来てやったで」

コテツは大きなビニール袋を高々に上げた、ツバサとヒノリはアタシの隣に椅子置いて座った、コガネは端の方で腕を組んで寄りかかっている、コテツは勢い良くベッドに飛び乗って足元の柵に座った、当然靴は脱いでね

「コテツとかは停学中だろ？バレたらまた長引くぞ」

「それが大丈夫なんや、先生直々に外出の許可が出たんやで！」

「あの担任のお陰で停学で済んだんだしな」

コテツとコガネが笑顔でカイに言う、なんかみんな元気そうだし安心したな、ヒノリもなんとも無いし

「ホンマはわいら退学やったんやで、大半を病院送りにしてもうたからな、せやけど川上先生が頼んで停学に軽減してくれたんや」

「今回はあの担任に頭が上がらないな、カイも早く良くなれよ、チカちゃんを泣かした罰はとくと受けてもらっからな」

「みんなカイのタメにありがとう」

みんなの笑顔がアタシに元気をくれた、カイも笑ってるし、でも何かカイの顔がさつきから晴れない、何かあるのかな？

「でもゴメン、腰から先の感覚が無いんだ、さつきから動かない」

みんなの顔が曇る、アタシは泣きそうだよ、生きてるだけで満足って言っただけ、やっぱり歩けないなんて酷いよ

「なあゝんてな！手も足も全部動くよ、ほら、みんなを驚かしたかっただけだよ」

カイは手足をバタバタさせた、嬉しいけど、何かム力つく、コテツとコガネは雰囲気倉庫に入って来た時みたいになった、当たり前だよ、この状況でその冗談は良くない

「カイはん、それは頂けまへんで」

「なんならもう一本くらい骨折ってやろうか」

「いやだから冗談だつて、な？」

「……………酷いよ、カイの馬鹿」

何でだろ、何で泣いちゃうんだろ、悲しくない、嬉しいハズなのに、多分本当に信じちゃったからなのかな、一緒に遊べない事を想像しちゃったからかな

「ちよつとチ力、泣くなよ、頼むから、悪かったつて」

いつの間にかカイの胸に抱かれてた、今の心臓はさっきの弱々しいのとは違って凄く速い、アタシと同じスピードで心臓が動いてる、でもみんなの前なんだけど

「キスの次はハグかいな」

「僕のチ力チ力があ」

「ひでえな」

「……………やっぱり不純」

「うるせえな！見せ物じゃねえぞ、……………ッ！」

カイの鼓動が速まった途端に頭を抱えて横になった、興奮しすぎたんだろ、これから一人ぼっちの三日間の穴埋めしてもらわないとな、まだまだ生きてるんだからいっぱいに幸せにしてもらおう。

カイが生きてればアタシはそれだけで満足だから

## 青の退院

入院生活は面倒な事とかを気にしなくて良いと思ってた、でも最悪だ、自由は無いし飯は不味いし楽しみは誰かが来ないと無いし、後三日で退院だけどいまずぐにでも逃げたい、しかも学校の女の子が来て邪魔するだけ邪魔して帰るし、お見舞いに来てくれるのは嬉しいけど周りの患者のタメにも静かにしてほしい、頼みの看護師さん達もやっぱり女だ、高校生にまで狙いを定め始めた

「四色くん、お姉さんが色々教えてあげようか？」

「いや結構です、っていうか拒否します」

ベッドで寝てる俺の枕元に腰掛けて俺の頬に手を置いてきた、普通の高校生なら喜ぶだろうけど俺にとってはいい迷惑だし

「なんならお姉さんが大人にしてあげようか？」

「や、やめて下さい！お願いだからほつといて」

看護師さんは俺の上に乗ってきた、ってか俺は患者でこの人は看護師だよな？キレイなら何しても良いのかよ？看護師さんは段々近付いて来て俺は身動きができなくなった、その時カーテンが開いた

「チ力！良いところに来た、助けてくれよ」

「何してるの？カイ」

「あらお嬢ちゃん、何って、ナニよ」

この看護師さんは本当に雇われてるのか？自称看護師と疑うくらいだぞ、看護師さんが俺の上から降りる時にあえて大胆に降りた、因みに黒でした

「お嬢ちゃん、早くしないと私みたいなのを持ってかれちゃうわよ、こんなに可愛いんだから」

「へ、変な事言わないで下さい」

看護師さんは色気を振り撒いて出ていった、その場に重い空気を残すだけ残して、若干頭が痛むし、興奮した自分に凹む、チ力はなんか怒ってるってか怒るよなそれは



「これで何回目？」

「看護師には3回、一般の人とか患者には2回かな」

「残念、看護師はもう一回あるよ、カイが寝てる時に襲われそうになつてた」

早く学校に逃げたい、チカにも申し訳無いしキズが治らないだろこれじゃ

「カッコイイ旦那を持つと大変ですね」

「自分で言うことか？それにさっきも看護師さんのパンツ見てたでしょ？」

「いや、あれは男の性っていうか、避けては通れないってか」

チカが怒ってるよ、当たり前だよな、いくら怪我人と言えども無防備にも程があるからな、あと三日は気を引き締めていこ

「あんなお婆さんのパンツに興奮したのかよ？」

「さすがに黒じゃ引くよ、……………チカは何色？」

チカならこれで黙るでしょ、もうこの話は終わりにしたいんだよな、俺の汚点を思いっきりついてるから嫌なんだよ

「白だよ」

「へっ？」

「何だよ自分で聞いたいて、何なら今から確かめるか？」

ヤベエ、傷口が痛む、ってかポーカーフェイスでそれ言われたら俺じゃなくても興奮するって、それともマジとか？ココは個室だし…

……………

「そんな事出来なくせに」

「アタシも高校生だぞ、……………これくらい」

そういつてチカがさっきの看護師さんと同じ事をしてきた、ってか病院なんですか、まあチカへの償いか、俺も満更でもないし

「カイ、傷口痛む？」

「かなりね、開かない程度にな」

「うん」

チカとキスをしようとした時だった、廊下の方でうるさい集団が、

つてか大きい声に関西弁、もしかして……………

『コテツ達だ!』

チ力は急いで降りて俺は布団を、チ力は服を直して何事も無かったかのようにする、コテツ達が大きな音をたてて入って来た

「カイはん元気でつか!？」

「頼む、頭に響くから静かにしてくれ」

「何やお二人はん、顔真っ赤やで」

「また看護師さんが来てさ、それでじゃない」

顔真っ赤か、さっきから傷口が痛んでしょうがない、確実に看護師じゃなくてチ力のせいだな、そういえば今日はコテツとツバサだけが

「コガネとかは？」

「二人でデートやって」

「コガネもあと少しだな」

「そやな」

俺らが話してる横でチ力とツバサはイチヤイチヤしてる、一方的だけれどね、いや一方的つてことを信じたい

「ねえチ力チ力、飲み物買いに行かない？」

「うん良いけど、カイは何が良い？」

「適当に任せるよ」

「行こうチ力チ力!」

ツバサがチ力の手を引いて走って出ていった、その瞬間コテツがいきなり真剣な顔になってツバサが座ってた椅子に座った、ため息を吐いて俺を見た

「まだ退院できひんのか？」

「あと三日だよ、知ってるだろ」

「どうしてもか？」

「脱走しかないな」

コテツのいつになく真剣な顔が更に険しくなった、俺はその時に始めて目の開いたコテツを見た

「チ力はんが可哀想やで」

「チ力が？」

「カイはんがいなくなってから他の男子が檻から放たれたようにチ力はんに寄ってくるんや、わいらがいるときはどうにか出来るんやけど、一人の時はかなり強引らしいで、不良の件があるお陰で手は出さないけど、弁当の時間も最近はおらへん」

そこまでは予想してなかった、寂しい思いさせてたんだな、情けない俺、他の男子にもってかれないって自惚れはある、でも笑顔は守れないのか

「……………退院か」

「無理なのは分かっとなるで、でも知ってて欲しかっただけや、チ力はんは強いから大丈夫やと思うけど、念のためちゅうやつや」

「いや、退院するよ、外にいて、支度するから」

コテツを外に出して着替えた、そんな事聞いて俺が大人しくしてるわけないだろ、ナースコールを押して看護師が来るのを待った。

案外早く来たと思ったたら不安そうな顔をしたチ力だった、チ力は慌てて俺に寄ってきた

「カイ！何してんだよ？」

「退院準備」

「無理だよ！まだ傷が治ってないだろ？」

「傷なんて家にいても治る、それにこんな所にいるよりは早く治るし」

荷物を持って出ようとした時だった、例の看護師さんが残念そうな顔しつ入って来た、半分あんたのせいで退院するんだけどね

「あらあ、退院しちゃうの？まだ三日もあるのに」

「別に良いだろ、俺は客だ、それくらい自由はあるだろ」

そついつて出ようとした時、やっぱり今後のためにあの看護師さんには注意しとかなないと、俺らに背中を向けてる看護師さんの後ろから耳打ちした

「若い子をおとしたかったら黒じゃなくて白の方が良いよ、黒はガツツキすぎだね、白なら自然さが伝わるから」

「あら、忠告ありがとう、今度から気を付けるわ」

俺はチカの手を引いて病院を出た、医者に止められたけど強攻突破で、怪我人に強く出来ないのが医者 of 弱味ってか。

コテツとツバサと別れて家路に向かった、久しぶりの外は気持ち良いな、もう日が暮れてるしこの時期だと冷えるな、もう少し厚着してくれば良かった

「チカ、寄って行きたい所があるんだけど、良い？」

「良いけど、どこ？」

「お楽しみ」

俺はチカに教えないで歩き続けた、道 of りで何となく気付いてると思うけどね、問題はそこまで連れてく事じゃない、それからなんだよな

「カイ、これって？」

「そう、前の家」

一学期まで住んでた家だ、今は空き家だけど所有権はまだこっちにある、一応鍵はいつも持ってるし、夏休みの終わりに来たのが最後だから二ヶ月くらいか、まだ使えるな

「何しにココに？」

「まあ良いから入って」

無理矢理家に入れた、俺とチカの部屋は殺風景だけど他は変わらない、時間が止まってるみたいだ、俺らはユキの部屋でくつろいだ、チカはベッドに座ってる、俺は丸いテーブルを挟んで反対側だ、先に謝っとく、ゴメンなユキ

「で、何だよ？」

「何色かなあって思ってた」

「えっ？」

チカは一瞬で顔を真っ赤にしてうつ向いた、さっきとは全く別人だな  
「あんなチカ見たら抑えろっていう方が無理だよ」

「だから、し、白だって」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど……………」

俺はチ力の前に立ってそのままベッドに寝かした、チ力は思ったより素直に寝てくれた、俺が覆い被さるような状態で上からキスをした「ヤバかったら言つて、俺も分らないからさ」

無言で頷く、チ力の制服のボタンを外した、ああ、俺は何をしてるんだろ、チ力を傷付けたらどうしよう

「…………ん！」

「大丈夫？」

「…………あつ、…………大丈夫だよ」

俺はチ力を傷付けないよう触れた、ホントは怖かった、自分に従ったのは良いけどそれをチ力が望まなかった時が。

チ力の肌は小麦色で綺麗だった、多分日焼けだけじゃないと思う、こんなに綺麗な肌をしてるんだから、柔らかくて同じ人間とは思えないくらいだった、全部がいつものチ力と違った、うるんだ瞳も、柔らかい唇も、何も着けてない体も。

俺はついにみなまで来ていた、でも最後の決心がつかない、ホントにコレで良いのか？ホントに後悔しないのか？

「カイ、きて大丈夫だよ」

「ヤバかったら言えよ、無理だけはするな」

「大丈夫」

「ゴメンな」

「……………っ！」

俺が心配してチ力の顔を見るとチ力は笑ってた、俺は決心がついた、傷付けないようやれば良いんだ

「行くよ……………」

「カイ、好きだよ」

「……………分かってるよ」

俺はチ力を抱き締めた、いつもより強く、チ力の温もりがいつもより強く感じられた、怪我の痛みが感じなくなるくらいに。

「大丈夫だった？」

「うん。……むしろアタシ幸せ、……こんなに幸せなの始めてだった、これも一つの愛のカタチだよな？」

「そうかもな」

俺はチカに軽くキスをして天井を見上げた、でもいきなり天井がチカの顔でいっぱいになってチカの唇が俺の唇と重なった、そしてチカの舌が俺の唇を割って入って来た、俺もそれに応える、最後にチカが強く俺を抱き締めてきた、脇腹の辺りから手を回して、……脇腹？

「イツテエ!!」

「キヤア！大丈夫!？」

今になって思い出した、肋骨折れてたんだ、邪魔だからギブスは外してあるし、チカは慌てて離れたけど俺は引き寄せた

「大丈夫なのか？」

「俺から抱き締める分にはね」

「……………何かズルイ」

俺は暫くの間チカを感じてた、明日からは俺がチカの全部を守るから今だけはわがまま聞いてくれ。

チカ、今日って記念日だよな

## 青の退院祝い

昨日は夜遅く帰った、夜遅くって言うても既に日付が変わってからだっただけだね。

帰るとコガネはしかめっつらをしてた、疑問か迷惑かは分からないけど。

そして今日、退院初日の学校、まだ頭には包帯が巻いてある、それが目立つのか何のか分からないけどいつも以上に視線が刺さる、頑張って考えた結果、やっぱりケンカの件が大きく響いてるんだろ、あのケンカで怪我したのは俺と相手だけだからな。

下駄箱には手紙が突っ込まれてた、海外旅行から帰って来た時のポストの方がまだ可愛いくらいに、とりあえずビニール袋に突っ込んで教室に行った

「おはよう、ヒノリ」

「カイ？大丈夫？」

あんまり心配して無さそうな顔でヒノリが聞いてきた

「一応ね、昨日無理矢理退院したんだけど」

「ハシヤギ過ぎないでね」

それだけ言っただけ本を読みだした、案外マイペースなんだなヒノリって、それ以上にマイペースなコガネは既に爆睡してた、しかも最近タオルを枕にする事を覚えたらしい、もう少しで枕持参するんじゃないの？

俺に群がる友達と話していると川上先生が教室に入ってきた、一応うるさくても恩師になっちゃったからな、呼び名は担任からクラスアップだ

「四色、退院はまだのハズだろ？何でココにいるんだ？」

「つまらないから抜け出して来た。それと、一応感謝してるから」それを言っているとクラスの視線が集まり驚きの声が飛び交う、俺とコガネと川上先生の口喧嘩は名物になってたらしいからな、俺の感謝発

言にビツクリするのも分かるような気がする、ってかみんなに見られると照れる、照れると頭に血が昇る、頭に血が昇ると……………

「……………ッ！」

俺は頭を抱えながら机に伏した、感情の起伏で頭が痛くなっていたらめんどくさいな、笑うと肋骨が痛むし、俺って案外重傷だったりする？

10分休み、いつも友達と教室で話してるけど俺が早めに退院した理由はそれじゃない、今はチカとツバサの教室の前にいる、男の群れに圧倒された、これをかきわけて入るには肋骨が危ないと判断して隣の教室のベランダから行く事にした、うちの学校は同じ階は全部ベランダで繋がってるから便利なもんだ、隣の教室に入ると女子が騒ぎ始めた、シカトしてそのままチカの教室に入った、チカの周りに群がる男どもを邪魔だから吹っ飛ばしてチカを引きずり出した  
「デメエ何するんだよ!？」

「ああ？自分の彼女を助けて何が悪い」

「カイ!？」

チカはビツクリしてる

「四色いつの間に?」

「別にお前に話す義務は無いだろ、それよりか早く散れよ、俺がいないからって調子のとてんじゃねえよ」

軽く声を低くして言った、群れはあつという間に解散して教室は静かに……………、はならなかった、ツバサが騒いだしどこから噂を聞き付けたか女子が集まって来た

「キヤー!カイっち王子様みたい、カッコイイ!」

「頼む、少し静かにしてくれない、ツバサの高い声は頭に響く」

「それより何でカイが?」

「それは俺が王子様だから?」

廊下にいた女子がこの言葉に悲鳴にも似た声を出し始めた、これも頭に響くな、でも黙らせる程の音量を出す気力がない



「潤間さんが羨ましい」

「私もあんな風に四色君に抱き締められたいな」

「私は名前呼んでくれるだけで満足よ」

そつえば、俺チ力を引つ張り出した時に抱いてたんだ、それは女子も騒ぐわな、女子達の声がうるさいせいでいつもうるさいチャイムが微かしか聞こえなかった

「今鳴ったよな？」

「うん」

「じゃあ帰るから。それと、次の十分休みも来るからな」

「アタシなら大丈夫だよ、それにカイは怪我もあるから安静にするよ」

「チ力のタメじゃないから、俺がやりたいからやる、チ力にそれを止める権利は無いね」

俺はチ力を放して今度はちゃんとドアから出ようとした、でも女子がいることをすっかり忘れてた

「ゴメンね、チョット退いてくれない？」

「あつ！はい、すみません」

「それとみんなも早く戻らないと授業に遅刻するよ」

またキヤーキヤー言いだした、俺なんか変な事言ったか？俺は左耳を左手小指で塞ぎながら自分の教室に帰った。

部活はさすがに休んでチ力の部活の見学に行った、相変わらず男達が大騒ぎしてて若干後悔もある、でもチ力の部活してるところをまともに見るのは始めてなんだよな、チ力もツバサもヒノリも俺には気付いてないらしく声を張り上げて練習してた、何か男子と変わらない気合いだな

「なんや、カイはんもおったんかいな？」

声の主は探さなくても分かるけどコテツだ、コテツは道着を着たま

まペットボトル片手にやって来た、多分この様子からすると休憩中だろ、コテツもこの姿だと引き締まって見えるな

「部活出来ないし帰るに帰れないから見学、コテツは休憩中？」

「そやで、道場と体育館近いさかいに毎日来とるんや。調度ええ、休憩に入るで。ツバサ！」

コテツが叫び出した、みんなこつちを見てるけどおかまいなしにコテツとツバサは騒いでる、チ力は俺がいることに気付いたらしく俺に手を振ってきた、俺も軽く振り返した。

練習が終わって全員が集まった、俺の退院祝いということで遊ぶ事になった、遊ぶって言っても焼き肉屋で大騒ぎするだけだけど、高校生には出費がキツイから食べ放題だけだね。

俺らはとりあえず席について乾杯、当然ジューズでだけどね

「ではみなはん！カイはんの退院を祝って……………」

『乾杯！！』

店内に響き渡るくらいの大声で言ったあとみんなで周りに頭を下げた、コテツはいつの間にかいなくなつて戻つて来た時には両手に皿を持ってた、しかも普通焼き肉は肉が綺麗に並べられて出てけるけど、これは山盛りだ

「こつちがカルビで、こつちがハラミや、この店潰す勢いで食うで！」

俺は白米が欲しい気分だったけどこの肉を食べるタメに我慢した、みんな思い思いに焼いて食べてる、よく動くツバサとコテツは通路側、俺とコガネは壁側、その隣にチ力とヒノリという具合だ

「そういえばカイ、何で昨日遅かったんだよ？」

コガネの不意打ちに俺とチ力は口に肉をくわえたままフリーズした、本当の事を言ったらヤバい、でも今のテンパった俺の頭で考えるには最適な言い訳が出てこない

「夜遅くって、わいらと別れたのは日が沈む前やったよな？」

「そうなのか？昨日っていうか今日の午前2時に帰って来たぞ」

「チカチカもだよ！ビックリしたけど僕眠かった寝ちゃって聞けなかったんだよね、今思い出した」

「ヤバイ、ココでぶつちやける勇気は持ち合わせてない、いつかバレるけど今はその時じゃない」

「不純な予感」

「ヒノリ、違うから」

「じゃあ説明してもらいましょか？」

「チカチカ、僕を裏切ったの？」

「言い逃れは良くねえな」

「カイ……………」

チカが目で訴えてくる、逃げ場はが無い、この場で白状すべきか、それとも押し切るべきか

「チカが泣いてなだめてたら時間がかつちゃって」

「それで深夜まで？」

「目が真っ赤なチカを帰す訳にはいかないだろ、それにたまには二人の時間を楽しませろよ、コガネとヒノリも楽しんだんだから」

「そうやでお二人はん！昨日はどうやったんや？ちゃんと報告してもらわなあかんで」

馬鹿が一人いて助かったな、コテツとツバサの注目がコガネとヒノリにいったよ、何とか危機回避。

トイレでの事だった、俺が入った後からコガネが入って来た、何をするでも無く洗面台に寄りかかっている

「この揉み心地はどうだった？」

「案外良かった……………、ってヤバ」

「残念でした。カイもついに卒業か」

「頼む！誰にも言わないでおいで！」

頭の上で手を合わせて必死にたのんだ、完璧誘導尋問に引っかかった、コガネにしては考えたのか俺が迂闊だったのかは分からないけ

ど、バレた事は確かだ

「言いふらすタメに聞いたんじゃないから」

「ホントに？」

「当たり前だろ、脅しの種には使わしてもらうけど」

「卑怯者」

「別に使えなくしても良いんだけど、そこは俺の良心なんだけどなあ？」

クソオ、コガネに秘密を握られた、いつかはバレるけどココまで早くバレるとは、我ながら馬鹿だと思うよ

「どうぞ脅しに使って下さい」

「ハハッ！行くぞカイ」

でも知られたのがツバサとかコテツじゃなくて良かった、ヒノリに知られても何となく怖いな、案外コガネがベストだったりして、でも知られた時点でベストじゃねえな、ベターだ

## 青への疑惑（前書き）

今回もチ力目線で話を進めていきます

## 青への疑惑

カイは最近やつと怪我が完治した、部活も出てるし元気も戻って来てるそんな今日この頃、外は寒くなってきたもうそろそろ秋も終りそう、今頃島の山とか綺麗な紅葉なんだろうな、東京は木が少ないからわざわざ見に行かないとダメなんだよね、でもわざわざ葉っぱを見に行くのも馬鹿馬鹿しいよな。

昼休み、アタシとカイはデザートを買いに購買にいた、残り物には福がある、生徒が退いた後に残った物でもたまには美味しい物があるんだよね、今日もそんな収穫があった

「これ美味しそう!」

「……………抹茶プリン?なんかオヤジっぽい」

「うるさい、アタシの勘は外れないからね。おばちゃん、これ頂戴!」

アタシは抹茶プリンを、カイはソーダゼリーを買って屋上に向かってた、一階の廊下を歩いてる時だった、遠くの方からスカート振り乱しながら走って来る女の人、あんなに走ったらパンツ見えちゃうけど良いのかな?そんな事を考えてるとアタシは気付いた、あの人がカイに向かって走って来てる、そしてそのまま飛び付いた

「カイ~~~~~!!!」

「うわっ!何だよ!」

女の方はカイの首に腕を回して上目使いでカイを見てる、ってか顔近いよ、カイは女の人をばーっと見てる

「……………はあ!?何でお前がココにいるんだよ!」

「何でって、ほら」

女の方は自分の制服をカイに見せた、当然の事ながらうちの学校だ、それにしてもあの女の人綺麗な、綺麗な髪の毛には今流行りのウェーブがはいってるし、顔はパーツ単位で綺麗、アタシなんて足下にも及ばないくらいだよ、それにさっきからカイの首に腕を回して

るからパンツが丸見えだし、ってかカイはアタシの彼氏なんだけど、カイも少しは嫌がってよ

「お前ココの生徒だったのかよ？」

「そうよ。カイも大人っぽくなったわね、それに髪も伸びたわね」  
最後は若干飽きれ気味に言った

「伸ばしてるんだよ」

「カイ、この人誰？」

アタシは思わず横から口を挟んでた、別にアタシがカイの彼女なんだから遠慮すること無いよな、むしろ突き飛ばすくらいの事はしても良いと思う、でも、カイが嫌がって無いのを見るとアタシの方が邪魔してるように思えてくる、カイは女の人に簡単に気を許すような性格じゃないのは知ってる、しかもアタシ以外の人が意図的に触れようとすると怒るし、そんなカイが何で？

「コイツは……………」

「ええと、カイの彼女の潤間さんだっけ？」

「はい」

「カイがお世話になってます」

「別にお世話なんてしてません」

アタシと話してる時も女の方はカイから離れない、アタシは思わず視線を反らしながら話してた、カイは離すどころか倒れないように支えてる、カイに裏切られた気分だった

「カイと貴方はどういう関係なんですか？」

「少なくとも今の潤間さんとカイよりは深い関係だったわよ」

もしかして元力ノ？でも元力ノだったら振りほどいても良いのに  
「毎朝手を繋いで登校してたし、枕元で好きって囁いてくれた事も何度もあっわね、少なくとも潤間さんよりはカイの事は深く知ってるわよ」

アタシはめまいがした、カイはアタシに嘘をついてたんだ、それにこの人の自信、もしかしてカイはまだこの人の事好きなのかな？それはそうだよ、あれだけ愛し合ったんだから、簡単に別れるなん

て無理だよな

「……………カイ」

「チカ、誤解だつて」

「じゃあ何？この人の言つた事が嘘だつたつていうの！？」

「それは……………」

「否定出来ないんだろ！？最低！！」

アタシは泣きながら走つてた、カイは追つてこない、カイは何も否定しなかった、やっぱりあの人の言つてゐる事は全部本当だつたんだ、あれだけ綺麗な人に勝てる訳ないだろ、カイの馬鹿。

アタシはその日そのまま早退した、ツバサの家に戻つて涙が枯れるまで、声が出なくなるまで泣き続けた、カイからの電話がうるさいから携帯の電源は切つてある。

次の日も学校に行く気にはなれなくて休んだ、皆勤賞狙つてたのに、今日はツバサも休んでくれた、アタシは断つただけどツバサは一度言い出したなら聞かない性格だから

「で、何があつたの？僕で良ければ相談にのるよ」

「カイの元カノが来て、しかもカイは抱きつかれても嫌がらないんだ、それどころか転ばないように支えてたんだよ」

「カイっち最低！」

ツバサが怒つてゐる、アタシは怒る気力も残つてないよ、カイは浮気なんてしないつて信じてたのに、浮気じゃなくてもあんなの見せられたら信じられないよ

「でもチカチカがファーストキスの相手なんですよ？」

「それが嘘かもしれないの」

「嘘！？」

ツバサは机を強く叩いて身を乗り出してきた、アタシは思わずのけぞつてそのままツバサを押し返した、ツバサを落ち着かせて自分の心も落ち着かせる

「女の人が言うには、……………何回も枕元で好きつて囁いて



たらしい」

「それってもしかして？」

「カイは女の人を抱いたんだよ」

ツバサは顔を真つ赤にしてフリーズした、アタシもこんな話をしてるせいか顔が熱い。

カイとアタシが初めてキスをした時、あれだけあつさりといきなり出来たのはそのせいかな？だとしたらアタシは遊ばれてたの

「でも僕にはカイっちがそういう事するようには思えないんだけど」

「アタシもだよ、でもカイはアタシが逃げて追って来なかったんだよ、アタシの事が大事なら追ってくるでしょ？女の人の方が大事だったんだよ」

アタシは自分で言っただけ泣けてきた、アタシがまた泣き始めるとツバサはタオルでアタシの涙を拭いてくれた、アタシはツバサの手を掴みながら泣いてた。

泣き終わった頃には昼を回ってた、でも何も食べる気がしない、多分今食べても喉を通らないと思う

「大丈夫チカチカ？なんだかグツタリしてるけど」

「肉体的には大丈夫だと思う、でも精神的にキツイ。ツバサ、これって失恋だよな？」

ツバサは目を反らしたまま何も言ってくれない、カイの本当の気持ちを聞く事も出来る、でもそれを聞いたら今以上に立ち直れなくなりそうで怖い、学校で会ったらどうしよう、顔も見れないな

「チカチカ、大丈夫だよ、カイっちを信じよう」

「無理だよ、今のアタシにカイは信じられない」

「チカチカ……………」

“ピンポーン”

家のチャイムが鳴った、ツバサは玄関の方に歩いて行く、アタシは少し後ろを歩いて部屋に入ろうとした、でも来訪者を見てアタシはその場に崩れ落ちる

「……………カイっち」

「ツバサ、チカは……………！チカ！話があるんだ」

玄関にはカイがいた、アタシはその場に崩れ落ちて耳を塞いで目を閉じた、今はカイの顔を見たくない、声も聞きたくない

「辞めて！帰って！今は何も話す事は無い！」

「チカ聞いてくれ！ホントにあれば誤解なんだって！」

「嫌だ！何も聞きたくないの！お願いだから、……………帰って」

アタシは力なく腕を床に落とした、自分でも分かる、今のアタシは抜け殻みたい

「チカ、ちゃんと話がしたいんだ、明日、学校に来てくれ」

それだけ言ってカイは帰って行った、ツバサはアタシの肩にそっと手を置いて優しい声で話しかけてくれた

「カイっち、泣いてたよ。明日はちゃんと話を聞いてあげな、これは僕からのお願い」

アタシは頷く事しかできなかった、今日一日はカイとの全てを絶った、電話の電源も切りっぱなし、アタシは心の整理がつかないまま次の日を待った

## 赤の誤解

ああ最悪だ、完璧にアイツのせいでチカに誤解されたよ、アイツは何も悪くない、俺がハッキリ言えなかったのが悪いんだけどタイミングが悪すぎる、チカは早退しちゃって理由は聞いてもらえなかった。

言い訳しに来たわけじゃないけど今はツバサの家の前にいる、チカは確実にココにいるはずだ、二人とも学校休んだし、俺は今日いてもたってもいられずに早退してココにいる、インターホンを押そうとしての手は震えてる、チカを傷付けた自分が何より許せなかった、震える手で無理矢理押した

“ピンポン”

ハア、押しちゃった、この先どうなるか分からない、最悪な結果が待ってるかもしれないけど違うかもしれない、案外早くドアが開くとそこにはツバサがいた

「……………カイっち」

「ツバサ、チカは……………！？チカ、話があるんだ！あれは誤解なんだよ」

ツバサの後ろで両耳を手の平で押さえて目を瞑ってるチカがいた、力なくその場に座りこんでる、顔色も悪い、俺のせいだよな、全部俺が

「辞めて！帰って！今はカイの顔も見たくない、話たくない！」

チカの言葉で目の前が歪んだ、頬を熱いものがつたって下に落ちた、俺は絶望感にさいなまれる

「チカ……、明日学校に来てくれ、話したい事があるんだ」

俺はそれだけ言って帰る事にした、涙がとめどなく流れてきて胸が苦しい、チカという存在が目の前から消えていく、チカは本気で俺を拒絶してた、電話の電源も切ってるし、チカまで失っちゃうのかな俺。

家に帰るとそのままコガネから借りてる部屋に入って泣いた、唯一無二の存在に拒絶された悲しみ、たった一人にすら信じてもらえない悲しみ、音をたてて崩れ落ちる幸せを繋ぎ止めておけない悲しみ、チ力がいない生活なら無くてもいい、チ力がいない世界なら俺は生きたくない、チ力、俺を一人にしないでくれよ

“ガチャン！”

コガネが帰って来た、今日は部活があるはずなのに早いな、しかも一人じゃない、もう一人誰がいる、こんな姿コガネにも見られたくないのに、その二人は躊躇なく俺の部屋に入って来た

「カイ、ゴメンね」

そこにはこの事件の根源がいた、俺が見たこともない暗い顔で俺の事を見てる、コガネは近くにあった椅子に座った、あの女はテーブルを挟んで反対側に座った

「カイ、悪い、どうしてもって言うから連れて来た」

「カイ、私のせいよね？ゴメンね、私も潤間さんに説明するから」

「全部俺が悪いんだよ、説明出来なかったのも、誤解を産んだのも全部俺のせいだ」

「カイはいつもそう！全部自分でしょいこんで、誰も頼ろうとしない！私そんなカイは嫌い」

確かにそうだな、でもこれは俺の問題だ、少なからず他人が原因だったとしても俺の力不足

「おいカイ、カイとこの人はどういう関係なんだよ？」

コガネは背持たれに持たれて腕を組みながら言った、ってかコガネは訳の分らない奴を家に入れたのかよ、その他大勢の女子だったらどうするんだよ

「コイツか？コイツは俺の姉貴」

「はあ！！？」

「カイの一つ上の蒼海、<sup>アオミ</sup>よろしくね」

アオミはコガネに笑いかけた、アオミは小さい頃から自己紹介だけ

はどんな時でも笑顔なんだよな、そのせいで何回か誤解をうんだけど  
「この人はカイのお姉ちゃん！？でもカイは親に捨てられたんだよ  
な？ならアオミさんは？」

「アオミは高校に上がる時に家出してそれ以来音信不通。そういえばいくら持っていったんだよ？」

「3000万」

「3000万！？」

俺もビックリした、アオミは家に《これで勘弁してやる》とそれだけ残して家出した、親父は通帳を見て笑ってたんだよな

「あのクソジジイにはこれくらい端金でしょ、私はこれであの家とは縁を切ったのよ」

「大胆なお姉ちゃんだな」

「困ってたよ」

会うつと抱きつくのもクセだ、中学校でも会つ度に抱きついてきたから慣れたけど、その慣れのせいで誤解されたんだよな

「ならチカちゃんに説明すれば済むだろ？」

「チカは俺と話たく無いって」

再び空気が重くなった、少しでも話してくれれば誤解は解けるのにそれすら出来ない、今の俺は最高に無力だ

「やっぱり私のせいだね？」

「それだけじゃない、ビックリしてチカの事を忘れてた俺も悪かった、でもあの言い回しは最悪だけど」

「だって私のカイなんだもん」

でたよブラコン、アオミは極度の弟好きなんだよな、夜這いしかけられたこともあったっけ

「カイ、アオミさんに手出してないよな？」

「そんな趣味は無いから、アオミは無理矢理色んな事仕掛けて来たけど」

「だってカイが弟じゃなかったら全部を捧げたいくらいよ、そこら辺にいる男よりカッコイイし強いし優しい、だからちよっと潤間さ

んに嫉妬したのもあるんだ」

アオミは半端な事はしないからな、一番ヤバかったのは裸で風呂に入られた時だったかな、いつの間にか添い寝してるのは日常茶飯事だし、今考えるとかなりヤバい姉貴だな

「とりあえず明日だ、明日チカと話さえすれば何とかなる」

「そうだな、チカちゃんも分かってくれるだろ」

「じゃあ私は帰るわよ、カイ、明日は私も事情を説明する、だから一人でしよいこまないで、私達姉弟なんだから」

アオミは帰って行った、少なからずアオミが帰って来てくれたお陰で楽になったな、急に現れて台風起こして行ったけど、目があるのも台風だからな、目を抜けたら逆サイドの台風が待ってる、弱まってる事だけしか祈れないな、雨をしのぐ事ばかり考えてたら黴ごっこだ、雨を降らせないように俺はなる。

今日はチカが学校に来てるって噂を聞いた、俺は授業に身が入らないから屋上でサボってる、コガネも今回は俺を一人にしてくれた、今は誰とも会いたくない、自分の気持ちに整理がつかないし万が一の事を考えたら怖い、でも今のままの方がもっと怖い。

昼休み、俺は4時間目が終わる前にチカの教室の前に立ってた、終わって先生が教室の前のドアから出てくると同時に俺は後ろのドアから入った、周りは気にしないでチカの前に立ってチカの腕を掴んだ  
「チカ、話がある」

チカは何も言わずに俺の腕をふりほどいて俺の後ろをついてきた、途中でアオミも連れて人気の無い学校の花壇の所で止まった、沈黙は暫く続いて俺は口を開いた

「チカ、とりあえず誤解をうんだ事を謝る、ゴメン」

「誤解ってこの人はカイの何なの？元力ノとか？」

やっぱりそっち方面の誤解か、元力ノに抱きつかせる程未練がまし

い男じゃないよ

「コイツ、……アオミは俺の姉貴だよ」

「潤間さん、ゴメンね誤解するような事行っちゃって」

チ力は俺とアオミの顔を見て険しい顔をした、チ力はさっきの疲れた顔から怒りの表情に変わった

「アタシがそんな嘘信じるとでも思ったの？もっとマシな嘘付いてよ！」

そりゃ嘘っぱいよな、ココにいる人が僕の生き別れのお姉ちゃんです、なんて信じろって方が無理だよ、でもそれを信じてもらうタメにアオミを呼んだんだけど

「アオミ、身分証明書出して」

アオミは生徒手帳の中から学校で配布されるカード型の身分証明書をだした、髪は黒いけどこれならいける

「はい」

「……………四色蒼海？」

「そう、それでも信じられないなら、ほれ」

俺はアオミの前髪を上げた、アオミは四色の遺伝から嫌ってたからいつも黒染めしてたんだよな、だから姉弟って見られない事もしばしば、でも普通の奴らが茶髪にして時間がたつとプリンになる、あれと同じような事が起こるんだよ

「生え際が、青い」

「こんな事が出来るのは俺か、俺と同じ様な遺伝子の奴だけ、これで信じてもらえたか？」

チ力の顔が悲しみに変わって行った、今日はチ力を疲れさせちゃったな、まだ体力が回復してないハズだ（俺のせいで）、無理させたくないんだよな

「じゃあ枕元で囁いたのは？」

「ガキの戯言、それが無理矢理言わされたか」

「じゃあ抱きついて来たのは」

「アオミは極度の弟loveだから、一種のクセだよ」

「ゴメンね潤間さん、貴方とカイは恋人同士、私とカイは姉弟、だから私は貴方のお姉ちゃんって事」

「おい、アオミ！」

アオミの奴いきなり変な事言いやがって、顔が熱い、茹でられたタコってこんな感じなのかな？チカも顔が真っ赤だし、でも笑ってる、チカが笑ってくれた

「あら二人とも、可愛い」

「からかうな」

「……………カイ！」

今度はチカが抱きついてきた、俺は倒れないように抱き寄せた、隣でアオミはクスクス笑ってるし、別にアオミの前ならこれくらいは良いだろ

「お姉さん、カイを頂きます！」

「お姉さんって、……………それに頂きますって表現的に良くないだろ」

「たまには私にも味見させてね、潤間さん」

「アオミ！」

「良いですよ、それとチカって呼んでください」

そういえばチカが敬語使ってるよ、一つ上なら躊躇なくタメグチでいくチカが敬語を使ってる、新鮮だな、俺がそんな事を考えてると左にチカ、右にアオミがいた、二人の唇がいつの間にか俺の頬に当たってる

「チカはともかく何でアオミまで！？」

「良いじゃないほっぺにチューくらい、それともお姉ちゃんにチューされて興奮しちゃった？」

「しねえよ！」

「じゃあアタシのキスで興奮した？」

誰かこの二人から俺を助けてくれ、チカの誤解が解けたのは良いんだけどこれは困る、しかもチカがアオミの事お姉さんだって、なんか現実味がありすぎて怖い、チカとは仲直り出来たし、アオミ



は帰って来たし、一件落着いてか。

## 青と蒼

俺はチ力とアオミと帰ってる、チ力とはかくアオミは無理矢理着いてきた、部活にいきなり来て俺をラチろうとしたけどチ力だけは道連れに出来た、左手はチ力と手を繋いでる、右腕にはアオミがしがみついている、そんなもって視線が痛い、確実にチャラ男に見られてるし、陰口言われて腕を振り上げようとしても腕が動かない。

チ力を家まで送って行ってアオミを送ろうと思った、でも俺アオミが何処に住んでるのか知らないし

「ねえ、何処に住んでるの？」

「すぐそのマンション」

「アオミ一人で？」

「そうだよ、バイトしながらあのクソジジイの金切り崩して生活してる」

俺は誰かの世話になって、新しい家族を見つけて、そんな事してる間にアオミは一人で苦労してたんだな

「彼氏とかはいるの？」

「いないわよ、カイが弟だとそこら辺の男はダメ男にしか見えないの。唯一惚れた男は彼女いるし、今はいないし」

俺はなんとなくその人物が絞れた、ってかこれって運命？家族同士が結婚とか笑えるし

「アオミが惚れたのってユキ？」

「何で分かったの！？」

やっぱりそうか、俺とアオミは人の好みだけは似てるからな、親嫌いもその一種、アオミも友達を作ろうとしなかったし、彼氏がいたってのも聞いた事がない

「該当人物がそれくらいしか見当たらないから」

「いや、他人に興味を持たないカイが何でユキくんの事を知ってるの？」

それか、全く説明してなかったな、今の俺の状況とその後を。

俺はアオミが家を出ていった後の事を全部話した、当然ユキが俺の家族だって事も、俺が親から捨てられた事も、アオミは最初は怒ってたけど今は笑顔だ

「カイもアイツらから解放されたんだ、よかったね。それに、ユキくんがカイのお兄ちゃんだったなんて、私は離れた家族に恋してたんだ」

「今はいいけどな」

「そうね。あ、ここが私の家よ」

かなりの高層マンションだ、自動ドアを入ると即オートロックがある、アオミは手慣れた手付きでカードを溝に滑らした、電子音をたてるとアオミが俺の手を掴んだ

「カイ、行こう」

「俺はココで……………」

「少し話がしたいし家に上がってよ。ね、良いわよね？」

「しょうがねえな」

俺はそのままマンションのオートロックをくぐった、一階はロビーみたいになっている、しかもかなり真新しい、本当にココに住んでるのかよ、高校生が住むような所じゃないよな

「スゲエマンションだな」

「これは私の貯金も合わせて買ったんだ」

「買ったって、どうやって？」

「お母さんだけは私の居場所知ってるの、お母さんに色々と手続きして貰ったんだ」

そついう事か、お袋は親父といればそれで良いって感じの人だからな、邪魔者が消えるなら何でもするのか。

俺とアオミは話ながらエレベーターに乗り込んだ、アオミが押したボタンには14と書いてあった、かなり上に住んでるんだな

「やっぱりクソだな」

「そのクソを利用してやったのよ、クソジジイは知らないしお母さんにはカードキーは渡していないからココには来れないの」

にしてもアオミの話を聞けば聞くほど俺らの親はクソ親だな。

これは自惚れかもしれないけど、アオミには俺しかいなかったんじゃないのか？俺も正直アオミがいなくなった時はショックだったし、今まで以上に荒れたな。

エレベーターが目的の階につくとアオミは俺の手を引っ張って右に行った、まるでホテルみたいな廊下を更に左に曲がった、少し歩くとアオミは停まりさつき使ったカードキーを出して溝に滑らした

「どうぞ、私の家に」

「お邪魔します」

中に入るとその大きさにビックリした、とりあえず女子高生が一人で住めるような家じゃない、部屋は左右に二つとリビングダイニングが一つ

「……………スゲエ」

「ちなみに私以外に入ったのはカイが初めてよ」

「良いのか？」

「当たり前でしょ、上がって上がって！」

俺はアオミに手を引かれるがまま家に入った、リビングには大きな白いソファアアがあったからそこに俺は座った、家具とかもキッチリ揃っててとても一人で住んでは思えない整いっぷり。

アオミは紅茶を出して来た、そのままアオミは俺の隣に座って紅茶を一口飲む

「なあ、料理は俺に作らしてくれよ」

「そつえばカイは料理得意だったもんね、私はあんまり家には帰らなかったし親もいなかったし。良いよ、お願い」

俺はキッチンに行って冷蔵庫の中身を見た、食材はそれなりに揃ってる、ゴミ箱にコンビニ弁当とかは無い、冷凍食品はないし調味料もある程度はあるって事はまともな食事はとってるんだな、少しは安心したな

「まともな食事はとってるんだな」

「当たり前でしょ、料理くらいは出来るわよ、カイには負けるけど」  
今日は調度豚肉もある事だししょうが焼きで良いか、これならパパッと作れるし野菜を付ければましな物になるだろ。

アオミはテレビを見ながら紅茶を飲んで、久しぶりの姉の背中が何となく淋しく見えるのは気のせいかな？たまにはココにも来てやるか。

俺達食事を食べ終って、片付けも済ましてテレビを見てる

「カイの料理おいしかったわよ」

「そう、ありがとう」

アオミはテレビを見てからずっと寄り添ってくる、昔からベタベタすることはあつたけどなんか多すぎる気がする

「カイ、私カイがあの学校にいるって知った時嬉しかった」

「俺はビックリしたよ」

「私ね、親友はいたよ、でも友達は少なかった、カイなら分かると思うけどあの馴れ合いみたいのが嫌いな」

なんとなく分かる、俺も俺の中での友達は少ない、周りは友達だと思っても俺にとってはただの知り合いに過ぎない、これでも進歩した方だけだね

「悩みを話せる親友は二人いたの、だけど一人は学校辞めちゃったんだ、カイなら察してるところだと思うけど私の親友の一人はマミコ」

マミコってマミ姉の事が、ってことは親友の彼氏に惚れてたのかよ、それとも親友の彼氏だから諦めたのかな

「でも二人とも親友に過ぎない、悩みも奥深くまでは話せないしそこまで押し付けたく無かった、だから溜め込んでた部分も少しあったの、そんな時にカイの顔が一番に浮かんだんだよ、カイがいたら少しは悩みも話せただろうな、って」

やっぱりアオミは辛い思いをしたんだな、俺がもう少し早くアオミ

を見付けてれば楽にしてやれたのに、アオミがいなくなつて自分は不幸だと思つてた俺がム力つく

「カイなら何でも話せる、一人で暮らしてる時に初めてカイの大きさに気付いたの、何回もカイに電話しようとか会いに行こうとか思つてた、だけどカイに嫌われてたらどうしようとか思つちやつたんだよね、私一人で逃げて、カイを置き去りにしたまんまで、最低なお姉ちゃんだよな」

アオミは泣いてた、いつも気丈に振る舞つて弱味を全く見せないあのアオミが、今は俺の肩で声を上げて泣いてる、そんだけ辛かつたんだ、アオミは自由になるために自分の心を捧げた、だから今度は俺がアオミの自由を守りたい、これはせめてもの弟に出来る孝行かな  
「俺はアオミの事を嫌いになんてならないよ、アオミはあの時の俺が唯一信頼出来た人だ、アオミには幸せになつて欲しいんだ」

「でもカイが幸せじゃなきゃダメだよ」

「俺は今、最高に幸せだよ、最高の彼女はいるし、最高の親友達がいるし、何より最高の姉貴がいる、だから今度はアオミが幸せになる番だろ」

「大人になつたね」

「マセてるだけだよ」

アオミは真つ赤な目だけど、最高の笑顔で笑つた、俺には分かる、それが頑張つてる笑顔じゃなくて心の笑顔だつてことが。

俺とアオミは空白の一年半を埋めるように話した、楽しかった事、辛かった事、悲しかった事、嬉しかった事、話しても尽きないくらいに話題が出てきた

「ヤベエ、少し話すぎたな、俺もう帰るよ」

「もう帰るの？泊まつてけば？」

「明日も学校あるし」

俺は立ち上がろうとした、でもアオミに腕を掴まれて立ち上がれず

にそのままソファーに逆戻

「ねえカイ、一つ私は隠してた事があるの」

「何？彼氏いましたとか？」

「違う、私、カイが捨てられたこと知ってたの、夏休みが終わった頃にお母さんから電話があつたの、カイを捨てたってね、その時お母さん泣いてたよ」

「言いたいのはそのだけか？」

俺はアオミがまだ言いたそうな顔してるのが分かった、別にそんなのはどうでもいいし

「この家って他に二部屋あるでしょ、あれは私の分とカイの分なの、高校に入る前にカイをココに呼ぼうと思ってただけどカイとは音信不通になっちゃって。言いたいのには、一緒に暮らそう」

俺は嬉しかった、やっと血の繋がった家族とまともな暮らしが出来る、それにコガネの家にいつまでもいる訳にはいかないし、答えが出るのにそんなに時間はかからなかった

「アオミが良いんなら良いよ」

「ホントに！？カイ、一緒に住んでくれるの！？」

「住んであげるよ」

「やったー！」

アオミは勢いよく抱きついて来た、俺はそのまま押し倒される形になる、でもアオミの満面の笑を見るとどうしても責める気にはなれない

「じゃあとりあえず今日は帰るから、明日荷物とか持ってくるよ」  
「分かった」

俺は帰り道アオミから手渡された物をながめながら歩いてた、アオミは帰り際にスペアキーをくれた、これで俺はあの家に自由に出入り出来る、やっと気を遣わないで暮らせるよ

## 蒼と一緒

俺は弁当を食ってる時にとても重大な事を言う事を忘れてる事に気付いた、コガネとチ力以外には大したニュースじゃないけど重大発表しますか

「あのさ、俺引越すから」

コテツとツバサは恐らく聞こえてない、ヒノリは全くもって興味がない状況だ、コガネとチ力はフリーズした

「俺、アオミと一緒に住む事にした、コガネの家にずっといるのは迷惑だしアオミの願いだし」

「ふ〜ん」

コガネは案外さっぱりしてた、そりゃそうだよな、別に人が入るより出た方がいいもんな

「落ち着いたらチ力に場所教えるよ」

「うん」

「俺らには教えてくれないのかよ？」

「コガネに教えるとアオミに手を出すかもしれないじゃん」

俺は冗談っぽくヒノリを見ながら言った、ヒノリは冷静を装ってるけど額には青筋がたってる、オーラが怖い

「ヒノ、カイのお姉ちゃんは綺麗だけど別に好きとは別だから」

「……………綺麗なんだ」

墓穴を掘った、更にコガネの居場所が無くなって、俺は笑いながらそれを見るけどヒノリに睨まれて笑えなくなった

「カイ、コガネを頼んだよ」

「大丈夫だってヒノリ、アオミは……………」

「ブラコンだろ、それにカイはシスコンと」

コガネに言葉を遮られた、しかも俺がシスコンってなんだよ、唯一信じられる血縁者を大事にして何が悪い

「カイ、シスコンなの？」



「チカが一番だから大丈夫だよ、それにシスコンになる程一緒にいなかったし」

「だからなっただろ？あんなに綺麗な人いないからな」

「……………そんなに綺麗なんだ」

コガネが更に墓穴を掘った、なんか最近コガネの権力がだんだん低くなってきたな、それともヒノリが強気になってきたとか？

放課後、部活にいかないで引越することにした、最近部活行っていないな、そろそろ体も鈍ってきたし行きたいけど忙しくて。

荷物はそんなにコガネの家に持って来てないからすぐに片付いた、全部持つて行つて貰つてコガネの家の鍵を閉めて鍵はポストに入れておいた、外にはアオミが立っている

「なんだ、来てたなら手伝えよ」

「今来たところだから、それよりもう終わったの？」

「終わったよ、忙しいのは嫌だから夜くらいに届けてもらう事にした」

「なら今暇だよな」

言つと同時に俺の腕を掴んできた、最近俺とアオミが一緒にいるから知らない奴らが付き合つてるつて噂をしてるらしい（ツバサ情報）、俺はどうでも良いんだけどチカにまたオスが群がってるらしい、俺がホントに浮気をしてると思つてる馬鹿共だな

「デートしようよ」

「デートって？」

「うゝん、渋谷！」

「ダメじゃないけど、アオミって俺と同じで渋谷とか嫌いだったよな？」

「前はね、最近は色んな思い出があるから好きだよ」

歩いてる最中も常に俺の腕を掴んでる、とりあえず駅に向かって歩

いてるから同じ学校の生徒に会う、大半が驚いてるけどこれを否定するのは見苦しいよな

「みんな私達の事付き合ってると思ってるよ、どうするカイ？」

「どうするって、俺にはチ力だけだし、誰がなんと言おうがアオミは姉貴、チ力は彼女、それは不変の真理だよ」

「本当の事だけ何だかチ力ちゃんに嫉妬しちゃうな」

アオミは苦笑いを浮かべながら言った、それに嫉妬って、頼むから誰かアオミとノイローゼになるくらいの恋をしてくれ、じゃないと本気で襲われる

「カイ、今襲われるって思ったでしょ？」

「えっ、な、何で分かったの？」

「カイの事なら何でも分かるわよ」

ヨダレを垂らしながら言わないでくれよ、アオミが言うのが一番リアルなんだから、俺はホントにアオミと同居して良いのか？

渋谷の改札を出るとすぐに人の群れが目に入った、高校生って生き物はなんでこんなに集まりたがるんだよ、俺も一応高校生だけどその心が理解出来ない

「クレープが食べたい」

「食べたいって言われても片手で数えられるくらいしか来た事ないから、マミ姉と何回も来たんだろ」

「しょうがないわね、来て」

アオミは俺の腕を引っ張って人ごみに切り込んで行く、これがチ力だったらとか思っちゃったりする

「チ力ちゃんじゃなくてゴメンね」

「べ、別に」

これは俺の事を知ってるってよりも心を読んでるだろ、怖い女だな「ココが美味しいんだよ、カイは何頼む？」

「アオミに任せる」

アオミは何か分からないけど適当に頼んで俺に手渡した、アオミには悪いけどこれくらいなら俺でも作れるし

「カイ、次はどこに行く？」

「アオミに全部任せる、俺全然この街の事分からないから」

「じゃあカラオケに行こう」

ちよつとまで、今俺にとつての永遠のライバルの親戚の名前を口にしたよな？これだけは頂けない

「アオミ、俺の成績表見たことないのか？」

「無いよ、どうせオール5でしょ？」

「残念、音楽以外は5だよ、音楽は2、1をとった事もあつたな」

アオミの顔が青くなつた、俺は音痴なんてもんじゃない、自分で分かるくらい酷い、ぶつちゃけ歌わない方が歌ってるって言われたくらいだ、自分で言うのはなんだけど完璧な人間なんていないよ

「じゃあプリクラ撮ろう！みんなにカイの事自慢したい」

「弟としてだよな？」

「そこ伏せちゃダメ？」

「ダメっていうか無理、事実を伏せるな」

この姉貴は釘を刺さないと何をしでかさ分からない、つてか四色が同じだから馬鹿じゃないとひっかからないだろ、まあ念には念をだ

「じゃあココで良いわよね？」

「良いよ」

つてか渋谷つてプリクラ多いな、札幌のローソン並だよ（札幌ではローソンが1ブロックに一つのペースである）。

プリクラ専用の店に入ると男人口が少ない、それにみんな俺を見るな、確かに変な髪型だし髪の色だけど……、そっちじゃないよ  
うな気もしてきた

「何でみんな見るんだよ？」

「それはカイがカッコイイからじゃない？それにそんな真つ青な髪の毛にサムライヘアしてたら誰でも目立つわよ、私は勝ち組気分

だけだね」

「勝ち組も何もアオミは俺の‘姉貴’だろ」

‘姉貴’の文字を強調したら全員の目が変わった、これはシスコンを見る軽蔑の目じゃない、獲物を狙うハイエナの目だ。

でも俺も馬鹿じゃない、左手で顔を掻くふりして薬指を目立たせれば…………、女達は舌打ちと共に散った

「あれ？みんなカイに興味無くなったみたいね」

「コレ。今時付き合ってもココにリングはするもんだからね、ハイエナ用の無言警告ってとこかな」

左手を見せると呆れた感じで機会の中に入って行っただ、俺も後を追ってカーテンをくぐる。

アオミの家に着いた時には荷物の到着時間の10分前だった、思わず長居すぎたな、今日はアオミが料理を作ってくれるらしい。

俺はテレビを見てると荷物が届いた、荷物って言っても段ボール3箱に布団だけなんだけだね。

俺は自分の部屋にそれを放置してキッチンに向かった、アオミの飯を食うのは初めてだから心配なんだよな、大丈夫だと思うけど何かいてもたってもいられない

「大丈夫か……………、つて、はあ」

「見ないでよお」

俺は見た瞬間呆れてため息がでた、今日の料理はハンバーグなんだけど形に問題有り、俺だけじゃないと思うけどハンバーグは楕円型だと思う、でもアオミが作ってるハンバーグはハートだ、これはブラコンを卒業したな

「まあ美味ければ文句は言わないよ、不味くても形が普通なら文句は言わないつもりだったけど、後者は前言撤回だな」

「大丈夫よ、私の愛が入ってるから、不味いなんて事は無いわよ」

新婚夫婦でも言わないようなセリフだよ、一週間もすれば飽きるだろう、ってか飽きる、頼むから飽きてくれ、じゃないとチ力に会わせる顔がない。

アオミの料理がどんどん食卓に並べられてく、ハンバーグの形以外は良いな、味はともかくバランスは最高だよ

「いただきます」

俺はアオミの視線が気になるけどハンバーグを一口口に入れた……

「美味いじゃん、少し見直したよ」

「ホントに！？カイに言ってもらえると嬉しい。やっぱり私の愛が入ってるから？」

「いや、それはない」

即答、他人の料理で美味いって感じるのはヒノリくらいだったけど、アオミも中々だな

「アオミは食べないの？」

ボツと俺の顔を見てるアオミが心配になった、全く食事に手をつけないで見学してる

「カイの食べてる顔を見てるだけでお腹いっぱい」

「なら貰っちゃうよ」

「それはダメ！やっぱり腹ペコ」

アオミは食べ始めた、ってか今気付いたけどハンバーグのサイズがデカイ、俺のがデカイ理由は分からなくも無いけどアオミのもデカイ、それにご飯は山盛り、女子高生の食事じゃないよ

「アオミって太らない？」

「何で？」

「いやそんなに食って、飯の量なんて俺より多いだろ？」

「お代わりするからまだまだ食べるわよ」

呆れた、食い意地と弟好きだけは天下逸品と。

俺は疲れたから先に風呂に入らして貰ってる、アオミから先に入る事を勧めたけど断固拒否された。

俺はゆっくりつかつてると脱衣所にアオミが、行動が明らかにかかしい、体を屈めたり、もしかしてあの馬鹿姉貴

「アオミ！もしかして一緒に入ろうとか思っ  
てないよな？」

“バレちゃった？”

ドア越しに聞こえた、ってか本当に入ろうとしてたのかよ

「風呂くらい一人で入れ」

“はい”

なんか物分かりが良いな、アオミはそのまま脱衣所を出て行った。

俺は早めに風呂から上がってソファーに座ってるアオミの所に行こうとした、でもおかしい、もしかしてコイツ服着てないのかよ

「あ、アオミ？」

「カイ！」

やっぱり、俺は急いで顔を背けて頭から被ってたタオルをアオミに投げた

「早く風呂に入れ、風ひくだろ」

「あら気にしてくれたの？それとも恥ずかしいの？」

「良いから早く」

アオミはそのまま風呂に行った、俺は暫くテレビを見てから寝よう。

アオミが風呂からあがって来る前に俺は自分の部屋に行って布団を広げた、横になって目を閉じようとした時、アオミが入って来た

「頼むから一人で寝て……………」

アオミはバスタオル一枚でそこに立ってた、俺は慌てて部屋の隅まで逃げた、本気でこの家はヤバイ

「カイ、一緒に寝よう」

「無理無理！服着ろ！」

「ねえ、寝ようよ」

「マジ無理だから！」

「お願い」

「分かった！服着たらな、一緒に寝るだけだぞ！」

「やったー！」

アオミは走って逃げて行った、あれだけあの姿で迫られたら拒否出来ないよ、ってかホントに恐ろしい姉貴だな。

アオミはパジャマに着替えて俺の部屋に入ってきた、チ力だったら大歓迎なんだけど、アオミは姉貴だぞ、さすがにヤバいだろ

「アオミ、誰にも言うなよ。チ力にも、友達にも、知らない人にも誰にもだ、それが約束出来ないんならこの話は無しだ」

「はい」

アオミはそのまま俺に飛び付いて来た、俺は押し倒されるような感じで布団に倒れる、そのまま隣に置いたけど、怖くて眠れない

「何も手を出すなよ」

「はい」

俺はアオミに背を向けて布団に入った、アオミは抱きついて来た、退けようとしたけど寝息をたててるのを聴いてできなくなった、寝るの早いな、俺は静かに向き直るとアオミ顔が俺の胸の辺りにある、寝顔は可愛いな。

俺はいつの間にか眠ってた、嫌だけど安心出来る不思議な存在だな

## 金と銀

今は男三人で暑苦しく買い物してます、それもこれも、今日は12月18日、超ビッグイベントを一週間後に控えて気付いた俺達。

去年と被るのは極力避けたい、それにチ力の場合誕生もあるんだよな、だから迷ってたんだよ、ネックレスと何かが良いんだけど、その何かがいまい浮かばない

「コガネ、何か無いの？」

「俺に聞くな、ヒノの趣味は分かってもチ力ちゃんの趣味は分からないもんで」

「確かに。コテツは……………、パスだな」

「何でやねん！」

「だってツバサと趣味が同じとは思えないから」

『確かに』

ああ悩む、こんなにチ力にあげる物で悩むなんて思わなかった、何か無いのかよ……………、あ、そうだ、そういえばチ力髪留めが壊れたと言って安いやつ買ってたな、二つ目はこれに決まりだな。

俺達は一通り買って飯を食いにファミレスに入った、商品が運ばれて来て食べながら男の会話というか、女の子がいる前では話せない話というか、ちなみにあっち系の話じゃないから、まあそんな話をした

「ねえ、コガネはんはヒノリはんとは付き合ってるん？」

「分からないけど、告白はどっちもしてない」

「いつも俺らに見えないように手を繋いでるくせに？」

「ブツ！」

食ってたパスタを多少吐き出した、俺とコテツは笑いながらパスタ



を片付ける、コガネは物凄い勢いで水を飲む

「ハアハア、知ってたの？」

「それはなあ……………」

「気付くな言う方が無理やで」

「で、最初はどっちから握ったんだよ？」

コガネは母親の血が濃くてた真っ白な肌を真っ赤にして、頬を人指し指で搔いてる、耳まで全部真っ赤

「ひ、ヒノから」

「ヒノリからねえ」

「コガネはんも腰拔やな、ここはコガネはんからいかなあかんやろ」

「いや、いきなりだったし」

「ならキスくらいはコガネからしてやれよ」

コガネが茹で蛸みたいに真っ赤になった、元が真っ白だから赤さが目立つ。

ヒノリもかなり積極的だな、喋らない分行動で示す男みたいなタイプとか、それともコガネに呆れて

「でもどうやれば？」

「俺はノリというか、勢いというか」

「コテツは？」

「それがさんざん言つときながらわいもまだやねん、ツバサもあんなさかい、タイミングが無くてな」

コテツがまだ何て以外だな、まあ二人でいるとずっと騒いでるからタイミングが無いのか、ホントに以外

「その前にコガネは自分の気持ちを伝えろ、十中八九ヒノリはコガネの事が好きだよ」

「どうやって？」

コガネのその言葉を聞くと、コテツはコガネの隣に行って肩を組んだ、コテツはコガネの顔を自分に向けた

「ヒノリ、めっちゃ好きやで……………みたいな感じじゃ！」

周りの人がみんな見てるよ、ホモに見えてるんだろぅな、俺はそれ

を客観的に見て楽しんでる、それにコガネは気付いてコテツをの腕をどけた、コガネはコテツに周りを見るように合図を送る

「ちよつとやりすぎたみたいやな」

コテツはそのまま自分の席に戻った、コガネは恥ずかしいのかまた顔を真っ赤にしてる

「コガネは奥手過ぎるんだよ、たまには自分の欲に溺れてみれば」

「それが出来れば苦労しないって」

「コガネはヒノリが他の男に持つてかれるとか思った事はないの？ちんたらしてたら足下すくわれるぞ」

「幼稚園入る前から一緒にいると、相手の一挙一動で分かっちゃうんだよね、相手が何を思ってるのかが、だから男が来ても全く興味が無いのも分かる、だからヒノが誰かを好きになるなんて思った事も無かった、当然俺にも」

「そっか、コガネにとつてヒノリは誰よりも自分を知ってる人間だな、コガネはヒノリの事なら誰よりも知ってる、だから分かっちゃうんだな、でも自分に対しての気持ちは気付かなかったと

「ココからは俺の推測に過ぎないけど、ヒノリはコガネの事をずっと好きだったんだと思う、でもコガネはヒノリの‘好き’って部分だけは客観的に見る機会が無かった、だから‘嫌い’とか‘ウザイ’には気付いたけど‘好き’だけは常に他人に向けられ無かったんだよ、コガネはそれが男に興味が無いのと勘違いしたんじゃないか？ヒノリのコガネに対する接し方が変わった時ってあった」

コガネは顎に手を当てて考えてる、俺の予想だとあるハズだ、ガキの好きと恋愛感情つてのは全く別物だから、気付いた時は絶対に何かが変わるハズ

「多分だけど、中二の頃かな、買い弁だった俺にヒノリが弁当を持ってきたんだ、それからずっと俺に弁当を持つてくるようになった」

「多分それだ、ってかそれなら気付けよ」

「ヒノリはなんて良い女やな」

「今までも何回か家に来て作ってもらった事はあったから、なんか

そこまで違和感は感じなかった」

静かに進む恋か、良く言えばクールな恋、悪く言えば奥手な恋、ヒノリもコガネと一緒に相手の事を知りすぎてたんだろうな、勇気を出したのはヒノリの方だけど

「コガネにはもつたいたないくらい良い女だな」

「そ、そうかな？」

「何でコガネはんが照れるんや」

「チカの方が100倍良い女だけどね」

『はあ』

うわあ、物凄い呆れた顔でため息つかれた、自分の彼女の自慢して何が悪い、自慢出来ない彼女だったら別れてるって。

俺らはファミレスを出て街を歩いてる、早く帰っても良いんだけど、それじゃつまらないから今に至る。

途中で見つけたデカイゲーセンに入った、4階建てで一回はプリクラが占めてる、俺らはとりあえずパンチングマシンの前に行った  
「ビリは一番にジューズ奢りやで」

『却下』

「なんでやねん！」

俺とコガネは顔を見合った、当たり前前の事だろ、ゴルゴ 3に射撃で勝負を挑んでるようなもんだよ

「なんでわざわざ相手の土俵に入って、賭けをしなきゃいけないんだよ」

「……………確かにそうやな、とりあえずやるか」

「ちよつと待った、俺とカイからやる、コテツからやったら俺らがシヨボくみえる」

コガネはコテツを押し退けて金を入れた、グローブを左手に着ける、そつえばコガネは左利きなんだよな。

サンドバッグみたいな柱が起き上がって来て、画面にスタートの文字が出た、コガネは軽く助走を付けて二重円の真ん中を殴る、ズドンという音と共に画面に文字が浮かび上がった

《143・3kg》

「中々やるじゃん、コガネ」

「ケンカ慣れかな」

俺はコガネの次にスタンバイした、柱が起き上がり、俺は思いっきり殴った

《144・0kg》

「俺の勝ち」

「別に勝負してないし」

「次はわいやな」

コテツはグローブを着けずに構えた、肩幅に足を開いて体を少し沈める、息を吐いて柱を見た

「ハッ！」

かけ声と共に殴る、俺達のズドンとは違って、ドスンという重い音が響いた

《163・8kg》

「……………」

俺らは口が空いたまま黙ってしまった、絶対コイツにはケンカ売れない、つてか絶対に殺される

「まあまあやな。あれ、どないしたんお二人はん？」

「凄すぎ」

コガネは全く声が出ないらしい、ギャラリーも集まって来たし、俺らだけの記録でも凄いと思うよ、でもコテツのせいでそれが薄れた

「コテツ、コガネ、早く出よう、見られるのは居心地が悪い」

「ホントだ、出るか」

「なんやお二人はん、わいはもうちょい目立ちたいんやけどな」

そんなコテツを置いてギャラリーの中から出た、コテツは暫くしてからギャラリーに愛想振り撒きながら出てきた。

俺らは一つ上の格ゲーのコーナーに行った、これはコガネからのお願、なんかコガネはゲームしないタイプだと思ったのに、以外だな「ちよつと見てろよ、ココのレコード全部塗り変えてやるから」

「格闘系のゲームにレコードなんて無いだろ」

「……………まあ、良いから見てろ」

「馬鹿や、馬鹿やで」

コテツがクスクス笑ってるのを睨みながらゲームを始めた、反対側に人がいて対戦するらしい、素人だから何が凄いかよく分からないけど、コガネが異常なくらいに強い事は分かる、あつという間に相手が何も出来ないまま終わった

「どう？強くな」

「確かに強いけど、自慢出来る特技じゃないよな」

「そうやな、ゲーム得意言われても引くで」

「うるせえな」

その後もコガネはゲームをやりつづけた、俺とコテツはついていけずに近くのベンチで休戦、ジューズ買ってコガネの方を見てる、コガネの周りにはかなりのギャラリイがいる、今回は男だけじゃなくて何故か女の子も

「コガネはん戻ってこれるん？」

「知らないけど、俺らもハイエナに狙われてるぞ」

コテツに顎で知らせた、少し遠くに女の子がいる、さっきコテツが愛想振り撒いた時に連れた奴らか、コテツはそれに気付いて手を振った

「ねえ、今私に手を振ったよね？」

「良かったね、私は隣の人の方がタイプだけど」

「もう一人はいくない？私的にはあの金髪の人が良いのに」

最悪だよ、コテツのせいで3人釣れた、みんな可愛いんだろうけど、全く興味がない、コテツもチラチラ見て遊んでるだけ、最悪な男だな

「女の子で遊ぶな、後でめんどくさい」

「わいは女の子とは見てないで、ただのギャラリーや」

最低、社交的もここまできると犯罪だよな、しかも彼女持ちだし、ツバサ以外は男も女も関係ないんだろうな、コテツにとっては

「多分真ん中の子は後で来るぞ」

「何で？」

「コテツが遊んでるから」

「じゃあないやん、あっちが見とるんやもん、シカトしたら可哀想やん」

多分これが本心だ、人が良すぎるのも良くないな、頭が悪いからそこまで回らないのか？

コガネがギャラリーの輪から出てくるとオマケも付いてきた、ギャラリーにいた女の子だ、なんでここにいいのかは分からないけど、一気に群がって来た

「コテツ、帰るか」

「そやな」

俺らはあえてコガネを置いて出ようとしたけど、コガネはなんとか追いついた。

ゲーセンを出るまでずっと後ろをつけられる、多分さっきの女の子三人衆だろうな

「コテツ、やっぱり着いてきたぞ」

「あつちやゝ、やつてもうたな」

俺らが出ると檻から放たれたように俺らのところに走って来た

「あのお……………」

「なんや？」

「ほら、早く言いなよ」

「そうだよ、帰っちゃうよ」

他の二人が催促してる、コガネは全く理解出来てない、コテツは頭を掻きながらしかめつつらをしてる、コテツに話しかけて来た女の

子は顔が真っ赤だ

「これから暇ですか？」

「全然、彼女を待たせてるから、すみまへんな」

「そうですか、すみません」

そのまま三人衆は去って行った、コテツにしては案外あっさりしてるな、しかも嘘ついてるし

「やってもうたな、今度からは考えなあかな」

「だから言っただろうに」

「あのお、さつきから話が掴めないんだけど」

蚊帳の外だったコガネが静かに入ってきた、俺とコテツはコガネがゲームしてる時の事を話した、コガネはため息について歩き出す

「馬鹿だろ」

「まさかこうなるとは思って無かったんや、ただ見てるから返しただけやで」

「それがいけないんだよ、悪いとは言わないけど、ツバサ君が可哀想だろ」

「……………そやな、今後は注意します」

俺らはそのまま家に帰った、今日はチ力のだけじゃなくてアオミのも買ってる、だからなるべくアオミには会わずに部屋に行きたいんだよな、いつも帰ると新婚夫婦ばりの勢いで抱きついてくるし。

そんな俺の心を知ってか知らずか、今日、アオミの帰りは遅かった

## 青と銀の準備

気付いたらあつという間に来てた今日、集まって騒ぐだけだけど、今日集まるっていうそれだけが、大事なんだと思う。

今日はクリスマス、こういう行事となると、飯を作らされるのは俺とヒノリ、その他は買い出し、何気に俺とヒノリの二人ってのが多かったりする。

何度か二人で作った事があるから息は合う、去年のダイチより100倍楽だな

「去年まではコガネってクリスマスどうしてたの？」

「クラスの人を集めて騒いでた」

「ヒノリは？」

「私は違う子達と。でも絶対にクリスマスかイブ、どっちかに会いに来てくれる、プレゼントだけ渡しに」

ヒノリは微笑みながら話してくれた、多分友達と騒ぐよりもコガネにクリスマスという日に会えるだけで嬉しいんだろうな、コガネはあんな性格だから一緒に過ごすのは照れて出来ないだろうし。

ヒノリは多分色んな事を思い出してたんだと思う、いきなり含み笑いでクスクス笑い始めた

「どうしたの？」

「いや、去年の事なんだけど。コガネ、去年はクリスマスの夜になつても来なかったんだ、私が諦めた時だった、いつもみたいに電話がかかって来て外に出たら、コガネ壁に持たれながら座ってた、コガネの顔を覗き込んだらすごくお酒臭くて、歩けないくらいに酔ってた」

多分酔つてもヒノリに会うのだけは本能が後押ししたんだろうな、オールして酒飲んで酔っ払って、フラフラになつてもヒノリだけは、か

「しかもそれだけじゃなくて風も引いてた、半袖でうちまで来たん



だもん。私はコガネに肩を貸しながらコガネを家まで送った、その時のクリスマスはコガネの看病で終わっちゃったんだ。泊まり込みで看病してコガネが次ぎに気づいたのは、26日の10時だった、コガネは慌てて時計を見て私に時間を聞いて、そしたら泣きそうになって私に謝って来たの、『ゴメン、ヒノのクリスマスを台無しにして』だって、その時くれたのがこれ」

ヒノりは自分のこめかみにあるヘアピンを指した、コガネもうらやましい奴だな、夜通しで看病してくれる幼馴染なんていないぞ

「じゃあコガネとのクリスマスって始めて？」

「そうだよ、だからそれでも今は興奮してる」

ヒノりは顔を真っ赤にしてる、チ力がいなかったらヒノりに惚れてるよ

「ヒノりは良い女だな」

俺はフライパンを振りながらヒノりを見て笑った、ヒノりは鋭い銀色の眼をいっぱいに開いてフリーズ、何か去年同じ事言っただけような反応した奴がいたな

「大丈夫だよ、親友として言っただけだから、それ以上でも以下でもない。第一、チ力の方が良い女だから」

「呆れた、カイって何でそんなにチ力が好きなの？」

「怒らせたら悪いけど、ヒノりは一目惚れしてたこと無いだろ。俺もチ力に会うまでは無かった、前にも話したと思うけど、一回精神的に腐ってた時期があった、その時に出会ったチ力は女神に見えたんだ、泣いてるチ力の背中を見ただけで死にそうなくらいドキドキした、話しただけで思考回路がぶっ飛んだ、想っただけで心臓が止まるくらい苦しかった。もう好きとか愛してるとかそんなものじゃない、言っちゃ悪いけどコガネやヒノり、コテツやツバサ、たとえアオミでもチ力を俺から引き離そうとしたら、迷わず殺す、チ力は俺にとっての太陽なんだ、真っ暗な海の底に沈んでた俺を照らしてくれた太陽」

ヒノりが途中から呆れてるのは分かった、でも聞かれたから応えた

ただだし、自分でも馬鹿みたいにチカに依存してるのは分かってるけどね

「でもそれってチカを束縛してる事にならない？」

「別にチカが別れたいって言ったら別れるよ、チカがそれを心から願ってるならな」

ヒノリは俺の方を見て首を傾げた、分からないのも無理も無いとは思うけど、それが俺の考えだ

「でもそれって、少し矛盾しない？」

「チカが拒否したらそれを受け入れる、それも相手を想うって事だろ、束縛するのはただの自己満足だよ」

ヒノリは黙ったまま窓から外を見た、外は満面の星空、雪は降りそうにないけど星は栄える、寒い時は光が綺麗に見えるからな、チカも同じ空見てるんだろうな

「買い出し遅い」

「不安？」

「チカも女の子だし、二人きりだし」

「俺らもじゃん、でも何もない、アイツらも何も無いだろ。それに俺もコガネも、手を出したら後が怖いから」

ヒノリはクスクス笑ってる、男ってのはそういうもんなんだよ、別に俺はヒノリに手を出すつもりはないし、コガネが手を出すとも思えない、だから心配するだけ疲れるだろ

「じゃあもしコガネがチカに手を出したらどうするの？」

「ヒノリに手を出す」

ヒノリは顔を真っ赤にして、下を向いちゃった、俺はヒノリの頭を掴んで、そのままこちに捻った

「嘘、コガネには動けなくなるまで手を出すけどね」

「カイが一番モテる理由が分かった」

別に俺には分からないんだけど、しかも不思議な事言い出すね、これは自惚れじゃないけど、どうせ皆面食いだろ

「勘違いさせてる、私がコガネを好きじゃなかったら、チカがいて

も好きになつてゐる。心当たりあるでしょ？」

「……………あります」

コテツに説教出来ないな、普通に接するだけで好きになられたら困るし、でもあのサエでもあだからな、注意しよ

「そんな事言つたらコガネもヤバいだろ」

「何で？」

「コガネの場合話すだけで顔が真っ赤になるじゃん、唯一最初からまともに話せたのはツバサだけ、あれはケンカだけど、顔真っ赤にするのが可愛いらしいよ」

ヒノリは天井を見ながらコガネの事を考えてるっぽい、顔を真っ赤にして頬に手を当ててる

「確かに」

「男はヒノリが無口だからボソツと何か言うだけでヤバいんだって、みんな何してもダメなんだよな」

二人で頷く、何で人は追えないものばかり追おうとするんだろう、コガネは目の前にあるものすら掴もうとしないのに、不思議だよな

## 赤と金の準備（前書き）

今回はコガネ目線です。コガネ目線は案外難しかったけど、頑張りました、見てやって下さい。

## 赤と金の準備

真つ赤な短い髪の毛の前髪だけを上げて、体は浅黒い、少し子供っぽい顔立ちだけど、そこら辺の女の子よりは可愛い、それが今俺と買い出しに来てるチカちゃん。

相手がチカちゃんってのはまだマシだけど、ツバサ君じゃないだけ良いんだけど、やっぱりヒノ以外の女の子って慣れないんだよな、コテツとツバサ君はやる事があるから、って俺らに押し付けてきやがったし、それにチカちゃんって男っぽいところあるだろ、更にやりづらいんだよな、勝てないんだよな

「コガネ、何ボくとしてんの？」

「別に」

今は飲み物を買ってる、女の子に持たせる訳にはいかないから持ってるけど、チカちゃんの背中って案外大きく見えちゃったりする

「なあ、こんなにジューズばかりいらなくない？」

「じゃあ何？お茶とか？」

「酒」

「お酒！？」

チカちゃんが大声で叫んだから思わず口を塞いでた、ってかチカちゃんに触れちゃった、カイはこれくらいじゃ怒らないと思うけど、俺が恥ずかしい

「だ、だから、やっぱり酒は必要だろ」

「アタシ飲んだ事無いし、カイも飲んだ事無いと思うよ」

「あれば飲むから」

俺はジューズを半分近く返して酒を適当に買い物籠に入れた、チカちゃんは若干不安そうな顔をしてるけど、大丈夫大丈夫、それに梅酒とかならそんなに酔わないし。

ある程度飲み物を買った後は、いろいろパーティーグッズ、コテツとツバサ君が変装物は買うなとか言ってたな、何かいない理由が推

測がつくんだけど。

チカちゃんは自分が思うがままに走って行く、それに着いてくだけで体力使うつて、男っぽいんだけどガキっぽい、変な奴

「コガネ遅い！早く来いよ」

「ちよつと待って、俺荷物持つてるんだから」

「男なんだから大丈夫だろ」

「男にも体力の限界があるから」

「あつそ」

流された、かなり普通に流された、カイ、俺にチカちゃんを操るのは無理だ。

その後も俺は振り回され続けた、女の子って怖い、ってかチカちゃんだけが怖い、やっぱり女の子は苦手だな、うるさい男も嫌いだけど。

俺達は時間が余ったし疲れたから、喫茶店に入って休む事にした、基本的に疲れたのは俺だけなんだけどな、カイは凄い、俺はアクテイブな女の子についていけないよ

「……………疲れた」

「だらしない、これくらいで疲れたなんて」

「チカちゃんが俺を使いすぎなの」

「うるさい」

パチンとデコピンされた、ってか痛い、女の子の力じゃないって、額を押さえながら顔を上げた

「……………痛い」

「お疲れ様、ありがとな」

チカちゃんが笑ってる、可愛い、ヒノを好きじゃなかったらヤバイ、カイはこれに惚れたんだろうな

「どうした、顔真っ赤だぞ？」

「……………別に」

「何だよ、気になるだろ」

ナイスタイミングで飲み物が来てこの話題は強制終了、そんな女の子に面と向かって、可愛いなんて言えないって、カイなら言いそうだけど。

一口俺がアイステイーを飲むとチカちゃんは目を丸くして見てる、あんまり見るもんだから顔を背ける

「何？」

「ガムシロップは？」

「いない」

「大人だね」

「そうか？チカちゃんがガキ過ぎるんじゃない？」

“ゴツツ”

今度はグーで殴られた、痛い、女の子に殴られたのは初めてだし、ヒノなら流してくれるのに、頭使わないと帰るまでにボコボコにされる

「ガキじゃない、コガネが爺なんだよ」

今度はフグみたいに膨れてる、これはモテるのも必然だな、ヒノ、俺に理性をくれてありがとう

「今アタシに惚れかけただろ？」

「自分で言う事がそれ？」

「うるさい。で、どうなんだよ？」

「否定はしない、チカちゃんにはカイがいるだろ、それに俺は……」

「ヒノリの事が大好き、でしょ？」

俺は無言で頷いた、もうみんな知ってるんだろうけど、改めて言われると恥ずかしい

「今日ヒノリにコクつちゃえよ」

「いきなり変な事言い出すんじゃないよ」

「だって好きなんだろ？しかももう付き合ってるようなもんでしょ」  
ホントにズバズバ物を言う人だな、俺なら引け目を感じて言えないんだけど、チカちゃんってそこら辺がサバサバしてるよな

「何か恥ずかしいじゃん」

「不良のクセに恥ずかしいとか言って、笑える」

「俺は不良じゃない、ピアスもチェーンもファッション、髪の毛は自毛」

「冗談だよ、冗談」

腹を抱えながら笑われた、机に顔を埋めて机をバンバン叩いてる、つてか流石にこれは他人に迷惑がかかるな。

俺は叩いてるてを受け止めて、反対の手でチカちゃんの頭を掴んで起こす、目には涙を浮かべてる、何がそんなに楽しいんだよ

「静かにしろ、迷惑だろ」

「ホントだ、少し笑いすぎたな」

「それに涙」

俺はチカちゃんにティッシュを渡した、チカちゃんはまだ若干笑いながら涙を拭いてる、チカちゃんの笑顔って純粹に眩しい、惚れる惚れないは別として何か輝いてる

「コガネって優しいんだな」

「何が？」

「ティッシュありがとう」

「別に普通じゃねえの。それと、人の事で大爆笑するな、……………」

……何か恥ずかしいだろ」  
顔が熱い、そんな俺の顔をチカちゃんは覗き込んで来た、ビツクリして背持たれに寄りかかると、勢い余ってそのまま引っくり返った、俺は慌てて直して普通に座る

「大丈夫か？」

「何とか」

「でもコガネって可愛いな、すぐに顔を真っ赤にして」  
「うるせえな」

「最初の頃なんてアタシと話ただけで赤らめてたもんな」

また古い記憶を、女の子なんてヒノくらいしか免疫が無かったからな、今でも三人以外はまともに喋れないけど



「外見だけ見ると怖いんだけど中身は可愛いんだよね、そのギャップがモテる理由とアタシはみた」

「そうなの？」

「そう、だってコガネホントに可愛いんだもん、なんかいじめたくなるんだよね」

「チカちゃんってS？」

その言葉に顔を真っ赤にしてうつ向いちゃった、それだけで？って感じだよな、カイと一晚過ごしたのに

「チカちゃんはカイのどんなところが好きなの？」

「何だよいきなり」

「何となく」

「カイって物凄い大きいんだよね、なんか包容力があるっていうか、包み込んでくれる感じ、隣にいるだけで安心出来る。カイはアタシの事を太陽って言うてくれた、アタシが太陽ならカイは海、太陽を映し出してくれる海、太陽は一人で輝いてても虚しいだけだろ、でも海に反射すると物凄く綺麗に映るんだ、だから海があれば太陽は綺麗に輝けるの」

何かチカちゃんとカイって会うべくして会った、運命そのものみたいだな、チカちゃんが太陽でいられるのは、海であるカイがいるから、か

「それに太陽と海って夏ってイメージがあるでしょ？」

「まあそうだな」

「アタシの名前は千の夏って書くだろ、太陽だけの夏なんて誰も望まない、海があって初めて千の夏を楽しめるんだよ。無理矢理のこじつけだけどね」

「何かチカちゃんって良い女だな、ヒノより先に会ってたら惚れてたかも」

「今は？」

「ヒノ以外は親友止まりだね、チカちゃんもツバサ君も親友だと思ってる、分かるだろ？」

チカちゃんは微笑みながら頷いた、今の俺はヒノ以外に興味はない、多分みんなそうだと思う、好きなんだからしょうがないだろ。

いつかはこの気持ち、面と向かって言える時が来るはず

## 赤が吞まれる

コガネとチカは帰って来たし、料理も出来ただけで約二名が帰って来ない、あの馬鹿二人組、コガネ談によると二人で消えたらしい、ホントにどこで何やってるんだよ、電話の電源きってるし。

……………もしかして、大人の階段登つてるとか？それなら邪魔しちゃいけないな、二人の時間を作りたいなら言ってくれば良いのに。

“ガチャ”

大きな音と共に誰かが入って来た、走ってこっちに来る二人は言うまでもなくコテツとツバサだ、でもおかしい、服装がおかしい、ってか変な人、だってコテツはトナカイ、ツバサはサンタクロースの格好だぞ、しかもツバサのサンタクロースは袖が無いベストタイプにミニスカート、これはマニア向けだな

「メリークリスマスやで」

「これ似合う？僕的にはかなり可愛いと思うんだけど」

みんな呆然、コガネなんて既に見てすらいらない、ヒノリは最初から見えないし、チカは……………、目が輝いてる

「ツバサ可愛い！！」

「キヤー！チカチカ分かってくれる！？」

二人で大ハシャギ、ってかこんなのタメに遅刻したのかよ、なんか呆れた。

俺は騒いでる三人を無理矢理座らして、俺も座った、始めたらまたうるさくなるんだろ、どうせ

「じゃあ始めましょか！」

『メリークリスマス！』

約一名を抜いてジュースで乾杯した、コガネは酒、コテツも一気にジュースを飲んで酒につけた、ツバサとチカは皿に取り分けずにそのまま食べ物をつまんでる、ヒノリは無言で皿に食べ物を取り

分けてる。

「カイもいる？」

「その前にコガネにあげるよ、酒入る前に食ってもらえ」

俺は自分で取った、ってかコテツは酒が入ったら危ないんじゃないの、只でさえあのテンションなんだから、落ちてくれれば幸いなんだけどな

「カイとチカちゃんも飲めよ」

「酔わない程度にな。チカはどうする？」

「……………味見だけ」

チカは始めてつばいから梅酒で、別に酒なんていらなんだけど、一杯くらい飲んでおけば後で言い訳できるし

「カイ、何か楽しいんだけど！」

「何が？」

「分かんない！でも楽しい」

チカが酔った、ってか早すぎだろ！？もう酔ったの？まだ一杯しか飲んでないじゃん、チカはセーブさせないとヤバいな

「コガネ！もう一杯頂戴！」

「OK！チカちゃんノリ良いね」

「まあね」

チカは缶を開けて飲もうとしたけど、取りあえず制止した、チカは俺の手を退けて無理矢理飲んだ、しかも一口で半分ほど

「ヒノリ、コガネを酔わせないようにお願いね」

「私が酔っちゃったかも」

ヒノリはシャツのボタンを外して扇ぎ始めた、ってかそれは大学のサークルで先輩落とす時に使うテクだろ、俺に使ってどうする、それにヒノリまで酔ったの！？

「冗談よ、私酔わない体質だから、馬鹿みたいに飲まなきゃ酔わない」

「そりゃ良かった。ツバサは？」

「僕は飲めないから安心して」

「三人なら大丈夫か」

チ力は酒に飲まれてるし、コテツは酔ってる酔ってないか分かんないし、コガネはいつもよりテンション高いし、まあ楽しくて良いんだけど

「カイ、何かこの部屋暑くない？」

「定番ありがとう、でも暑くないし脱ぐなよ」

「じゃあカイがアタシの体温奪って！」

チ力がいきなり抱きついてきた、ホントに熱いな、酒臭いし、でも何かトロンとしたチ力がめっちゃめっちゃ色っぽく見える、二人なら襲ってたかも

「カイ、キスしたい」

「はあ！？」

「キスがしたい！キスして」

「みんなの前で出来る訳ないじゃん、帰る時に好きなだけしてやるから」

「グヘヘヘ、約束だぞ」

「ああ、だから酒を抑えろ」

敬礼してまた酒を飲んだ、なんかもうパーティーじゃないよな、コガネは酔っても平常心を保ってる、コテツはツバサの膝枕で爆睡してる、一番たちが悪いのはチ力か

「カイ飲んでるう？」

「飲めないよ」

「にやんで？」

「チ力が酔ってるから」

「酔ってないよ、アタシは普通」

酔ってるよ、心の中でつつこんどいた、俺以外の前で酒を飲まないで欲しいな、確実に家に連れてかれる。

ツバサはコテツを膝で寝かしつけてるからおとなしい、子供を見るような目でコテツの髪を撫でてる。

ヒノリは逆に酔ったふりしてコガネにくつついてる、コガネが飲むとすれば酒を取り上げて自分向かしてる、プロだな、でもコガネも寝そうだな、壁でウトウトしてる

「カイ、もう我慢できない」

「はい……………！？」

チ力の方を向くとチ力の唇が俺の唇に当たった、俺はビックリして目を見開いてると、そのまま崩れるように眠った

「チ力チ力やるう」

「そうやるんだ」

ツバサとヒノリに見られた、始めて他人に見られたかも、コガネは壁に背を預けて寝てる

「コガネ、寝てて良かったね」

「そうだな」

「僕もチ力チ力にキスしていい？」

「コテツにな」

ツバサがフグみたいに膨れた、チ力は俺の肩で寝てる、もうお開きかな

「終わりだな」

「みんな寝ちゃった」

「ツバサ、コテツ起こして帰りな。俺も片付けたら帰るから」

「いいよ、私が片付けるから」

「良いのか？」

「カイっち、ヒノノとコガネん二人きりにしてあげな、これからは大人の時間だよ」

「そうだな」

俺はチ力をおぶった、ツバサはコテツの耳元で何か囁くとすぐに起きた、魔法の呪文でも唱えたのか？

「ツバサ、真っ直ぐ帰るの？」

「いや、コテツ送ってから帰るよ」

「ツバサはどうするんだよ？」

「一人で」

さすがに夜道で女の子を一人で帰すのは良くないよな、コテツの家からツバサの家まで送って行くか、片道10分くらいだもんな

「ツバサ、コテツの家にいろよ、迎えに行くから」

「別に良いよ、一人で帰れるから」

「最近不信者が多いんだろ？」

「……………」

「コテツも使いもんにならないし。少し遅くなるけど待ってるよ」

「分かったよ」

コテツは起きた瞬間寝た、これで帰れるのかよ、ヒノリは一人で黙々と片付けてるし。

俺はチ力をおぶってコガネの家を出た、ツバサはフラフラになりながらコテツを支えてる。

二人っきりが勝負でしょ

## 多色の夜（前書き）

今回は色々視点が変わります。

なるべく読み易いように作ったつもりです。どうぞ見てやって下さい。



## 多色の夜

とりあえずチ力をおぶってコガネの家を出た、顔が肩の位置にあるから酒の臭いが漂ってくる、寝顔は可愛いんだけど酔っ払いだしな、ここまでチ力が酒に弱いとは思わなかったし、寒いから風邪ひかなきゃいいんだけど。

プレゼントも渡せなかったし明日の朝に会いに来なきゃな、ホントにチ力に酒はタブーだし

「……………う、うん」

チ力が起きた、背中にいるからどんな事してるか分からないけど、伸びてるような気がする

「あれ？なにこれ？」

「チ力が寝てる間に終わったよ」

「そう、何か気持ち悪い、……………吐きそう」

「はっ!？」

「ゴメン！降ろして！」

チ力は勢いよく俺の背中から降りて、道の端で吐いた、そりゃしょうがないよな、始めて飲んだのにあんだけハイペースで飲んだら。

「チ力、水飲めよ」

「ありがとう」

こんなこともあるのかとコガネん家から水を貰って来た、チ力は水を飲んで落ち着いたらしい、フラフラだけど歩き始めた、俺はチ力を支えながら歩く。

顔色も悪いし、何だか気分も悪そうだし、大丈夫かな？

「おぶろうか？」

「いいよ。それよりゴメンな、せっかくのクリスマスなのに」

「別に良いよ、変な事は……………」

今キスした事言ったら泣きっ面に蜂だよな、明日で良いか、明日なら思いつきいいじれるし。

「どうした？」

「どうもしてないよ」

「酔っててほとんど記憶が無いんだよ、恥ずかしい事とかしてないよな？」

「大丈夫、コガネもコテツも寝ちやってたから」

「そっか……………」

いつになくテンション低いな、まあ早く寝かして、明日はあんまり会えないけど会ってやるか。

明日はアオミが夜空けとかなないと犯すとか言ってるからな、本気でやりそうだから怖いんだよ。

皆も帰ったし、部屋も片付けたし、コガネをベッドに寝かせようかな、私は今日は泊まるって言ってるから大丈夫、別に不純な理由じゃないわよ、コガネがこうなるのが分かってたから。

私は壁に寄りかかって寝てるコガネを起こそうとした、でも寝顔が可愛いから起こすに起こせない。

「……………ん、……………ヒノ……………好き……………」

「えっ？」

「…………………………」

寝言か、でも今コガネの口から好きって言われた、寝言でも心臓がうるさくなる、血が体の中を物凄い勢いで回ってる、顔が熱い。

私はコガネに毛布をかけて飲み物を取りに台所に行った、何を飲むかな、コガネの冷蔵庫の中は飲み物ばかりだからね、大体私が

買ってきて、その場で作ってるから食材はたまらないんだよね。

私があさりながら冷蔵庫を見てると背中になにかが乗った、重くて暖かい、ビクリして動けない、私を包むように毛布にくるまれる、でも毛布の下には人間の腕がある、背中にあるのも人、もしかして？

「コガネ？」

「ゴメンな。始めて一緒に過ごせるクリスマスだったのに」

「どうしたの？いきなり」

「ヒノ、好きだよ」

嘘？今‘好き’って言ったよね？寝言でもない、夢でもない、コガネはお酒強いから酔ってもない、心からの‘好き’だよ？

顔が熱い、心臓が爆発しそうなくらいうるさい、息が詰まるくらい苦しい。

何だか目の前が歪んで来た、視界が悪い、私泣いてるの？

でも何で、悲しくないのに、むしろ嬉しくて倒れそうなくらいなのに、違う、これは嬉しくて泣いてるんだ、何だか暖かい。

「ゴメン！悪い事した！？」

コガネは慌てて離れようとしたけど腕を掴んで引き寄せた、コガネが逃げないように手を掴んで、コガネの温もりが逃げないように毛布で包んで。

台所は冷蔵庫も開いてるし、暖房が届かないから凄く寒いハズなのに、私達は暖かい。

「待ってたよ、ありがとう」

「良かった。あとコレ、プレゼント」

そっとうとコガネは毛布の中で私の首になにかを架けた、冷たい金属の物だ、ネックレス？

コガネは私に見えるように持ち上げた、その時に胸に触れたのは秘密。

それは左右非対象のハート、でも可愛い、歪んでるけどハートには変わりない。

「どう？」

「可愛い。じゃあコレは私から」

私は少し反って耳の位置まで顔を寄せる、コガネに抱かれてるから顔が近い、息使いまで分かる。

コガネの耳のトープンを外してピアスを付けた、ひっかけるやつでクロスがぶら下がってる、見えるように鏡を渡した。

「コガネ一個無くしたって聞いてたから」

「しかもコレって？」

「コガネが雑誌で見た物、コガネの事は誰よりも見てるんだから。私の瞳には好きな人しか見えてない」

「……………俺も」

そういつてコガネはより強く抱き締めてきた、私の心臓の音が聞こえそうなくらい。

コガネ、大好きだよ。

僕はコガネを送ってる、足取りは確りしてるしちゃんと喋れてるからそこまで酔ってないと思う、お酒の臭いもあんまりしない、多分今日一人だけ部活終わりだから疲れたでしょ、トナカイ（コテツ）が酔ってたらサンタクロース（僕）はどうしようもないからね。

でも何かコテツが元気がない、何でだろう？

「コテツ、どうしたの？」

「ホンマにゴメン！」

コテツは頭の上で手を合わせた、僕はよく分からなかったから首を

傾げた。

「わい疲れてて、眠ってしもた。せつかくのクリスマスなのに」

何だそんな事気にしてんだ、別に僕はそんな事気にしてないのに。僕は手を繋いでたけど腕を抱き寄せた、コテツに体ごと近づく。

「クリスマスは明日だよ、今日イヴ、明日も会えるじゃん！」

「許してくれるんか？」

「許すも何も僕は気にしてないよ！それにコテツが疲れてたもん」

「ツバサあ！」

コテツは僕を抱き上げてクルクル回る、何かドラマ見たいで嬉しい。これを皮切りにいつものコテツに戻った、やっぱりコテツは元気じゃなきゃ、僕もつまらないもん。

「ツバサ、左手出してや」

「何で？」

「ええやないか、ホレ！」

コテツは僕と手を繋いでる手とは逆の手を取った、僕はそれを見るとコテツはポケットから何かを取り出して僕の指にはめる、もしかして！？

リングだ！コテツも自分の左薬指に指輪を付けて顔の位置まで上げた、僕と同じ。

「ペアリングや！」

僕は口が空いたまま喋れなくなっちゃった、嬉しくて、ビクリして。

「どないしたん？嫌か？」

僕は思いっきり首を横に振った。

「嬉しい！しかもこのリング可愛い」

「ホンマか？」

「ホンマ！超可愛い」

コテツは跳びはねながら喜んでる、僕もつられて同じように跳びはねちゃった。

コテツが後ろ向いてる間に持ってきた紙袋からコテツへのプレゼント

トを取り出す、いっぱいいっぱいになりながらコテツの首に巻いた。  
「わっ！？何や……、マフラー？」

「手編みって嫌？」

「手編みやの！？」

「うん、編み物は得意だから。大丈夫？」

「最高やで！ごつつう嬉しいで」

コテツはそのまま抱きついてきた、僕もコテツの首に手を回す、そのまま軽々と持ち上げられた。

下ろされると頭の後ろに手が当てられた、コテツの顔が少しずつ近付いてくる、そしてそつとコテツの唇が僕の唇に触れた。

チ力をツバサの家まで送った、とりあえず暫くはチ力のそばにいようと思う、気分が悪いから俺もチ力を一人にするのは不安だ、ツバサは少し遅くても大丈夫だよな。

とりあえずチ力をソファアに座らして水を飲ました、酒臭さも無くなつてたけど念のため。

チ力一氣に水を飲み干すと俺の前にコップを差し出して来た、俺は渋々もついっぱい注いで渡す、それも一氣に飲み干した。

「よく飲むね」

「だってさっきから体が暑くて暑くて」

そういつてチ力は服を脱ぎ始めた、最後の一枚までは俺が拒んだけど、かなり薄着だ、大丈夫なのかな？

「カイ暑い」

「俺にどうしろと？」

「キスして」

「何でそこに行き着くのが分からないんだけど？」

「良いからキスしろ！」

まだ完全に酒が抜けてないのかな、いつものチ力だったらこんな事言わないのに。

俺はやけくそ気味にキスをした、でもやっぱり今日のチ力はおかしかった、いきなり俺の唇を割ってチ力の舌が入って来た、そんなキスは今までした事が無かったから目を見開いたまま動けない、チ力はどんどん俺の口の中で暴れる。

やっと離れたと思ったら、目は溶けたようにトロンとしてる、完璧にまだ酔ってる。

「カイ、アタシもう無理、……………しょ」

「馬鹿！ココはツバサの家だろ」

「関係ない」

チ力は俺を倒して馬乗りになった、行為そのものはありがたいんだけど、ココは他人の家だし、それにツバサを迎えに行かなきゃ。

「ツバサが帰って来るぞ」

嘘だけ。

「ツバサとコテツも同じような事してるよ」

「キスもしたことない奴らがするわけないだろ！」

「カイも男でしょ！往生際が悪い」

そついうとチ力は最後の一枚も脱いだ、上半身は下着一枚のみ、つてか俺はホントにツバサの家でやっちゃうのか？

「チ力チ力？」

俺はチ力以外の声が聞こえて上半身を起き上がらせた、そこにはサ  
ンタクロースもといツバサがいる、完全に状況が把握出来てないら  
しい。

「ツバサ！良いところに来た、チ力を止めてくれよ！」

「どういうこと？」

「ツバサ、アタシとカイの邪魔するの？」

ツバサもチ力が酔ってる事に気付いたらしい。

「カイっち、これはどうすれば？」

「俺にその気は全く無いから」

「アタシはあるの」

チ力はそのまま俺をソファーに叩き付けた、そして抱きついてベル  
トに手をかけた時、ツバサがチ力を俺から引き離れた。

「チ力チ力終り」

「ツバサ、羨ましいの？」

「少しね」

「ならこれからは女同士の時間ね！」

二人は肩を組んで部屋に入って行った、俺は服の乱れを直して、ツ  
バサの家を後にする。

明日のチ力は後悔の塊だろうな、でも、今度二人きりになったら酒  
を飲ませよう。



## 青とママさん

今日は25日、一日中チカといたいんだけど、アオミのをバツクレたら後が怖すぎる、チカには悪いけど今日は昼だけで。

ツバサの家のインターホンを押すとすぐに走る足音が聞こえた、ものの凄い勢いで扉が開いてツバサが現れる、一歩退いてなかったら今頃顔がまっ平になってたよ。

「なんだカイっちか」

「コテツじゃなくて悪いな。チカいる？」

「それが昨日の今日だから、部屋に籠っちゃって」

「二日酔い？それともそれ以外？」

「それ以外」

そりゃそうだよな、記憶があれば凹むよな、でもいつまでも凹まれてたら困る、今は一分一秒でも大事なんだから。

「入っていい？」

「良いけどまだ昼だよ」

「大丈夫、それが目的なら昨日あのまま一緒に帰ってるから」

「そっかあ、なら良いよ」

ってかツバサは何を考えてるんだよ、まだ昼だよって、俺はそんな事ばかり考えてるように見えるのかな？

俺はチカの部屋のドアを開けた、別にノックとかめんどくさいし着替中も無いだろ。

チカは布団を抱きながら囓んでる、泣いてたのか目が真っ赤でうるんでる。

「カイ~~~~」

「何泣いてるんだよ、今から外に行くつてのに」

「怒ってる？」

「何を？」

「だから、き、昨日の……………」

そのまま口ごもった、何かイジるの楽しいな、もう少しチ力をイジってから出て時間も余るし。

「昨日の事？有り過ぎてどれの事だか分かんないんだけど」

更に落ち込んだ顔になって泣きそうになってる、俺はベッドに腰かけて後ろに手をつく、丁度チ力を見上げる感じになる。

「みんなの前でキスした事？それとも俺を押し倒して、服を脱いだ事？それとも……………」

「ゴメンゴメンゴメンゴメンゴメンゴメン！」

もう無いんだけどね、チ力は布団を被って丸まって、もう少しイジったら終りにするか。

「チ力が無理矢理キスするから皆に見られちゃったもん、それが一回ならまだしも何回もキスするんだもん、俺は酒飲んで無いから言い訳出来ないじゃん」

「ゴメン……………」

すすり泣く声が聞こえたからこれで終了、すでに可哀想だからな、半分嘘で半分本当なんだけど、これ以上時間を削ると俺が凹む。

「でもさあ、今までの話が全部嘘だったらどうする？」

「え？」

「別にそんな恥ずかしい事はしてないよ、今までののは全部作り話、普通に酔ってただけだよ、家に帰ってからは記憶があると思うけど」

「キスは？」

「一回だけツバサとヒノリの前で、二人とも呆れてただけだけど」

“ゴツ！！”

殴られた、布団を思いっきりとって振り向き様に殴られた、せめてパーだろ、只でさえ力が強いからグーは無しでしょ。

「痛いって」

「うるさい。それで今日はアタシをからかいに来たの？」

「違うよ、夜はアオミのせいで会えないから、せめて昼くらいはチ力に俺の時間をあげたいな、って」

チ力の怒った顔が徐々に笑顔になった、チ力は目に溜ってた涙を拭

いてベッドを下りて俺の前に仁王立ちする。

「許す！」

「ありがたきお言葉」

「じゃあ支度しなきゃ」

「そうだな」

チ力は何故か俺の前に笑顔で立ったまま、意味が分からないからとりあえず俺も笑顔を返しす、その瞬間頭に拳が落ちてきた。

「何だよ！？」

「女の子の着替えを堂々と見るつもり？」

「あつ」

「せめて覗け」

「大丈夫、覗きもしないよ、酒飲めば勝手に脱いでくれるんだもん」  
「……………馬鹿」

チ力は顔を真っ赤にして俺を部屋から押し出した、とりあえず俺はリビングのソファに座った、ツバサもソファに座ってる。

「大丈夫だった？」

「二発ほど殴られたけど」

「変な事言っただけでしょ？」

「当然！」

俺の自身満々の回答にツバサはため息をついた、そのため息と共に家の扉が開く音がした。

扉の前には派手な服を来た綺麗な人がいる、大人の色気というかなんというか、とりあえず綺麗の一言に尽きる。

女の人はバッグをリビングに投げ捨てて迷わずキッチンに行った、コップを取って冷蔵庫の水ついで一気に飲み干す、そしていきなり俺を見る、目が合って離せない、女の人は近寄って来て俺の顎を掴んで上から睨むように見る、顔が近くて香水と酒の匂いが漂ってくる。

「ツバサ、この男は昨日泊まったのか？」

「はあ！？」

「違うよママ、コレはチカチカの男のカイツチ」

「チカの男か」

「ツバサ、コレ、ってなんだよコレ、って」

更にツバサママの顔が近くなる、角度を変えれば唇同士が重なるくらいの近さ、ツバサママは確かめるように顔を撫でまわす、その手付きがなんかいやらしい。

「良い男じゃないか、フリーだったら私が食べちゃいたいくらいだよ」

「ママ、チカチカの後のカイツちのお姉ちゃんが順番待ちなんだから、ママはその次」

「姉との禁断の恋なんて、若者、良い玉つけてるな。私も一時期は不倫に燃えたねえ、あのギリギリの綱渡りが更にゾクゾクするんだよ」

ってかこの二人は俺の意思そっちのけかよ、勝手に色々と人生設計されてるんだけど。

「おばさんは……………」

「ああ!？」

俺の一言でもの凄いスピードで胸ぐらを掴んで来た、しかもマイク・イソンも裸足で逃げ出す顔で。

「カイツち、ママにそれは禁句だよ。因みにチカチカは、ママさん、って呼んでる」

「ママさんはどんなお仕事をしてるのでしょうか？」

「よろしい。私は夜の世界で体を……………」

そりやそうだよな、女の人が一人で子供を育てるのは辛いもんな、なんか悪い事聞いちゃった気がする。

「なあんてな、そんな顔するな若者。私はテレビ関係の仕事だ、そんな女の落伍的な仕事するくらいなら工場でも勤めてる」

この人はただ俺をからかえば気が済むんだよ、それともチカのツケが回って来たとか？

それに、ママさん、ってやっぱ夜っぱいよな、でもこの男っぱい

喋り方でテレビ関係って、想像できない。

「ママさんは綺麗だけどいくつななか？」

「若者、女に歳を聞くのはセクハラだぞ」

「セクハラは業務上でしか適応されないですよ」

「口だけは達者だな」

「それでも無いですよ、綺麗な人が目の前にいるから緊張してるんですけど」

ママさんは俺の頭を腕で固めて頭を拳で擦りつけた、胸がかなり当たってるんですけど。

「気に入ったぞ若者！私は30、ツバサは私が15の時のガキだ。

若者、名前は何ていう？」

「やだなあママったら、カイっちだって言っただじゃん」

「それはアンタが付けた、最低最悪のあだ名だろ、本名を聞いてるんだよ」

「四色海」

「四色？」

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない」

俺が四色って言った瞬間に顔が変わった、別にそこまでは気にならないけど。

チ力はかなり長めの支度が終わって出てきた。

「何だチ力、これからデートか？」

「ママさんいたんですか、これからデートですよ」

「じゃあママさん、俺らはこれで」

「一発やってこいよ、じゃないと家に入れないからな」

「ななな、何言ってるんですか！？」

真っ赤になってるチ力の手を引っ張って家を出た。

## 多色のクリスマス（前書き）

今回も主観が変わります、今回は男だけです。

## 多色のクリスマス

チ力を連れてくがまま喫茶店に連れて行った、店に人は少なくて静か、軽く怪しい雰囲気が漂って薄暗い、俺が散歩中に見つけた穴場。

散歩が爺臭いとか言う奴は可哀想だな、穴場とかも見つかるし、東京でも静かな場所はあるんだよ。

適当に食べ物頼んで来るまで待つてる、ただ一人の店員のおっさんはかなり静か、店同様に何か裏がありそうな感じた。

「カイ、ここ大丈夫なの？」

「一回来てチェック済みだから大丈夫だと思う」

チ力はそわそわしながら周りをキョロキョロ見てる、俺的にはこの店の雰囲気よりチ力の行動の方が怪しいんだけど、それでコンビ二に入ったら挙動不信で捕まってもおかしくないくらいだ。

「今日はホントにゴメンな、アオミの相手しなきゃいけないから時間とれなくて」

「別に大丈夫だよ、お姉さんには貸しを作らないとな」

「頼むからその‘お姉さん’ってのやめてくれない、なんか怖いんだけど」

「ダメ、保険だから」

女って怖いな、この歳から将来の保険をかけられてるなんて、チ力を手放したくないのは確かだけど、その先ってのは想像できない。

俺は昨日渡せなかった物を取り出した、本当は昨日渡す予定だったんだけど、あれだったからな。

「コレ、とりあえずクリスマスの方」

「プレゼント？」

「落し物には見えないだろ」

「ありがとう」

チ力は細長い箱を開けると笑顔になった、この笑顔を見ると気持ち

が安らぐんだよな、チ力は中からネックレスを取り出した。

「可愛い……」

「変じゃない？」

「最高だよ、最高に可愛い」

チ力はネックレスを付けて俺に見せてきた、子供のようにしゃぐチ力、俺はキリがなさそうだから誕生日の方を渡した。

「コレは？」

「誕生日、金がないから大したものんは買えなかったけど」

小さな袋を開けて引っくり返す、中からは髪留めが一つ。

「チ力の壊れてただろ」

「知ってたの？」

「当たり前じゃん、一日だけ付けてなくて次の日からはいつも違う髪留め、他は気付かなくても俺は気付いちゃうんだよね」

「付けて良い？」

「当然」

チ力は今着けてる髪留めを外して俺のプレゼントをつけた、窓ガラスを鏡がわりに見てる。

「貰ってばかりじゃ悪いよね。はい、コレ」

チ力は袋を机の上に置いた、大きさの割には重め、中には長方形の箱が一つ入ってる、俺は一瞬でピンときた。

「チカコレって？」

「大したものじゃないけど」

「大した物だよ！超能力でもあるの？丁度欲しかったんだよね」

中身は包丁、最近使い過ぎてて切味が悪くなってきたところなんだよね、しかも俺が欲しかったやつ、チ力のプレゼント買って金が無  
いから諦めたのに、ココで出会えるなんて。

「何か高校生っぽくないけど」

「いやいや、最高に嬉しいよ。でもかなり高かっただろ？」

「そう、そんな高いとは思わなかった」

「ありがとう」



確かに高校生向けではないけど、俺向けではあるな、チカ様万歳だよ、しかもこれマジで高いんだよね、俺のプレゼントの総額でもまだ足りないくらいに。

「決めた！この包丁で最初に作る料理はチカに食べさせる」

「ホントに！？」

「ホントに、今年中に最高の料理をご馳走します」

「楽しみにしてるからな」

「夜眠れなくなるくらい楽しみにしてる」

二人で声を上げて笑った、静かで薄暗い店内が明るくなるくらい大声で。

でもその前にアオミにチカの家への入室許可をとらないとな、十中八九OKだと思うんだけどね。

朝起きると俺は床に寝てた、何でか分からないけどとりあえず布団に戻った、何か暖かい、多分落ちたばかりなんだろ。

俺は寝返りをうつとそこには見慣れた顔が、銀色の瞳、真っ黒な綺麗な髪の毛、これは多分ヒノだな、……………ヒノ？

「どわっ！」

俺は再び床に戻る、そういえば昨日ヒノが泊まったんだよね、だから俺は床にいたのか。

俺は頭を強く打ち付けたらしく、痛い、ベッドに寄りかかって頭を押さえてると耳元から声が聞こえた。

「朝這い？」

「なっ！ヒノ！？」

横にはヒノの顔がある、寝起きなのに何でこんなに笑顔なんだよ、多分俺は目を見開いてるんだろうな、何となく渴いてきた。

「違うつて、すっかりヒノが泊まってるの忘れてて」

「私のこと忘れてたの？」

「いや、そういう意味じゃなくて」

「……………おはよう」

「お、おはよう」

毎日こんなヒノの笑顔が見れるなら同棲って良いかもな、多分誘ったら不純とか言うんだろうな、しかも物凄く冷めた顔で。

「なんか同棲してるみたい」

ヒノから言っちゃったよ、やっぱりヒノもそう思うのかな、それとも俺をからかってるだけとか。

「それとも新婚？」

「何かテンション高くない？」

「だって私達付き合ってるんだよ、幼馴染みならまだ可愛いけど、彼氏の家にお泊まりなんて……………」

そっか、俺ら真正銘に付き合ってるんだよな、しかもさりげに爆弾発言連発なんだけど、こんな言葉をヒノの口から聞くなんて。

「よく我慢出来たね」

「何を？」

「不純な事」

「ば、馬鹿じゃねえの！？今まで何回か泊まってるじゃん！」

「幼馴染みとしてね」

「そっか、ヒノは俺の彼女か」

俺が天井を見上げて感慨に浸っているとヒノが目の前に座った、今気付いたけどパジャマじゃん、しかもボタン開けすぎ、胸が見える。

「顔真っ赤」

「あ、暑いからだよ」

「今ノーブラだよ」

「馬鹿！ 仮にも俺は男だぞ！」

「でも何も出来ないでしょ？」

「今の効いたわ」

確かに何も出来ないけど、打ち明ける事でもないだろ、そんなこと言われたら気になるって。

「彼氏なんだから何しても良いんだよ」

「大胆過ぎだろ」

「だって好きなんだもん」

「……………」

何か顔が熱い、こんなにヒノが積極的だったなんて、多分今まで色々あったんだろうな、俺が気付かないだけで。

「世界で一番大切な人が目の前にいるんだよ、それだけで嬉しいもんでしょ？」

「そうだな」

「今日も泊まっちゃおうかなあ」

「おじさんとおばさんが不安がるだろ」

「大丈夫、コガネの名前を出せば喜んでOKしてくれるよ」

「ああもう！ 好きにしろ」

積極的なヒノって怖い、俺の一般教養が間違ってたなければいくら彼氏の家でも泊まらないよな、ってか幼馴染みでも親は許さないよな、それにガキの頃から知ってるとはいえ世間の評判は知ってるだろ、おかしいって。

昨日は悪い事したな、疲れてて寝てもうた、ツバサは怒ってないって言っってはったけど嬉しくは無いやろ。

そんな事ばかり考えててもしやあない、今日を思いっきり楽しませれえんや。

わいはツバサの家のインターホンを押した、かなりやかましい音と共にドアが開く、怖かったさかい一歩下がって正確やな、こないスピードで当たったら打たれ慣れてるわいでものびるで。

出てきたのは当然ツバサ、ツバサは勢いを殺さず抱きついて来た、後ろの手すりはお世辞でも高いとは言えん、せやさかい必死こいて受け止めた、ツバサはどうやればそこまで眩しく笑えるんや、つてくらいの笑顔。

「待つてたよ！」

「悪い悪い。支度してきいや、今日は楽しませてやるで」

「わーい！しかもそれ、僕があげたマフラーじゃん、着けてくれたんだ」

「当たり前やろ、コレで寒さ知らずや」

「そっか、少し時間かかるから家で待つてて」

わいは玄関に入って気付いた、ハイヒールがある、もしかして親いるんとちゃう、自然に彼氏アピール？

リビングに入るとワイシャツにパンツだけの綺麗な女の人がおった。

「わわ！すんまへん！」

「今日は男よく来るな。で、そんな所で何してるんだよ？」

「ズボン履いてないやん！」

「気にするな」

無理やって、女の人こない姿始めてやもん、直視できひん。

そんなわいの気持ちを知ってか知らずか、女の方はわいに近付いて来た。

「パンツぐらいで騒ぐな、親のくらい見た事あるだろ」

「パンツぐらいやないで、それにこない綺麗な人のは見たこと無い！」

「お世辞はよせ」

「お世辞やないからはようズボン履いてや！」

「しょうがない」

履き終ったのを確認して視線を戻すと今度はワイシャツを脱いでる、この人は露出狂やる。

「エッチな関西人だな」

「お姉さんが露出狂なんやろ！それに誰？ツバサのお姉さん？」

「関西人お世辞はよせ！嘘でも嬉しいぞ」

女の人は頭を腕で掴んできた、体に引き寄せられて胸が当たると、なんやねんこの人は？

「私は母親だ、関西人はツバサの男か？」

「そうやで」

「良い体してるな、何かやってるのか？」

「空手」

「ふゝん」

ツバサのお母さんはわいの体を念入りに触ってる、かなり手付きがエロい、上から下まで触ってその後再び上がる、その時に下腹部の辺りで止まる、そこらへんをしつこく触ってる。

「何しとるん？」

「チエック」

「娘の彼氏で品定するなや」

丁度ツバサが出てきて見られてもうた、スウェットとブラのみで下腹部を念入りに触ってる、ツバサと目が合ってフリーズした。

「ツバサ、これはちやうんや」

「なんだいたのか」

「何してるママ！？」

「若者がダメだったから関西人の品定」

「コテツは僕の！誰にも渡さない」

ツバサはわいの腕を掴んで引き離れた、さりげに嬉しい事言ってくれるやないか。

「これからデートか？」

「そうだよ」

「泊まるなら電話しろよ。それと既成事実を作る時はゴムの袋を開ける前に画鋏で刺しとけ」

「ママの馬鹿！」

ツバサに無理矢理腕を引かれて家を出た、ツバサのお母さんは本当に親か、普通娘にそない事教えないやろ、シングルマザーって怖いんやな。

街は人ばかりや、いつもならツバサの自由にさせるんやけど、今日は手を離したらいなくなりそうやで、あんまり繋がへんのやけどごちゃごちゃ言ってられへんな。

「ツバサ！あんまり走るな！」

「時間は待つてくれないよ、今を楽しまなきゃ！」

「せやけど体力がもたへんやろ」

「だらしないぞ」

ツバサの暴走を止めるのは無理そうやな、体力を消耗するデートなんてありえん、ツバサにジツとしてる言う方が無理やと思うけど。でも走りながら振り向いた時の笑顔で許せる、この笑顔があるから馬鹿やれる、始めて見た時から笑顔に惚れてたんやな。

## 蒼とのクリスマス

予定より遅くなっちゃったな、アオミが怒ってなければ良いんだけど。

チカという時間があつという間すぎて予定時間をオーバーしてた、俺は走ってマンションまでついた、カードキーで自動ドアを開けてエントランスを歩き、エレベーターの上のボタンを押す、つかこういう時に限って遅いんだよな。

やっときたエレベーターに乗り目的の階を押す、階につくと走って家の前まで行きカードキーでドアを開けて中に入った。

「アオミ、遅れてゴメン！」

リビングまで慌てて走って謝る、準備は進んであとは料理を待つだけの状態になってた。

「ゴメン、準備を手伝うって言ったのに」

「別に良いわよ、どうせチカちゃんとの会話に花が咲いてたんでしょ？」

「ゴメン。今から手伝うよ」

「大丈夫よ、もうすぐ出来上がるから。主役は座って待ってて」

「悪い」

俺は言われた通りに座って待つことにした、それにしても一人で全部やったにしてはかなりこつてるな、アオミは作りながら笑ってるし、何か良いことでもあったのかな？

「なんか楽しそうじゃん、何で？」

「カイとのクリスマスよ、それは張り切るわよ」

なんか色んな意味で申し訳ないな、こんな全部やらせちゃって、それにアオミって案外尽くすタイプなんだな、プライドがなかったら良い恋出来るのにな、邪魔してるのは俺なんだけど。

アオミは出来た料理を次々と並べてく、見た目も匂いもかなりうまそう、これを女子高生が作ったとは思えない。

「食べて、カイ」

「いただきます」

俺は一番手前にあったものから手をつけた、色々ちょこちょこ食べた結果。

「美味い！めっちゃめっちゃ美味いよ」

「ホントに！？」

「ホントホント、これなら男は一発でおちるよ」

「カイはおちないの？」

「弟をおとしてどうする」

将来アオミに出来るであろう彼氏は嬉しいだろうな、俺が言つのもなんだけどこんな綺麗な奴にこんな料理作って貰ったら。

「カイとのクリスマスなんて何年ぶりだろ」

「何年ってか始めてじゃない、ガキの頃はそんなイベントある事も知らなかったし、大きくなったらなつたでそんなに家にいなかったじゃん」

「そっか、そうだね、行事なんてあつてないようなものだったもんね」

小さい頃は一年のうちに行事なんてものは存在しなかった、親は家にいないし、子供だけじゃなにも出来ないし、だから世間がクリスマスで騒いでも俺には違う世界の出来事を感じた、サンタさんがプレゼントをくれるとか騒いでも俺達は好きな物を買って与えられてた、だからそんなものはいらなかった、今思うと冷めたガキだったんだな。

「私達って可哀想だったのかな？」

「世間一般から見たらそうじゃない、でも俺は今が楽しいからそうは思わないけど」

「私もかな、唯一の家族とこうやってクリスマス出来るんだもん」

唯一の家族か、確かにそうだよな、親がいた時よりも姉弟の時の方が幸せってのは変な話だよな。

「アオミは昨日何してたの？」



「親友と遊んでた、女だけの悲しいイヴよ」

「早く彼氏作れよ」

「カイが私の彼氏よ、カイより良い男なんて日本にはいないわよ」

「アホか」

弟の立場としたら早く恋して欲しいんだよな、邪魔とかそういう意味じゃなくて可哀想じゃん、弟なんて近いようで遠い存在だから。

「みんなレベルが低いんだもん、ルックスとかじゃなくて考える事が浅はかなのよね」

俺と似てる、唯一違うのそういう奴らをはねのけるか受け入れるかの差だな、男なんて特に馬鹿な生き物だからな。

「馬鹿も楽しいぞ」

「飾らない馬鹿はね、背伸びしてる馬鹿は見てて可哀想」

男はみんな可愛い人を前にすると自分を良く見せたいもんな、アオミはそれが大っ嫌いなんだろ、それで飾らないユキに惚れたのか。

俺らは食べ終わっていつものようにソファーに座ってテレビを見た、どの局もクリスマスの特番だ、テレビまでうんざりするくらいクリスマス、さすがに嫌になるよな。

「何でクリスマスって祝うんだろ」

「アオミからそんな言葉が出るとは思わなかった」

「何で？どうせカイもそう思ってるんでしょ？」

「そうだけど、アオミって軽くロマンチストなところあるじゃん」

「そうだけどキリストの誕生日だよ、たかが人一人の誕生日を世界中で祝わなきゃいけないの？」

「じゃあアオミは何で今日俺を誘ったの？」

「誘いたいから？」

「それだよ、打ち上げと同じで只の口実だろ、バレンタインとかその類だよ。二人で今日という日を過ごす、それがステイタスになるんだろ」

「そう思うと馬鹿みたい」

クリスマスを二人で祝つときながら、こんな冷めた話する姉弟もどうかと思うけど、こんな冷めた話をしてる二人でも、波に思いつきり吞まれてる、クリスマスってそんな魔力の事なんじゃないかな。「じゃあくだらないクリスマスのプレゼント」

アオミは俺の前に袋を出してきた、大きさに比べて軽い、しかもふわふわしてる。

袋を開けて中の物を取り出した、中にはパーカーが入ってる。

「カイに似合うかな、って思つて」

「さすがアオミだな、俺の趣味と真ん中だよ。ありがとう」

礼を言うのと同時に俺もプレゼントを渡した、アオミのプレゼントはかなり悩んだんだよね、全然好きな物とかも分からなかったから直感を信じて、かな。

「手袋だ。寒い、何で私が欲しいのが分かったの？」

「いや何となく、いつも手を暖めてたし寒いからかな」

「ちゃんと私の事見ててくれたんだ」

「当たり前だろ、現時点ではアオミの事を誰よりも知ってるんだから」

「カイ!!」

アオミが飛び付いて来た、ソファーから落ちないようにするのが精一杯で、拒否する余裕がない、アオミは俺の首に腕を回して顔は肩に乗ってる、これだけ喜んでるアオミを突き放すほど酷い心を持ち合わせてないもので、背中を抱き返しちゃった。

「やっぱりカイは私の自慢の弟、誰にも渡したくない」

「チカでも？」

「今後しだいね」

コイツは娘を手放さんとする親父かよ、ブラコンもここまで来るとペットだよな。

「でもカイがチカちゃんに惚れた理由も何となく分かるよ、彼女といると不思議とあつたかくなるのよね、不思議な娘よ」

「俺の彼女だもん、普通の女な訳ないじゃん」



もうつこつむのもかったるくなってきた、情事って何だよ情事って、  
しかも半強制的にアオミがやらしたんだろ、なんかアオミと話して  
て疲れた。

でも、安らげる少ない居場所もアオミ、俺が守らなきゃいけないも  
のがまた一つ増えた。

## 青と四色

ビッグイベントも終わって只今冬休み歐歌中、歐歌って言うてもただたんに家でダラダラしてるだけだけどね、たまには家にいないと流石の高校生でも疲れるって。

俺が家にいるとアオミも何故か家にいる、友達がいらない訳じゃないと思う、何回も電話がかかって来て断ってるから。

いつもの事だけど家にいると俺の腕にしがみついてる、最初の一週間は拒んだよ、でもアオミに拒否は無意味だから、完璧に諦めたよ。

「なあ、夜何食う？」

「寒いから鍋やろ」

「鍋か、何鍋が良い？」

「チゲ鍋！」

「OK。なら買い出し行ってくるから鍋出しとして」

「はい」

つてか二人で鍋って悲しい、俺の真相心理の中で鍋は大勢ワイワイのイメージがあるからな。

最近は暗くなるが早いな、買い物終わって帰るだけで夜道になる。

今日の帰り道も辺りは真っ暗だ、寒さも体に響くし早く帰ろう。

でもそんな俺の気持ちを知ってか知らずか携帯が鳴り響く、携帯をポケットから取り出し開いてみると知らない番号だった、たまに番号とか登録しない事があるからその類の奴だと思って普通にでた。

「もしもし」

“ 若者か？ ”

若者？俺をそんな呼び方したのは、記憶の中で一人だけだ。

「ママさん？」

“おう、悪いな、ツバサから番号聞いた”

「そうですか、それでどうしたんですか？」

“ちよつと話がある、今から来れるか？”

何かいつになく真剣な口調だな、それとも酒で酔っててあんなだったのかな

「今から？姉貴を待たせてるんですけど」

“ちようどいい、若者の姉も連れて来い。話はそれから”

「何処に行けば良いんですか？」

“それはメールで送る、じゃあな。プツッ”

切れた、かなり強引な人だな、それにアオミまで連れてこいって、どんな話なんだろう。

その後すぐにメールが来た、俺が知る限り指定された場所はバーだ、もしかして酒飲ませるために呼んだとか？

いろいろ不安があつたけどアオミを連れて指定場所の前まで行った、細い階段を地下に下りた所にある。

中は薄暗くてカウンターの向こうには沢山の瓶が棚の上にのつて、そのカウンターの真ん中にグラスを持ったママさんがいる、俺は真っ直ぐママさんの隣に座った。

「話って？」

「まあその前に何か頼め」

「俺未成年だから適当にジューズを」

「私はグレープフルーツの入った何か無いですか？」

「ありますよ」

店員らしきオッサンはシェイカーを振りながら応えた、この人俺らが未成年って分かってて酒飲ませるの？何か怪しい店だろ。

「ってかアオミ飲むの？」

「お酒の一つや二つ飲めなきゃ女としてやっていけないわよ」

「分かってるじゃねえかブラコン」

あんたも親ならせめて一言くらいは制止しろよ、まあ俺らをココに呼んだ時点で大きく間違ってるけどな、それに今……………。

「何でアオミがブラコンだって気付いたんですか？」

「そりゃ入ってきた時から腕抱いて、今も腕を離さないじゃないか、誰でも分かるって」

「何かカッコイイですね、姉御って呼んで良いですか!？」

「好きに呼べ」

「じゃあ私の事もアオミって呼んでください」

この二人の板挟みって怖いかも、まあアオミが自分から話しかけた人だ、悪い人じゃないでしょ、アオミは人を見る目はありすぎるくらいだからな。

「それよりココに呼んだ理由は何ですか?わざわざアオミまでも」

「酒を一人で飲んでもつままないから」

やつぱりかよ、この人は未成年に酒を率先して飲ませるつもりかよ。

「嘘よ、酒は一人でたしなむものだからな」

「姉御カッコイイです!」

アオミガッツキ過ぎだよ。

「ツバサの事なんだけどな」

「ツバサの事ならコテツに話せば良いじゃないですか」

「いや、その類じゃない、ツバサの親の事だ」

「ツバサって誰？」

「ツバサはママさんの娘で俺の親友のうちの一人、チカが間借りしてるのもママさんの家。ちなみにママさんはシングルマザーだからアオミの目が子供のようにキラキラ光始めた、何となくアオミが進もうとしてる路線が見えて来たかも。」

「やつぱり姉御はカッコ良すぎです!」

「アオミは話が早くて楽だな、シングルマザーって言うとみんな一歩退くのにな」

「女は男なしで生きていきますから」

「その話はココで終り、話が進まない。それでツバサの親がどうか

したんですか」

アオミを止めて話を元に戻した、二人で話していると本題に入る前に酔いづぶれそうだからな。

「そうだそうだ、ツバサの親は当時ホストをやってた奴で、私はその男に入り浸ってた。馬鹿だろ、ホストにハマるなんて」

「度合いによりますけどね」

何か場がしんみりし始めた、今考えると俺達にツバサの親の話を話すのも筋違いだと思うけど、この際どうでも良いや。

「それで私は付き合ってるってつきり思い込んでた、それがホストの営業の一貫だとは知らずに。まだガキだった私はその男に始めてとい始めてを全て捧げた、男のタメに体を売りかけた事もあったな」

ママさんの話を聞いてて怒りを抑えるので精一杯だった、まだガキだったママさんにそんな事をするクソホストが許せなかった。

「そんなある日ついに来なかったんだよ、生理って奴が。」

言ってる事分かるよな、私は妊娠してた、まだ高校一年の15歳の私はガキなりに幸せを感じてた、これであのホストと一緒になれると本気で思ってた。

でもそこはホストだよ、妊娠の二文字を聞いた途端、札束目の前に出して無かった事にしろだよ、私はその時やっとな気がいたんだよ、遊ばれるだけの女だってね。

親の金に手をつけて、学校にも行かないでひたすらバイトして、結果は子供一人と札束置いてさようなら。

でもそこで私が自暴自棄に走ったらお腹にいる子供はどうなるって思ったんだよな、だから子供を育てる事で過去を正当化しようとしたんだ、この子のタメに私は産まれてきて、馬鹿したんだってね」怒りの矛先が向けられない俺の感情は悲しみに変わってた、涙は何とか堪えた、隣でアオミが泣いて俺も泣いたら話辛いだろ。

「ココからが本題だ、私はこんな昔話なんて高校生のガキに聞かせて楽になる程馬鹿じゃない、そのホストの事だ。ホストの名前は、



しきしんと  
四色真人、」

俺の頭はオーバーヒート寸前で、悲しみが再び怒りへと変わって力ウンターを思いっきり叩いてた、アオミにいたってはショックを隠しきれないみたいだ。

「ママさん、俺らの親も四色真人っていうんだけど」

「四色なんて日本にはそんなないだろうからな、もしかしたら若者達の一族だけかもしれない。率直に言う、若者とツバサは異母兄妹だ」

嘘だろ、俺とツバサは全く似てないし、でも俺もアオミも母親似なんだよな、それに四色だけで信憑性は限り無く100に近いし、否定の余地がない。

「偽名でたまたまとかは？」

「免許証を盗み見たときの名前だから間違いは無い」

「カイ、私一回だけ聞いた事ある、ジジイが今の仕事をする前にホストをやったって事」

「何でだよ！！？」

俺は机を両手で叩いて顔を埋めてた、俺が産まれた頃にアイツは平気で女と遊んでたのかよ、自分には子供がいるのに平気で。

「何でアイツは家族だけじゃなくて、他人にまで迷惑をかけるんだよ」

「過ぎた事だ、私は気にしてない、ツバサもホストの子供だったのは知ってるが、問題は血縁だな。ツバサは3月産まれだから若者……、カイが兄なのは確実なんだよな」

ツバサはどんな顔するのかな、親友が兄でしたなんてシャレにないって、つか急に兄妹なんて言われても無理だって。

「とりあえず………。ツバサ？今からいつものバーに来て、……いや、チカは無しで、今すぐだからな」

ママさんはあつという間に電話してツバサを呼んだ、ココからなら10分もかからないだろ。

ということはママさんは母親に近い存在になるって事？ややこしい

な。

「姉御は私のママ？」

「知らないが、位置的にはそんな感じじゃないのか、別に友達感覚でも良いけど」

「なんか俺の人生メチャクチャだよ、親に捨てられ、島で新しい家族見つけて、義兄は死んで、家出した姉はいきなり現れて、次は親友が妹ですだ？家族何人だよ？」

「何かカイの人生もヤバそうだな」

俺は一応ママさんに俺の人生談を話した、四色に関わるとマシな人生を歩めないな、ちよつと意味深に言うと言われた一族、そんな力ツコイイもんじゃないけどね。

三人のしんみり？した空気に割って入って来たツバサ、俺とアオミがいることにとりあえずビクリしてるらしい、ツバサは困惑気味にママさんの隣に座った。

「とりあえず、ツバサ、この二人はツバサのお兄ちゃんとお姉ちゃんだ」

「えっ？」

「いやママさん、何段飛ばしの説明なんですか？」

ママさんはめんどくさそうに頭を掻いてタバコに火を付けた、左手でタバコを持って右手で酒を飲んだ。

「お前の父親がホストってのは言ったよな？」

ツバサは無言で頷いた。

「そのホストは四色真人、カイの父親だ。ココまで言えば馬鹿のお前でも分かるだろ」

「えーと、カイっちのパパと僕のパパが同じって事は血が繋がってる、血が繋がってるってことは家族、パパと一緒に家族って事はカイっちと僕は兄妹！？僕は遅産まれだからカイっちはお兄ちゃん、その隣は噂に聞くカイっちの美人お姉ちゃん、カイっちのお姉ちゃんはお僕のお姉ちゃん、ってこと」

全員で頷いた、数式を解くみたいに解釈するんだな、まあ軽いパニ

ツクを起こしてるけど分かったみたいで良かった。

「はじめまして、姉のアオミよ」

「僕はツバサ、僕にこんな綺麗なお姉ちゃんがいるなんて」

「姉御とは正反対だけど可愛い妹がいたなんて」

アオミの順応の速さにもビックリだよ、こういう時って男って弱いよな、むしろココにいる奴らが速すぎなんだろ、俺は普通だよ、そう信じたい。

「何だかよく分かんないけど、よろしくね、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「ちよつと待て、アオミはともかく俺にお兄ちゃんは馴染まないって、今まで親友でしか無かったんだぞ」

「でもお兄ちゃんはお兄ちゃんだもん、僕お兄ちゃんが欲しかったんだよね」

「歳は変わんないんじゃない」

何かコテツに言いづらいんだよな、ってかみんなに言いづらいし、受け入れざるおえないけど、ブラコンの姉に続きうるさい妹だよ。

「でもお兄ちゃんはお兄ちゃんだよ、僕のカッコイイお兄ちゃんと綺麗なお姉ちゃん」

ツバサは俺とアオミの腕を掴んで両方を笑顔で見た、妹と思うと違った意味で可愛く見える。

「カイ〜〜、この子めちゃめちゃ可愛い！」

「お姉ちゃんもめちゃめちゃ綺麗！」

「ツバサ〜〜！」

「お姉ちゃん〜〜！」

感動の再開みたいに抱き合ってる、始めて会ったのにココまで馴染むとは、恐るべし血縁。

「お兄ちゃんもシラケてないで」

「だからお兄ちゃんって呼ぶな！」

「でもお兄ちゃんにカイっちはダメでしょ、それに僕はお兄ちゃんって響きが気に入ってるんだけどな」

「じゃああれだ、せめて学校にいる時だけはお兄ちゃんって呼ぶな、それ以外なら良いから」

「はい」

「実は妹萌えとかしてるんじゃないの？」

「しないしない、数十分前までは親友だったんだぞ、多少は違うけどそんなマニア向けの感情はないから」

みんなにどう説明すれば良いんだよ、特にコテツには申し訳なくしょうがない。

俺の人生なのに俺に関係なく激変する人生、これ以上の変化には耐えられないだろうな。

「もう帰って良いぞ」

「ママさんは飲むんですか？」

「飲む。それとそのママさんも辞めろ、なんか他人行儀過ぎて嫌だ」

「じゃあ何て呼べば良いんですか？」

ママさんは明後日の方向を見て考えてる、流石に親への昇格は順応出来ないから無理だな。

「弥生って名前だからヤヨイで良いよ」

「じゃあヤヨイさんで」

俺がバーを出ようとしたらツバサもついてきた、でもアオミは座ったまま。

「アオミは帰らないの？」

「私は姉御と語り明かす。良いでしょ？」

「私と語のには酒が要り用だよ、潰れない自信はある？」

「バカルディーまでならいけますから」

「流石にこんな所に無いから……、ウオツカ二つ頂戴」

どんだけハードボイルドな姉なんだよ、ってかバカルディーは通じるんだろうか、どこで飲んだのかも知りたいし。

俺とツバサは二人で帰り道を歩いてる、血は争えないらしい、ツバ

サはさつきから俺の腕にしがみついている。

「なあ、それは流石にヤバいだろ」

「何で？お兄ちゃんと腕組んで何がいけないの？チカチカにもしてるのに」

「俺は男だぞ、それに親友の方がまだ強いし」

「堅いなあ、前は前、今は今でしょ、お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだから」

ため息しか出ないよ、何で四色の女は腕を組みたがる、呪われた一族の七不思議ってか。

「ツバサは飯食ったの？」

「あつ！そうだ、チカチカと作る予定だったのに」

「チカは家にいるの？」

「いるよ」

俺は携帯を取り出してアドレス帳を開いた、チカの番号にかけるとすぐに出た。

「もしもし」

「チカ、飯食った？」

「食べてないよ」

「作ってあるの？」

「まだ、何で？」

「俺んち来いよ、鍋やるし俺も一人しかいないからさ」

「分かった、でも家知らないんだけど」

「じゃあコンビニまで来て」

「分かった、プツッ」

俺とツバサの家の中間にあるコンビニで待ってもらう事にした、勝手に家に入れちゃヤバいかな、でもアオミなら許してくれるよな。

## 青の苦悩

俺は妹に昇格したツバサと一緒にコンビニに向かってる、あのバーからコンビニ行くのとツバサの家からコンビニ行くのだと、ツバサの家の方が近いからチカの方が先に着いてると思うんだよね。

ツバサは腕にしがみついてて歩きにくいし、何度も言うんだけど、ほんのちよつと前までは親友でしかなかったんだぞ、しかもコテツの彼女っていう肩書付きで、それが今は腕を組んでる、絶対におかしい。

しかも感じがアオミにメチャメチャ似てる、だからかは分からないけど無理にほどけない。

コンビニにつくとチカは雑誌のコーナーで立ち読みしてる、俺は店内に入ってチカを呼んだ、チカは俺の声に反応して目があった、その瞬間読んでた雑誌が床に落ちた。

「……………カイ？」

もの凄い険しい表情をしてる、俺はよく分からずに周りを見渡す、そして左腕で視線が止まった。

そこには満面の笑のツバサがいる、ヤバい、俺も順応速度の速さに影響されてた。

「チカ、コレには深すぎる事情が」

「最低！その見せるために呼んだの！？」

「何でチカチカ怒ってるの？ねえ、お兄ちゃん」

「……………二人ともそういう関係だったの？」

「そういう関係だけど疑似ではない、本物なんだよ」

「本物？」

何とか治まったみたいだけど、表情は明らかにキレてる。

俺は全てをチカに話した、ヤヨイさんの過去、ツバサの親の事、俺とアオミの親の事、そして納得して、……………フリーズ。

「分かるよ、俺もテンパったから」

「それでツバサが腕組んでるの？」

「ああ、四色はブラコン家系らしいからな」

チカは大いに納得したらしい、何で姉妹そろって誤解を生むんだよ、俺には荷が重すぎる。

「でもツバサでしょ？」

「それが問題なんだよ、アオミはとにかくツバサがコレは正直しんどい」

「お兄ちゃん酷い、やっと出来た兄妹なのに、僕はずっと一人で寂しかったんだよ」

「いや、それは分かるけど、チカが目の前にいるんだぞ」

仮にツバサを妹として受け入れたとしよう、でも彼女を目の前にしてコレは無しだろ、いや、普通に腕を組むのは有り得ないけどそこは大目に見るか。

「じゃあチカチカは右腕を良いよ」

「そういう問題じゃなくて……」

俺はツバサの頭を押して引き離れた。

「とりあえず離れろ」

「僕の事嫌いなのか？」

「嫌いじゃない、でも俺にも優先順位つてものがある」

「しょうがないな」

ツバサは納得したらしい、チカでコレだけ苦労したって事は、コテツの時は一発殴られるくらいの覚悟でいかないとな、でもコテツの一発だろ、不良殴った時に一発で頬骨折ったらしいし、逃げる事だけ考えるか。

俺達は俺の家？に向かった、当然握ってるのはチカの手、逆サイドには後ろ手に組んでるツバサがいる。

ツバサには今度兄妹の許容範囲について教えとかないとな、最悪の場合添い寝が有り得る、アオミが夜這いをかけるくらいだからな。

俺はマンションにつくといつものようにオートロックをあけた。

「凄い」

「ねえねえ、コレホントにお姉ちゃんの家？」

「そっだよ」

「もしかしてお姉ちゃん、ホステスとか？」

「違うよ、それはまた後で話す」

俺はエレベーターの上のボタンを押した、最上階にあったエレベーターは徐々に降りてくる、一旦10階で止まったけど再びスムーズに降りる。

チンという音とともにエレベーターのドアが開く、中には二人の男の人がいた、でも何故か出てこようとしない。

「すみません、出ない……………」

「チカ？」

男内の一人がチカの名前を呼んだ、俺はビックリしてチカを見ると、チカはそれ以上にビックリしていた。

「兄貴」

「えっ！？」

「チカ嬢じゃねえか！おい、紅、チカ嬢がいるぞ！」

「うるせえ、分かつてる葉夜」

「チカ、もしかしてお兄さん？」

チカは無言で頷いた、奇跡的感動の再会？ってか世界は狭いな、ツバサの件といい、チカのお兄さんの件といい。

兄ことコウは赤に近い茶色で、メガネをかけている、一言で言うところ冷めた奴、チカとは反対側の人間みたいだ。

ハヤと呼ばれた男は印象的には好青年だ、しかもどこことなく雰囲気、グキに似てる、そしてハヤの一番目を引くのがドレッドの髪の毛。

「チカコイツら誰だ？」

「俺はチカの彼氏の四色海です」

「僕はチカチカの親友兼カイの妹の鷲鷹翼です」

そっいえばツバサって親友にしかあだ名つけないんだよな、普通の



友達は名字だし、コテツはコテツ、ってことは俺はクラスアップしたのか？

「コウ、チ力嬢に彼氏だってよ！良かったなあチ力嬢。ああ、忘れてた忘れてた、俺は蘭葉夜、で、こっちがチ力嬢にお兄様の紅」

蘭？どこかで聞いた事ある名前だな、蘭、蘭蘭、蘭真珠子！マミ姉だ、って事は。

「もしかしてマミ姉のお兄さん？」

「おお！マミコの事知ってるの！？そう、俺はマミコのお兄様です」

「そんなのは後だ、チ力、彼氏ってなんだ」

怖っ、この人ただでさえ冷めてるのに声を低くすると怖さがでる。

「アタシの彼氏だよ」

「何だコイツは」

「何だとは何ですか！？」

「吠えるなガキが。こんな変な頭しやがって」

「色は自毛です、コウさんやチ力と同じように。髪型は言っちゃ悪いですけど、ハヤさんよりはマシだと思いますよ」

「変じゃない、これはファッションだ」

「俺と同じですね」

コウさんは顔色一つ変えずに俺を睨み続ける、チ力のお父さんでもこんな怖い顔しなかったぞ。

「チ力、これからどこに行くんだ？」

「カイの家だけど」

「男の家か？」

「そうだよ」

「おいガキ、テメエチ力に手え出したらただじゃおかないからな」  
うわあ、何も言い返せない、時既に遅しだし、もうこれ以上ないくらい手を出しちゃったよ。

この人の怖さは尋常じゃないな、もしかしたら今まで会った人の中で一番威圧感があるかも。

「チ力、コレは俺の部屋の鍵だ、コイツに変な事されたら俺んこ

来い」

「その条件だったら行く事は無いかな」

チ力はこのマンションのカードキーを受け取った、絶対にチ力を行かせないようにしなきゃ、俺が殺される。

「ゴメンなカイ君、コウはシスコンだからさあ、妹が可愛くて可愛くてしょうがないんだよ」

「ハヤ！そんなに殴られたいか？」

「別に良いけど、そんなことしたら、カイ君にコウのシスコン列伝を夜通し語っちゃうから」

コウさんは顔を真っ赤にして舌打ちと共に歩きだした、ハヤさんも後を追って走って行った。

ってかコウさんのシスコン列伝つても聞いてみたいな、一晩かかるくらいのもんならだろ。

その前に、コウさんがいなくなる前に言わなきゃいけない事が。

「コウさん！俺、コウさんよりチ力を幸せにする自信ありますから！絶対に泣かせませんから！」

コウさんはそのままシカトして行った、ハヤさんは親指を立ててコウさんの後について行った。

俺が向き直ってチ力を見ると顔が真っ赤になってる、ツバサも騒いでるし。

「カイの馬鹿」

「お兄ちゃんカツコイイ！あんなに堂々と宣言しちゃうなんて」

「俺は嘘つかないから」

チ力の手を引いてエレベーターに乗った。

飯も食べ終わってみんなでテレビを見てる時だった、急に携帯が鳴りだした、ディスプレイを見るとアオミの名前が出る。

「もしもし」

“カイ？私今日姉御と語り明かすからツバサとチカちゃんを家に泊めちゃって、カイが泊まりに行っても良いけどね……………、プツツ”  
「お、おい！」

一方的にきりやがった、しかもかなり酔ってたっぽいし、しかも泊めろって何だよ泊めろって、ヤヨイさんからの命令とか？

「カイ、どうした？」

「アオミとヤヨイさんが語り明かすってから、二人を家に泊めろだつて」

“それは許さねえ！”

大きな音と共に誰かが入って来た、赤茶の髪の毛にメガネの男とドレッドの男、コウさんとハヤさんだ。

それより何でココにいるんだよ、俺は部屋番号どこか階も教えてないのに。

「コウ、聴くだけって約束だろ？」

「チカ！男の家に泊まるなんて許さないからな！」

「その前に何でココにいるんですか！？」

「コイツチカ嬢が心配だから、ポストで部屋番号調べてずっと聞耳たててんだぞ」

スゲエ、そこまでやるとはアオミも真つ青だな、犯罪犯してまで妹を守りたいのかよ。

「でもカイなら安心だよ、ツバサもいるし」

「ダメだ！俺の家に来い」

「コウさんも男じゃないですか」

「兄はOKだ」

「今時兄が妹に手を出したって例もありますからねえ」  
ちよつとからかったら顔色が変わった、この顔は完璧ぶちギレモードだ、殺される。

「すみません、冗談です」

「とりあえず、チカ、俺の家に来い」

「カイ、ゴメンな」

「別に良いよ」

コウさんとハヤさんとチカが出ていった、コレで俺とツバサの二人つきりになっちゃったな、……………ツバサと二人つきり？

「お兄ちゃん！」

「おい！馬鹿！」

ツバサが飛び付いてきた、最悪な予感的中だ、今のツバサはアオミ級に危ない、ブラコンモードマックスだよ、コウさんと良い勝負だな。

「お兄ちゃんと二人つきりだ、ねえ、何する？背中流しっこ？」

「しねえよ！コテツに殺される」

「大丈夫だよ、兄妹なんだから」

「あのな、兄妹でも風呂には一緒に入らないし、抱きつきもしない、実際のところ親友よりも浅い存在なの」

「ええ、僕の見てるアニメはキスもしてたのになあ」

どんなアニメを見てるんだよ、しかもツバサの兄妹の基準はそこからか、アオミの言った妹萌えが半強制的に執行されそうだな。

「じゃあさあ……………」

「添い寝もダメ」

「ケチ」

「ツバサは‘お兄ちゃん’って存在とどこまでしたいの？」

「ファーストキスはしたから……………！」

ツバサは慌てて口を押さえただけど全部聞いちゃいました、顔を真っ赤にしてる、コイツ墓穴掘りやがった。

「キスう？お兄ちゃんによく話してみな」

「馬鹿馬鹿！お兄ちゃんの馬鹿！」

「冗談だって、それより、キスまでするつもりだったの？」

「そうだよ」

コイツ危ない、完璧にアオミと同族だ、アオミは更に高みにいるけど、問題はそこじゃない、こんな姉妹に囲まれてたら俺は犯罪に手を染めそうだよ。

うらやましいとか思ってる変態ども、ちつとも嬉しくないからな。

「でも言ってたじゃん、兄でも妹に手を出すって」

「それは間違った例だよ」

「でも添い寝くらいなら許されるよね？」

「許されない、それにコテツがいるだろ、コテツと寝ろよ」

「男の人と寝たことないから恥ずかしくて出来ないよ」

俺は男じゃないのかよ、ツバサの中では兄ってのはまた違った部類に入るのか？

コテツ、助けてくれよ。

「お兄ちゃんってチカチカには積極的なのに、それ以外には硬派なんだね」

「いや、俺がノーマルなの、よりによって何でツバサに四色の血が流れてるんだよ」

「僕が妹じゃ不満？」

「いや、四色のブラコンの血が不満」

「僕の事嫌いなんだ……」

なんだかしょぼりしちゃった、鼻をすすりだし、何で女の子に泣かれると何でも許しちゃうんだよ、女の涙は核兵器だな。

「ツバサ泣くなよ」

「お兄ちゃんに嫌われたあ」

ガキかコイツは、でもこの場をどうやってやりきるか。

……………ゴメン、チカ、コテツ、殴るなら殴れよ、俺は目の前で泣いてる妹を平気で放っておけるほど悪魔じゃない。

俺は仕方なくツバサを抱き寄せた、罪悪感が身体中を支配してる、これは兄としてだ、決してツバサを女として抱き締めてる訳じゃない。

「大丈夫だよ、妹を嫌う兄なんていない、兄として好きだよ」

「ホントに？嫌いじゃない？」

「当たり前じゃん、知らなかったとはいえ兄妹だもん、アオミもツバサも同じくらい俺には大事だ」

「チカチカは？」

「ツバサとアオミが二人がかりでも勝てないくらい好きかな、でもコテツとかコガネやヒノリよりも、ツバサが大事だよ、家族だもん」

「……………お兄ちゃん」

みんなマジでゴメン、俺って最悪の男だよな、数時間前までは親友だった奴を抱き締めてる。

確かにツバサの事は好きだよ、でもチカの好きとは全く違ったもの、チカのためならツバサやアオミでも投げ出せる、でもツバサとアオミのためならコガネ達を投げ出せる。

親友ではない事は確かだ、でもまだ複雑なのも確か、それもこれも全部あのクソ親父のせいだ。

## 赤の兄貴（前書き）

今回はチ力目線です。

## 赤の兄貴

兄貴に連れていかれるがまま兄貴の家に着いた、カイの家が14階で兄貴の家が10階、前来た時は違う家だったから引越したんだと思う。

部屋の中は兄貴そのものって感じ、銀を貴重とした家具ばかりで生活感の欠片もない、無駄に几帳面に揃えてあるし、兄貴はこんな家に住んで疲れないのかな。

兄貴は冷蔵庫から飲み物を取り出して、コップを3つ取り出した。

「コウ、俺はいいよ、コウのシスコンの邪魔しちゃ悪いだろ」

「今の発言の方が問題ありだ」

「ハヤ君も残って、ハヤ君に話したい事があるの」

「チ力嬢もしかして俺に惚れてたとか？」

兄貴の裏拳が飛ぶ、でもハヤ君は軽々と体を反って避けた、懐かしい光景だな。

アタシはハヤ君と兄貴を座らして話した、話す事は沢山あるけど重大ニュースから。

「ハヤ君落ち着いて聞いて。まず、ユキが死んだ」

ハヤ君は机を叩いて立ち上がった、でも兄貴がハヤ君の腕を掴んで無理矢理座らせる。

「島に行くフェリーでマミ姉をかばって海に落ちた、それで行方不明の搜索打ち切り、事実上死んだ事になった」

「ユキが、マミコをかばって？」

「ユキとマミ姉は付き合ってた、でも本題は違う、マミ姉がそのシヨックで喋れなくなっちゃったの」

ハヤ君は頭を抱えてうつ向いてる、兄貴は無表情で腕を組んで椅子に背を預けてる、端から見たら冷たい奴かもしれないけどアタシには分かる、腕を掴んでる手に力が入ってる、兄貴も辛いんだ。

「時間が経てば話せるようになるらしいけど、それがいつになるか



は分からない。でも言葉が喋れないだけでマミ姉はマミ姉だよ」

「マミコなら大丈夫だよ、絶対に話せるようになる、俺の自慢の妹だから」

ハヤ君はうるんだ目で笑った、ハヤ君が大丈夫って言ったんだから大丈夫だよな。

「暗い話をした後は明るい話を、風間詩織さん、アタシ達はフウちゃんって呼んでるけど、フウちゃんが島の中学で先生やってる」

「シオリが!?!」

二人の表情が驚きに変わった、そんなに驚く事かな、確かに少し頼りないけどそれなりだと思うよ。

「シオリに先生なんて出来るのか?」

「用務員の先生とかだったりして」

「英語の先生だったよ、アタシ達3年の担任もやってたし」

「担任!?!」

そこまで驚くことなのかな、アタシは今のフウちゃんしか知らないから分かんないけど、あの天然っぷりが酷かったとか?

「だってあれだろ、確かシオリは妄想が行きすぎて授業中に鼻血出して失神したよな」

「後はハヤに告白する時に、呼び出した所を自分が間違えてた」

「マラソンの授業で迷子にもなったよな」

「数学の時間は<sup>エックス</sup>Xを全部x(かける)って読みやがった」

「国語の時間は縦読みじゃなくて横読みしたよな」

「フウちゃん酷すぎるよ、いくらアタシでもフオローしきれない、あれで治まった方、っていうか劇的進化だよ。」

「シオリはどうなんだ?」

「今は元生徒と付き合ってるよ、天然もそこまで酷くないし」

「残念だったなハヤ」

「いや、付き合ってたの?俺ら」

「キスまでしたんだから付き合ってたんだろ」

ハヤ君は難しい顔をして顎に手をあてた。

「でも告白される前だし、告白する場所間違えて来なかったもんね」  
「ハヤ君は何でフウちゃんとか付き合う前にキスしたの」

「キスしたい人とか言っただから、冗談半分で手を上げたらキスされた。それが俺もシオリもファーストキスだったんだよね」

「フウちゃん恐るべし、ファーストキスを拳手であげるなんて、天然を通り越してただの馬鹿だよ。」

「チ力嬢はあのイケメンの彼氏とはどこで会ったの？」

兄貴の目がピクツて動いた、冷静を装ってるけど内心あのガキかと思ってるんだろうな。

「カイは島に来たの、アタシが東京にいる兄貴に会いに行った時に、ひたたくりにあって泣いてるところを助けてくれたの、そのお礼に島に呼んだんだ」

「って事はチ力嬢はカイ君に会いたくて東京の学校を受けたの？」

「いや、カイはそれからずっと島にいたよ」

二人とも頭の上にクエスチョンマークが浮かんでる、これ言ったら兄貴怒りそうな気もするけど、大丈夫かな？

「カイは島にいる時に親に捨てられて、ユキの家に居候ってというか、ユキの義理の弟みたいな状態だね、ユキの両親の事もとおおかあって呼んでるし」

「カイ君も辛い人生歩んでるんだな」

そういえばハヤ君つてももの凄く涙脆いんだよな、確か島出る時なんかは泣きすぎて部屋から出てこなかったんだっけ。

「でもいざとなったらチ力を置いて逃げ出すんだろ」

「そうでもないよ、アタシがストーカーにあつた時なんて、刃物出したストーカーに立ち向かって行ったんだから、ほったの傷はその時に付いた傷。それ以外でもアタシが不良の先輩に襲われた時、カイは一人で不良の山に飛び込んで行ったんだもん、その時は3日くらい意識が戻らなかったよ」

「コウ、負けたな」

兄貴も下を向いちゃった、ハヤ君は頭の後ろで手を組みながら笑っ

てる。

カイはアタシの自慢の彼氏だもん、たとえ兄貴がなんと言おうとアタシはカイを手放せない、カイより良い男なんて絶対にいないよ。

「でも酒癖は悪いだろ、そういう奴に限って豹変するんだ」

「お酒は自分でセーブするよ、むしろ悪いのはアタシの方だよ」

「酔った彼女を思っで自分は我慢する、なかなか出来ないよ」

兄貴は頭を抱えて何か汚点を探そうとしてる、カイの悪いところなんて無いよ、カイより完璧な人がいるなら知りたいくらい。

「でも頭悪いと将来苦労するぞ」

「それも大丈夫、テストは常にトップだから。それに料理はもの凄く上手で案外家庭的なところもあるよ」

「頭が良くて料理が出来てイケメンで彼女思い、男の理想像だね」

兄貴は更に必死に考えてる、アタシとハヤ君は笑いながら兄貴が次はどんな質問をしてくるのか待ってる。

無理なのに、兄貴が可哀想に見えてきた。

「でも不良に負けたって事は喧嘩弱いんだろ、運動出来ないんだ」

「そうでもないよ、相手はバット持ってたし、8人くらいいたもん。運動はサッカー部で2大エースって言われてるよ、県の選抜に呼ばれたけど断ったらしいし」

「運動も出来るなんて、コウ、諦めろよ」

ハヤ君は兄貴の肩にポンと手を置いて慰めてる。

カイ、兄貴に勝ったよ、やっぱりカイは最高の彼氏だよ、モテすぎてたまにヤキモチやいちゃうけど、それはしょうがないよ、カイにも色々我慢させてるんだもん。

「だからって俺は認めないからな」

「コウも意地っ張りだなあ、カイ君より良い男なんていないぞ、チ力嬢の幸せを思ったら今のままがベストでしょ」

「クソッ、好きにしる」

兄貴は部屋に入って行った、少し悪いことしちゃったかな、後で謝っておこう。

それにしてもハヤ君の髪型は凄いなあ、確か美容師なんだよね、ハヤ君もマミ姉と同じように綺麗な顔立ちなんだよ、モテるんだろうな。

「何だよチカ嬢、そんなに俺の顔ばかり見て、惚れたか？」

「違うよ！ただ、モテるんだろうなあ、って思っただけ」

「モテるよ、職業柄女の人が多いし」

ハヤ君自分で言っちゃったよ、少しは謙遜して欲しいけど、ハヤ君らしいって言えばハヤ君らしいな。

「彼女はいるの？」

「いないよ、会う暇が無いし必要ないかな、って」

「兄貴はいるの？」

「気になる？」

アタシは無言で頷いた、やっぱり妹として気になるんだよね、妹が言うのもただで兄貴ってクールな感じで、そういうのが好きな人には良いと思うんだよね。

「いないんだよね、理想が高すぎて出来ないんだよ」

「やっぱり」

「でもモテるよ、同年代じゃなくて10代のガキと30代お姉さまから」

「どういう意味？」

「同年代には取っ付きにくいって牽制されるんだけど、ガキにはカッコイイってモテるし、お姉さまに良くあるのは『貴方の乱れた顔が見てみたい』だっただけ」

兄貴も案外凄いな、そんなディープな世界にいるなんて。

その日はハヤ君も泊まって行った、アタシはもう一室あるからそこに布団を敷いて寝た、ハヤ君はソファで寝てる、久しぶりの兄貴も変わって無かったな。

でもみんなと話してる間もカイとツバサの事が気になってた、まだアタシの中でツバサは親友、カイの妹としては考えられない、だから少し嫉妬しちゃう、早く慣れないとな。

## 青の告白

朝は大体俺が飯を作ってる、アオミが作る事もあるけどアイツ低血圧だから起きないんだよな、酷い時は叩いても起きない、魔法の呪文というか屈辱的一言というか、とりあえず人には言えない一言では物凄い勢いで起きるけど。

今日も布団の中でグズる俺の体を180度回した時だった、隣に見たことある女の子が寝てる、これはアオミじゃなくて妹だ、妹ってツバサだよな……………。

「ツバサ!？」

俺が叫ぶとツバサが眠い目を擦りながら起き上がった、寝起きなのにこの笑顔はなんだよ。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはようじゃねえよ!何でココで寝てるんだよ!？」

「一人じゃ怖かったから、最初はお兄ちゃんに抱きついてたんだけど、寝てる間に離しちゃったんだね」

「抱きついたのか？」

「うん、お兄ちゃんも抱き締めてくれたよ」

頭が痛い、抱き締めたって、寝てる俺、妹になしてるんだよ、全身全霊をかけて拒否しろよ。

「キスはしてないよな？」

「おやすみにお兄ちゃんのほつぺたにしたよ」

怖い、妹が怖い、姉妹が揃ったら俺に安息はあるのか？

「チカチカと寝てて良かったね、チカチカと寝てなかったら罪悪感で泣きたくなってたでしょ？」

「そうだな、ホントにチカと寝て……………」

「寝たんだ」

ハマった、完全に誘導尋問にハマった、ツバサのしてやったりの笑が怖い。

「やっぱり退院したときに？」

「そうだよ。アオミには言っなよ」

「何で？ 姉弟なのに隠し事するの？」

「アイツに言ったら確実に襲われる」

「僕なら良いの？」

「ツバサにはコテツがいるだろ、俺を大事にするのも良いけど、コテツはそれ以上に大事にしるよ」

ツバサの頭を撫でて俺はベッドから立ち上がった、3人分の朝飯作らなきゃいけないし、ツバサの妹就任の記者会見もやらなきゃな、殴られるだけで済めば良いんだけどな。

ツバサも部屋から出てきて、ソファーに座ってテレビを見てる、そんな中インターフォンが鳴る。

「お兄ちゃん、誰かな？」

「分かんない、ツバサでてくれる？」

「はーい！」

ツバサは走って玄関に向かった、鍵を開ける音が聞こえてドアを開ける音も聞こえた、そして何故かツバサの叫び声も。

俺は慌てて玄関に行くと、倒れたツバサの上にアオミが倒れてた。

「大丈夫かアオミ！？」

「お姉ちゃんお酒臭い」

「酒？」

「かあい、ただあいむあ」

完全に酔ってる、俺はアオミを担いでソファーに座らした、隣ではツバサが支えてるけど、酔ってるアオミはツバサをも押し倒す勢いだ、しかもツバサは嫌がってないし。

俺は水を一杯渡した。

「ゴメン、私寝るう」

「分かった、俺は今日出掛けるから昼は適当に食って」

「はあーい」

アオミはそのままフラフラになりながら自分の部屋に入っていった。

俺は出来た料理をテーブルに並べて、アオミの分はラップをかけておいた。

「いただきます」

ツバサは一目散に食べ始めた、一口口に入れるとそのまま止まった、そしてプルプルと震え始める。

「美味しい！」

「何だ、美味しいのか」

反応がおかしいから不味いのかと思った、俺の作る飯が不味いわけないもんな、と自惚れてみる。

「お兄ちゃん美味しいよ！」

「そこまで騒ぐ事か？」

「騒ぐ事だよ、こんな美味しい朝御飯始めて食べた、毎日食べたいなあ」

「ヤヨイさんが帰って来ない時なら良いよ」

「わーい」

学校でいる時よりも無邪気だな、少し疲れるけど可愛い妹？慣れるまでは色々苦労しそうだけど、慣れれば可愛い妹になるんだろうな、大人しくしてればの話だけど。

「お姉ちゃんはママと何話してたのかな」

「さあ、でも久しぶりに楽しそうなアオミを見た」

「どういうこと？」

「アイツって友達を選ぶところがあるんだよね、ツバサと一緒にブラコンだし。だから帰って来ても楽しそうじゃないんだ、でも今日は俺と同じ笑顔で帰って来た。多分女同士でしか話せない事でも話してたんじゃない」

ツバサは納得したように頭を上下させてる、ホントに分かってるのかな、まあそのうち分かるだろ。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんはやっぱり姉弟だね、良く分かってるよ。でも僕なんて……」

「そうか、ツバサの場合寂しかったんだろ、チカが同居してても親

友だ、悩みとかあっても話せる限度とかはあるし、親友に甘える事は出来ない。母親がいても男の包容力が欲しい時もあつただろ、そこでお兄ちゃんぐれば甘えなくなるのもしょうがないだろ」

「お兄ちゃん凄いい、そこまで分かつてたんだ」

「まあな、ツバサの甘えて来る時の目と、俺が遅く帰って来た時のアオミの目が似てたから、寂しさをぶつける感じがな」

ツバサの目は少しうるんだ、俺とかアオミとは違ってツバサは甘えたいタイプだもんな、女同士の家族には出来ない事もある、それが溜ってたんだろ。

ツバサはチ力を連れて帰った、俺も支度しなきゃな、これからコテツに殺されるかもしれないし、気合い入れてこ。

待ち合わせをしてるレストランに行くと、既に全員集合してた、そりゃ重大な話があるって言えば遅刻する奴はいないよな。

コガネとヒノリとコテツの順で椅子に座ってる、奥にツバサがいてその隣にチ力、俺はチ力の隣に座った、コテツと調度対角線上になつて良いし。

「カイ、重大な話ってなんだよ？」

「そうやで、わいこれから稽古あるんや、早めにお願ひしまっせ」

「いや、コテツに一番関係あるんだよね」

「わいに？」

コテツは心当たりが無いか考えてる、分かつたらビックリだよ。

ああ、今になって緊張してきた、ツバサには黙ってるって言ったから何も言わないから良いけど、ツバサは何を口走るか分からないもんな。

「驚くなよ」

「大丈夫やって」

「ツバサと俺は兄妹なんだって」



「……えええええ！」

店内の視線全てが俺らのテーブルに注がれる、とりあえず全員でお辞儀して話を戻した、コガネもヒノリもコテツも理解出来ないらしい。

「冗談やろ？」

「ツバサの父親と俺の父親が一緒らしい」

「でも髪の色が違うじゃん」

「そうやで、カイはんのお姉さんまで青いのにツバサはノーマルやで」

「髪の色は母親の遺伝子」

再びフリーズする、ヒノリは驚いたわりには既に興味がないらしい、全員がヒノリみたいだったら楽なのに。

「俺の親父はホストやってて、その時に手を出して妊娠させたのがツバサの母親、だから俺とツバサは異母兄妹って事」

「ツバサはどう思ってるん？」

「僕は嬉しいよ、お……、カイがお兄ちゃん」

「血が繋がってるだけならまだマシなんだけど。みんなアオミ見た事あるよな？」

コガネとコテツは顔を見合わせて考えてる、その間もヒノリは椅子に背を預けてアイステイーを飲んでる。

「カイはんにベタベタなんやろ？」

「チカちゃんよりもな」

「ツバサまであだとしたら？」

「カイはん、もしかしてツバサと手繋いだんか？」

「ゴメン」

コテツはテーブルを思いっきり叩いて立ち上がった、ヒノリ以外全員に緊張が走る、俺はまともにコテツの顔を見れない。

「まあ、ええか」

「えっ？」

「だって兄妹なんやろ？それならしゃあない、カイはんはツバサの

兄貴なんやる？」

「そうだよ、僕達はもう親友じゃないよ」

「でも良いのか？カイは昨日までは俺らと同じだったんだぞ、ツバサ君はやり辛くないのか？」

コガネは肘をつきながら、まへのめりになって、ツバサに聞いてる、おれもそれがずっと引つ掛かってただけど、ツバサがあんなだから受け入れてるけど。

「でもカイは産まれた時からお兄ちゃんだもん、親友になるずっと前から僕達は繋がってたんだよ、むしろ親友だったのが嘘みたいだよ」

そっかあ、そうだもんな、俺が産まれた時にアオミが姉貴だったように、ツバサは妹だったんだよな、そう考えれば楽だな。

「チカちゃんが良いのか？親友と彼氏がベタベタしてて」

「最初は嫌だったよ、でもツバサはコテツという時は愛を受けてる女の顔をしてる、カイという時は兄貴に頼る子供の顔をしてるんだ、それ見たらアタシと兄貴の事を思い出しちゃって、別に良いかなって」

今はこんなに気丈に振る舞ってるけど、寂しがりやの泣き虫のブラコンだったんだよな、ツバサの気持ちは少し分かるんだろうな。

「コテツは？」

「カイはんは酷い事せえへんやる？」

「うん、家族思いの良いお兄ちゃんだよ」

「それならええで。カイはん、妹さんを下さい」

「何それ？プロポーズ？」

コテツは真面目な顔で体をのりだしながら行ってきた、高校生のクセに気が早いな。

「まあそんなもんやな」

「ってか早く持つって、アオミとツバサが揃うと疲れそうだから」

「お兄ちゃん酷い！」

「ツバサ、馬鹿！」

ついにコイツやりやがった、折角今まで上手い具合に抑えてたのに、3人の冷ややかな視線が突き刺さる、ヒノリまで興味持ちやがって

「………… お兄ちゃんだって」

「カイはんそんな趣味あつたん？」

「ツバサ君が言うとりアルだな」

「アタシはフォローしないよ」

「お兄ちゃんごめんなさい」

ツバサが泣きそうな顔で謝ってきた、ツバサにも見捨てられるし、この調子だと学校中に広まるのも時間の問題だな、コイツらの中では諦めるか。

「ツバサ、別に気にするな」

「ごめんなさい」

「カイが言わせてるの？」

ヒノリがボソツと爆弾発言した、俺にそんな趣味があると思ってるのかな、だとしたら今後の在り方を考えないとな。

「ヒノリはそう思う？」

ヒノリが無言で頷いた。

「そんな訳ないじゃん、ツバサがこうとしか呼ばないから諦めただけだよ」

「コテツ、カイが一線踏み越えるのも時間の問題だぞ」

「それはアカン、そない事したらわいの拳が暴れてまうで」

「それはアタシも許さない」

それは無いと思うけど、手前までなら有り得そうで怖いんだよな、アオミは仕掛けて来てるし。

「大丈夫だよ、始めてはコテツって決めてるから」

「……………不純」

「爆弾発言だろ」

「カイはんええんか、妹あない事言ってるで」

「好きにしるよ」

「お兄ちゃん僕が大事じゃないの？」

全員笑ってるよ、俺は泣きたい、常に暴走してる妹を誰かに止めて欲しいんだよ。

「でもココまで来るとホントの兄妹みたいだな」

「何言ってるのコガネん、僕とお兄ちゃんは正真正銘兄妹だよ」

「お兄ちゃんはどうなの？」

「コガネの兄貴では無いな。親が言ってるんだから確かなんだろ」

「前々から兄妹だったみたいだな」

確かに、俺もツバサが妹つてのが自然になりつつある、学校も同じだし良く会うから一緒に住む必要は無いけど、むしろ一緒に住まれると困る。

でも、こんなに可愛い妹がいるんだ、毎日がつまんない訳ないよな、俺が言うのもなんだけど綺麗な姉もいるし、俺って馬鹿だよな。

## 青と甲板

今日は夏休み以来の帰省、半ば強引にアオミやらツバサやらをふりほどこいて来てる。

いつもなら今頃は船内で爆睡してるんだけど、今日はチカに無理矢理甲板に連れて来られた、寝ようと思えば寝れるんだけど、元気なチカを見てると寝れなくなる、いや、寝るのがもったいないってのが妥当かも。

最近何故かチカが落ち着いてきて、こんだけ無邪気にはしゃいでるのは見てなかった、だから何だか嬉しくて。

俺はチカに腕を引かれるがまま船首に行った、風をもろに受けて気持ち良い。

「カイ！向こうで飛び魚が飛んでるぞ」

「ホントだ」

「また飛んだ！」

久々にこんなチカ見た、大人しくしてる時の100倍可愛い、癒されるなあ。

「カイ、顔が赤いぞ」

「チカが可愛いからだよ」

「……………馬鹿」

チカは顔を真っ赤にして、また海を眺め始めた、やっぱり可愛いな。でも何でチカは大人しくなったんだろ、今までは人目を気にせずに騒いでたのに、最近は控えてるように思える。

「チカ、何で最近大人しいの？」

「そ、そうかな？」

「そうだよ、何か元気そうじゃない」

チカは人指し指で頬を搔いて、視線を海から空に移した。

「カイが疲れちゃっただろ？」

「はい？」

「いや、だからあ、最近コテツとかツバサのお守りやってるし、コガネとヒノリのコントロールもしてる、何かカイが全部動かしてるだろ。それにアオミさんとツバサの家族の事もあるし、アタシが甘えたらカイが余計に疲れるから……………」

「それだけ？」

チカは無言で頷いた、チカも下らない事考えるんだな、まあ確かに疲れるけど、そこでチカがセーブするのは筋違いだと思っただし。俺は柵に捕まってるチカを被うように抱き締めた、チカは多少ビツクリしたらしく、俺の顔を真ん丸の目で見てきた。

「バゝカ」

「何がだよ！？」

「俺はチカのモノなんだから、甘えたい時に甘えれば良いし、頼りたい時に頼れば良い。チカにだけは我が儘して欲しいんだから、自分に嘘付くなよ」

「でもカイが疲れるだろ」

チカは物凄い不安な顔で俺の目を見てきた、少し惚気させてもらうと、この顔もメチャメチャ可愛い。

「ああ、チカに気を使われるとこっちが疲れる」

チカは笑顔になって地平線に視線を移す、その瞬間俺は柵に背を預けて座りこんだ。

「どうしたの？」

「チカに気を使われたから疲れた」

「大丈夫か？」

「ダメだな」

「あああ、ゴメンゴメン！アタシのせいだよな！？」

あたふたしたチカも可愛いな、ってか俺さっきから惚気てばっかだな。

「そうだよ」

「何かアタシに出来る事はある？」

「キスして」

チカの顔がみるみるうちに真っ赤になつてく、あたふたが止んで、うるんだ目で俺の事を見てくる、そんな事されたら俺からしたくなるだろ、でもコレはチカへの罰？だ。

「ホントにキスだけで良いのか？」

「ああ」

「分かったよ」

チカは目を瞑つて、勢い良く触れるだけのキスをした。

でも俺は戻る途中でチカの両頬を両手で挟んだ。

「ダメ」

「んん！」

そのまま無理矢理、今度は俺からキスをした、いつもよりも長く、五感が全て無くなるようなキスを。

チカを離すとそのまま床にへたれ込んだ、体に力が入って無い、目はトロンとしてるし。

「もしも〜し」

「久しぶりなんだから、……………優しくしてよ」

そっか、チカはクリスマススの記憶が無いから久しぶりなのか、まあ良いか、こんなチカも見れたんだし。

「チカ、早く立たないともっと激しいキスしちゃうよ」

「それはダメ、抑えきれなくなる」

何をだよ、何を抑えきれなくなるんだよ、試してみたい気もするけど、試すと怖そう、確実に変態路線に行きそう。

「カイ、カイのキスでアタシの心臓が壊れそうだよ。ほら」

チカは俺の手を取って自分の胸に押し当てた、しかも確実にこれは狙ってる、そうと分かっても何故か鼻が熱くなる、寒いからかな、鼻水が出てきた。

「カイ鼻血！」

「えっ、嘘？」

鼻に手を当てると手が真っ赤に染まってた。

チカにティッシュを借りて処置はしたけど、我ながら情けねえ、こ

の程度で鼻血出すなんて、コガネの事からかってられないな。

「これはアタシの勝ちだな」

「勝ち負けの問題か？」

「勝ち負けの問題だよ」

チ力は俺と同じように柵に背を預けて座った、背中から風を感じるから余計に冷える、でもチ力が俺の腕を抱いてくれるから、そんなの全くもってお構いなし。

「カイ、卒業したら結婚しよう」

「ハハ、気が早いな」

「良いだろ」

「良いよ、結婚でも何でもしてやるよ」

チ力は俺の腕を抱きながら喜んでる、遅かれ早かれこの言葉が出てくるとは思っただけ、ココまで早いとはな。

「ねえねえ、アタシとカイの子供って紫色の髪の毛してるのかな？」

「単純に考えればそうだけど、遣伝子ってそんな単純な物なのか？」

「良いの！カイの子供だからカッコイイんだろうな」

「女の子だったらうるさいだろうな」

「それどういう事！？」

チ力は頬を膨らまして怒ってる、このまま海に入っても頬だけで浮けるんじゃないの。

「冗談、可愛くて子離れ出来ないと思うな」

「男の子だったら蒼紫<sup>アオシ</sup>、女の子だったら紫紅<sup>シンク</sup>って可愛くない？」

「気が早い」

チ力の額を指で小突いた、でも確かに可愛いかも、後何年先だか分からないけど、現実になったら良いな、いや、現実にするか。

ガキの戯言、でも俺らは本気だよ、絶対に二人で幸せになる。



## 黒と手話

フェリーは徐々に減速して着岸の準備に入った、俺とチ力は自分達の席に戻って荷物の準備をしてる。

島に着いたらとりあえずマミ姉に会いに行く予定だ、元気だとは思うけど、何か変化があれば儲けもんだろ、そんなに早く治ると思つて無いけど。

乗客は次々に降りて俺らだけになった、船内の客がいなくなったのを見計らって、俺らも船を降りた。

降りてビックリ、ハヤさんとマミ姉がいた、いや、ビックリしたのはそれじゃない。

「マミ姉、その髪の毛どうしたの？」

マミ姉は笑って自分の髪の毛を触った、以前のマミ姉なら髪の毛は指に絡む。

「俺が切ったんだ、可愛く出来てるだろ」

ハヤさんはマミ姉の頭を撫でながら笑った。

マミ姉の髪の毛、夏休みまでは綺麗なロングの黒髪だった、でも今はベリーショート、チ力よりも短くて若干はねてる、そこらへんの男よりも短い、でもそれが似合っただから凄い。

『似合ってる？』

マミ姉は手話で話しかけてきた、夏休み俺らが島を出る前の約束、マミ姉には手話が出来るように、俺とチ力は理解出来るようになること。

「凄く似合ってるよ、可愛いし」

「凄い、アタシよりも短い。でもさすがマミ姉だよ、どんな髪型にしても様になる」

『ありがとう』

「なあなあ、俺を抜いて話を進めるなよ」

そっか、ハヤさんは分からないんだよな、逐一通訳しながら話せば

良いか。

それより何でハヤさんがココにいるんだろ、ついこないだマンションで会ったのに、地味にストーカーとか？

「ハヤさんは何でいるんですか？」

「チ力嬢にこの事聞いていてもたっていられずに、あの後仕事そっちのけできちゃった」

仕事をほったらかしにして来るなんて、かなり無茶苦茶な人だな、でも、マミ姉が心なしか元気そうだし、兄貴様々だな。

「こんな所で立ち話もなんだろう、俺達の家に来なよ」

「じゃあ荷物置いたら行きます」

俺とチ力はとりあえず荷物を置きに帰る事にした、マミ姉には色々話したい事があるしな。

俺はチ力を迎えに行つてからマミ姉の家に行った、チ力の家はマミ姉の家に行くときに、丁度通るからな。

家につくとハヤさんが出てきた、満面の笑で通されると、居間にはマミ姉がこれまた満面の笑で座つて、笑顔の絶えない良い兄妹だな。

俺らが座るとハヤさんは飲み物をくれた、机を真ん中にしてマミ姉の左にチ力、右にハヤさん、正面が俺だ。

「マミ姉、四色蒼海って覚えてる？」

マミ姉はビックリした表情で頷いた、気付いてると思うんだよな。

「俺の姉貴」

『もしかしたらと思ったけど、ホントにカイ君のお姉ちゃんなんだ』俺は簡潔に翻訳しながら聞いた、ハヤさんのために。

『アオミちゃんって可愛いよね』

「極度のブラコンだけどね」

マミ姉は首を傾げた。

「弟Loveなんだよね」

『そうなんだ、始めて知った』

アオミの事だから無駄に自慢してると思ったけど、軽い罪悪感で話せなかったのかな、俺の事を見捨てたって思ってたらしいし。

「でもさあマミ姉、カイったらアオミさんと学校で抱き合ってたんだよ」

「あれはアオミが無理矢理抱きついてきたんだよ！」

「学校では浮気って噂されてるんだぞ」

「大丈夫だって、俺にはチ力だけだから」

「そんな事言ってもダメ！」

「フフッ」

「……笑った!?」

今マミ姉が笑った、あの声は聞き慣れたあの声だ。

マミ姉は喉を押さえてもう一回声を出そうとした、でも出てくるのは空気だけ、悲しい顔した後にもた満面の笑になった。

「大丈夫だよマミ姉、良くなってる証拠じゃん」

マミ姉は笑顔で頷いた。

「良かったなマミコ」

ハヤさんはマミ姉の頭を撫でて笑ってみせた、マミ姉のこんな子供みたいな笑顔は始めて見た、いつもは大人っぽい笑顔なのに。

「マミコも落ち着いたし東京来るか？」

マミ姉はビクリした顔でハヤさんを見た。

「マミコも落ち着いただろ、それに東京に行けば親友もいるし、チ力嬢やカイ君もいる、なんだったら俺ん所でバイトも出来るし」

マミ姉は悩んでるみたい、そりやそうだよな、話せないのに東京に行くのはキツイもんな。

「やっぱり嫌か？」

『お兄ちゃんに迷惑がかかるよ』

俺はハヤさんに通訳した、マミ姉らしい理由だな、でもハヤさんなら……。

「俺がそうしたいんだよ、マミコをココに一人で置いておきたく無いんだ、俺と同じ所で仕事すればずっとマミコと一緒にいれるだろ」  
『でもお兄ちゃんに迷惑だよ、友達とかもいるでしょ?』

「大丈夫! コウやチ力嬢、カイ君やアオミちゃんっていう親友もいるんだろ、こっちにいますより楽しいだろ」

この人は俺らに相談無しに決めてるよ、まあ少なくとも俺は大丈夫だな、アオミも喜ぶと思うし、俺は万々歳。

「俺は大丈夫だよ」

「アタシも、兄貴も喜ぶと思うし」

「マミコは?」

マミ姉は笑顔になって頷いた、ハヤさんは喜んでマミ姉の頭を思いっきり撫でて、頭を撫でるのってハヤさんの癖なのかな。

「じゃあ年明けに帰ろう」

マミ姉はハヤさんに撫でられてるから小さく頷いた。

「じゃあマミ姉に毎日会えるの! ?」

「さすがに毎日とは会えないだろ」

「何で?」

「マミ姉はハヤさんの所でバイトするんだし、俺らにも学校がある、それにそんな毎日マミ姉に会われたら、俺がマミ姉にヤキモチやかし」

「わああ、今のコウが聞いたなら青筋立ててキレるだろうな」

チ力は顔を真っ赤にしてうつ向いてる。

こうやって話しているとハヤさんとユキってホントに似てるな、でもハヤさんには悪いけど、ユキには敵わないんだろな、まあハヤさんの存在が治癒に一步步近付いてるのも確かだ。

東京に行って、マミ姉が少しでも言葉を取り戻せば良いんだけどな。

## 青の同窓会

今は超大豪邸ことミッチー宅にいる、軽くここら辺の説明が必要だ  
と思う。

ミッチーは中学の同級生、それと両想いでミッチー宅の使用人の娘  
のコノミちゃん。

他にいるのは、人形好きで子供っぽいユメちゃん、一つ下の彼氏の  
これまたガキのゲン。

教師に恋したダイチ、その恋された教師でダイチの彼女、初恋の相  
手はハヤさんという天然のフウちゃん。

後は学級委員長兼ユメちゃんのお守りだったサエ、ちなみに一回サ  
エから告白された。

こんな懐かしの面々と同窓会モドキを開催してる、大体こういう会  
場になるのはミッチーの家。

理由はデカ過ぎるから、どれくらいデカイかっていうと、俺とダイ  
チが迷子になっただくらい。

「カイ、その髪の毛何？」

サエが呆れ気味に言ってきた、サエは思った事ズバズバ言うし言う  
ことキツインだよな。

「オシヤレ？」

「髪の毛伸びましたねカイ君」

ミッチーが横から入ってきた、当然コノミちゃん付きで。

「ホントだ、カイさんこんなに長くなかったですよね？」

「まあ長くもしたくなるさ」

「何で？」

「気分」

サエが呆れて頭を抱えてる、ってかさつきから結んでるところを触  
られてるような……、いや触られてる。

振り向くとそこにはゲンとそれを制止するユメちゃんがいる。

「スゲエカイさん！何コレ、男なのに髪の毛結んでる！」

「うるせえ、ゲンのチョンマゲを引っこ抜くぞ」

ゲンの頂点で結んだ前髪を引っ張った。

「イタタタ！カイさん痛いよ！」

「じゃあ俺に変な事するな」

ゲンのチョンマゲを放した、ユメちゃんが片手で人形を抱きながら、ゲンの頭を撫でてる。

「ゲンちゃんが、悪い」

「カイくん！」

この声は……………、何か飛んで来たから体を反らして避けた、俺の目の前を物凄い勢いで誰かが通り過ぎる、見るとヘットスライディングしてるフウちゃんがいる、反対側にはダイチがいた。

「何で避けるんだよカイ、フウちゃんが可哀想だろ」

「フウちゃんを抱き締めても良かったの？」

「……………カイが正しい」

「ダイチ君酷あい！」

再び俺の前を通り過ぎて、今度はダイチに抱きつくフウちゃん、コイツはホントに教師かよ、何か一瞬にしてドツと疲れたな。

チカとサエがジュースを持って来た、それにしてもみんな変わって無いな、少しは変化を期待したんだけど。

「カイ、ジュース」

「ありがとう」

「なあカイ、サエに彼氏出来たんだって」

「マジで！？」

俺が本気でビックリすると、顔が『失礼ね』と訴えてくる、確かに失礼だな。

「やったじゃんサエ」

「ダイチに出来たんだから、私に出来ない訳ないでしょ」

「いや、何かサエなら勉強の邪魔になるとかで、彼氏作らなそうだったから」

「エスカレーターだからね、それに女の子なんだから恋くらいするわよ」

確かに、なりふり構わず俺に告白したくらいだからな、それでチカと喧嘩したらしい。

「カイとチカも仲良さそうだね」

「当たり前だろ、アタシが惚れた男だぞ、死んでもはなさないよ」  
嬉しい事言ってくれるねチカ、まあ例の如くサエは呆れてるけど、サエをのらせるのってヒノリをのらせるのよりめんどくさいかも。

「チカ、そういう事は思っても口に出さない」

「でもさあサエ、カイってアタシがいるのにモてるんだよ、酷いと思わない？ サッカー部の試合とか女の子だらけなんだぞ」

別にモてるのは俺のせいじゃないんだけど、酷いも何もしょうがないじゃん、俺だっていなくなるならいなくなつて欲しいもん。

「カイとチカって光ヶ丘だっけ？」

「そうだよ」

「光ヶ丘のサッカー部は有名だよ、彼氏がサッカー部だから言つてたけど、2人メチャメチャイケメンがいて、それ目当てに他校からも女子が来るって。彼氏も見たこと無いらしいけどね、とても男が入れるギャラリじゃないって」

そうなんだ、他校から来てるのは始めて知つたし、そこまで俺って有名人？ なんか照れるな。

「それにチカはバレー部でしょ？」

「何で知ってるの！？」

「私もバレー部だもん。光ヶ丘のバレー部3人も有名だよ、可愛くて上手だつて」

「何か俺らの学校って有名なんだな」

「別名アイドル高校だもん」

無駄に他校の生徒の出入りが激しいのはそれが理由か、第一校風がおかしいもんな、普通高校でミスコンなんてしないだろ、それに生徒会長がイケメンって制度もどうかと思うし。

「来年は私も試合に出るからチカとあたるかもね」

「アタシ達には勝てないよ」

サエもバレー上手いんだよな、確かコテンパンにされたっけ。

サエが財布から何か探してる、何かを見つけたらしく取り出した、写真二枚、もしかして彼氏自慢とか。

「はいコレ、カイと、チカ」

手渡された写真にはつい最近の俺が写ってる、チカの方には最近のチカだ。

「何コレ？」

「売ってたからネタとして買った、チカとカイの他にハーフの男の子とか、銀色の目をした女の子とか、コスプレした女の子もいた」  
コガネにヒノリにツバサだ、こんな事をするのは一人しかいない、帰ったら……、穩便に話し合いで済まそう、殴るの良くない。

「もしかして売ってた奴って糸目でスパイラルの関西人？」

「何で分かったの？」

「コテツか、カイどうする？」

俺は携帯を取り出してアドレス帳からコテツの名前を引き出した、通話ボタンを押すとコテツにかかった。

「もしもし、何でっか？」

「コテツ、他校でも写真売ってるだろ？」

「あら、バレてもうた？」

「バレたバレた。帰ったら焼き肉屋で報告聞くから」

「焼き肉屋？」

「コテツの奢りでね」

“ちょちょ、ちょっと待ってや！それだけは堪忍して……プツッ”  
話の途中で強制終了。

「チカ、帰ったらコテツの奢りで焼き肉だって」



「やったあ！」

「何なのコテツって？」

「商売に目がない親友、その写真に写ってた奴らと俺らと関西人でいつもつるんでる」

「アタシを含めて女の子3人がバレエ部、ハーフの不良が有名なサツカー部のもう一人、って感じかな」

「物凄い濃いメンツだね」

確かに、かなりの色物グループだってのは分かってるよ、でも中学の時もドッコイドッコイだろ。

超ボンボンに、メイドさんに、人形オタクに、チョンマゲに、マリモに、天然教師に、毒舌委員長、誰が誰だかは分からなくても良いけどね。

## 青の幕開け

今年も残り2時間ちよつと、なんか年寄りっぽいけど1年って早いな、今年は色々ありすぎて楽しかった、来年はもつと楽しくなる、ハズ。

今年はママ姉はハヤさんと一緒だから俺とチ力だけ、去年もだけど今年も俺の両親はいない、何が言いたいかっていうと、只今家には俺とチ力だけ、他には誰もいないし誰も来ない。

まあ、チ力に何をしようって訳じゃないんだけどね、臭いかもしれないけど、隣にいればそれで良いじゃん。

「カイ、今年もソバ作るの？」

「もう作つてあるよ、後は茹でるだけ」

「ホント!？」

チ力が何故か喜んでる、無駄に嬉しそう。

「どうしたの？」

「カイのソバだぞ、あれを食べるタメに一年間過ごしたようなもんだもん」

「大袈裟な」

「大袈裟じゃない!」

隣にいたチ力は俺の顔を覗きこみながら、頬を膨らまして怒ったフリをした、俺は膨らんだ頬を両手の人指し指で潰した。

「カイのソバがどんだけ美味しいか知らないのかよ!？」

「知らないも何も俺が作ってるんだけど」

「あのソバを食べたら、死にかけた人も奇跡的回復をするよ!」

普通にスルーされた、しかも奇跡的回復って、過大評価もそこまでくると妄想だろ。

でもそんなに期待してくれてたなんて嬉しいんですけど。

「アタシだけじゃなくて、みんなにも食べさせたいくらいだよ」

「みんなって」

「ツバサとか」

「じゃあそれは来年だな」

「うん！」

チ力は覗きこむのを辞めて普通……、じゃなくて俺の腕を抱いて座った。

テレビは紅白がやってる、この番組も飽きずによくやるよな、実際楽しくもないのに国をあげて騒いで、俺にはそれが理解出来ない。

「今年も終わっちゃうな」

「悲しい？」

「いや、楽しかった、ツバサもヒノリもコガネもコテツも、最高の親友なんだもん。それにこんな最高の彼氏がいれば、今年よりも来年の方が楽しいに決まってるよ」

「じゃあ楽しくするタメにソバ食うか！」

俺はチ力の頭に手を置いて立ち上がった、俺がそのまま手をどけようとしたらチ力が手を掴まれた、チ力は俺の手を引っ張って立ち上がる。

「アタシも手伝うよ」

「もう茹でるだけだけど？」

「うん」

まあ良いか、別に茹でるのに上手いも下手もないもんな、それに二人で作った方が楽しいし。

キッチン行くと冷蔵庫から麺を取り出した、ダシはもうとってある、俺は鍋に水を溜めてダシの鍋と同時に火を付けた。

キッチンに暖房器具は無いから寒い、火を付けててもそんなすぐに暖まるもんじゃないし、とりあえずありえないくらい寒いから家なのにチ力と手を繋いでる。

「カイ、沸騰したから麺入れて良いよ」

チ力は麺を熱湯の中に入れた、徐々に部屋も暖まってきたけどチ力が手を離す気配はない。

客観的に見ると変な光景だよな、ソバ茹でながら手を繋いでるなん

て、でも他人から見て変とか馬鹿が二人にとっては幸せなんだよな。  
「湯切りするからちよつと離すよ」

「それアタシがやる」

「大丈夫か？」

「当たり前だろ」

「分かった、怪我するなよ」

チ力はタオルで取っ手を握ってザルにソバを流した、寒いから余計に湯気が立ち上ってチ力の顔を覆ってる。

「ゲホッ！ゲホッ！」

湯気でむせてるよ、鍋を置いてせきこんでるチ力を見てたら笑えてきた、俺が腹を抱えて笑っていると、チ力は顔を真っ赤にして俺を睨んでる。

「もう笑うな」

「ゴメンゴメン、湯気でむせてるのなんて始めて見たから」

「涙出るまで笑わなくてもいいだろ」

やっと落ち着いてチ力の顔を見ると泣きそうになってる、俺はチ力の頭に手を置いて、髪の毛をクシャクシャにした。

「泣くなよ、可愛い顔が台無しじゃん」

「……………馬鹿」

「もう出来るから用意してて」

チ力はのそのそと歩いて行った、俺はソバを取り分けてチ力の後を追った。

紅白を見ながらのソバ、定番中の定番だな。

「いただきます」

「いただきます」

俺らは同時にソバを口に入れた、チ力がまたむせてるけど今度は我慢、ソバをくわえて震えながらがまんした。

「落ち着けよ」

「熱い」

「当たり前じゃん、冷たいと思ったの？」

「違うけど。お茶取ってくる」

チカは冷蔵庫を開けて飲み物を取り出して、食器棚からコップを出して戻ってきた。

部屋に入る手前の段差でチカがつまづいた、俺は慌ててチカを支えると、チカは両手を広げた状態で止まった。

「大丈夫？」

「大丈夫だから離して」

俺はチカを抱き締めてた、離してって言われても、何か離したくないんだよな。

「嫌だ」

「ソバが伸びるだろ」

「だってチカあったかいんだもん、このまま年越す？」

「一時間近くあるよ、無理だって」

「それもそうだな」

俺はチカを離して座った、チカも隣に座ってコップについだ麦茶を一気に飲み干す。

そんなに暑かったのかな、俺は暖かかったけどね。

「後一時間だよ、年越したら最初に何してると思う？」

「ハッピーニューイヤーとか言ってるんじゃない」

「あ、そっか」

「チカはむせてそうだけど」

その瞬間チカが俺の背中を思いっきり叩いた、いや、叩いたんじゃない、コイツ、グーで殴りやがった。

「カイがむせてるぞ」

「そりゃ殴られればむせるって」

チカは自分で話をふっておきながらシカトしやがった、最近チカの絡み方の強弱が激しいような気がする。

テレビがカウントダウンモードに入り、今年も残すところ数分。

年を越したところで何も変わらないけど、思い出を去年に残すのは悲しい気がする、同じに見えて違う数分後。

「カイ、カウントダウンまだかな？」

「なんなら今からする？ 4 5 5 … 4 5 4 … 4 5 3 … 4 5 2」

「辞めよう、10秒前でいいよ」

俺は渋々カウントダウンを終了した、時間に終れてる感があって良いのにな、残り450秒。

たった10秒ないし5秒、それだけの短い間だけど日本中が同じ事をする、それって凄い事だよな、ワールドカップよりも、オリンピックよりも、政治批判よりも日本中が揃うそんな数秒、俺はそんな流れに逆らいたいと思うひねくれ者だったりする。

「カイ！ 始まるよ、10 … 9 … 8 … 7 …」

「6 … 5 … 4 …」

「さん、むう！」

俺は残り3秒でチカの唇を俺の唇で塞いだ、テレビの番組が年を越して騒いでる最中、俺とチカは長いキスをしてる。

俺らは息が切れるくらい長いキスをした、顔を離すとチカは今年一番の赤面度だった、そりゃそうだよな、今年はまだ一分くらいしか経ってないもん。

「年越しキス成功」

「するなら言つてよ」

「いや、こういうのはいきなりやるから楽しいんだよ、打ち合わせしてキスするのは日本中に呆れるほどいる、でもサプライズでやられたのはそんなに多くは無いだろ、チカはそんな幸せサプライズされた内の一人なんだぞ、もしかしたら最初で最後かもしれないじゃん、そう思うと凄くない？」

「ドキドキする」

そうだよ、キスはいつでも出来る、365日いつでも、だけど今俺がやったのは一年の内一瞬、しかも一回したら翌年は気付かれてる可能性がある、って事はこのドキドキは一生に一度かもしれない、

俺らはそんな事をしてた。

「今のキスが去年最後のキスで、今年最初のキス、凄くね？」

「一回のキスなのに思い出は2年分か、何かカイの事もっと好きになりそう！」

チ力が飛び付いて来た、俺は倒れながらチ力を受け止めると、チ力は最高の笑顔を見せてくれた。

こんな最高の笑顔で始まったら今年はどんだけ楽しくなるんだろ、最高の幕開けだ。

## 黒と大騒ぎ

冬休みは島で楽しんだし、宿題も全部終わったし、今日は家で思いっきりのんびりするか。

いや、アオミがいる時点で無理だったのは分かってる、実際チカと島にいた方が疲れないかも、それにかなりの間家空けたし、多分疲労が溜まる一方だろうな。

チカは10階で降りた、俺は14階まで昇り自分の家へ。

カードキーを滑らしてドアを開けると中からどんよりした空気が、そしてどんよりが凄まじい勢いで近付き、俺に抱きついた。

どんよりの根源はアオミ、目を真っ赤に腫らして、頬には涙がった痕が、どうしたんだよコイツ？

「カイ~~~~！寂しかったあ」

それか、だからってそこまで号泣することじゃないだろ、俺の服はアオミの涙でビショビショだし、普通そこまで泣かないだろ。

「寂しかったよお、私死ぬかと思った」

「大袈裟だろ」

「寂しくてご飯も喉を通らなかった」

確かに多少やつれてる、俺は何も悪い事してないのに罪悪感が襲ってくる。

アオミを慰めると肩をつつかれた、そうだ、すっかり忘れてた。

「アオミ、コレで少しは元気になってくれる？」

俺は玄関の外から人を呼んだ、アオミはその人を見た瞬間に一気に顔が明るくなり、涙を拭いてもう一度見直した。

「……………マミコ？」

「マミ姉東京のお兄さんの所に住むことになったから、いつでも会えるよ」

「マミコ~~~~！会いたかったよお！」



アオミはマミ姉に飛び付いて胸に顔を埋めてる、うらやまし…、じやなくて！元気が戻って良かった。

「マミコ髪の毛可愛い」

『気分転換したの、似合う？』

「淒く似合うよ」

えっ？今マミ姉は手話を使ったのにアオミは理解した、アオミが手話を使えるなんて聞いた事ないし、もしかして親友特有のテレパシ―とか？

「アオミ、何で分かったの？」

「カイの練習見て覚えた」

すげえ、見ただけで覚えたのかよ、確かにアオミは頭が良い方だと思っよ、でも俺も2ヶ月近く必死に勉強したのに、アオミは見ただけで覚えやがった、恐るべし。

「こんな所じやなんだから入ってよ」

マミ姉は頷いて家に入って行った、アオミも良い顔してたな、マミ姉も楽しそうだし、良かった良かった。

マミ姉とアオミはリビングで話が盛り上がってる、と言ってもアオミの声しか聞こえないけど、でも少しはマミ姉も回復に近づくですよ。

俺は部屋で雑誌読んだり音楽聞いたりしてる、マミ姉のお陰で訪れたやつとの安息、最近はフル回転で毎日過してたからコレはコレでありがたい。

でもそんな事を知ってか知らずか誰かが家に入ってきた、いや、この家に入れるのは俺とアオミともう一人だけ、って事は消去法で一人しかない。

侵入者はリビングに行ってアオミと話して俺の部屋に近付いてる、ドタドタと大きな音をたてながら走ってきた、ドアを開けると同時に俺に飛び付いてくる。

「お兄ちゃん！」

ツバサのダイビングをキャッチするのも慣れた、って何でツバサも泣いてるの？ツバサにはコテツがいただろ。

「ツバサは何？」

「じゅぐだあい！」

クシャクシャになりながら泣いてたからとりあえず拭いてやった、で、今のを解釈すると、宿題をやってないから見せろ、と。

「コテツとやった方が楽しいだろ」

「コテツは稽古があるから無理だって、コガネもヒノノも付け入る隙が無いし。……ダメ？」

そんな上目使いで言われたら拒否出来ないだろ、コガネとヒノリは納得出来た、コテツが稽古を理由に拒否するのが意外、そこらへんは真面目にやってるんだな。

そしていつの間にかマミ姉とアオミがドアに立ってる、俺らの騒ぎを聞き付けて来たのか。

マミ姉は俺とツバサの関係を知らないから焦ってるし、関係って言うとか変な感じに聞こえるな。

「マミ姉、コイツは俺の異母兄妹だから、つまりアオミと俺の妹」

「はじめましてですよ？僕は鷲鷹翼です、いつもお兄ちゃんがお世話になってます」

お世話って、下らないところはしっかりしてるんだな。

マミ姉の自己紹介を通訳するとさすがのツバサでもショックを受けてた、説明したけど実際に直面すると違うもんな、でもツバサの良いところは適応が速いところだからな、既に気にしてない。

「マミコさんって呼んで良いですか？」

マミ姉は無言で頷いた、ツバサはマミ姉の手を取って飛び跳ねながら喜んで、何が嬉しいのか俺には理解出来ないんだけど。

「マミコさんっておっぱい大きいですよ？」

「マミコのおっぱいは柔らかくて気持ち良いよ、ツバサ、触ってみたら？」

いやいや、アオミが許可することじゃないだろ、ツバサは既に揉ん

でるし、この光景は男子高校生には刺激が強すぎる、マミ姉の苦悶？の表情を浮かべてるし、俺の理性を発破で壊そうとしてくる、耐えられるか？俺。

「ん！んう……」

「……喋った！」「」

今喋ったよな、いや、声を出したただけだけどかなりの進歩だよ。

でも何故かアオミとツバサは不適な笑を浮かべてる、確実に何か企んでるな。

「ツバサ、もつと揉めば喋れるようになるかもしれないわね？」

「お姉ちゃん！僕手伝います」

二人は一斉にマミ姉の胸を揉みだした、マミ姉は二人の攻撃に、俺は自分の理性の限界と戦ってる、既に限界に達している理性を抑えるのは、コイツらを排除するだけだ。

俺は二人の首に腕を回してマミ姉から引き離れた、二人はバタバタしながらマミ姉の胸を揉もうとしてる、マミ姉に至っては壁に持たれながら床に座った、真っ赤にした顔が俺の理性にダイナマイトを投げ込んでくる。

理性の前に身体がもたずに俺の鼻から真っ赤な血が、何で僕はこんな所から流血を？

「お兄ちゃん鼻血だしてるう、エッチイ」

「カイも男の子なんだ、私のならいつでも揉ましてあげるからね」俺は二人を無視して鼻にティッシュを詰めた、我ながら情けねえ。

「じゃあカイ、私はマミコとまた話すから。ツバサ、キスまでは許す、それ以上は私が先よ」

「はい」

アオミはそのままドアを閉めた、その瞬間ツバサがキスを迫ってきたけど、手で押さえながら俺の宿題を机の上に出した。

ツバサは黙々と宿題を写してる、俺は隣で雑誌を読んだと、イン

ターホンが鳴った、俺は部屋から出て、顔を確認するとチ力がいる、何となく想像できるんですけど。

俺がドアを開けると本日三度目の抱きつき、俺の周りにはハグ魔しかいないのかよ。

「カアイ〜！」

「宿題だろ」

「そう、写さして」

「部屋に先客がいるから一緒に写せよ」

チ力は喜びながら部屋に入って行った。

つてかヤバい、この家は女子人口率が80%に達した、俺の鋼の理性で今後起こる何かに耐えられるのか、正直自信がない。

女の子が多くて身の危険を感じたのしょっちゅうだけど、理性の限界を感じたのは初めてだ。

「カイ、そんな所でつつたってないでこっち来いよ」

「ああ」

「お兄ちゃんココはどうするの？」

まあみんな自分の事で手一杯だから大丈夫だろ。

宿題をやっと半分写し終えたお昼時、俺はキッチンに立ってます、この状況下で率先して作るのは俺だけだしな。

本日は人数が多いので鍋です、昼から鍋はおかしいと思ってる偏見野郎、料理つてのは作る奴の独断と偏見で決まるんだよ、俺の気分が鍋だから鍋、それに有り合わせで作りやすいし。

俺はコンロをセットしてだしの入った鍋を置いた、中に野菜やら肉やらを放り込んで、味噌やその他調味料で味付けすれば出来上がり、今日はいろいろありすぎて疲れたから楽させてもらいました。

「飯出来たぞ！」

俺の一声で全員が集まってきた、大勢で囲むのは鍋か焼肉が通例で

しょ。

「カイ、鍋？」

「しょうがないだろ、有り合わせで作るにはコレが一番だし、何より疲れた」

「でも美味しいよ！お兄ちゃん」

「ホントだ、鍋もカイが作るココまで変わるのね」

「マミ姉は無言で頷いてる、そこらへんの雄の鍋と一緒にされちゃあ困るよ、なんせ俺が作ったんだから、鍋も三ツ星級だね、と自惚れてみたりする。」

「ツバサ、野菜も食べなさいよ」

「僕野菜が苦手なんだもん、それにマミコさんが食べてくれるし」

「マミ姉は肉食べなよ、ツバサとかチカに取られるぞ」

「胸が大きくなるからあんまり食べないんだよね、マミ姉」

「マミ姉は顔を真っ赤にしながら頷いた、何でコイツら胸の話しか出来ないんだよ、もっと話題はあるだろ。」

でもまあマミ姉も楽しそうだ良いか、ハヤさんの言う通り自然で心を休めるのも良いけど、みんなでワイワイも一つの手だよな。

もう一回マミ姉の声で喋れるその日まで、俺らは騒ぎ通すか。

## 青と焼肉

俺達は盛大に焼肉パーティー、ではない、コテツの尋問を兼ねた焼肉、尋問内容は他校で俺らを使い金儲けした事、恐らく高校生がバイトで稼げるような額じゃないだろ。

俺らは割りと高めの焼肉屋を選んだ、6人で食ったら3万はいくだろうな、コテツは半泣きで入ってきたけどね。

とりあえずジューズで乾杯、酒を飲んで流されたら困るし、一応高校生だし。

「じゃあとりあえず、いくら儲けた？」

「……………10万や」

「『10万!?!』」

予想以上だ、軽く俺らって凄いなあって自惚れてみたりする、写真だけで10万ってアイドル並だな、しかもコテツに暇なんてあったのか？

「ツバサ君は知ってたのか？」

「知らないよ」

「コテツ、どうゆう了見だ？」

コガネが半ギレ、俺は焼肉食えるから良いんだけど、コガネは名前が売れるのを人一倍嫌うからな。

「ヒノとかも怒れよ」

「遊園地に行きたい」

「はっ？」

「私遊園地に行きたい、みんなで行こうよ、コテツの奢りで」

それ名案かも、焼肉食わしてもらったうえに楽しめるんなら許すよ、これからやらないならの話だけだね。

「アタシも賛成！」

「僕も！」

「なら俺も」

「おいちよつと待てよ、そんなんで良いの？」

コガネは何故か焦ってる、コテツに発言権は無いしほとんど決定なのに、何故コガネは焦る、ヒノリが喜ぶし俺がコガネの立場なら喜んで行くだけだな。

「コガネは行かないの？」

「いや、遊園地だろ？乗り物とか乗るんだろ？」

「何だよ、乗り物酔いでもするの？」

「だからさあ……………」

「怖いんでしょ？」

ヒノリの一言にチ力は吹いた、机に顔を埋めて肩を震わせてる、ツバサは大爆笑、コテツは蚊帳の外、コガネは顔を真っ赤にしてうつ向いてる。

「コガネ高所恐怖症だから、観覧車も乗れないの」

「コガネも可愛いんだな」

「だから俺は嫌だ」

「でも私コガネと行きたい」

ヒノリは上目使いのダメ押し、コガネの顔が一気に真っ赤になって考えてる、ヒノリは強いな。

「しょうがねえな」

「コテツ、よろしくね」

コテツは頭を抱えて机に突っ伏した、許可をとらなかった罰だな、ヒノリが珍しく積極的になったお陰でビッグイベントが入った、ヒノリ様々だな。

俺らは約一名を抜いて大騒ぎした、コテツはツバサに促されて渋々食べてたけど、自業自得だよな、8割は俺らのお陰の金なんだから後の2割はコテツの腕、そこは俺らの寛大な心意気で食事する権利は残しといてやったよ。

「コテツ美味しいよ」

「ありがとう、コテツ」

「コテツ美味しかったよ！」

「可愛い女の子にそない事言われたら嬉しいやないか」

女の子3人の力で多少元気が戻った、コガネはまだ気が乗らないらしいけど、そこはヒノリの力でご機嫌取り戻してるから良いだろ。

「コテツ、お前本当に商売目的だけで他校に行ってるのか？」

「カイどういうこと？もしかしてコテツが女あさりとか？」

「ホントにコテツ！？僕に飽きちゃったの？」

「チカもツバサも早とちりするな、コテツは何かのついでに行ったんじゃないのか？」

コテツはバツが悪そうな顔をして一瞬うつ向く、そして飲み物を一気に飲み干しいつもの笑顔に戻った、やっぱり俺の勘は当たったな。「やっぱりカイはんには敵いまへんなあ！そやで、写真はついでと言つか圀やな。勧誘に行つてたんや、他校に行つてその主将と大勢の前で試合して、興味持った奴勧誘して、ついでに写真を売ったんや」

「ちなみに俺らの事門下生とでも脚色したんだろ」

「降参でんがな、でも大丈夫やで、大半は辞めた、空手にハマった奴とか喧嘩強うなりたい奴、そんなんばっか残ったんや、まあ結果オーライやな」

コテツも頭使ったな、下手な鉄砲数撃ちや当たるか、これはツバサには言えないけど、中にはコテツ目当ての女の子がいるだろうな。

コテツも地味にモてるんです、誰とでも気軽に話してるし優しいからな、空手にひた向きな姿がカッコイって奴もいたし。

「やっぱり俺ら使ったのかよ」

「だから謝るさかい、怒らんといてえな。あつ、それと忘れとった、カイはんとコガネはんはんに喧嘩で負けた奴も何人かいるで」

「いやそれは破門しとけよ、俺とコガネが危ないだろ」

「大丈夫やで、うちの道場で腐った根性は育たへん」

「そりゃ師範代が腐つてればおのずと門下生はピシッとするだろ」

「コガネはんは厳しいな」



多分強くなつて俺らに喧嘩売つてきても勝てる自信はあるけどね、コテツほど強くなる事はまず無いと思うし。

でもコテツは他校に殴りこみに行つたんだろ、それで毎日無傷つて、怪物だな、そして潰された空手部は面目丸潰れ。

「でもどうしてもツバサの写真売れないんや、他の四人はバンバン売れるんやけどな」

「何で？ 僕の不細工なの使つたの？」

「いや、わいが選んだからそないな事はない」

「どうせ『わいの彼女やで』とか言つたんだろ」

「そやで」

「空手部ボコボコにした奴の彼女にあえて手を出そうとする野郎はいいいだろ」

「あいたたた、わいとした事が盲点やつた、ツバサのが売れば2割増しやつたのに」

「もうコテツの馬鹿、僕のを売らないでどうするの！」

「いやいや、コテツは彼女を売り物にするなよ、ツバサは彼氏に良いように使われた事を怒れよ、なんかずれたカップルだよな。」

結局焼肉は予想以上に高く4万もした、俺とコガネが意地になつて食つたからな、後の6万は遊園地で使いきるか。

## 青と遊園地

本日はヒノリの提案によりコテツの奢りで遊園地に来てる、この遊園地は絶叫マシーンが有名な所、数々の奇抜なマシーンやギネス級のマシーン、後はデカイお化け屋敷があるので有名なだ。

コガネは遊園地に入った瞬間から手が痙攣し始めた、そこまで怖いのかよ。

前にヒノリから聞いた情報によると、コガネは絶叫マシーンで泣いたらしい、って事は重度の高所恐怖症、今日は気絶するまで乗らせるか。

とりあえず俺らは一番人気のから乗る事にした、これは高さが半端な高さじゃない、つい最近までは世界一だったらしい、でもこれくらいなら登れるかも。

コガネは並んでる時からダダをこねてたけどヒノリが腕を抱いてたから逃走はできなかった、マシーンに乗る前になって大騒ぎしはじめたけど、俺とコテツで無理矢理乗せた。

「ちよつと待った！本気で無理なんだよ！マジで死ぬから！」

「コガネ、往生際が悪いよ」

俺とチカは先頭、その後ろにツバサとコテツ、更に後ろにはうるさいコガネとヒノリ。

「発車しまゝす」

「おいテメエ！何スタートさせてるんだよ！」

「行つてらっしやゝい」

発車させるのにコガネの了解がいるのもどうかと思うけどな、しかも係員は営業スマイルでシカトしてたし。

このジェットコースターの感想を一言で言つと、メチャクチャ楽しかった、人が集まる理由が分かるよ。

チ力は軽く腰が抜けてる、コテツとツバサは相変わらずはしゃいでる、問題はコガネだ、隣で満面の笑のヒノリをよそに気絶してる。俺らが頬を叩いても起きない、しょうがないから俺は魔法の呪文をコテツに耳打ちした、コテツはその魔法の呪文をコガネの耳元で言つと、コガネは目を開いてコテツにフックで殴った、コテツは軽々避けてたけど。

「カイはんわい殺す気でつか!？」

「どうせ当たらないだろ」

「確かに」

コガネはフラフラになりながら立ち上がった、ヒノリに支えながら何とか出たけど、かなり惨めな姿だな。

「私最近出来たクルクル回るの乗りたい」

「アタシも」

「僕は何でも良いよ」

「わいもOKやで」

「みんな、コガネの事忘れてない？」

虚ろな目をしてベンチに腰掛けるコガネ、軽く壊れかけてる。

「次は死ぬかもよ」

「コガネ大丈夫だよな」

頷いた……、ように見えるけどあれは意識が危ないんじゃないのか、しかもみんなYESと解釈してるし、ヒノリはコガネを立ち上げらせると腕を強く抱いた、あえて胸が当るように。

並んでる時のコガネは少し余裕だった、高さが無いからだと思うんだけど、本当の怖さを分かってないからだよ。

乗る時も全く嫌がらなかったし、もしかしてネジが一本抜けたとか。

走行中

「回る何て聞いてねえよ！じ、地面が下にある！」

案の定分かって無かった、しかも涙声なんですけど、泣くくらいなら気絶した方がマシだよな。

「カイ何か回ってるう！」

チ力は俺の腕を掴んだまま目を瞑ってる、それじゃあんまり意味ないよな、重力の変化を楽しむような乗り物じゃないもん。

「カイ！今度はバツクしてるよ」

「座席回転してるからな」

「今度は目の前に空がある！」

俺の話をしカトされた。

終わるとコガネはフラフラだった、チ力は目が回ってフラフラだけど。

俺らはとりあえずコガネのために休む事にした、テーブルを挟んで椅子に座ると、コガネは速攻机に突っ伏した、かなりの極限状態だったんだろうな。

コテツはトレーに飲み物を買って六人分持ってきた。

「ヒノ、悪いけど俺の取って」

「アイスコーヒー？」

「そう」

コガネは依然伏したまま、チ力は俺の肩に頭を置いてジュースを飲んでる、チ力もわりと絶叫系はダメとか。

「カイは大丈夫なの？」

「余裕、こういうの好きだから」

「アタシはやバめ、高くて速くて怖い」

俺らはコガネの懇願によりスローペースなモノに乗ってる、舟みたいな乗り物に乗って室内のセットを見ながら楽しむモノ。

コレはコガネも楽しんでる、チカも楽しんでるし、でも俺には下に水があるのが引つかかるんだよな、普通のなら舟なんていう設定にしなければ水はいらないだろ、俺の予想だけどコレはコガネがダメなタイプなうえに濡れるような気がする。

アトラクションも終盤に差し掛かりスピードも上がった、やっぱり俺の予想は当たったな、コガネはまだ余裕っぽいけど。

「カイ、何か明るいよ」

「落ちる準備しとけよ」

「えっ？」

とりあえずチカの片手はバーを掴ませ、片手は俺が握った。

明るいのは外にでるから、そして先に道はない、そのまま真下に落下、全員の悲鳴とコガネの奇声がこだまする。

終わるとチカは目が点、コガネはやバそう、死んだ魚みたいな目をしてる。

あんまり濡れなかったのは幸いだな、コガネは降りようとした時にそのまま倒れた。

いつもは怖がられてるコガネのここまで情けない姿、他の奴らにも見せたいな。

とりあえず昼飯、女の子3人が弁当を作ってきたらしい、いつも作ってばかりだから作られる立場ってのも良いな。

とりあえず弁当を広げた、なんか弁当って良いよな、心なしか和む。

「カイ、このタコさんウイナー私が作ったんだぞ」

「へえ、タコ」

「何だよ？」

「可愛いじゃん」

チ力の不安そうな顔が一気に笑顔になった、タコのウインナーなんて始めて見るかも、弁当なんて自分でしか作らなかったからな、俺が作ってたら引くだろ。

「何で玉子焼きが2種類あるんだよ？」

「コガネんよくぞ気付いた！どっちかが僕でどっちかがヒノのだよ」

「じゃあこっちがヒノが作った玉子焼きだな」

コガネはだし巻き玉子の方を食べた、でも何故か雰囲気がおかしい、口をもごもごして明後日を見てる、俺は二つとも食べてみた、片方はだし巻き、片方は甘い玉子焼き、どっちも美味いんだけどな。

「美味いんだけど、いつものヒノのと違う」

「コガネん凄い！いつもは逆なんだけど今日は僕がだし巻き、ヒノが甘い玉子焼きを作ってみました」

「コガネはだし巻きが好きだから、ツバサに作らしたら気付くかな、って思ってた」

コガネ凄いな、だし巻き玉子の味なんてそう簡単に分かるもんじゃないだろ、ヒノリの事なら何でも知ってるぞ。

「ダメや、わいには分からへん」

「ダメだなコテツ」

「いやいや、コガネが凄いんだろ」

「そうか？唐揚げと、昆布のおにぎりと、エビフライ、ヒノが作ったんだろ？」

「凄い、正解」

みんな空いた口が塞がらない、長年連れ添った夫婦でも分からないぞ、作り方とか味付けとか個人差はあると思うけど、普通分らないって。

「コガネんカツコイイ！」

「普通じゃない、親のとそれ以外くらいは判断出来るだろ？」

「別々なら分かるけどごちゃごちゃになってたら分かんないし」

「アタシもカイのなら分かるよ」

「それはカイはんの料理がアホみたいに美味しいからや」

「何か嬉しい」

ヒノリは顔を真っ赤にしてうつ向いた、コガネはこれがどれだけ凄いのか理解出来てないらしい。

勘で当てた訳じゃないし、ヒノリが作ったの全てを当てた、コガネって本当にヒノリしか見てないんだな。

## 多色の遊園地（前書き）

今回は女の子目線で話を進めていきます。



## 多色の遊園地

ご飯食べ終わったから今はみんなバラバラ、僕達は絶叫マシン巡り、コガネんが嫌がるから行きたい所に行けなかったんだよね、だから二人の時くらい思いっきり絶叫させてよ。

僕とコガネは椅子に座って塔みたいのを上下するやつ、あれ怖そうで楽しそうなんだよね、コガネんがこんなのに乗ったら死んじやうよ、チカチカも危なそうだけど。

「ツバサ、何か緊張するな」

「そうだね、一気に上がるんだよ」

「おっ、もう始まるで」

スタートと同時に上にビューンって上昇した、今までので一番怖いけど一番楽しい。

コテツからの色々な提案が出たけどやっぱりこの遊園地に来たんだからお化け屋敷でしょ、出てくるのに何十分もかかるんだって、怖いよコテツとか言いながら抱きついちゃったりとかして、僕って策士。

でもさっきからコテツの顔が真っ青なんだよね、もしかしてコテツってお化け屋敷苦手なの？

「コテツ、怖い？」

「だ、大丈夫やで！」

「じゃあ行こうか」

「ちよつと待て！やっぱり怖い」

コテツって強いのお化けは怖いんだ、あんなに怖いお父さんよりも怖いんだ、何だか意外。

コテツは入ると意地で僕の前を歩いてるけど、かなりビクビクしてるよ、チヨットした音だけでビククリしてるんだもん。

「コテツ……………」

「わっ！な、何や！？」

「いや、呼んだだけ」

「脅かすな」

いや、脅かしてないんだけど、でもこんなコテツも可愛いな、弱い部分って初めてみたんだもん、頼れる人でも弱いところが無いと人形みたいだもんね。

恐る恐る進んでると目の前からお化け役の人が脅かしてきた、コテツはビククリして……………、ビククリして殴って気絶させちゃった。

「あかん！怖い！」

「コテツ！大丈夫、……………じゃないけど気絶してるよ」

「ホンマや」

可哀想なお化け役の人、その後もコテツはビククリして5人くらい気絶させちゃった、その度に怒られて、謝って、お化けの人が一番怖い思いしたよね。

恋人達の遊園地といえば観覧車でしょ、僕達も観覧車に乗った、密室に男の子と二人きり、僕みたいなか弱い女の子は襲われちゃうよ、ってか襲って。

観覧車はゆっくり回ってのどかな、コテツもしんみりと外見てるし、隣に行ったら何かされちゃうかな？

「何や？」

「良いじゃん、二人だけなんだからナニしてもバレないよ」

「ナニ」やない「何」や」

「細かい事にしない！」

「いや、かなり大きな事やる」

何だよコテツは堅いな、僕の周りには硬派な人しかいないんだね、

お兄ちゃんも頭が堅いんだよね。

「じゃあ何かしてほしいんか？」

「そりゃもう、あんな事やこんな事……」

「……はせえへんけど、これくらいならええで」

コテツの顔が急に目の前にきたと思ったらコテツの唇が僕の唇に当たった、僕達、今観覧車の中でキスしてる、僕はいつの間にかコテツの首に腕を回してた、どれくらいの間したか分からないけど、僕には全てが止まってたよ。

コガネを見直しちゃった、私の作ったモノ全部当てちゃうんだもん、横顔が少し遅しく見えるのは気のせいかな？

コガネは二人になった途端に私の手を掴んできた、いつも腕を抱いてるのにコガネから握られるとドキドキする、コガネの手は暖かい、心までポカポカする。

「ヒノ、顔真っ赤だぞ、熱でもあるのか？」

「……………大丈夫」

鈍感なんだから、女の子の心には時に痛手なんだから、でもそれが

良いときもあるんだよね。

私達はお化け屋敷に入る事にした、ココのお化け屋敷って緊急避難通路があるくらい怖いんだって、私はこういうのは怖くないんだけど、ココは女の子らしく演技しよ。

コガネは私の前を快調に歩いて行く、私は怖いふりをしてコガネの後ろにしがみついている。

「コガネ、大丈夫？何もいない？」

「何がそんなに怖いんだよ？相手は人間だぞ」

「だけど暗いしいきなりくるから、……キヤー！！」

お化けに驚いたふりをしてコガネの背中に抱きついた、コガネは振り向いて頭を撫でてくれてる、優しいんだ、コガネは少しも驚いてないし、高い所はダメなくせに怖いのは全然大丈夫なんだね、平地にいれば頼りになる。

「そんなに抱きつかれたら歩き難い」

「でも怖いんだもん、早く出たい」

「ならチャッチャと出るぞ、つまらない」

コガネは私の事を抱き上げた、これってもしかして、俗に言うお姫様抱っこ？そうだよ、棚ぼただよ、私は驚かされる度にコガネに抱きついた、コガネの顔は暗がりでも分かるくらい真っ赤になっている、可愛い。

私とコガネは観覧車に乗る事にした、今までなら観覧車すら乗らなかったけど、あれだけ怖い思いしたから大丈夫になったのかな？

観覧車はゆっくりとジラすように回ってる、でもこの密閉空間に二人でいると少し期待しちゃうんだよね、女の子もそういうモノなのよ。

「ハックション！」

「寒いのか？」

「少しね」

「これ着ろよ」

コガネは私に上着をかけてくれた、でもこれじゃあコガネが寒いよね、大丈夫なのかな？

「コガネは寒くないの？」

「ヒノが寒くなければ良いよ」

「ダメだよ、一緒に入ろう」

「どうやって？」

私とした事が盲点だった、一つの上着に二人入れるわけないよね、毛布じゃないんだから。

「なら抱き締めて」

「別にいいよ、俺は大丈夫だから」

「私の事嫌いな？」

私は得意な演技で少し目をうるうるさせてみた、コガネはすこし焦ったような感じで立ち上がり、私の隣に座って抱き締めてくれた、ドキドキが聞こえなければ良いんだけどな、静かだから聞こえてるよね。

「コガネ、私の心臓の音聞こえる？」

「聞こえるわけ無いだろ」

「ほら、こんなにドキドキしてるんだよ」

コガネの手を掴んで私の胸に手を置いた、コガネは焦ってるけど、私も何でこんな事したんだろ。

「分かった？」

「ご、ゴメン、分からなかった」

「私の胸が大きいから？」

「ち、違うから、……俺もドキドキしてるからだよ」

コガネの顔が真っ赤になった、多分嘘じゃないんだろうな、いつかコガネも積極的になってほしい、好きなのかたまに不安になるんだよね。

やっとかイと二人きりだ、みんなでワイワイしてるのも楽しいけどやっぱりカイと二人きりの方が楽しい。

絶叫マシンとか本当はもの凄く怖いんだよ、ってか怖いもの全般が無理、無理して乗ってたけどどれもフラフラ、だけどカイが手を握ってくれると不思議と安心するんだよね、やっぱりカイは凄いやな。

でもカイを誉めたアタシが馬鹿だったね、カイがお化け屋敷に入りたいと言ってる、アタシは怖いよ、でもカイが楽しみにしてるから断りきれない、大丈夫！きっとカイが守ってくれる、……きつとお化け屋敷暗い、狭い、どんよりしてる、長い、不満しかでてこないよ。

「キヤー！」

後ろから脅かされた、アタシの心臓が弱かったらしんでるよ、お化け屋敷は殺人マシンだな。

アタシはもうカイから離れられなくなった、カイの背中にずっとしがみついて顔を埋めてる、もう怖くて怖くて死にそう、カイも少しビクビクしてるけど笑ってる、何が楽しいのかアタシには理解出来ない。

「キヤーー！」

ああ、もう怖い、あれ？立てない、怖くて腰が抜けちゃった。

「チカ、どうした？」

「こ、腰が」

「腰が抜けたの？」

アタシは無言で頷くとカイは大爆笑しはじめた、酷い、でもその前に助けて。

「ほら、乗れよ」

「重くない？」

「チカくらい軽いよ、それにその体の何処に重い要素が入ってる？」  
お言葉に甘えてカイの背中に乗せて貰った、カイの背中は大きくつてあつたかいな、なんなら帰るまでこのままでも良いかも。

アタシはお化け屋敷はずっとカイの肩に顔を埋めてやり過ごした、全然ゴールが見えなくて怖すぎ。

そしてメイイベントかどうかは知らないけど観覧車、こんな密室にいたらカイに襲われちゃうよ、……多分無いと思うけど、理性の塊みたいな人だからね、でも一回理性が飛ぶと何をしてくすか分からないんだよな。

ゆつくりと回るゴンドラ、これ止まらないよね、止まるわけ無いか、あんまりニユースで聞かないもんな。

「カイ、どうしたの？」

「いや、帰ったらコガネに謝ろう」

「何で？」

「集合時間過ぎちゃった」

「ホントだ」

コガネは誰よりも時間にうるさいからな、5分前行動とか小学生並だよ、遅刻の常習犯はコテツだけだね。

「チカ、外見てみるよ」

カイが外を指指すと夜景が広がってる、今は丁度頂上付近だから最高に綺麗に見える、凄いなあ。

“ガタンっ！”

「「えっ？」」

今ガタンとかいった、しかもゴンドラが動いてない、もしかしてこれって事故？

「ヤバいな、係員の人焦ってる」

「止まったの？」

「みたいだな」

どうしよう、こういうのって長いんだよね、最悪だよ、でもカイと密室にいれるのは最高かも、いや、こんな時に不謹慎だよな。

「今ならチカに色んな事出来るよな」

「えっ？」

「冗談だよ、そんなに顔真っ赤にするな」

カイの嘘は見破れないんだよ、一寸の濁りの無い目で言ってくるんだもん。

寒いな、もう夜だしこんな鉄の檻に入れられてたら寒いよ。

「チカ、寒いのか？」

「少しね」

「なら、……………乗れよ」

カイは下に降りてあぐらをして乗れだって、アタシ抱かれちゃう、今の表現はおかしいよね。

「良いの？」

「俺も寒いから、こういう時は二人で寄り添った方が暖かいんだよ、本当は裸がベストなんだけどね」

「馬鹿！」

怒りながらもカイの膝の上に乗った、カイは大きな体でアタシの事を包んでくれる、心まで暖まるってこの事だね。

「チカあつたかい」

「なに子供みたいな事言ってるの？」

「俺はこのまま永遠に二人だけになっても良いよ」

カイとならアタシも大丈夫、カイはこんなに暖かくアタシを包んで



くれるんだもん。

「チ力を絶対に離さない、俺チ力が離れたいって言ったら離すつもりだった、でもそれは俺に嘘をついてる、チ力が離れたいなら俺は更に良い男になってチ力が離れたくない男になる、チ力は俺だけのモノだ」

何だか独占欲が強いけど嬉しい、アタシから離れるなんて有り得ないけど、そこまでアタシの事を思ってるって事だよな、アタシも同じだよ。

「やっぱりチ力寒いだろ、これも着ろよ」

「それじゃカイが寒いだろ？」

「大丈夫、風邪ひかないので有名だから」

カイはアタシに無理矢理上着を着せてきた、確かにまだ寒かったけどカイが風邪引いちゃうよ、カイが風邪ひいたらもともこもないのに。

どれくらい止まったかな、1時間は経ったと思う、何かアタシもカイもグツタリしてきた、疲れたよ。

「チ力、大丈夫か？」

「アタシは大丈夫だよ、でもカイがキツそうだよ」

カイの息遣いが荒い、やっぱり風邪引いちゃったんだよ、アタシのせいだよな、アタシが上着をとらなかったら。

「俺は大丈夫だよ」

「ホントに？ちよつとおでこ貸して」

「ちゃんと返せよ」

それだけの事言えれば大丈夫だと思うけど、アタシはカイの額にアタシの額を当てた、嘘？凄く熱い、これ絶対に熱があるよ。

「カイ熱酷いよ！」

「大丈夫、微熱だよ微熱」

「嘘！かなり辛いでしょ？」

「怒るな、正直フラフラだね」

“ガタンっ！”

今動いた、観覧車が動きだした、これでカイを外に出してあげれる。アタシはカイの上着を返した、虚ろな目をしてて何処を見てるのか分からない。

下に降りるとコガネとコテツがカイを出してくれた、アタシは泣かないように頑張ってたけどヒノリとツバサの前で泣いちゃった、カイに泣いてるところ見せると心配しちゃうから、カイにはバレないように。

カイはコガネの背中では寝てる、多分疲れとか風邪でダウンしたんだろうな。

「チカちゃんは大丈夫か？」

「アタシは元気」

「なら良かった、カイは例え話で『チカが無事なら腕の一本や二本くれてやる』って言ってたんだ、カイはどんな怪我するよりチカちゃんが無事ならそれで良いんだとよ」

でもそれじゃあアタシの不安が溜まる一方だよ、アタシだってカイが元気じゃなきゃ嫌なんだから。

## 青と風邪

ああ情けねえ、『彼女とゴンドラに閉じ込められて風邪ひきました』  
って何してたんだ？って話だろ、まあ俺が先へ先へって感じで考え  
てるからそう思うのかもしれないけど、絶対誰か思ってるよ、チ力  
一人で学校大丈夫かな。

ダメだ、頭使うとフラフラする、大人しくしよう。

“ピンポーン”

誰だよこんな昼間に、まあいいや、シカトシカト。

“ピンポーン”

うるせえ。

“ピンポーン”

分かったよ、うるせえな、出るから黙ってろ、ってなんでインター  
ホンをキレてるんだろ。

“ピンポ”

「うるさい！」

ドアを開けるとそこにはチ力が立ってた、ビックリして泣きそうに  
なってるし、タイミングわる奴だな。

「ゴメン、どうした？」

「アタシのせいで風邪ひかしちゃったからお見舞い」

「うつつても知らないぞ」

「うん！」

チ力は喜んで家の中に入ってきた、嬉しいんだけど僕フラフラです、  
もうかなりヤバイ、何もする気がしないな。

「カイ、大丈夫か？」

「ヤバめかな、それより学校は？」

「カイが心配で早退してきた」

「ホントにそれだけ？」

チ力はばつが悪そうな顔をしてる、予感的中な予感、ってどんだけ

アバウトなんだよ俺。

「みんな何があつたかうるさいから、『四色と潤間が観覧車でヤツた』って噂になつてゐる」

やっぱりな、何でそういう噂が好きかね。

俺はチ力の頭に手を置いて今出来る精一杯の笑顔を作つた、そうでもしないと可哀想だろ、俺らは必死にやり過ごしたのに何も知らない奴らにそんな事言われたら。

「大丈夫だよ、明日は俺も学校に行くから」

「ありがとう、アタシカイに助けられてばかりだな」

「チ力を助けるために俺がいるんだから、それくらい当たり前だよ」  
「腕の一本や二本くれてやる？」

何でチ力がその事知つてゐるんだよ、何か前に同じような事言つたよ  
うな気がするけど、チ力にその事は言つて無いよな、もしかして。

「コガネがコテツに聞いた？」

「昨日ね、でもそれはアタシが許さないよ、カイと同じくらいアタシも辛いんだから」

でも抑えきれない衝動というか、俺の本能というか、とりあえずチ力を守りたいんだよね、これはただの自己満足だけど。

「カイ、ご飯食べてないだろ？アタシが作つてやるよ」

「良いのか？」

「せめてもの恩返し、アタシにもそれくらいさせろよ」

「分かつた、頼んだよ」

チ力はキツチンに走つて行つた、気になるけどちよつと体力がもたないんだよな、ココでジツと待つてゐるか。

何か俺が学校休むたびにチ力に苦しい思いさせてゐるんだよな、コテツかコガネが同じクラスなら俺も安心出来るんだけど、まあ休まなきゃ良いだけか。

チ力はお盆の上に鍋を乗せて持ってきた、なんか看病されてるって感じたな、こんな事初めてで新鮮。

「お粥だけ良いよな？」

「ありがとう」

チ力はお粥をレンゲで取って冷ましてる、コレってもしかして夢のワンシーン？誰もが憧れるあの……。

「カイ、口開けて」

「マジで？」

「マジマジ、はい、あゝん」

うわぁ、何かしちゃってるよ俺ら、でそのままされちゃってるよ俺、最高の彼女だな。

「美味しい？」

「ああ、かなり美味しい」

チ力の顔がパアッと明るくなった、そこまで喜ぶ事か？いや、喜ぶ事かも、チ力の料理を遊園地の弁当以外に食った事がないんだよな俺。

「アタシだって料理出来るんだぞ、カイの方が美味しいだけで」

「そうだな、たまにはチ力にも弁当作ってもらおうかな」

「それは無理！」

「何で？」

「朝は苦手なんだ、だから弁当だけは勘弁して」

そういえばそうだな、ユキとかと住んでた時は一番起きるの遅かったんだよな、俺が爺みたいに朝が強いってのもあるんだけど。

なんだかんだ言って全部チ力に食べさせてもらった、言い訳をさせてもらうとチ力が言うことを聞かなくて、無理矢理食わされた。

「少し寝ろよ、弱ってるんだから」

「そうさせてもらうよ」

俺は目を瞑って寝ようとした、でも何故かチ力がいると思うと寝れない。

「カイ、目を瞑ったまま答えて」

「何で？」

「良いから」

「分かったよ」

微妙に鼻声だな、もしかして泣いてるとか。

「カイはアタシの事好き？」

「当たり前じゃん、何でそんな当たり前の事聞くんだよ？」

「時々不安になるんだ、もしかしたらカイはアタシ以外を好きになるんじゃないのかって、ツバサはまだ我慢出来る、でもヒノリと楽しそうに話していると不安になる、ヒノリにヤキモチやいてるんだ、嫌な奴だよな」

そんな事考えてたのか、全く気付かなかった、確かにあの中だとヒノリが一番うまがあうけど、それまでだ。

「カイもヒノリもタダの友達だったのは分かってる、でも嫌なんだ、ヒノリと笑ってるカイが遠くにいたいので、アタシの知らないカイがそこにいたいみたいで嫌なんだ」

チ力は後半から泣き出してる、俺とヒノリはチ力にはそういう風に見えてたんだ、確かに友達の中ではヒノリという時間は長い、でもヒノリも俺も大切な人がいる、そこに誰かが入る隙は無いと思ってる。

「じゃあどうすれば満足？ヒノリとは今後話さないようにする？」

「それじゃあダメ、居心地が悪くなる、だから分らないの」

「俺にはチ力しかないようにヒノリにはコガネしかない、お互いに大切な人がいるから笑って話せるんだ、そこに引け目を感じる恋心があったら逆に話さないよ、だから笑って話してるのは安心の裏返し、そう思ってくれないか、じゃないと俺はヒノリと喋れなくなる」

俺が話してる途中で更に強く泣きだした、俺はヒノリとチ力の仲が悪くなってほしくない、だから二人の仲が保たれるなら俺は犠牲になる。

チ力は大きな声で泣き出すと、俺の上に乗ってきた、なんでチ力が

弱ってるんだよ。

「ゴメンなカイ、ゴメンなヒノリ、アタシ嫌な女だよな？」

もう目を開けても良いよな、俺は目を開けてチ力の頭を撫でた。

「大丈夫だよ、誰もチ力をせめない、多分コガネも口には出さないだけで同じ気持ちだと思う、だから我慢しろとは言わない、でも溜め込まないでくれ、俺を信じて何でも言ってくれ、俺はチ力に嘘はつかないから」

「ゴメン！ゴメンなカイ！アタシ、カイの事が好き過ぎて不安なんだ、だから嫌いにならないで」

サラッと凄い事いつてるな、俺はチ力の事を信じてる、いや、信じる事しか出来ないのかも、チ力を信じる事しか出来ないから疑えない、だからチ力の小さな事にも気付けない、疑う事は必ずしも悪い事じゃない、信じることは必ずしも良い事じゃない、信じるのと疑うのは表裏一体なんだよな、五分五分だから丁度良いんだ。

## 赤と部活休み

今日の部活は休み、だからヒノリとツバサと女3人で遊んでる、カイとか待ってても良いんだけど、たまには女だけで遊びたいよね。でもこの3人でいると目立つんだよね、ツバサはうるさいし、ヒノリは胸が大きいし、アタシは髪の毛派手だし、かなりの色物グループだと思っただよね。

とりあえず女の子集まればプリクラでしょ、アタシ達も例外じゃない、最近はお女の子だけしか入れない所とかもあってビックリ、覗く男がいるんだって。

「チカチカ、ヒノノ、コレで良いでしょ？」

「アタシは良いよ」

ヒノリは無言で頷いた、ツバサはアタシとヒノリの腕を掴んで入って行った、ツバサは無駄にテンション高いよね。

「ホラホラ、撮るよ」

その後はウィンドウショッピングというか、街をブラブラというか、とりあえず街を歩いてる、特に何を買うでもなく、何をしてもなくツバサに振り回されてる、これはこれで楽しいんだけどね。

3人で歩いてると男の人3人に声をかけられた、もしかしてコレってナンパ？ いや、もしかしなくてもナンパだよね。

「ねえねえ、君達暇？ 暇だよね？」

ほらナンパだ、制服着てるから高校生だね、制服を見る限り近くの高校だ。

「ツバサ、どうする？ 烏丸君とかはまだまだ時間あるよね？」

「そうだね。五百蔵君はまだまだ大丈夫だよね、ヒノノ？」

「四色君が許せば大丈夫だと思うよ」



「烏丸？四色？五百蔵？」

「おい、ヤバいぞ、コイツら四色とかの彼女じゃねえの？」

「ホントだ！ゴメンね、俺達用事思い出した、バイバイ！」

最近はナンパ対抗術も身に付けた、カイ達の名前を出せば大体が怖がって逃げていく、色々暴れててくれるからね、持つべきモノは喧嘩が強い彼氏だね、ゴメンねカイ、番犬扱いしちゃって。

皆で騒いでたら時間がかなり経ってた、このまま帰っても良いんだけどせつかくだから夜も食べちゃおう、って事になって只今ファミレスにて。

女の子をファミレスに入れたら耐久レースだよ、どれだけドリンクバーで居座れるか、頑張れアタシ達。

「今頃カイとか何してるのかな？」

「コガネの家にいるんじゃない」

「コガネの家は溜り場だからね」

一人暮らしたからカイとかは自分の部屋のように使ってる、この前アタシとツバサで入ろうとしたのに断固拒否された、何でアタシ達はダメなんだろう。

「ヒノリは何回もコガネの家に泊まった事あるんだよね？」

「週に一回は泊まってる」

「コガネんに変な事されてない？」

「大丈夫、キスも出来ないから」

シャイで奥手なんだね、最初の方なんてアタシが肩叩いただけで慌ててたもん、今でも普通の女の子と話すのは苦手だし。

「コガネんと一緒に寝てるの？」

「いや、いつも床で寝ちゃうから私も床で添い寝してる」

「ヒノリ大胆、ヒノリってかなりコガネに仕掛けてるよね」

「コガネとだと待ってたら何もしてくれないんだもん、私から全部

仕掛けないとね。でもキスだけはコガネからって決めてるんだ」

コガネに出来るのかな、手を繋ぐのでやっとのコガネがキスなんて、そう思うとカイって大胆なんだよね、全部勢い任せなところもあるけど。

「ツバサのキスはコテツからだよね？」

「そうだよ、クリスマススの帰りにされちゃった」

「アタシは……」

クリスマススは思い出したくない、過去最悪のクリスマスだったよ、あれ以来お酒は飲まないって心に決めたもんね。

「ヒノノはクリスマススどうだった？」

「2泊3日した」

「「嘘!？」」

2泊3日も泊まって何も無いの？逆に凄すぎる、しかも泊まる時点で凄いよ、親もよく了承したよね、男の家に泊まって何も無いことを想像出来る親がいたんだ。

「コガネんの家で2泊3日で何したの？」

「話すくらいだね、手を繋ぎながら寄り添って」

「ロマンチックだな、カイだったら襲われてるよ」

「お兄ちゃんチカチカは襲うの!？」

「それはねえ」

「僕の事は襲ってくれないのに」

当たり前だよ、ツバサはカイの妹だもん、そこら辺の理性は残っててもらわないとアタシが困る、それにツバサはカイに襲われる事を望んでるんだ、さすがアオミさんの妹。

「チカチカは良いよね、お兄ちゃんとキス出来て」

「ツバサ、もしかしてカイとキスするつもりだったの？」

「当たり前じゃん、ヒノノはお兄ちゃんとキスしないの？」

ヒノリも絶句、ツバサの価値観の酷さに言葉も出ないよ、カイってとっても辛い環境にいるんだね、少し同情するよ。

「ツバサ、アタシもヒノリも兄貴はいるけど、親友以下の付き合い

だから」

「おかしいよ、お姉ちゃんなんか『いつか犯す』とか言ってるよ」

「カイのお姉さんがかおかしいの」

アタシのカイが奪われてく、妹萌えのオタクよりも危険な姉妹だよ、カイは多分常識を知ってるから大丈夫だと思うけど、いつか一線踏み越えそう。

「コテツが悲しむぞ」

「コテツは心が広いから大丈夫、……かな？」

「アタシ達に聞かれても困るよ、そもそもツバサはコテツの事好きなの？」

「好きだよ！コテツは優しいし、僕の事絶対に守ってくれるし、なにより一緒にいて楽しい、僕はコテツの事が大好きなんだよ」

コテツは何でツバサの事が好きなんだろう、一目惚れとか言ってたけどあんまり聞いた事ないよな、ツバサのコテツが好きな理由も今初めて聞いたし。

「それに皆僕がコテツを好きになった理由はコテツが僕を助けてくれた事だと思ってると思うけど違うよ。本当はその後、家で安静にしてた僕の家に来てくれたんだ、自分も身体中痛いのに汗びっしょりになりながら『怪我人を一人にせえへん、わいが面倒見たる』だって、その時にコテツなら僕の事を本当に守ってくれると思ったんだ」

少しコテツの事カッコイイって思っちゃった、アタシもコテツの怪我見たから分かるけど、とても人に気を使っただけで傷じゃなかった、山の中から人一人おぶって来ただけでも奇跡だって言われたくらいだもん。

「コテツってカッコイイでしょ？」

「アタシ見直したよ」

「コテツの悪いところが良い感じに出たんだね」

「「悪いところ？」」

「コテツって目的のタメなら手段を選ばないところがあるでしょ？」

この前の写真の件といい、私達に近寄って来た時、でもその時ばかりは良い感じにそれがでたのになって」  
確かに、どんな手を使っても物事を達成させるところがあるもんね、いつも利用されてるのはアタシ達なんだけどね。

カイもアタシがいなくなったら助けしてくれるよね、アタシ何処でも待ってるから、カイとどんな事になってもカイの事待ってる、アタシにとってカイは最初で最後の人だから。

## 青との同居

何で俺はヤヨイさんに呼ばれたんだろ、いきなり携帯に電話がかかってきて出たら『バーに來い』それで終りだぞ、俺に発言権と決定権は無いらしい。

俺は一人でバーに向かつてる、アオミはマミ姉が來てるから着いてきて無い、俺一人って案外重荷なんだけど、酒飲まされるんだろうな、確実に。

着くと既に飲んでるヤヨイがいる、隣に行くと何故か酒が出てきた。  
「飲め」

しょうがないから飲む事にした、飲めないわけじゃないし付き合いならしょうがないだろ。

「何ですか？」

「ツバサの事だ」

「何ですか？実は弟もいましたとか？」

「フツ」

鼻で笑われた、ヤヨイさんならありえない事もないからな。

それにツバサの事って？もう俺に関係あるツバサの事なんて無いだろ、いや、無いでほしい。

「私はアメリカの本社に行く事になった」

「凄いじゃないですか！」

「前々からあつた話だ、問題はそこじゃない、私がない間ツバサを預かれ」

えーと、俺の思考回路が止まりかけた、何とか理解は出来たよ、でもまた強制かよ。

「チカはお兄さんの所に行くらしい、だからツバサを預けられるのはカイとアオミの家だけだ」

「そうですけど……」

「大丈夫だ、アイツになら何しても良い、襲っても文句は言わない」

今の発言は親的に問題があるだろ、それに俺が心配してるのはその逆なんだよな、アオミだけでも毎日がサバイバルなのに、ツバサが加わると地獄だ。

「金もある程度は仕送する、それでも不満か？」

「いつからですか？」

「明日」

「明日！？何でもうちよつと前に言ってくれないんですか！？」

「アオミに言った」

アイツ、俺に通せよ俺に、アイツの家だから強く文句は言えないけど、妹とはいえツバサは女だぞ、それと暮らすのかよ。

「どれくらいで帰ってくるんですか？」

「最低で3年だ、でも確実に延びるだろう、たまには戻って来るけどずっと向こうにいる可能性もある、ツバサは了承済みだ」

いや、了承済みっておかしいだろ、一生ツバサと住めと？俺に一線を越えさせるつもりかよ、確実に一回は襲われる。

「大丈夫だな？」

「分かりました、一緒に住みますよ、引越しはどうするんですか？」

「明日荷物をカイの家に送る、ツバサは明日の昼には着くから」

「分かりました」

最悪だ、ツバサが嫌いな訳じゃない、怖いんだ、地獄ロードの幕開けだよ、今でさえアオミが週に2回は朝起きると布団に入ってるんだから、単純計算で一人での気持ち良い目覚めは週に3回になる。

「そういう事だ、何かあるか？」

「何も無いです」

「私からも何も無い」

俺はそのまま帰った、憂鬱です、ツバサとの生活が不安。

次の日、休日だから俺は家にいる、アオミはマミ姉と買い物行ってる、こういう時に何でいないんだよ。

家のロックが外れる音がした、そのまま走る足音と共に部屋のドアが開き、ツバサが飛んで来た。

「お兄ちゃん！」

ナイスキャッチ俺、ツバサは思いっきり抱きついて離れない、コレに慣れてる俺が悲しいよ。

「お兄ちゃん、今日から一緒に住めるね！」

「そうだな」

「毎日こうやってお兄ちゃんといれると思うと僕嬉しい！」

何で親と別れたばかりなのにこんなにテンション高いんだよ、普通なら凹んでるべきだ。

「そういえばお姉ちゃんは？」

「マミ姉と出かけてる」

「じゃあ僕とお兄ちゃん二人だけか！何する？」

「何もしないよ」

「何かお兄ちゃん冷たくない？僕の事嫌い？」

「好きだよ、でも兄妹としての好きだからツバサが望んでるような事は出来ない」

ツバサは泣きそうな顔をして俺の顔を見てる、頼むからそんな顔で見ないでくれ、ツバサに一般常識すら通じないのかよ。

「お兄ちゃんは嫌なの？僕と暮らすのが」

「別に暮らす事自体は嫌じゃない、でもツバサがそれ以外の事をしようとしたら俺は拒否する」

「じゃあ生活するだけなら良いんだね！？」

「そうだよ」

何だ言えばちゃんと聞くのか、それなら大丈夫だな、ツバサも何もしなければ可愛い妹なんだけど、その奥に潜むアオミと同じ血が怖い。

アオミは外で食べてくると電話が入った、つまり俺とツバサの二人きり、さっきから何もしてこないから何も無いと思うけど、何故か

胸騒ぎが。

「お兄ちゃん！今日のご飯は何？」

「オムライスとかは？」

「本当に！？僕オムライス大好きなんだ」

「それなら良かった」

オムライスが好きとか微妙に子供っぽいと思うのは俺だけ？まあ人の好みはそれぞれだから偏見で決めつけちゃいけないよな。

「それより、何でキッチンにいるの？」

「だって1秒でも長くお兄ちゃんと一緒にいたいんだもん」

「これから飽きるほど会えるんだから良いだろ」

「飽きないもん！お兄ちゃんとずっと一緒にいても大丈夫だから」

それは俺が困る、それにコテツの事はそっちのけかよ、絶対におかしいって。

「ツバサ、もう出来るから椅子に座つてろ、大人しくしてないと食わせないぞ」

「ヤダ！オムライス食べる！」

「なら大人しくお座り」

「はい！」

扱い方はガキ同然だな、扱い易くて俺的には良いんだけどね。

俺はテーブルの上にオムライスの乗った皿を置くと待てをされてる犬みたいな目で俺の事を見てくる、こういう時に妹って可愛いなとか思っちゃうんだよな。

「食べたい？」

「早くうゝ、僕、我慢出来ないよ」

「それじゃあさあ、俺から離れろ」

ツバサは俺の腕を掴んで離そうとしない、俺も右利きだしツバサも右利き、だから俺が食えないんだよね、飯に食えたとしてもうつとうしい。

「でも僕はこうじゃなきゃいや」

「なら、食べさせない」



「ダメダメ！離すから食べさせて！」

「分かったよ、食べて良いよ」

「いただきますあゝす！」

ツバサは一気に口に掻き込んだ、そして左手を頬に置いて震えてる。

「おいしい！お兄ちゃん凄く美味しいよ」

「当たり前だろ、ツバサのタメに作ったんだから」

「僕のタメに！？でもそれと美味しいのどう関係があるの？」

「料理つてのはただ作るだけじゃ美味しいだけなんだ、『美味しく食べてほしい』とか『この人のタメに一生懸命作ってる』とか思っ  
て作ると美味しいだけじゃなくて暖かいんだ、本当に美味しい料理  
つてのは心が籠ってる、当然このオムライスにも」

彼女とかに作ってもらった弁当がそんな感じかな、よっぽど不味く  
なきゃ無駄に美味く感じるもんだろ、だから俺は大衆的なデカイ店  
よりもこじんまりとした店の方が好きなんだ。

「お兄ちゃんの料理は美味しいだけじゃなくて暖かいんだ、じゃあ  
僕がコテツに作った料理とかも心が籠ってればもっと美味しくなる  
の？」

「そう、コテツの喜んでる顔やコテツに誉められる事、そんな事を  
考えながら作れば美味しくなる」

「そっかあ、頑張ろう」

何だ、ちゃんとコテツの事も考えてるんじゃない、やっぱりツバサは  
ブラコンの前に一人の女の子なんだな。

「お兄ちゃんご飯付いてる」

「マジで？最悪」

「取ってあげる」

ツバサは俺の顔からご飯粒を取ろうと体を乗り出した、でもツバサ  
の膝が俺の股を思いつきり踏んで俺とツバサはそのまま後ろに倒れ  
た。

「痛あゝい！」

「ツバサ、いいからどけ」

「でもまだ付いてるよ」

ツバサの顔が徐々に近付いてくる、俺に逃げ場は無くツバサを突き飛ばす訳にはいけない、ツバサは顔を傾けた、そして……………、俺の頬を舐めるとご飯をそのまま食べた。

「ドキドキした？」

「当たり前だろ、顔がマジだったんだから」

「だって途中まで本気だったんだもん、でもお兄ちゃんがダメだった言っただけから我慢した、偉い？」

「言っただけを守ったのは偉い、でも舐めたのは偉くない」

ツバサはフグみたいになって座り直した、マジで怖かったし、なんかツバサと目が合った瞬間かなしりにあったみたいな状態になった。

でもツバサも俺の言っただけを少しずつだけ守ってくれる、それは兄として嬉しい。

## 青のその先

「じゃあ来年度も元気に学校に来るように。解散！」

終わった、高校一年も長いようであつという間、目の前で爆睡して  
るコガネとの出会いで始まったんだよな、最初はツバサとコガネは  
仲が悪かったし、ヒノリはあんまり喋らなかったな、コテツは絡み  
辛かった。

でも終わってみたら色物だけど楽しかった、来年はみんな一緒にな  
れる事を僅かに願ってみたりする。

ヒノリはゆつくりと立ち上がりコガネを起こした、コガネがノソノ  
ソと起き上がると同時に騒がしいのが一人。

「まいど！皆はん終わったで！やっとピカピカの一年生も終りや」

コガネが人をかきわけて俺らの所まで来た、この声によつてコガネ  
は完全に起床。

「コテツ〜！」

「ツバサ〜！」

ツバサは入つて来ると同時にコテツとハグ、少しは他人の目を気に  
しろよ、皆見てるぞ。

「じゃあ皆揃つたし行くか！」

俺らはこれから6人で打ち上げ、クラスの打ち上げもあるけど俺的  
にはコッチが無くても行かない、友達がいらない訳じゃなくてそこま  
で思い入れがあるクラスじゃないから。

とりあえずカラオケに行くことになった、俺は全身全霊をかけて拒  
否したけど多数決には勝てない、別に歌わないからいいんだけど。  
カラオケで意外な事実が発覚、コテツの歌がメチャメチャ上手い、  
プロ並の上手さ、俺にとってのカラオケは傍聴するもの。

「カイは歌わないの？」

「歌えないの」

「何で？」

「超絶音痴だから」

チ力の心配は嬉しいんだけど俺に歌わせたら可哀想なんだよな、俺も歌ってて不思議なくらい下手、リズム感はあるけど音程が取れない、カラオケは聞いているだけでも楽しいから良いんだけど。

「いやあ、歌った歌った」

「歌上手いんだな」

「そうでつか？上手いかどうかは分からへんけど歌うのは好きやで俺は歌うと凹む、歌つてると楽しいんだろうけど俺には分からない、コガネが高い所の気持良さが分からないのと同じようなもん。

「わいは皆はんと出会えて良かったで、最初はツバサと話せればええと思っとった」

「知ってるよ、俺もコテツが何考えてるか分からなかった、今も時々分からないところもあるけどね」

「よく言われる、思ったままに動いてるんやけどな」

考え方が人とは違うんだろうな、いつも何かのついでに何かしてるし、コレって俗に言うケチなのかな？

腹も減ったし飯、俺らみたいな打ち上げ組が街にはいっぱいいる。

店に入って乾杯、コガネが酒を頼もうとしたけど制服だから無理だった、残念だったなコガネ、高校生なら高校生らしくジュースだよジュース。

「クラスの発表って登校日だっけ？」

「そうだよ、また張りだし」

「僕達一緒になれるよね？」

「わいは一人は嫌やで」

「アタシはカイと一緒にになりたい」

「楽しければそれで良いよ」

皆思い思いだな、ヒノリは相変わらず冷めてるけど、それにヒノリの楽しいの定義って何だ？やっぱりコガネと一緒にとかかな。

「俺はカイと一緒にの方が良いな」

「俺にそんな趣味無いし」

「……………意味違うから！」

反応遅すぎ、しかもコガネの顔で言われたら若干まに受ける奴がいるだろうし、チカの顔を見る限りホモだと思ったな。

「カイがいると楽しんだよ、頭が良いから教師に何か言われても言い返してくれるんだよ」

「そうなのカイ？」

「まあ教師が好きじゃないからな」

「カイと先生の喧嘩観戦も楽しいよ」

ヒノリは楽しんでたんだ、口喧嘩は俺の得意技の一つだからな、内心楽しんでるし。

「カイはん先生に喧嘩売ってるん？」

「楽しみで、かな」

「悪いやつちゃんあ、先生は味方にするもんやで」

コテツの場合教師にもヘラヘラしてるからな、教師の好感も良いから学校で商売出来るんだろうな、裏取引もしてるだろうし、要領が良いというかケチというか。

「わいはツバサと一緒になれば満足や」

「そのクラスにはなりたくないな」

「なんでやねん？カイはんは妹が嫌いか？」

「うるさいだろ、常にコテツとツバサを相手にしてたら気がおかしくなる」

「酷いお兄ちゃん！」

「そうやで、お兄さん」

頭が痛い、色んな事が俺を追いつめる、誰かツバサとコテツの暴走を止めてくれよ、心配してるのはチカだけじゃん。

「私もこの二人と一緒に嫌かも」

「ヒノリはんまで」

「大丈夫だよコテツ、僕達二人でも愛だけは残る、愛があればなんでも出来るよ！」

「そうやな、わいらは二人でも大丈夫！」

つつこまないぞ、この夫婦漫才に絡んだら俺の負けだ、妹ながら可哀想になってきた。

「アタシはカイと一緒にじゃなきゃ嫌」

「学校でまでカイとチカちゃんにイチヤつかれたらファンが減るぞ」  
「それなら率先してやるんだけどな」

「イチヤつかやいよ、でもカイが一緒の方が落ち着くから」

確かに俺もだな、一緒にいれば馬鹿も近寄ってこないだろ、コテツかコガネがいても来ないと思うけど。

「カイは浮気できなくなっちゃうけど良いの？」

「浮気してるの!？」

「しないしない、ヒノリもサラツと嘘付くなよ」

ヒノリが嫌な顔で笑ってる、怖い、ヒノリが怖い、何を言い出すか分からないし。

解散後の帰り道、ツバサとコテツはいつの間にか消えてた、だから俺とチカの二人だけ。

チカはコウさんの所に住んでるから会える時間が増えた、その分コウさんの監視がキツくなったのも事実だけど。

「一年楽しかったな」

「そうだな、騒いで騒ぎ通した感じがな」

「カイの思い出は？」

「不良達の喧嘩……………」

「あれは怖かったよ、カイが来てくれなきゃどうなったか」

「……の後の退院した時かな」

チ力の顔が真っ赤になった、暗くも分かるくらいだからかなり赤いんだろうな。

でも全部が全部印象的だから優越つけがたいよ。

「エツチなんだから」

「冗談だよ、色々ありすぎた一年だったから、全部が印象的だな」

「カイって初めて会った時より変わったよね」

いきなり変な事言うよな、変わったのは確かだけどね、昔のままだったら今頃はアオミしかいなかったかも。

「チ力のお陰だよ、今の俺の世界は全部チ力が造ってくれた世界だ」

「何だか照れるな」

「チ力も変わったぞ」

「どこが？」

「女の子っぽくなった」

チ力は顔を膨らまして俺の肩をポコポコ叩いてくる、こういう一つ一つの行動が俺を惹き付けるんだよな。

「それも認める、今まで男の子を異性として見てなかった、兄貴やユキがいたから男の子とばかり遊んでた、今でもダイチやミツチは異性の部類には入らないよ。でもカイは違った、何か全てがアタシと違って輝いて見えた、アタシもカイがいなかったら今頃は可愛げの無い女の子になってた」

あの日あの路地で会ってから俺らの価値観は変わり始めたんだろうな、好きな人が出来れば世界が変わる、それは本当だと思う、今までの俺なら世界がこんな明るいなんて分からなかった。

でも俺にはチ力という太陽が俺の世界に光をくれた、だから俺はチ力の世界のデッカイ海になって、チ力の全てを包み込む、それが俺のチ力に対する愛。

でも、全てを燃やし尽すのも太陽、太陽に近付きすぎれば燃え、地に落とされる。

つづく



## 青のその先（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

最後にあつたように続きます、予定では後2つで完結予定です、もしかしたら最後にもう1つあるかもしれません。

それと番外編やるとか言っていましたけどそれは次のでそれっぽい事します。

よければコメントやメッセージお願いします、次回作等の励みになります。

それじゃあ次回作、楽しみにしてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5479a/>

---

青と赤の白黒テレビ：金銀＋

2010年10月14日13時20分発行